孤蝶隨筆

馬場孤蝶著

新作社版
1924

序

こゝに、隨筆集をまた一冊刊行することになつた。震災前に執筆したものを集めたものだ。もう今では可なり古いものになつてしまつたことは萬々承知なんだが、書いた人間その者が古いのであるから、反つてそれも宜からうといふので、別に書き改めもせずに取り纒めた譯だ。執筆の年月のところも、各項の終りに大凡書いて置かうかとは思つたのだが、敢てそれにも及ぶまいと思つて、省略した。さうなると、本文中の例へば『昨年』とか、『一昨年』とか、『三年前』とかいふやうなのをば、何とか直さないとへンな譯ではあるのだが、此の方はツイ疎懶のために、そのまゝになつてしまつた。けれども、一々直さずとも、讀者には大凡の年代は大抵お分りのことだらうと思ふ。

自分でもよく分つて居るのだが、此集の各項で取り扱つて居るのは皆如何にも古い事柄である。今日流行の思想問題とか、勞働問題などゝは、直接には何んの交渉もない事柄であ

る。あいつも到頭ひどく時勢に後れやがつたものだと誰かはいふのであらうと思ふのだが、本集の著者は唯何んにもしないでゐて、此んな考、此んな趣味になつた譯ではない。少しは讀書もし、少しは人の話をも聞き、聊か識見を博くしようとしてゐるうちに、かういふ風になつてしまつたのだ。他人から見れば、退歩なんであらうが、著者自身の方から云へば、これは進歩と思ふより外にし方がない。少くとも、著者は、今日では、自分の眼界が廣くなつたのだと思つてゐるのだ。

それはとにかく、本集に收めてあるやうな事柄は皆古ぼけきつた全く無用なものであるのだらうかといふことになると、何うも、さうばかりも云へなからうと思ふ。近頃では、若い人々で古い事柄に着目する向きが大分できて來たやうである。それ等の人々は皆な古い考なんだといふ非難も聞かぬやうである。ところで、それ等の人々も、大抵はさう先人未發といふやうな奇拔な見地から古い事柄を見てゐるやうにも見えないのであるから、必らずしも古い趣味が絕對に惡いものだとは斷じ兼ねる。吾々老人がやればいけないが、若い人々がやれば至極結構なことだといふ論は成り立つ筈がない。要は、その取り扱つてゐる事柄に對する

觀方次第のものだと思ふのだが、さうなると何うも本集の著者の如きさへ、最も古き考の者のなかへは入れがたいもの丶のやうにも思はれるのだ。

讀者は本集を讀む時、さう無用な事柄を讀ませられるのだといふ考を去られて宜しからうと思ふ。

集中の『綠蔭茗話』の緒言に云つて置いた通り、何んな人でも知らないやうな事を書くことが不可能であると共に、誰でも知つてゐるやうな事ばかり書くのも不可能であるのだから、著者は何時でもそんな不可能事を企てようとしたことなどはない。しかし、本集に書いたやうな別に珍らしいところもない事柄からでも、讀者によつては、多くの慰みと考との材料を見つけられるに困難でなからうと思ふ。實はさういふことを當てにして、本集を公にする譯である。

終りに一言して置き度いのは、『綠蔭茗話』中の劍の話のなかの坂本龍馬暗殺の項に就てである。此の隨筆は大正十年かの八月に書いたものだと記憶するのだが、その當時結城禮一郎氏（未見の人）から、手紙を貰つた。その手紙では、今井信郎の談話なるものは、結城氏

孤蝶隨筆目次

本所横網……………………二
大音寺前……………………一四
『にごりえ』の作者……………………二一
緑雨と一葉……………………五一
一葉の手紙……………………六四
藤村氏の『春』に描かれたる人々……………………八二
『文學界』のこと……………………九四
職業婦人の危險……………………一〇八
昔の寄席……………………一二四
文化の變遷と寄席の今昔……………………一六一
故講釋大橡……………………一七一

紅塵居漫筆……一八一
怪力亂神……一八七
大力……一九七
大蛇……二〇五
魔術……二一九
樹下漫筆……二二六
籐椅子に倚りて……二三一
綠蔭茗話……二四七
一、敵討……二四七
二、弓の話……二五七
三、馬の話……二七六
四、槍の話……二八九
五、劍の話……二九一

筆蹟の相似……三二三
逝ける板垣伯……三二八
清夜雜記……三三一
おでんの鍋……三三五
夏日雜感……三四五

孤蝶隨筆　目次畢

孤蝶隨筆

馬場孤蝶著

本所横網

一

南風が稍大粒な雨を吹き付けて、大川の面には可なり高い波が立つて居る。百本杭は最早とくに影も無くなつて了つて、電燈會社の徒に長い板塀が續いて居るのを左にして行くと、右の家並が何か大きな手斧のやうなものででも一打に切り取られて了つたかのやうに、町が廣くなつて居る。十三四年前は此處に交番があつたのだ。此所に兩國の停車場の正面の路へ出る横町、寧ろ路次がある。齋藤綠雨の死んだ家は此の横町の中程の右側で、確横網町一丁目十七番地であつた。

綠雨の弔問客が交番で番地だけ尋ねると、査公は『あ、綠雨先生のお宅ですか』と、云つて、敎えて呉れたと云ふのだ。

その家は未だ存して居るやうに思ふ。この邊りが一體に明くなつたやうに思はれるのは僕の氣からのみではなからう。僕は綠雨の事を追想しながら川岸を厩橋まで歩いた。

綠雨が本郷の千駄木町から横網へ引越したのは三十六年の十一月頃だと思ふのだが、暫時世間から離れて暮し度いと云ふので、誰にも居所を云つて呉れるなといふ頼みであつた。自分でも可なり祕して居たものと見えて、尾崎紅葉氏が死んだ時にも住所を書かない弔問狀を送つたのであつたといふのだ。

綠雨が死んでから、諸雜誌に出た綠雨追憶談には大抵その談話者が綠雨の病中を見舞はないといふことを云つて居た。某雜誌の六號子は『綠雨の追憶談で見ると、馬塲孤蝶を除いては、誰も皆綠雨の病中を見舞つて居ない、どうも不人情な奴等ばかりでは無いか』といふやうなことを書いた。此の非難は全く無理だ。前に云つた通り、綠雨は住所を誰にも告げなかつた。誰にも病狀を知らせなかつた。綠雨は、二十七八年頃にさへ肺患で危篤だと云はれた程であるのに、その後一向に重體とさへ云はれたことは無かつたのであるから、誰も綠雨を見ること殆ど健康體を以てするやうになつて居たのだ。だから、重體だと云ふやうな噂でも無い限りは、可なり親しかつた

人々でも、見舞には行かないのが當然である。

馬場孤蝶即ち僕には、綠雨は少し用があつた。その一つは、一葉の日記を出版したものだらうかどうだらうかといふ相談であつたのだ。千駄木に居る時分に、樋口家から日記を預つて、鷗外氏や露伴氏とも相談したことがあるのだ。綠雨は彼の日記を出版することには餘り贊成でなかつた。勿論、その當時の文壇は自然主義勃興以前の文壇である。當時の文壇の氣分は、彼の日記の全部の公表を許す底のもので無かつたことは明白である。尚その外に綠雨自身の或る感情も加はつて居たのではなからうかと今では考へられる理由がある。

綠雨は一葉からは可なり尊敬を表されて居たと信じて居たらしい。しかるに、日記の文面だけで見ると、必ずしもさうで無いやうに見られる。これが綠雨に取つては少し辛いことであつたらう。その次ぎには、日記には、『めざまし草』の連中が一葉に加盟を求めた時に、綠雨が影でそれを妨害したことが、明白に書いてある。で、それが公表されるのは、綠雨は少し困るのであるらしかつた。綠雨は、日記の公表には餘程躊躇する理由を――例へば、故人の價値を損ずるやうになるといふやうなことを――說明するのみで、僕には日記の一部しきや見せなかつたが――或る

時――千駄木でのことだが――『三木竹がめざし草へ一葉に加盟して貰ひに行つたことがあるんだが、それを僕が後へ廻つてぶち破して了つた。それが日記にあるんだから其所を森（鷗外氏のこと）に見せるのは、少し困るがね』と、緑雨はニヤ〳〵笑ひながら云つたことがある。

要するに、緑雨は彼の日記を公表するのならば餘程削つた上で無ければといふ意見であつたのだ。作家は自分の私生活を餘り人に知らせたくないと思つて居た時分であつた。緑雨などは殊にさういふ氣分が強かつたやうに思ふのだ。

さういふ譯で、樋口家とも種々交渉する必要はあり、その仲人に僕を使ふのが都合が好かつたので、緑雨は僕には住所も知らせ、病氣の模様も通知して來たのであつたのだ。勿論、僕と最後まで音信を斷たなかたのは、さういふ功利的な理由からのみだといふのは、緑雨を餘り利己的な人間に見過ることになるだらうが、よしその外に友情的の理由があつたにしても、直接の理由は前掲の用事が重なものであつたことは殆ど疑ひを容れないと思ふ。

だから、緑雨の最後の病狀を見舞はなかつた緑雨の友人諸君が不人情であつたのでもなく、僕が緑雨の病中に度々緑雨の宅へ行つたのも僕のみが特に友情が淳かつたといふ證據には少しもな

らないのだ。

三

僕はその頃は飯田町五丁目に住んで居て、日本銀行に勤めて居た。

三十七年の四月の十一日頃かと思ふのだが、最早誰そ彼れ時に近かつたが、横網の齋藤からだと云つて使が來た。『齋藤が今夜にも危ないので、後々のことも聞いて置いて頂き度いから、直ぐおいでを願ひ度くつて上りました』と、その使だといふ人――確それは綠雨の妹婿の中村氏であつたと思ふ――が、云ふのであつた。

一月の末か、二月の始であつたか、綠雨から『咳嗽がどうしても止まらぬ。萬方施すに由無き有樣に立ち至つたことを承知して居て吳れ』といふやうな意味の消息があつた。僕は直ちに行つて見た。

綠雨の住居は元誰かの隱居所であつた家の一部――東の部分――を仕切つたものだといふのであつたが、水口に並んだ格子戶を入ると、取り付きが二疊、その後は壁で、左が四疊半位の茶の

緑雨の終焉は極靜かであつた。一寸眠るから、少し彼方へ行つて居てくれと云ふので、人々は臺所へ行つて居たが、少し經つて來て見ると、最早息が絶えて居たといふのだ。

五

雨を含んだ春の朝の明けたばかりの時分、緑雨の棺は獨龍に入れられて、横綱の横町を出た。棺に從ふ者は二三近親の人々と、露伴氏と與謝野氏と僕とであつたと思ふ。

大川の面には霧が下りて居て、岸の柳の綠が殊に艶やかに見える。物皆和かに見える朝景色である。いとゞしく寂しく、黑く見える獨龍は、大川沿ひを厩橋へと向つて行く。

やがて、長い橋を越へ、電車道を横切つて、黑船町を直行する。北富坂町あたりであつたらうか、露伴氏が『緑雨君の戒名に、緑雨醒客をその儘取つて、春曉院緑雨醒客として、居士とも何とも付けないのは何うでせうか？』と、云つた。吾々は、緑雨が最も敬服して居た露伴氏に、緑雨の戒名を付けることを、前日から頼んで置いたのであつた。

緑雨の自ら記するところ――『みだれ箱』の中かと思ふ――に據れば、緑雨は雅號を坂崎紫瀾氏

に撰んで貰つたのであるが、紫瀾氏は紅露情禪といふのと綠雨醒客といふのを撰んだ。が、前者は當時既に知名の作家になつて居た紅葉露伴二氏の號を一字づつ借りるやうな形になるといふので、後者の方を採ることにしたといふのだ。綠雨は、生れは伊勢であるが、育つたのは、本所綠町であつたので、此の雅號は、それにも因むのであつた。綠雨とは若葉の雨だといふのだ。

それは夏、これは春であるけれども、露伴氏の付けてくれた院號が、折からの朝景色に思ひ寄せられて、如何にも善く稱まつたものと思はれた。吾々は、『結構です、それに極めませう』と、答へた。露伴氏は『生憎仄字ばかりで少し面白くないとは思ひますが、何うも他に善い考へが無いものですから』と、云つた。

直ぐに、吾々は、榮久町――彼の大溝の流れてゐる町――へと右へ曲つた。

それからは、何ういふ路を通つたのであるか、今はさらに記憶して居ない。日暮里の火葬場には、野崎氏、井原青々園氏、堀内新泉氏その他の人々が待ち受けて居た。棺は無雜作に火屋の中へ入れられて、黑い――物凄い程黑く思はれた――扉が閉まつた。

斯ういふ風に、先づ密やかに荼毘に付せよといふのが、綠雨の遺言であつたのであらう。綠雨

は本葬はしないで宜いとまで言つたやうに聞いて居る。

緑雨が伯母さんと云つて居た若江氏の内儀の話では、緑雨は遺言をして了ふと、最早これで此世に何も用は無いのだから、棺を買つて来て、その中へ入れてくれと、度々云つて、困つたと、いふのである。

緑雨が危篤に陥るといふと、醫者は「この人は貴君方と違つて學者なんだから、死ぬるといふことを當人に知らせて、誰かに遺言でも聞かせて置かぬと、後で困ることになるかもしれない」と、附き添つて居た人々に云つたが、誰も進んで、緑雨にさう云はふといふ人がない。で、到頭この伯母さんが緑雨に助からぬといふことを云つたといふのである。伯母さんは佛教の信者で、身體の肥つた、その時最早五十に近い位に見える人であつた。

緑雨の本葬――埋骨式と稱へたと思ふ――は、間もなく本郷東片町の大圓寺で行つた。知友は大抵皆會葬した。遺骨は、同寺内の先塋に納めた。齋藤家の宗旨は曹洞宗である。

大音寺前

一

樋口一葉女史の『たけくらべ』の場所は下谷の龍泉寺町(註)——俚俗大音寺前——である。一葉女史の日記に依れば、樋口家の人々——一葉女史の母君と妹の邦子氏——が小商賣を始める目的で家を探しはじめたのは、二十六年七月十五日からであつて、龍泉寺町で家を見付けたのは、十七日である。日記の中の『塵の中』といふ部分には、

『十七日、晴れ、家を下谷邊に尋ぬ、國子のしきりにつかれて行ことをいなめば母君と二人にて也、坂本通りにも二軒斗り見たれど氣に入けるもなし、行々て龍泉寺町と呼ぶ處に間口二間奥行六軒ばかりなる家あり、左隣りは酒屋なりければ其處に行きて諸事を聞く、雜作は無けれど店は六疊にて五疊と三疊の座敷あり、向きも南と北にして都合わるからず見ゆ、三圓の敷金

間、その奥六疊に綠雨が臥て居るのであつた。横綱へ行つてからは直きに寒くなつたので、綠雨は臥床勝であつたやうに思ふのだ。

その六疊の東は壁であつて、その壁の中央ところに柱が出て居るのであつたが、見ると、その柱に『烟草を飲んで呉れるな』といふやうな意味を書いた紙が張つてある。僕は烟草を遠慮して、話を始めた。綠雨は『君、かまはんから烟草を飲んで呉れ給へ、此の間、亞米利加烟草を飲まれて、その臭に閉口して、斯うしてあるんだから』と、云つた。が、僕は烟草を飲まずに話を續けた。その時の話しは、何うも病氣が重いやうなので、十分養生してみたいと思ふ、就ては、朝日の村山氏と、大橋新太郎氏とから、金を借りるやうにしたい、それは、僕の從兄の野崎左文に頼んで口をきいて貰つてくれといふのであつた。

で、野崎に頼んで、その件で奔走して貰つて居たので、その後一二回綠雨を見舞つたのみで、半月程は無沙汰になつて居たのではあるが、今危篤ときくのは甚く意外な氣がした。

四

春の薄暮は何と無く哀愁の懷のするものである。僕は路を急いだ。未だ兩國橋の架け變らぬ時分であつた。

吾々の家にはまだ電燈の無い時分の事である。部屋の光景は何となく悽愴の氣を帶びて居た。死の床には一種肅殺たる威嚴がある。

綠雨は氣分はまだ確であつた。何か少し言ひ掛けて、家人を呼んで、如何にも苦しさうな咽喉を絞られるやうな聲で、『咽喉が苦しい』と云つた。綠雨の晩年に同棲した金澤竹女が猪口に水を入れて持つて來た。綠雨はそれで咽喉を沾した。僕は、『管で飮んだ方が樂ではないか』と注意してみた。綠雨は、竹女に硝子の管を持つて來させて、それで猪口の水を飮みながら、話をした。『醫者の云ふのでは、今夜から注射するのだが、それも一二回で利かなくなつて、それ切りだと云ふのだ。君には種々お世話になつたが、最早いよ〳〵此れでお別れだ』と、云つて、竹女に指圖して、手文庫を持つて來さして、中から一葉の日記を紙絢で纏めて縛つてあるのを出させて、『此れも何うにかする積りであつたのだが、最早斯うなつては何うにもしやうがない。樋口へ返してくれ給へ。此の事を賴まうと思つて君に來て貰つたのだ』と、落着いた低い聲で言つた。

緑雨の平生は、その態度にも言葉付にも一種の氣魄が滿ちて居た。が、此の時は、平生の威儀は少しも失はれては居なかつたが、さすがに、聲は全く思ひ諦めたやうな寂しい調子があつた。僕は、『宜しい、承知した』と云つたのみで、その他には何とも云ふべき言葉がなかつたので、默つて居た。さまざまな様の一世界を含んだ沈默である。

緑雨は重ねて云つた『もう一つ頼みがある。君一寸筆を執つてくれ給へ』と云ふのだ。僕は緑雨の枕もとにあつた筆と紙とを取つた。緑雨は『幸徳(秋水氏のことである)へ使ひをやつてあるのだが、間に合はんといけないから、書いて置いてくれ給へ』と云つて、やがて、

『緑雨齋藤賢本日目出度く死去致候、此段謹告仕候也。年月日』

といふ廣告の文案を口授して、『それへ黒框だ』と云つた。僕が書き終つて、その紙を渡すと、緑雨は禮を云つて、蒲團の下へそれをしまつた。が、少し經つと、又『もう一枚書いて持つて居てくれ給へ、で、幸徳の來やうが遲いやうだつたら、君がそれを持つて行つて、新聞の廣告をしてくれ給へ。新聞は讀賣に萬朝に朝日位で宜いから』と云ふので、僕はもう一枚書いて、自分の懐へ入れた。

そのうちに、綠雨は斯う云つた『何時まで居てくれても名殘は盡きない。が、僕は最早綠雨醫客でなく唯の齋藤賢で死に度いのだ。文筆の士が枕上に居られると反つて、心殘りがあつていけない。もうどうぞこれで歸つてくれ給へ』僕は唯、『君の言葉に任せてそれでは今夜はこれで歸らう』と云ひ得たのみであつた。

が、少時立ち兼ねて居た。綠雨は臺所の方を見るやうにして、『君が歸つた後で裏屋の葬式の相談をするんだ』と云つた。その聲は、如何にも靜な悲しく聞なさるゝ調子であつた。

僕はやがて、『それでは、餘り氣を使はないで、靜に眠るやうにし給へ。用があれば、何時でも呼びによこしてくれたまへ』と、云つて、座を立つた。

翌日は、夕方銀行の歸りに、見舞つたが、『お目にはかゝりたいが、お目にかゝつたところで苦しんで居るところをお目にかけるのみだから、此のまゝのお別れにしたいと、病人が申しますから』と、竹女が云つたので、逢はずに歸つた。

その又翌日の十三日の午前十時頃、野崎左文から、日本銀行に出て居た僕のところへ電話で『齋藤君が先き程死ました。私は今行き合したので、知らせます』と、云つて來た。

があつたのか、今記憶には殘つて居無い位であるのだが、此頃では、兎に角、小さいながらさまざまな店屋が續いて居て、例のショウ・ウインドウに花やかな色の品物を置き列べた小間物屋さへ見掛けられる。場末らしい町の氣分は今も尚續つては居るものゝ、決して『何々横町の十軒長屋二十軒長屋』といふやうなその昔の有様では無いのである。

龍泉寺町の四辻の交番は今も昔もその位置は變つて居無いと思ふ。が、南北に通じて居る町は近頃の市區改正で非常に廣くなつて居る。本願寺の東側から公園の西を過ぎて眞直に北へ通ずる町である。水排の爲めの大溝でも道側に出來るのであらうか、町の東側に、大きい丸太の杭が打ち込まれて居る。

交番から西、坂本通り――三島神社の角――へ出るまでのところは、その昔は家がまばらであつて、お寺の墓地か何人かの別莊かと思ふやうな生垣が路に沿うて居たところもあつたやうに、覺えて居るのであるが、今はそんなところはすこしも無い。兩側とも町家が櫛比して居るのである。入谷に續く南側の路次、昔は所々に池があつてじめ〳〵した濕地であつたあたりも、今は新らしい木の香のまだ失せぬやうな長屋が立ち續いて居るのが往來から窺はれる。此頃の初夏の日

光はこのあたりの土を干かして如何にも乾燥な土地のやうに見えさして居るのである。

三

樋口家の人々が龍泉寺町で始めた商賣といふのは、紙、渋團扇、蠟燭、石鹼、燐寸といふやうな荒物と、小兒を相手の駄菓子とを商うのであつた。日記に依れば、いよ〳〵店を開いたのは八月の六日である。

『六日　晴れ。店を開く、向ひの家にて直に買ひに來る。中々にをかしき物也……夕刻より着類三つよつもちて本鄕の伊勢屋がもとに行く、四圓五十錢借り來る。菊地君のもとに紙類少し仕入る。二圓近く成けり。今宵はじめて荷をせをふ、中々に重きものなり……』

で、商賣の有り樣はといふと、八月の十二日には、賣り上げが三十八九錢、十三日には三十三錢、十四日には三十九錢あつたと書いてあり、二十日千束神社の祭禮の日には大多忙にて壹圓の商ひであつたとあり、九月の二十一日のところには、『此の頃の賣高、多き日は六十錢にあまり少しとても四十錢を下る事はまれなり、されど大方は五厘六厘の客なるから、一日に百人の客を

せさるは無し、身の忙はしさ斯くて知るべし』とある。
駄菓子とか、玩具のやうなものは、神田の多町へ一葉女史自身が買ひ出しに行つた。『何處でも姉さんと呼ばれる、自分はそれまでは妹からか親類の小兒からかで無くば、姉さんと呼び掛けられたことは無かつたので、全く知らない人々からさう呼びかけられると、何だか自分のことではないやうな氣がした。羽織を着て居ると、人が不思議さうにジロ／＼と見るので、その後は、羽織を着無いで行つた』と、一葉女史が話したことがある。現代では、最早士族といふ階級は亡びてしまつたのだが、一葉女史とか吾々とかいふのは、侍時代から直ぐ次のゼネレエションである。されば、侍階級の習慣も、思想も、矜持も可なり傳へて居たのである。樋口家の人々が而も龍泉寺町のやうな場末で小商賣の店を開いたのは非常な奮發であつたものと見無ければならぬ。固より龍泉寺町へ行つたのはなまなかな所よりはいつそのことずつと場末にしろといふ考慮からであつたらうと思ふのだが、又それだけ奮發の度は大きかつたと見て宜しからう。然し、それまでとは全然異つた境遇に身を置いた樋口家の人々に取つては、さま／＼の感慨を促す事物が多かつたらうと思はれる。

樋口家の人々は皆愛想が好かつた。殊に一葉女史姉妹は、如何にも快濶に心持好く人に應接する人々であつた。表情も冴々して居た、言葉もハキ／＼して居た。さればその店には小兒が馴染んで遊びに集つたらうと思はれる。『たけくらべ』に描寫されて居る小兒はモデルをさういふ小兒の中から擇んだものであらう。

『年の暮に、小兒が店に遊びに集まつて、相互に話をして居る。錢が貳拾錢とか參拾錢とかあれば宜いがなあと云つて居る。それがあれば何うするのだと聞くと、寶船を買つて、二日の晩に賣りに行くのだと云つた、何處へ賣りに行くのだと聞けば、或る者は公園へ行くと云ひ、或る者は柳橋へ行くと云ひ、皆それ／＼寶船の價好く賣れる賣り場を知つて居るのであつた』と、一葉女史自身が話したことがある。

『たけくらべ』の八には、『容貌よき女太夫の笠に隱れぬ床しの頬を見せながら『筆屋の店先を通ると、大黑屋のみどりがそれを呼び止めて明烏を語らすところがあるのであるが、日記『塵の中』には、八月三日のところに、次のやうに書いてある。

『毎夜廓に心中ものなど三味線に合せて讀み賣する女あり、歳は三十の上幾つなるべきや、

にて、月一圓五十錢といふに、いさゝかなれども庭もあり、其家のにはあらねど裏に木立ども
のいと多かるもよし。さらば國子に語りて三人ともによしとならば此所に定めんとて其周旋屋に
頼みて歸る、邦子も異存無しといふより夕かけて又行く、少し行ちがひありて餘人の手に歸ら
ん景色なればさま〳〵に盡力す。
十八日　晴れ。龍泉寺町のこと近邊なれば萬猪三郎にまかせたるに午後まで返事無し、さらば
とて又母君と二人行く、道に行違ひて留守に行きけり、されども萬好都合におさまりたりと聞
きしかばこれより轉宅のもうけをなす』
とある。樋口家の人々はそれまでは本郷の菊坂町六十番地に住まつて居たのであるから、下谷
の龍泉寺へ引越すことになつたのは、甚く離れたところへ行くことになつたものだと、誰も思ふ
だらう。これは、小商賣のことであるから、餘り知人などの眼に觸れぬところで始めたいといふ
考へがあつたのと、『塵の中』の十五日のところにある通り、和泉町（神田）二長町（下谷）から、柳
原、鳥越、藏前といふ風に淺草へまで入つて、家を探したのであるが、何處にも庭のあるやうな
家が見付からなかつた。町家に住まつたことの無い樋口家の人々には、その庭の無い家に住まふ

ことが辛かつたのとで、龍泉寺に家を定めた譯であるらしい。
で、その龍泉寺町（三百五十八番地）へ移つたのは、その月の二十日である。

『廿日　薄曇り。家は十時といふに引拂ひぬ、此ほどのことすべて書きつゞくべきにあらず。此家は下谷より吉原通ひの一筋道にて、夕がたより轟く車の音飛ちがふ燈火の光たとへん詞無し、行く車は午前一時までも絶えず、返る車は三時より響き始めぬ、もの深き本郷の靜なる宿より移りて、こゝにはじめて寢ぬる夜の心地まだ生れ出でゝ覺え無かりき、家は長屋だてなれば壁一重には人力ひく男ども住むめり……』

二

『たけくらべ』は『廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐろ溝に燈火うつる三階の騷ぎも手に取る如く、明けくれなしの車の往來にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛くさけれど、さりとは陽氣の町と住みたる人の申しき、三島神社の角をまがりてより是ぞと見ゆる家もなく、かたぶく檐端の十軒長屋二十軒長屋、商ひはかつふつ利かぬ處とて……』とい

ふ言葉で書き始められて居るのであるが、樋口家の人々の住んで居た家は、三階の燈火うつるといふそのお齒ぐろ溝へ餘程近いところであつた。

吉原遊廓の北面の西端は揚屋町の非常門である。その非常門のところから、西へ、即ち、上野の方へ向けて大凡一町位來たところの右側の家であつた。

その時分は、揚屋町の非常門から土手に至るまでの間は、まだ田圃の名殘を十分止めて居た。土手へ面したことにして云へば、右はお齒ぐろ溝で左は空地勝で二三間隔に小屋掛程の小さい建物があるのみであつたやうに覺えて居る。それから北は所謂三輪の田圃になつて居たのだ。

所で、揚屋町の非常門から土手までの路は、現今ではお齒ぐろ溝に沿うて居ることは一葉女史時代と同じであるのだが、北の路が吉原の大火（明治四十四年？）以前には、現今の路よりも少し北を通じて居て、お齒ぐろ溝に沿うては、唯狹い裏路が通じて居たのみであつた。僕のこの記憶にして誤無きものとすれば、吉原の北裏の路は大火後になつてその以前の形に戻つた譯である。

お齒ぐろ溝はその昔より餘程狹くなつて居るやうに思はれる。『たけくらべ』に『垢ぬけのせし三十あまりの年增、小ざつぱりとせし唐棧ぞろひに紺足袋はきて、雪駄ちやら／＼忙がしげに横抱

きの小包は聞はでもしるし』とある『誂へ物の仕事やさん』なるものが『とんと沙汰して、廻り遠や此處からあげまする』と云ふのであつたといふその『茶屋の棧橋』も幾つか溝の上に掛つて居るのだが、それも昔のものよりは餘程短くなつて居るやうな氣がする。のみならず、昔は皆その刎橋が何處のも引上げてあつたのであるが、此の頃では引き上げて無いのが大分あるやうである。これは、所謂警視廳令なるもの、改正にも關係のあることでもあらうし、又現今の吉原の狀態を表示するもの、一つであるかも知れぬ。それは、兎に角、吉原廓內が昔のやうに城の如く牢獄の如くでは無くなつたのは事實である。

『たけくらべ』の中に『落かゝるやうな三味の音を仰いで聞けば、仲之町藝者が冴えたる腕に、君が情の假寢の床にと何ならぬ一ふしあはれも深し』とあるその三味の音の落かゝる『茶屋が裏ゆく土手下の細道』なるものは、此のお齒ぐろ溝に沿うた日本堤下の小路のことである。

樋口家の人々が住まつて居た家は勿論、あのあたりの家は一帶に最早餘程前に取り崩されて、今ある家々はその後に新に建てられたものであらうと思ふ。樋口家の人々が其所に居た時分には、商賣の全然利かぬ場所であつたのであらう。町の有り樣が如何にも場末らしく、何ういふ店

水淺黄に鱗形の浴衣着て帶は黒繻子の丸帶を締め、吉原冠りに手拭冠りて、柄長の提燈を袴にさしたるさま小意氣にしやんとして其昔は何なりけん鶯鳴かせし末なるべきか、まだ捨がたき藥煉の色を捨てゝのあきなひと見れば、大悟のひじりの心地もすれど、或ひは買かぶりの化れ主義にて、仇な小歌の聲自慢これに心をとゞめよとにや、素見ぞめきの格子先、一寸一服袖引烟草上がれ上がるの問答に心浮るゝたはれ男は知らず、粹が身をくふ思ふどし二階せかれて忍び足、籬にからむ蔦の紋、松の太夫と囁きの哀れ命を引け四つの鐘に限り、鴛鴦瓦上置く霜の明日をも待たじと思ひ詰めし身には、如何に身に染みて心細かるべき、細く澄みたる撥はり上げて糸の音色もしめやかに大路小路と流し行く後姿、これが哀か、かれが哀か。

一昨日の夜我が門通る車の數をかぞへしに十分間に七十五輛なりけり、これをもて推しはかれば一時間には五百輛も通るべし、吉原斯くて知るべし、さりながら多くは女連の素見客のみにて茶屋貸座敷の實入りは少きよしに聞く、伊勢久などにてすら客の一人もなき夜ありとか云ひし、さなるべし、今宵九時まで見ありきけるうち、提灯を提げたる茶屋送りの客は一人も見受けざりき……」

『たけくらべ』の一節に『つゞいて秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶこと此通りのみにて七十五輛と數へしも』とあるのは、人の知るところであらう。

四

樋口家の人々は荒物の店での商ひと、妹の邦子氏の縫ひ張りの仕事とで生計を立てゝ居たやうである。仕事は廓内のものを引き受けたやうに聞いて居る。

これは、一葉女史の名が世上に喧傳されるやうになつた二十八年の暮から後のことであるのだが、戸川秋骨君が、『世間では飛んでもない馬鹿な噂をして居る者がある。一葉君姉妹は吉原でおでんやを出し、おつ母さんは何某樓の遣り手をやつて居たのだと云つて居る者がある。彼の眞面目なおつ母さんにそんな仕事ができるか、何うかは、一眼見れば、誰にでも直ぐ分ることであるのに、隨分篦棒な噂をするものだ』と、云つて笑つて、僕に話したことがある。『たけくらべ』に表はれて居る吉原及びその附近の事物風俗の描寫が如何にも的確であり如何にも徹底して居るので、右のやうな誇大な噂が起つたのであらう。

『たけくらべ』は、當時の有識社會の人々の容易に接觸することのできない社會からの消息である。否、今日と雖も、有識社會の人にして『たけくらべ』の作者と同じやうな程度に下層の生活小兒の生活に觸れ得る機會は甚だ少いと云はなければならぬ。『たけくらべ』は、今より二十五年前に於ける吉原附近の風俗の不朽の記錄である。作者自身の敍述の一行にも、作中の小兒のふとした言葉の一句にも、あのあたりの事を知つて居る人々の心の裡には、さま〲なる心象を喚起さるゝことであらうと思はれる。『たけくらべ』が文壇に現はれた當時には、

『春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、つゞいて秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶこと此通りのみにて七十五輛と數へしも、二の替りいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に亂るれば橫堀に鶉なく頃も近づきぬ、朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懷爐灰に座をゆづり、石橋の田村屋が粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそゞろ哀れの音を傳へるやうになれば、四季絶間なき日暮里の火の光りもあれが人を燒く烟かとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かかるやうな三昧の音を仰いで聞けば、仲之町藝者が冴えたる腕に、君が情の假寢の床にと何ならぬ一ふしあはれも深く、此時節より通ひ初むるは浮れ浮かるゝ遊客ならで、

身にしみ〴〵と實のあるお方のよし、遊女あがりのさる人が申しき』

とある一節が、『たけくらべ』中の絶唱と稱へられたものであつたが、今では全くクラシックとして後に傳へらるべき名句となつてしまつた。

所で、横堀といふのは、吉原の西側に近い田圃に在つた堀であつたといふのである。今はその田圃であつたところには、大きい路が通じ町家が立ち續いて居ることは勿論である。石橋といふのは、揚屋町の非常門のところから路が折れて龍泉寺町へ入るその入り口に在つた石橋を云ふのであつて、その南の角に在つた煎餅屋が田村屋といふのであつたさうである。邦子氏の話では、この田村屋は今も尙存して居るかも知れぬといふのである。上清といふのは田村屋と同じ側でも少し西へ寄つたところに在つた荒物屋で、上州屋清兵衛とでも云ふのであらうが、暖簾には上清と書いてあつたといふのである。日暮里の火の光りは三河島の火葬場である。今は町屋とかいふ所へ移つてしまつて居るといふのだ。一葉女史の屍も明治二十九年の十一月に其所の烟となつたのであらうと思ふ。齋藤綠雨の屍が荼毘に附せられたのは其所であつた。

尙、『たけくらべ』の中の私立の小學校といふのは、樋口家の人々の住まつて居た家と同じ側で

石橋の方へ寄つたところの路次程の小路の奥にあつた小學校で、その奥の方には吉原の樓の寮などがあつて、大黑屋のみどりのモデルになつた小娘がさういふ寮の一に住んで居たといふのである。公立の小學校といふのは、三島神社附近にある今の東盛小學校のことである。『盲目按摩の二十ばかりになる娘』が『かなはぬ戀に不自由なる身を恨みて』水入したといふ水の谷の池といふのは、交番の向ふ横町あたりにあつた水の谷といふ料理屋の池だといふのである。

筆屋は樋口氏の家と同じ側で交番の方へ寄つたところに在つて、其所には町内の若い衆達が集まり、一葉女史の店の方には小兒が集つたといふのである。

大音寺前を場面に取つた一葉女史の作物には、今一つ『別れ路』があるのであるが、傘屋は上清の近くに在つたかなり大きい家であつたといふのである。傘屋の吉三のモデルになつた小僧は當時彼のあたりで誰の眼にも着いた特異な少年であつたさうである。一葉女史の大音寺前の作物は、二十六年の十一月頃に作つた『琴の音』と、廿七年の二月に筆を起した『花ごもり』とであつた。

五

一葉女史の家を僕が始めて訪うたのは、『日記ちりの中』に依るに、二月十二日である。雨上がりの日の午後であつたと思ふ。平田禿木氏に連れられて行つたのである。

一葉女史の家は前に書いた通り五記には店が六疊で、その外に五疊と三疊とであつたといふのであるが、吾々が案内された奥の部室は三疊ではなかつたかと思ふ。部屋にはかなり古びを帶びた机が置いてあつたやうに覺えて居る。向つた左側は雨戸が半ば繰り開けられて居て、その外は狹い庭であるらしかつた。

その時一葉女史から受けた印象は何ういふものであつたらうか今は殆ど記憶に殘つて居ないのであるが、唯如何にも世慣れた——その時吾々の考へから見て——人の話振であるのを感じたことだけは、確である。話の調子を一つ二つ憶ひだし見ると『殿方がお野掛でお出かけ遊ばすのは嘸ご愉快で御座いませうねえ』とか『師匠の所では樋口の荒物病だと皆さんが仰つしやるんで御座いますが、妙な病氣もあつたものでは、御座いませんか』といふやうなものであつた。一葉女

史は禮儀正しい人であつたからでもあるのだらうが、僕はその時親しみ易い人のやうに思はなかつたやうに記憶して居る。が、決して面白くない人だとは思はなかつたらしい。その證據にはそれから少し經つて或る雨の降る日に、築地に居た島崎藤村君を訪うた歸り途か何かに一人で一葉女史の家を訪うたことがあるのだ。その時は女史は留守であつた。

二十七年の三月末近くなつて、樋口家の人々は、いよ〳〵商賣をやめて、龍泉寺町を去る決心をした。『塵中につ記』には

『國子は物に堪え忍ぶの氣象乏し、この分厘に太く飽きたる比とて前後の慮なくやめにせばやとひたすらに勸む、母君も斯く塵の中にうごめき居らんよりは小さしと雖も門構への家に入り、柔かき衣類にても重ねまほしきが願なり、さればわがもとの心は知るや知らずや、兩人ともに勸むる事切也、されども年比賣り盡し、借り盡しぬる後の事とて此店を閉ぢぬる後、何處より一錢の入金も有るまじきを思へば、こゝに思慮を廻らさゞるべからず、さらばとて運動の方法を定む……』

『廿六日半井ぬしを訪ふ、これよりいよ〳〵小說の事廣くなしてんの心構へあるに、此人の手

あらば一しほ然るべしと、母君もの給へば也、年比のうき雲唯家のうちだけに晴れて、此人のもとを表だちて訪はるゝやうに成ぬるうれしとも嬉し、先づ文を參らせて在宅の有無を尋ねしに、病氣にて就蓐中なれどいとはせ給はずばと返事あり、此日、空模樣宜しからざりしかど、梓弓射る矢の如き心のなどしばしもとゞまるべき、午後より出づ。君は太く青み瘠せて見し面影は何方にか殘るべき、別れぬる程より一月が程もよき折なく、惱みに惱みて斯くはといふ哀れとも哀也、物語りいと惱ましげなるに多くもなさで歸る』

中島歌子氏の塾の歌文の添削の手傳ひで少しの金が得らるゝことになつたので、四月に入つてからは小石川の安藤坂の中島氏のところへ通ふことになつた。四月の末になつて金策がついたので、いよ〳〵五月の一日に龍泉寺町を引拂つた。

『たけくらべ』の腹稿は大音寺前時代に可なり纒まつてゐたかも知れぬが、筆を下し始めたのは一葉君が丸山福山町へ越してからで、それは明治二十七年の晩秋頃であつたらう。

「にごりえ」の作者

一

一葉女史が大音寺前を引拂つて本郷の丸山福山町四番地へ移つたのは、明治二十七年の五月一日である。『塵中日記』の四月二十八日のところには、

『いよ／＼轉居の事定まる、家は本郷丸山福山町とて阿部邸の山にそひて、さゝやかなる池の上に建てたるが有りけり、守喜といひし鰻屋の離座敷なりしとて、さのみは古くもあらず、家賃月三圓也、たかけれどもこゝと定む』

とあるのであるが、その家は六疊二間に四疊半があつて勿論疊建具附である。それが月三圓の家賃とは今の人には嘘のやうにも思はれる位であらう。けれども、その時分にはまだそれでも高いといふ位であつたのだ。以て、當時の物價が今日に比して何れ程安かつたかゞ、窺へるだらう。何しろ、今日のやうに、着飾るやうな事はなし、食ひ物もさう贅澤なものは中流の者の口に入りや

うはなし、金の遣ひ途といふのもなかつたのであるから、各人が儲ける金の高は今日に比しては餘程少かつたのだけれども、今日よりもずつと樂に暮せたのである。兎に角一圓とか二圓とかいふ位の高の金が可なり使ひでがあつたのだ。

樋口家の人々が、大音寺前へ越すまで住まつて居た本鄕菊坂町六十番地の家といふのは、菊坂町の谷の底に在つたのである。振袖火事で名高い本妙寺——今の女子美術學校の在る所がその寺であつたのだ——の下を通じて居る菊坂町の本通と眞砂町の臺との間に、大溝が流れて居て、菊坂町の通りを本妙寺の前のところから一町程西行すると、左へ下りる路が、その大溝にかゝつて居る橋を渡つて、其所から、左は本妙寺坂——本妙寺の正面の坂——へ通じ、右は眞砂町の西端へと登る狹い險しい坂へと通じて居るのであつた。で、その大溝に沿うて東西に通じて居るその路に面して、幾軒かの家があつた。樋口家の人々の住んで居たのはさういふ家の一つであつた。で、さういふ家からは菊坂町の本通の家の勝手が高い舞臺のやうに仰ぎ見られるのである。

『蓬生日記』の二十六年三月十二日のところに、

『我が家は細道一つ隔て、上通りの商人どもの勝手と向ひ合ひ居たり。されば口さがなき者ど

ちが常に云ひかはす正なごとどもいとよく聞ゆるに、今日しもとある事の序に亦主先の物語りすとてふと言ひたることに國子耳とゞむれば、かの大人があたりのことにぞ似たる、主めきたる人二人三人あれば何が夫なるや分らねど、色白くたけ高やかなる人のものいひ少しあがりたるは大方この人主なるべし、奥方や何や知らず面ざしなどさして美事ならぬがものを買ふとていとたかしなど小言いひつるに、さなまが〳〵しく商人な叱りそとて其のまゝの價に買とりくれたるはわかりし人なりし、家は三崎町のはづれにて店がまへ立派なる葉茶屋なりと云ひ居たるよし、かの大人に違ひはあらじなど國子の語るに、忘れぬものを又更に思ひ出ていと堪へがたし。

『くれ竹のよも君しらじふく風の
　　そよぐにつけてさわぐ心は』

此に謂ふ彼の大人といふのは、一葉女史が小說を書く手ほどきをして貰つた半井桃水氏のことである。半井氏はこの時分三崎町で葉茶屋を妻君に出させて居たのだ。

で、一葉女史は、さういふ風に可なり長く本郷に住つて居たのであるし、又小石川の安藤坂の中島歌子氏の歌塾へ手傳ひに通ふ都合もよいといふので、丸山福山町へ住居を定めたのであらうと思はれる。

二

福山町四番地の家の位置を、現今の周圍に依つて説明することにすると、大要次のやうなことになる。

巣鴨線の小石川柳町の停留場からほんの少し北行すると、右側に狹い横町があつて、その角に活動小屋がある。それからもう少し行くと、矢張右側の角に小さい西洋建の銀行のある少し廣い横町がある。で、その横町を入つて福山町の通りへ出ると、その角から北へ殆ど筋向位に當る所に大溝の彼方に道へ武者窓とでも云ひさうな窓を向けた平家があつて、その平家とその隣りの薪屋との間に大溝を渡る橋があつて、それから路次のやうになつて居るのであるが、その突き當りにあつた家が、一葉女史が住つて居、又その後になつて森田草平君が住つて居たことのある家で

あつた。
　その家は、明治四十三年の八月に、大雨の續いた後で、後の西片町の山――一葉女史の日記に所謂阿部邸の山――が崩れて、破(こは)れてしまつて、現今ではその跡へ不動堂か何かゞ建つて居る。門標には、智山派密嚴教會支部とか本部とか書いてあつて、納め手拭などが風に飜へつて居るのである。
　家は、一葉女史の日記には、守喜といふ鰻屋の離座敷であつたとあるのであるが、その鰻屋の母屋といふのは、多分入り口の武者窓とでも云ひさうな窓のある家ではなからうかと思はれる。
　それは兎に角、その家は入り口の戸が半分から上が、赤、綠、紫といふやうな色硝子で張つてあつて、方三尺位な履脫の土間があり、正面は眞直に三尺幅位の板の間が通つて居る、それに沿ふて、右側には六疊が二間並んで居り、左側は壁と袋戸棚であり、それから、上り口の左の方も一寸(ちよつと)板の間になつて居て、それから正面の廊下の右側の後になる所に、丁度隠れたやうな四疊半位な部室があり、臺所は入り口の左側にさし掛のやうになつて、突き出て居た。これは此の家を獨立さして一軒の住居にする爲めに、後から附け足したものであるらしく見えた。

六疊二間の南面は、手摺のやうに敷居が通つて居て、その下は板戸が開け閉てができるやうになつて居た。その前が三坪位は確かにあつたらうと思はれる池であつた。水は西片町の山から滲み出して來る清水であつたのだ。ところで、その池の水は、小さい溝を流れて、入り口の家――鰻屋の母屋であつたらうと思はるゝ家――の庭へ行つて、其所でも、一葉女史の家のと同じ位大きさの池をなして居た。又、一葉女史の家の裏手即ち北側にも同じ位な池があつた。明治二十年頃のことかと思ふのだが、此の邊に釣り堀のあつたことを記憶して居るのだが、これらの池がその釣堀であつたのではなからうかと思ふのだ。

三

明治二十七年五月以後の一葉女史の日記は、『水の上』若しくは『水の上日記』といふ名がついて居る。所でこの池のことは、一葉女史の隨筆『そゞろごと』の中の『月の夜』といふのに、次のやうに書いてある。

『さゝやかなる庭の池水にゆられて見ゆるかげ（註月の影也）物いふやうにて、手すりめきた

ろ處に寄りて久しう見入るれば、はじめは浮きたるやうなりしも次第に底ふかく此池の深さいくばくとも測られぬ心地に成りて、月は其の底いと深くに住むらん物のやうに思はれぬ、久しうありて仰ぎ見るに空なる月と水のかげと孰を誠のかたちとも思はれず、物ぐるほしけれど箱庭に作りたる石一つ水の面にそと取落せば、さゞ波すこし分れて是れにぞ月のかげ漂ひぬ、斯くはかなき事して見せつれば甥なる子の小さきが眞似て、姉さまのする事我れもするとて硯の石いつのほどに持て出でつらん、我れもお月さま砕くのなりとてはたと捨てつ、それは亡き兄の物なりしを身に傳へていと大事と思ひたりしに、果敢なき事にて失ひつる罪得がましき事とおもふ、此池かへさせてなど言へども未ださながらにてなん、明ぬれば月は空に還りて名殘もとゞめぬを、硯はいかさまに成ぬらん、夜な〳〵影や待とるらんと憐なりしが、斯ういふことが實際あつたのであるか、何うだか知らぬが、若し實際あつたことだとすれば、一葉女史の甥といふのは女史の直ぐ上の兄さんの虎之助氏の長男ではなからうか。一葉女史の一番上の兄さん泉太郎氏――明治元年生――は明治二十年の夏に亡くなられたのである。

入口の六疊の間で、大抵一葉女史は客に應接したのであるが、その部屋には、兩側に引出しの

附いて居る可なり古色のある硯が、手摺の近くに置いてあつたことを見たやうに思ふのであるが、硯はその上にあつたのであらう。

池には、可なり大きい鯉が居るのであつた。『水の上』の二十八年五月二十日のところに、

『隣に住めりし人家移りすとて、その池に飼ひたる緋鯉金魚などかず／＼我家にもて來て預けぬ、大いなる魚どもの鰭を動かし尾を振りて游げるさまいと面白く來人ごとにほめたゝゆれば、何時となく我物のやうに覺えて計らざるに庭上の奇觀を添へたるなど喜び合し、程經てかしこの妻なるものその家に池の堀しかば魚たまはらんとさでなどもて來たり、いざとり給へといへば、中に入りて追ひ廻るに、隣りよりおこしたる少さきは得よくも取がたく、もとより我が池にありし大なるをのみ皆集めて、數にみたしてもて歸る、それしか非じともいふにうるさければ取るにまかせてやるを母君などいと惜がり給ふ、斯くあるにて思へば、世は誠に常無きもの也、昨日面白しと見る事なくば、今日の殘り惜しき思ひあらんや、計らざるに景色を添へ、計らざるに景色を損ず、つく／＼思ふて、榮華も富貴も一時の夢なるを思ふ事切也』

とあるのであるが、此の池の鯉のことでは、何日か――二十八年のその頃かと思ふ――一葉女

史の戸を開けて、ひどく笑はせられたことがある。それは斯うである。その手摺めいた所に腋をかけて、鯉の游いで居るのを見ながら、話をして居ると、一葉女史が笑を含んで、『この中には天上しそこなつた鯉が居るんですが』と云つた。僕が、『又例の諧謔ですか、嚇いぢやアいけませんぜ』と云ふと『いえ、それは全く本當。四五日前邦が庭を歩いて居ますと、大きい眞鯉が泥だらけになつて轉がつて居ました。池で跳た勢で陸上へ上つて了つたのですね。水へ入れてやると、平氣で游いで居るんです。今にその天上しそくつた鯉が出て來ればお敎へします』と、一葉女史は云つたが、その日は生憎その鯉は出て來なかつた。

此の池は、森田君が住まつた時分には、最早皆埋められて了つて居て、唯森田君の庭には石菖が周圍に植つた三尺四方位の水溜りがあるのみであつた。

池の向ふに、芭蕉があつた。『そゞろごと』の中の『雨の夜』に『庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上やがて五尺もこえつべし、今歳はいかなれば斯く何時までも丈のひくきなど言ひてしを、夏の末つかた極めて暑かりしに唯一日ふつか三日とも數へずして驚くばかりに成りぬ、秋風少しそよ〳〵とすれば端のかたより果敢なげに破れて、風情次第に淋しくなるほど雨の

夜の音なひこそは哀れなれ、こまかき雨ははら〳〵と音して叢がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず、風一しきり颯と降くるは彼の葉にばかり懸るかといたまし』とあるその芭蕉がそれであつたのではなからうか。

四

柳町、指ケ谷町から白山下までが水田であつたことは、さう昔のことではない。僕等の十五六歳の頃までは確にさうであつたのであるから、彼の邊が埋め立てられて町になつたのは一葉女史の福山町に住ま居を定めた當時を去ることさう古いことではなかたのだ。で、樋口家の人々が福山町に住つた時分には、彼の邊は未だ新開の町であつた。

所が、その時分には新開町には大抵出來る一種の商賣屋があつた。それは所謂銘酒屋である。さういふ者どもが何日も新開地を繁昌させるパイオニアーであつたのだ。

現今では、兎に角公道らしい道をなして居る活動小屋の横町などは全くの拔け裏であつたが、その邊りからかけて、樋口家の人々の住まつて居たあたりまでの兩側に、所謂銘酒屋が幾軒もあ

つた。
さういふ銘酒屋の内部は、家の廣狹により色々になつて居たのであらうが、何處も皆入り口が土間になつて居て、壁に棚があつて、其所に洋酒の壜が列んで居るといふやうな風であつた。
現今では彼の邊は如何にも靜な淋しい町になつてしまつたが、明治二十八年頃はなか／＼陽氣町なであつた。
現今の銀行の横町は、昔よりずつと廣くなつて居るが、此の横町の角にあつた銘酒屋には紅葉亭といふ行燈が出て居たやうに思ふ。その家は少し大きい家であつた。入り口は土間で、其所に白金巾で被つた圓卓子があつて。その上に陶器の花瓶に花が生けて置いてあり。壁には洋酒の壜が列んで居て、福山町の通から見て、その左手に當るところに上り框があつて、其所には障子が篏つて、其所からが坐敷になつて居るやうな家であつた。思ふに、それがその邊のさういふ家の代表的なものであつたのであらう。が、現今では福山町のその邊に當る角には亞鉛屋根の軒の太く傾ぶいた空壜屋があり、その隣は石灰屋で白く汚れた戸や壁板が、如何にも場末の町らしい趣を見せて居る。

一葉女史の家の入り口の左側の家――今薪屋になつて居る家――には船板でもあつたらうかと思ふやうな細長い板に御待合と書いた看板が格子戸の横の柱に懸つて居たが、右側の家は小料理屋といつたやうな體裁であつた。現今ではその家が横側を大溝の方へ向て、その方には窓が一つあるきりであるのだが、その當時はそれが店の正面になつて居て、大溝の上は廣く橋になつて居た。現今、その家の門になつて居るやうな右手の入り口は、その料理屋めいた家の別の入り口になつて居て、その門柱には、一葉女史が円番地へ越して草々頼まれて書いた御料理仕出し云々といふ細長い板の看板が出て居た。その家では三味線の音がよくして居た。鈴木亭といふ家であつたさうである。一葉女史が、隣で面白い歌を唄つて居ますよ。それは、添へぬなら元の他人にして返せ、出雲の神も解らない、結びそこねか、空解けか、といふのです』と話したことがある。それから別の日に、一葉女史の家へ行つて居ると、その三下りを隣で唄ひだしたので女史と顔を見合せて大笑をしたことがある。

一葉女史の日記の中に『しのぶぐさ』といふのがあるが。その中に、

『後は丸山の岡にて、物靜なれど、前なる町は物の音常に絶えず、怪し氣なる家のみいと多か

るを、断るあたりに長くあらんは、未た年などのいと若き身にて、終に染まらぬやうあらじと、しりうごと折々聞ゆ。

　　つまごひの雉子の鳴く音鹿の聲

　　　　こゝもうき世のさがの奥山』

とあるのであるが、所謂る怪し氣なる家は、一葉女史の家の入り口の兩側のみならず、町を隔ての向ふ側が門並それであつた。その邊を通ると、『寄つてらつしやいよ』といふ聲が方々の家から掛る。人の足音さへ聞えれば、さう呼ぶのだ。一葉女史は、『此の邊では人さへ通れば、寄つてらつしやいと呼ぶのです。通る人の方は少しも見ずに、唯さう呼んで居るんです』と云つて笑つたことがある。

六

同じ『しのぶぐさ』の中に、

『隣りに酒賣る店あり、女子あまた居て客の伽をすること歌妓の如く遊女に似たり、常に文書

きに給はれとて我がもとに持て來る。ぬしは何時もかはりてその數はかり難し。

　　まろびあふ蓮の露のたまさかは

　　　　誠にそまる色もありつや』

これは、鈴木亭に居た女のことだといふのである。二十八年の夏頃、一葉女史が『隣に居た女が客に出す文を書いてくれと云つて來たので書いてやりましたが、それから大層私の書きやうが氣に入つたと見えて、數寄屋町へ出てからも、車に乘つて、賴みに參ります』と話したので、僕は『いや。貴女の名文で書いた文を貰つては、先の男は到底じつとしては居られなくなつて直ぐ女のところへ飛んで來るでせう』と云つた。一葉女史は笑つて、『い丶え、何う致しまして、文句は彼方のいふ通りに書くのでございますよ』と、云つた。

それから、少し後になつて、僕は或る日一葉女史に、『何か新しいお作の御趣向が立ちましたか』と聞くと、女史は『面白い女があるので「放れ駒」といふのを書かうと思つて居ります』と低い落着いた聲で答へた。一葉女史は自分の作物に就ては得意らしいとか、熱中したとかいふ樣子を決して、人に見せない人であつた。戸川秋骨が「われから」の中の奥方が宮の前で、物思ひ

に沈むところを賞めたところが、一葉さんは下を向いて、微笑を含んで「彼所が肝腎なところです」と低い聲で云つた。滅多に自分の作のことを云はない人が、彼れだけに云つたのだから、彼所は大に得意なのだらう』と云つたことがある。女史自身が自分の作物に就て何か云つたことがその外にあつたか何うか、吾々は少しも記憶して居ない位である。

所で、一葉女史のところへ文を書いて貰ひに来た女といふのが『にごりえ』のお力のモデルであつたのだ。鈴木亭が菊の井のモデルになつた譯である。尤も鈴木亭は平家である。お力のモデルになつた女は、鈴木亭に来るまでは赤坂に居たと云つて居たさうであるが、藝者ではなく、矢張り鈴木亭同樣の家に居たのではなからうかと想像される。その女は、數寄屋町の藝者になつて居るうちに、新派の役者の餘り名高からぬ者と深間になつて、何時か數寄屋町を去つてしまつたといふのである。樋口邦子君の話ではその女は器量はそれ程ではなかつたのだが、如何にも人好きのする、心持の好い肌合の女であつたといふのだ。年はその時分二十二三であつたらしいのである。名はお留と云つて居たさうだ。

その時分のさういふ家での客の取り方は今日のさういふ家のやり方ほど簡單明瞭なものではな

かつたやうに聞いて居る。東京者のまだ幅の利いた時分であつたのと、何と云つても人間がまだ鷹揚な、まだるつこい事に趣味を持つて居た時代であつたからとで、さうであつたのであらう。

『にごりえ』の中で、お力が、『祖父は四角な字をば讀んだ人でござんす、つまり私のやうな氣違ひで、世の益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかに斷食して死んださうに御座んす、十六の年から思ふ事があつて、生れは賤しい身であつたけれど一念に修業して六十にあまるまで仕出來したる事なく、終は人の物笑ひに今までは名を知る人もなしとて父が常住歎いたを子供の頃より聞知つて居りました』と、云ふところがあるのであるが一葉女史が或る時、『白山へ寄つた方に、佐藤一齋の孫が銘酒屋を出して居て、其所には一齋の書が額になつて居るので、それだけを見に行く人が大分あるさうです』と、話したことがある。郭子君の話では、一齋の孫の家といふのは、一葉女史が福山町へ越した時分にも最早なかつたといふのである。お力の身の上のその一條は、一齋の孫のことからヒントを得たものであらう。

七

『にごりえ』には、濁酒屋の源七の佗住居が巧に描寫されて居るのであるが、一葉女史の『にもぎふにつ記』の十二月二十七日（明治二十五年）のところに、

『躊躇かねての心組に晦月夜の原稿料十圓のつもりなりしを思ふに越えたれば、彼の稲葉の許並風にもまれて種々なるも哀なるに昔は我も睦びし人の、是よりは何ごとも頼まねど、流石に他の間に非ず、理を推せば五本の指の血筋ならねど、さりとておなじ乳房にすがりし身の昔は〻姉ともいふべきを、いでや喜びは諸共にとて柳町の裏屋に貧苦の體を見舞ひて金子少し歳暮にやる、昔は三千石の姫と呼ばれて白き肌に綾羅を断たざりし人の髪は霜枯れ野の薄の樣にて何時取りあげけん油氣もあらず、袖無しの羽織見すぼらしげに着て、流石に我れを恥ぢればにやうつむき勝に、さても見苦しき住居にて茶を參らせんも中々に無禮なればとて、打詫るぞことに涙の種なり、疊は二疊ばかりにて切れもきれたり唯藥缶の樣なるに、障子は一處として紙の續きたる處もなく、見し昔の形見と殘るものは卵の毛におく露ほどもなし、夜具蒲團もなかるべし、手道具もなかるべし、淺ましき形の火桶に土瓶かけて、小鍋だての面影何處にかある、あるじは是れより仕事に出る處とて、筒袖の法被肌寒げにあんかを抱きて夜食の膳に向ひ居る

もはかなし、正朔君の我が土産を喜びて紅葉の樣な手に持しまゝ少時も放たず、御佛前に御覽に入給へと母君に言はれて佛壇あきたる處に供ふ、何事も時世にて又廻りくる春もあらんを正朔君だに斯くてあらば夢力を落して給ふな、かよはき御身に胸を痛めて病氣など起し給はゞ、それこそ取り返しのあることならねばと慰むるに、聞き給へ此子の成長くならば陸軍の技師になりて銀行より幾らも金を持ち來りて、父も母も安樂にすぐさせんと常々威張りて申すことと流石に賴もし氣に笑みて語る、又こそとて此家を出れば夕風袂に吹きて大路既に闇くなりぬ』

とある。こればかりを粉本にして、源七の佗住居を書いたのではなからうが、これが幾らかの助けになつたことは、疑ひがなからう。同じ源七の佗住居のところでは、源七の妻のお初が蟬表の內職をやつて居るのが描いてある。蟬表とは下駄の籐表のことである、夏、蟬の鳴くころから使ふといふので蟬表といふのださうである。これは二十五年頃、邦子君がやつて居た內職である。日記中の『わか草』といふ部の八月三日（二十四年）のところに、

『國子當時蟬表職中一の手利に成たりと風說あり。今宵は例より酒旨しとて母君大ひに醉ひ給ひぬ』

とあり、又『蓬生日記』の十月二十三日（明治二十四年）のところには、

『新年参る、國子の蟬表得まほしと様に云へばやがて二つばかりもて來し内にかばかりのはなしなどいふ、我身の蟬表とくらべられんにいかにかせまし穴にも入らまほしうこそ』

とあり、それから、二十五年四月頃になると、一葉女史自身も蟬表を作つたものと見えて、日記の四月の部に、

『十日より蟬表内職にかゝる。』

十一日　おなじく。

十二日　おなじく

とあるのである、

結城朝之助の粉本は大部は半井桃水氏であらうと思ふのであるが、一葉女史が或る時『隣りへ遊びに來る立派な人があるのだが、皆なに馬鹿野郎などと云はれながら、平氣で、池の中に入つて、ざぶ〳〵鯉などを追ひ廻して居る』と話したことがある。そんな事もモデルの一部になつて

呼ぶのであらう。

『にごりえ』の中にある源七とお力が心中したお寺の山といふのは傳通院の裏山のことである。今は人家が建て連つて居るのであるが、明治二十七八年頃は傳通院の裏手は藪や草原になつて居て、淋しい所であつたのだ。

大正五年であつたか、眞山青果君が伊井河合一座のために『にごりえ』を脚本にしようと企てたことがある。その時に眞山君は彼の邊にお寺があるか何うか見て來ようと思ふといふ話であつたので、僕はそれは傳通院の裏山なのだと說明した。眞山君が『お寺の山』といふのを直ぐに傳通院の裏山と心付かなかつたのは、僕に取つては少し意外な感じがしたのであつたが、更に考へて見ると、眞山君の方が尤もであつたのだ。一葉女史時代の東京は吾等老人の徒にこそ意味はあるのだが、眞山君あたりとは更に交渉のないものであるのだ。

一葉女史の日記中には、おぶんといふ女に惑溺した小宮山庄司といふ甲州人のことが、方々に出て居る。今にして思へば、その男の事であつたらうと思ひ當るやうな話を一葉女史から聞いたことがある。お力に惑溺した源七の心持を描くには、その小宮山の樋口家で或る時したらしい告

自ら[illegible]參考になつたのではなからうかと推測せられる。

綠雨と一葉

上

樋口一葉の晩年には、齋藤綠雨が餘程親しく交際した。一葉の病が重ると、綠雨が森鷗外氏に頼み、森氏の紹介で青山胤通氏に一葉の病狀を診察して貰つたのだと聞いて居る。

一葉が亡くなると、綠雨と戸川秋骨とが、樋口家の爲めに、いろ／＼骨を折つた。

福山町へ出る田町の右角のところが、當時は眞鍋病院であつた。その病院の夜警の太鼓といふのが實に厭な陰氣な音であつた。綠雨は一葉の靈前で通夜をして居る時に、「霜冴る田町に太鼓聞く夜かな」と口吟んだといふのだ。

博文館の一葉全集は綠雨の校訂及び校正になつたもので、誤植が殆ど一箇所も無い位に善く出來

て居たのである。その卷頭にある『一葉女史、樋口夏子君は東京の人也云々』といふ緒言は綠雨の筆になつたものだ。

一葉の日記『水のうへ』の一月――明治二十九年――のところには、

『正太夫のもとよりはじめて文の來たりしは一月の八日なりし』

とあつて、その手紙の要綱が書いてある。それから、その次には、

『九日の夜書きたる文十日にとゞきぬ。半紙四枚がほどを重ねて原稿書きたるがごと細かに書したり』

とあつて、又その手紙の要綱が擧げてあつて、

『一覽の後は其狀かへし給はれ、君よりのもかへしまつるべし、世の人聞うるさければとなりけり、直に封じてかへしやる』

とある。で、此の時分は、綠雨は一葉にまだ面識がなかつたのだ。所で、此の二通の手紙は、綠雨の請求に依つて、綠雨の手許へ返したと日記には書いてあるのだから、その全文は今日では知ることが出來ない譯であるのだが、實際はその全文を此所に載せ得るのだ、僕はこれを樋口家

から得て來たのだ。

一葉はその手紙を緣雨に返す前に、妹の邦子に讀ませて、大急ぎで書き取つてしまつたのださうである。これは、日記には

『正太夫はかねても聞けるあやしき男なり。今文豪の名を博し明治の文壇に有數の人なるべけれど、其しわざ、其手だてあやしき事の多くもある哉、しばらく記してのちのさまをまたんとす』

とある通り、後日の證據にもといふ意味でもあつたのであらうが、又一方ではいたづら半分の心持もあつたのだらうと想像される。一葉の氣質がさういふところにも表はれて居て甚だ面白い。

最初の手紙即ち九日に來たといふのは、次の如きものである。

『われは申すまでもなく君に所緣あるものに候はず、唯わが文界の爲に君につけ參らしたくおもふ事二つ三つ有之候、筆にてすべきか口にてすべきか、但し我れに一箇の癖あり、われより君を訪ふ事を好まず候、きゝ給はんとならばいかなる親しき人の間にも必らずよく祕密を保たるべき事を先づ誓はれ度候、然らざれば君に不利なりと信じ候により

勿論手でには及ばず、われも又強いて人の爲に言をすゝめんにも候はねば

正太夫

一葉樣』

此の手紙の寫しの末に、一葉は此の手紙が使者でとゞいたものであることを記して居る。綠雨は此の時分は本鄕弓町あたりに居たのではなからうかと思ふ。

一葉が綠雨の此の手紙に對して出した返事は次の如きものである。

『御ふみ拜し參らせ候、御親もじの御意身にあまりて有がたく、人には得こそもらすまじく候まゝ、ひたすら御申聞け願度、たゞちに參上御ひざもとにてと飛びたつ樣に存じ候へど、男ならぬ身なれば、さるかたに御見ゆるし、御教へのいたゞかれ候やう神かけねんじ參らせ候、御返事のみを　あら〳〵かしこ

一月九日

齋藤　樣

御前に』

日記に『何事かは知らねど此度兩家がことかならずをかしからんとて返してやる』とある返事がこれである。今日の人々に比べると、感情を包む修練が前代の人々には出來て居たのだ。

中

綠雨の手紙――九日に書きたるものといふ――は、可なりな長文である。便宜上二つに割ることにする。

『おそく歸り候處、御返書參り居り拜見いたし候

さらば、某が思ふよし遠慮なく可申上候、もとより筆にてと存じ候なれども、乍失禮御心入いかゞと存じ、わざと御尋ね申上げたるに候

凡そ人間の交りの上に於て、ためすなど〻申すは甚だようしからざる事に候、こゝに我れは言を吐いて、まづ御說申上置く

さてこれより「二つ三つ」の本文に候へども、女性に對し甚だ申しにくきことを申すにて候へば、

無論失禮は覺悟の上に候、尤も禮とは一種の規則に有之、飾るを以て禮とは心得不申、おもひ切つて飾らざるわが言葉の裡に何ものか採りあて給ふ所あらば幸ひと存候

ことさらに君と呼び申候、君が名は、改進なりしか武藏野なりしか忘れたれど、我れは早くより承知致し居、其後「たけくらべ」「ゆく雲」等を讀みて（但全篇通してにはあらず）、多分御同人と推し、其筆のいたく上り給へるに驚き候

「にごり江」出でゝ、御名の餘りに評論界にかしましきより、われも窃に注意致居候處「わかれ道」に至つて、昨日の如き書面をさし上ざるを得ざる次第と相成候

何となれば「わかれ道」に於てぞ明らかに御作の漸く亂れんとするの（亂にあらず寧ろ濫也）傾向あるをみとめ得らるべく候、どこをとさす事は今暫らく見合すべく候へども「にごり江」に比して數等の下に居り候、人は「にごり江」を殊の外とりはやし候へども、われは寧ろ材は「わかれ道」の方まされりと存じ候にも拘らず

今の評論界と申すは、一ト口にいへば、めくらの共進會に候、實際的批評すたれ科學的批評のみ行はれ居り候、世間の事何も知らず、たゞ本で覺えた理屈に當てはめて初めてなるほどゝ合

點致すやうの連中のみに候

か丶る連中にほめられ候とて何ほどの事か候べき、われを以ていはしむれば、「にごり江」の評判よきは彼等が夢にも知らざる事實を組合し給ひたれば大半はそれにうたれて他は評したくとも評すべき力なき故に候、力なきと申よりは評すべき氣がつかぬのに候、われは「にごり江」には感服いたし候へども、かれ等とは殆ど反對の點に於て感服いたし候、此邊猶大に申すべきこと有之候へども、議論に渉りて長く相成候に付省き申候

御作の亂れんとするの原因についてわが意を單刀直入に申候へば、君が多少かれ等の批評に心ひかされ給ふ所あらずやとの事に候、さる弱々しき御こゝろにては候まじけれど、たとひ彼等がほめ候ともくさし候とも一向眼にも耳にも入れ給はぬがよろしく、たゞ君が思ふ所にまかせて、めくら共に構はず、マッすぐに進まれんことをわれは希望致候、斯くの如くにして出來そこなひ候とも決して恥には候はず、なまじいなる議論に心とめてわれとわれをいぢくり廻し候こそ却て恥と存候

約言すれば直往し給へとばかりには候へども、これ實にわれの君につけんと存じ候第一に候

猶すゝみて御身の上に及び候、但し此だんは風說のまゝを申すなれば眞僞は知らず候、決して我れが悉く事實とおもひて申すとは思召し給はるまじく候

嘗て君が淚六のもとに原稿を携へ行き給ひしとの事を聞きて、君が考の頗る異なるに不審の眉をひそめ候、此事は今申さゞるべし、其後聞き候へば、君がもとに文人と稱するもの大分入込み候よし、勿論深く御交際あるには候はざらんが、望むらくは夫等の輩は斷然逐ひ拂ひ給はん方御爲と存候、いづれ參りて疎な事を申すには候はざるべく、われより察し候へば、多分それ等は世間輕薄の少々も並ぶるに過ぎずと存候

訪問と申すことは利己か利他の二つを出でず候へどもそれ等のは利己でもなく利他でもなく、唯おもしろづくにまぜつ返しに參るばかりに候、其證據は君が家に行きて菓子をこひしに、妹御が金花糖をもとめて參られたりなど申すことまでも、翌日は直ぐに風聽しあるくを以ても明らかに候ふ

下

「此のほど中より君をおとづるゝものに碌な奴はなしと申す事はわれは斷言するに憚からず候姓名は皆存じ居り候、われが君を訪ふことを好まずと申候は半ばは此故に候

友は無かるべからず、心ある人々と道など語り合ふは妨なし、稱へのみは文人にて俗人に劣れる(文人のいやしきは俗人のいやしきに劣り候)奴共の相手をし給ふには及ばず、よき事は少しもいはで惡しき事のみ傳へ候、チト嚴めしく見せ候へば、話しするもふるへ候ほどのしろ物たちなれば、頓着なくはねつけ給ひて、やくざ共の寄り參らぬやうになさるべく候、やがて何かに思ひよらぬあやまりを背負ひ給ふ事あるべくと、君の心の底はしらず候へども、われは案じ申候

われは常に孤立致し候のみならず、作家は必らず孤立すべきものと考へ居候、異方面の人に會ふはおもしろくとも、御宅へ此ごろ參り候やうなるやくざ文人などに取まかれ候は何の益もなく害あり候、われはやくざ共の受けよろしからず、種々の惡名を山の如く負ひ居り候へども少しも構はず、たとへも如何なれど、佛は頭に鳥の糞かゝり候とも佛たることをうしなはず、鳥の糞は一時にて、…われさへ取合はずば、雨が來て洗つてくれ申候、君がやくざ共をはねつけ給

ふによりてかれ等が何と申さうとも、さる事は御懸念に及ばず、精々御遠ざけあるべく候やくざ共の唱ふる風說一にして止まらず、果は何がしは君に結婚の事をすゝめに參りたりの、君は君よりも想の低き何がしと其約ありのと、人間の大事までもよくもきはめず風聽致居候、われは此風說の內申度き箇條少々あれど、まことか嘘かの分を分きかね候まゝこゝには記さず候、さし當る所は先づ以上の二件に候、おそらくは君は文界の內情など知り給ふまじければ、些細の事とおぼし召さんか知れず候へども、われの考へ候ところにては、等閑……

最後に御斷り申置くことは、今の評者をめくらと申、文人をやくざと申候とて、何等の恩怨あるには無之、唯君の爲に打割つて申までに候へば怪しみ給はざらん事を祈り申候、遺れるものは其內折を得て可申上候、性根すわらぬやからの萬一にほひをかぎて何かと申さんもわづらはしければ御書面お返し申上置候、御誓言ありたれば御疑ひ申す次第には候はねど、わが昨日の書面も御覧後御序に御戻し下され度候、この書につきては御判斷は君にある事に候へば御返事には及ばず、わが書面だけ封じて御送り下され候へば、其封筒はもとより火中いたすべく候

唯今夜二時の鐘をきゝ申候、名代の惡筆亂筆順序立てゝ記したるに候はねば、よろしく御判讀

ありたく候

いつかは御目にかゝる事の全く無きにも候はざるべければ、こまかくは其折になりとも

九日夜　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　綠雨

一葉様』

文中『等閑』だけで後がないのは、大急ぎで寫したものであるので、その後を略したか何かであらう。多分『等閑に附し難き事也』といふやうな意味の文言であつたのであらう。寫には、『いつかはお目にかゝる事の云々』といふ行には墨が引いてあるのは綠雨の原書に棒が引いてあつたのであらう。讀めないやうに塗り消してなかつたところが一寸面白いと思ふ。

金花糖のことは、大野洒竹などから傳はつたのではなからうかと思ふ、大野は一葉の七週忌の時に、『一葉を初めて訪ふた時に出された菓子は金花糖の鮭で、而も口に縄のついた儘であつた』と、僕に話したことがある。洒竹はかなり饒舌であつたからその當時そんな事を人に話したかも知れぬと思ふ。一葉と結婚の約があると噂されたのは川上眉山である。然し、一葉の日記には、

後の方になると、眉山のことを随分惡く書いてある。

綠雨が一葉を初めて訪ふたのは、五月二十四日である。日記には『正太夫はじめて我家を訪ふ。ものがたる事多かり、』とあるのだ。同月の二十九日に、綠雨は二度目の訪問をして居る。これは『われから』の夫人と書生との關係に就て露伴氏と意見を異にしたので、作者の考へを尋ねに來たといふのであつた。日記には綠雨との應答を詳記した後で、綠雨のことを次のやうに書いてある。

『正太夫齡は二十九、瘦せ姿の面やゝ凄味を帶びて、唯口もとにいひ難き愛敬あり、綿銘仙の縞がら細かき袷に木綿縞白の羽織は着たれど裏は定めし甲斐絹なるべく、聲低なれど澄みとほるやうの細く凉しきにて、事理明白に物語る、當時六が云ひつるごとく、彼は毒筆のみならず誠に毒心を包藏せるのなりといひしは實に當れる詞なるべし、世の人さのみに知らざるべけれど、花井お梅が事につきて何がしとかや云へる人より五百金をいすり取りたるは此人の手腕なりとか、其眼の光の異樣なると、いふことくの嘲罵に似たる、優しき口もとより出ることながら、人によつては恐ろしくも思はれぬべき事也、われに癖あり君がもとに訪ふ事を好まずと書したる一文を送られしは此一月の事なりき、斯道熱心の餘りわれを當代の作家中物語るに足

ろものと思ひて諸事を打すて訪ひ寄る議ならば何かこと更に人目を忍びて隠れたるやうの振舞あるべきや、めさまし草のことは誠なるべし、露伴との論も僞には非ざらめど猶この外に潜める事件の無からずやは、思ひてこゝにいたらば世はやうやう面白くもなりける哉、この男かたきに取りても面白し、身方に付きなば猶さらをかしかるべく、眉山、禿木が氣骨無きに比べて一段上ぞとは見えぬ』

で、その續の所には『逢へるはたゞの二度なれど、親しみは千年の馴染にも似たり………語る事四時間にもわたりぬ、暮ぬればとて歸る、車はかどに待たせ置つる也』とあるのだ。斯ういふ風で、相方の興味が段々深くなつて行く經路が、それから後の日記で明かに窺はれるのである。

もう紙數が盡きたので、此で筆を止めるが、唯だ最後に一言して置くが、前掲の手紙から見ても、日記に書かれて居る綠雨の言で見ても、綠雨は如何にも大家らしく振るまひ、且つ新派とか舊派とかいふ區別を立てゝ、可なり頑冥な態度であるやうであるが、僕が親しく交際し始めた三十年頃にはさういふやうなところは殆ど無かつた。明敏なる綠雨は時勢の推移を看取するに遲疑で無かつたのだらう。

一葉の手紙

一

嘗て讀賣新聞に樋口一葉君から平井桃水君に送つた手紙が公にされたが、その中に、

『此ほどは思ひもよらぬ賜ものありがたく打ふし不在にてしけ樣に御目にもかゝらず、御前さま御近狀をくはしくは承り得ざりしこといとも〳〵殘念にて、ことに鎌倉へ御旅行とか伺ふはもし御病氣にてはなきやと御案じ申候ひしかど、憚る處なきにしもあらで心ならずも日を送り申候。

今日しもめづらしき御玉章、久々にて御目もじせし心地、うれしきにも又お恨みの御詞がうらめしく候、私し愚どんの身人樣をしるなどゝ申すことかけても及ばねど、師の君なり兄君なりと思ふお前樣のこと誰人が何と申傳へ候とも夫を誠と聞く道理も無く、もとよりこしらへごとゝは存じ候故別して御耳にも入れざりしに候、我さへしらぬ事をしる世の中、聞かぬ事を聞くかと申す仰、さしてあやしきことにもある間敷、御捨置き遊ばし候とも消ゆる時にはきえ候はんかし。

かく計らぬ事より御目通りの叶はぬ樣に成しもやむを得ぬことゝ私しはあきらめ居候、今更人の口に耳も立ず只身一つをつゝしみ申居候。

さりながら其源は何方くにもあらず、みな私しより起りしにて此一事のみにも非ずひきおれかし落しいれんのおとしあな設けられし身、いかにのがれ候とも何の罪かきせられずにも居る間敷と悲しき決心をきはめ居候。

唯々先日野々宮さまにおことづて願ひしとほりお前樣御高恩のほどはみな〳〵身にしみて有難く日夜申暮し候もの、其御親切仇にして御名前をけがし候こと何より心苦しく愁らきはたゞ是のみに候、申上度こといと多けれど、さのみはとて御返しばかりをなむ、猶々願ひ參らするは何卒へ御轉住相成とも何とぞ御住所御しらせ置きたまはり度、又折ふしは一片の御便りもと夫れのみ苦中のたのしみに待渡りりゝかしく。

折しもあれ初秋風の吹きそめたるに、蟲の音の時しりがほなるなど、月にもやみにも夜こそものおもはれ候へ、露けき秋とはつねに〳〵申ふるせし詞ながら、袖の上におく今日此頃ぞ誠にしかとは思ひしられ候。世の中の心細さ限りなく私しこそ長かるまじき命かと存じられ候、先頃

より腦病にて自宅に歸り居候を又さる人々のあしざまに言ひならすとか兎にも角にも誠なき世はいやに御座候。

八月十日夜　　　　　　　　　　なつ子

御見上樣御前』

といふのがあつて、それに『私しこそ長かるまじき命かと存じられ候とあるを見ては何人か涙なからん女史は實に此年の秋廿六歳を一期として逝かれたるなり、眞に悲慘の極みならずや』といふ評語が付けてあつた。此評語を付けた人は前記の手紙を二十九年の八月十日の夜に書かれたものと臆測されたものらしい。

所が、私どもは此手紙は二十五年八月十日の夜に書かれたものと斷ぜざるを得無いのだ。

一葉全集中の『日記』に依ると、半井君と一葉君との間に世間の疑が生じて居るといふことを一葉君自身が明に耳にしたのは、二十五年の六月十四日の夜、中島歌子刀自の許でゞあつて、中島氏の忠告によつて、一葉君は半井君と一時交際を絶つことになつて、同月の十五日に半井君を訪ふて、『中島家が人少なであるから、手傳ひの爲め暫時中島家に行つて居らなければならぬ、就て

は小說を書く事も無からうから』といふやうなことを云つて、半井君との交際を絶つ前提を設けて置て、同二十二日までは、一葉君は中島家に宿つた。同日になつて、再び半井君を訪ふて、事情を殘らず打ち明けた。それから七月十四日に中元の禮に半井君を訪ふた。『君今日何方へか轉居されんとする也けり、もの語ることも無くて歸る』とあるのだ。それからは二十五年十一月十一日に至るまでは、半井君と一葉君との面會の期は無かつたやうだ。

二十九年八月頃には半井君と一葉君との間に物疑ひを入れるやうな人は殆ど無かつたやうだから、半井君と一葉君との間に前記のやうな文面の手紙をやり取りすべき何等の事情も無かつたやうだ。『日記』中の前記の部分だけで見ても、手紙の二十五年八月十日夜のものであることは明らかなのだが、『日記』には未だもう少し確なことが書いてある。『午後より野々宮君來る、終日詠歌す、半井君の事種々ものがたる』とあり、八月六日『此日半井君より重太郎を使者として菓一箱おくらる』とあり、同七日『野々宮來訪、終日歌をよむ、半井君を訪給ひしよし、我事に付ての談話ありしやに聞く』とあり、同十日『半井君より長文の手紙來る、返事したゝむ』とあるのだ。一葉君は二十九年十一月二十三日、年二十五で死んだ。一葉全集後篇の卷頭の文の中に書いてあ

る明治五年三月二十五日といふ一葉君の生年月日は間違つては居無いさうだ。

二

一葉君は、半井君に宛てた手紙でも知れる通り、手紙の文句の實に旨い人であつた。私は二十八年八月の末から三十年一月へかけて地方に居たので、文學界の連中のなかでは、一葉君から割合に多く手紙を貰らつて居るのだが、皆旨い文章なのだ。一葉君の作物は今度出る一葉全集で大抵まとまる譯だが、まだ詠歌だけが殆ど全部殘つて居る。併し、それは、一葉君の十五位の時分から歿年までの分が皆集まつて居て、非常な數なので、歌集の出版は歌の選拔になか〳〵骨が折れやうと思はれる。私は一葉書簡集を出してみ度い。樋口家でも其の希望があるものと見えて、故人の知友諸君に頼んで手紙を借り集めて居る。

試みに左に一葉君が私に呉れた手紙を寫して出さう。郵便局の消印のある封筒も共と保存してあるのだから、手紙の年月日に間違ひは無い。

私に取つて面白く思はれることは、半井君宛の手紙で公にされた分は何れも一葉君の小說家と

して未だ名を成さなかつた時分のものであるに拘らず、文章は矢張り旨いことであるのだ。『日記』で見ても分ることだが、一葉君は初から文才の秀はれた人なることは確かである。

* * * * * *

『こゝろのほかの御不沙汰に打過ぎいかやうの御しかりをうけ候ともたゞ恐れ入り候ほかもなけれど、さりとて一通りの申しわけはゆるし給へ、はじめの御手紙たまはり候ころより中島の師こと酒匂へ遊びに参り留守のこと何くれとたのまれ候まゝ大かた日ごとの用事おほく家に居るはまれなるやうにくらし居り、おもひながらも思ふにまかせねば、此方より御恨み申上べき筈をあべこべに相成候、さりとてはくやしきことなれど、此度は御詫び申上候べく候。

俄にきのふ今日秋風のたちておどろかるゝやうに候へども、御地は如何、このほどのお文の御様子にては、いよ〱御盛んの御勢ひ、こゝなる人々いか斗うら山しういらせられんかとをかしく候、むらさきの矢がすりを見過したるの、曾根崎あたりかけぬけ給ひしのと、少しあやしき御事どもたやすくは受とりがたき御話しなれど、御氣まぎらしといわふけならば御尤様とてうなつき申べく、それはみをつくしの床しかりし御方さま空しき烟りと成給ひしよし承り及べばに御座候、

湖水の月に打むかふてそゞろにものを思しめすお前樣のお姿こゝにも見えるやうに御座候、哀れ成し人の爲、かつは御身の罪ほろぼしがてら、みをつくしの後日といふもの是非かゝせ給はねばかなはぬ事と存じられ候、箱根にてはじめてその便りを聞得給ひし時御愁傷どのやう成しかまだどなたにも御目にかゝらず候まゝ御樣子承ることかなはず、唯大方に御悔み申上置候。

學校はもはや御始まりの事なるべく、さのみ御面倒もなきやうに承り候が、変はり給ふ御方々はいかやうにや、お獨寢にさはるやうの事ありてはと、夫れのみ御案じ申され候、御からだも其樣に御丈夫ならず、お健には入らせらるべけれどお弱きやうに存じられて兎に角御こゝろのやましからぬやうにと祈られ候、常に御目通りのかなひ候ころはたゞ事なし打過ぎ候へども、かく御遠方にはなれ參らせたることゝ存じ候へば、俄にさびしくこゝろ細く候て、此ほどの月のよなどは打寄りて御うはさのみ申居候ひし、汽車といふものあればこそなれど、百里といふは大方の事かは、山もあり川もあり、俄におもひ立て何を申すもかなはぬに候へば、空のみながめらるゝなどゝいふ人事をさへ思ひ合せられ候。

此ほどの御末文かたじけなく拜し候、勉强せよと仰せ下さる御方は私の爲の守り本尊なるべく

そのやうに仰せ下さろをたのみにはかなき文をも作り出で可申、笑ひ給はで御教へを賜はれ候やうこれは見かけての御願ひに御座候。此月は文學界にての拜見かなふまじくや、其あたりの御模様さぞかしとこゝろ樂しみに候、申度ことも多けれど筆がまわらず候まゝ此次にとて、

このほどは伯母と仰せ下され候あれば返上致し置くべく候、我身のよいを讀くといふ譯にはこれなく、勿體なき事なれば恐入りての返上に御座候、何も此度はあら／＼、何れ不日又々御邪魔いたすべく御目をおかし下さるべく候。

草々　かしこ

なつ

十七日夜

馬場様御前

母よりも妹よりも何卒よろしく申上くれと返す／＼申出に御座候』

これは、二十八年九月十九日の手紙だ。私が彦根から大阪へ一寸と行つてから、便りをしたので、その返事のやうによこしたものだ。『雲の矢がすり』と云ふのは、京都の賣る町を歩いて居た

舞妓か何かのことを書いてやつたのだと思ふ。倉根崎は實際車で馳通つたのみであつた。『みをつくし』の女といふのは、箱根温泉宿の女中で、米神(こめかみ)といふ村から來た確かおくらとか云つた女であつた。一寸と器量の好い女であつたので何の氣無しにほめた所が、同人間の噂に上ぼつて、一葉君にまで斯の如くヒヤカされるに至つた譯なのだ。

三

『御いそがしくゐらせられ候や、たえて御たより承らず、その地はわるき病流行するよしなどかねがね承り居候まゝ、いとゞ心配にたえかね申候、時々文學界のかたがたなどお出も候へども、人様のおかほさへみれば馬場樣〳〵とおうわさ申出す事の少しは極りわるく存じられ候まゝ、このまゝには御樣子承りおはす事もならで、いよ〳〵御なつかしさの増るやうに御座候、おかはりなく御勉强ゐらせられ候や、萩も薄も下葉やつれて、やがての月に隈なくころ、やゝ色つきゆく山の梢など御覧ずるにつけて、お旅寢のおこゝろいかにやとおし料り參られ候、いつぞやのお便りに石山寺義仲寺などよそながら承るだに心ゆく樣なる所々御遊覽の御樣子うら山しく、逢坂

の關よりと遊ばしたるお葉書とゞきたる時は、そゞろお前様のおわらひ姿、おもかげに見えて、今も見てしがなと御なつかしさやるかたもなく候ひし、それより絶えておたよりなきは、これよりさし出さぬ失禮を怒り給ひてかとおもひたどられ候に、お詫を申すが厭やなれば、今日まで我まんを致し居り候へども、もとより女子は弱きもの、まけてもさのみの恥ならず、御なつかしきは何處までもおなつかしきなれば、用なき痩せ我まんにそなたの空のみながめんよりとて、文したゝめてさし出し候。おひまあらばたゞ一筆お便りつけさせ給へ、文學界のおかた〴〵など、おん有様しりたしとならば、親御様の御もとにもはしり給ふべし、私はお馴染もなければ、今僅にお留守を背なひ參らすることもならで、空しくうち〳〵におうわさ申暮すのみ、筆とり給ひて折々のおたより、夫れのみ待渡られ參らせ候、さても此ほどのことにて候ひき、都も秋の空さびしく萬づにまぎるゝ物なく暮し居候まゝ、一日妹ともなひて飛鳥山より瀧野川あたりそゞろあるきすることありしに、ある野道にてふと逢ひたる人のとしは二十四五位にや、そのわたりの野に折りし草花少し手に持ちて、無造作にさつ〳〵と歩むうしろ姿似たりとてもいかな事お前様をそのまゝなるに、追ひかけてお名をも呼び度やうに候し、されども、もとよりお前様にてある筈なけれ

は、唯そのかたしろのかげ消ゆるまで立盡して見おくり申候、かゝるおもはぬ筆道などにて、おもはずお目にかゝるやうの事あらばと、はかなき事申あひて歸り候ひしが、その時すぐに文さし出さんの心成しかど、猶その折にまける事のくやしく、けふまで打擱き候ひぬ、彦根の風に染まり給ひて都をうはの空におぼさば、かつ彌樣とは申さじ、馬場樣はそのやうの情なき不實のおん方にてある答なければ、此頃打たえおたよりのなきもおいそがしきのまぎれに筆とり給ふおんいとまのなかるべく、さらばおしては願ふまじ、唯おのづからのお序にとのみを。色々申上度こと澤山、それは十二月おんめもじのふしならでは盡すまじう、たゞ明くれ指をりてそのほどいと待わたられ候。おんなつかしく候かな　かしこ

なつ

馬場樣御もとに』

これは二十八年十月九日の手紙だ。一葉君の『日記』には十月九日『此夜文二通したゝめき。一つは如來ぬし、一つは馬場君、前のはきのふの返事、附錄の事など云ひて、つぎなるは久しう音づれのなきにいかゞ暮らすとおぼつかなくてなり』とある。此返事に對しては、『若い者を感動さ

せるやうな手紙をよこすことなかれ。私だつて何な思ひ違ひをせぬにも限るまい』といふやうな返事を出すと、急ぐ折り返へして一寸と面白い返事が來たと思ふのだが、その返事の分が今一寸と見付からない。誰か持つて行つてしまつたのか、何處か箱の奥にでもあることだか、まる／＼無くなつてしまつたとすると、惜しいものだと思ふ。

* * * * * * *

『御無沙汰の罪さり所なく候、日ごと夜ごとこゝろの中にお詫びは絶えず申上げ候へども、願はれねばそのかひもなし、たゞ御ゆるし給はるべく候、いつぞや、お寫眞おめぐみにあづかり候折お禮ながら申上度こと數々御座候ひしかど、今は時おくれて申そびれ候まゝ、たゞ御禮をのみ申上候、倫敦お寒く相成候へどもその御地はいかゞにゐらせられ候や、相かはらず御盛んに名所舊跡おさぐりのこと、御浦山しく存じ居候、此月末にはかならず御めもじのかなひ可申か、みな樣がたお出にてはいつも共うはさ許、たとひいかやうにお心ひかるゝ物ありても、此地にはおとし寄りもゐらせられ候、かならずお顔みせにおもどりのやう、これのみを願はしく候、いよ／＼御出京ならば、いつごろ幾日ぐらゐに御めもじかなふべきか、そのほど／＼待兼られ候、お詫びもおん

禮もまたそのほかに申上度ことも取かさね、その折おうるさくお聞きにいるべく、うきもうれしきも申かはす人なき今日このごろ、たゞ御めもじをのみつまだてゝ待參らせ候。あら〳〵かしこ。

め　いゟ

かつやをぢ様御もとに』

これは二十八年十二月五日の手紙だ。『かつやをぢ様』とは、ずつと前に私の方から『樋口をば様』といふ宛名で手紙を遣つたことがあるので、そのしつぺがへしなのだ。

* * * * * *

『餘り久しき御無沙汰に相成申候。けふは〳〵と存じながら、日々つむりのなやましさに何するもものうく、本もよまねば手ならひは更なること、人とものいふもいやにて暮し居り、夫れ故の怠りに候、日々母と妹の右左よりせつきて馬場様へのお返事をかけよ〳〵とせきたてられ、空しう事のみいひ〳〵今日までには相成候所、けさは雨降て物の淋しさに堪へがたく、今小石川の稽古に出づべきなれど、夫れも憂くつらければ、とりとまらぬことしたゝめ出で申候、私は此春御めにかゝりし頃よりの病氣さらによく成り申さず、たゞ氣がふさぐやうにて困り入候、文學界の

らわが筆二十七日に世に出で申候へど、これに何かしたゝむべき約束成しもつい出來候はず、誠に筆など持つことといやに成りはて候、このほど人の訪ひ來て、御もとは近ごろのやうに筆とる事をいや〳〵といふほどにやがて全く物かゝれぬやうに成るべしといはれ申候、さなるべきにや候はん。おもしろしと思ふ事もなし、筆とりて物いはんといふやうな力を入るゝこともなし、よし又力を入るゝやうな事ありとも、此方づれがつべこべ何の用をかなし候はんや、無用のことをしたり顏にして居るほどくだらぬものはあるまじく候。さりとて是れをすてゝ外に何のおもしろき事ありといふにあらず、移らばやと思ふ業もなし、誰れやらが歌に、しかりとて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中といふが御座候、斷つことのかなはねばこそほだしといふには候はめ、私は日々考へて居り候、何をとの給ふな、たゞ考へて居るのに候、大抵の人に思ふ事をうち明けたとて笑ひごとにされて仕舞ふべきに候まゝ、私は何もいはぬ方が洒落て居ると獨ぎめにして居り候、たかが女子に候もの、好い着物をきて芝居でも見たい位の望みがかなはねば彼のやうにぢれて居るのであらう、といふやうな推察をされて馬鹿にされて嘲笑されて、これでん十年をやつさもつさに送つてそして死んでしまふ事かと思ふに、其死ぬといふ事がをかしくてや

つとほゝゑまれ申候、こんな事はどうでも宜いのに候へど、つい御心安だてに下らぬ事を書き申候。

御前様はいよ／＼おふるひ、二頭馬車の御威勢をば御しめし下され度待渡り參らせ候、こゝの平田ぬしは男爵末松といふ御名のもとに揚々としておはしまし候、戸川さまはとかく病ひがちのやうに承りしが、此頃すこしおん勢ひよきもやう、御同人として御文通しば／＼おはします事なるべく、此度の試けん終り候はゞ、御地へでも遊びにお出かけなされ度おほし召らしく承り居り候。暑中のおん休みにはかならず御歸京のおん事かと待たれ候、いつ頃よりお休みには相成候や。筆はおもふ事のかゝれで口をしく候まゝ、御目もじの折のみ待たるゝに候。

此ほどはおこころいれの花すみれ嬉しきことは御禮の筆たるまじく、たゞ手なれの書物のうちに納めて長く餘香をかたじけながり居り候、久々にておん姉上様にお逢ひ遊ばされし御嬉しさのほど、蔭ながらもおしはかり懐かしと存ぜられ候、奥様とまがへられ候ひし由、さて御ゆかりのお文様お讀どのなど參られなばいかならん、定めて蜂の巣をつつきたるやうのさわぎ成るべしとをかしくて、どうやら其やうの事あれかしと願はるゝ心地も致し候。

あゝし遠い事いかさまに成り候ひけん、あの子は今も御身近く參り候や、にほの海近くにも風流はおはしますものを、みるめなき浦との給ふこと心得ず、箱根は箱根、近江は近江、二かたに分けて同じやうに御あはれびつかはさるべく候。

この文したゝむうちにをかしき事いろ〳〵湧來て猶申上度心地に候へど、時たま文さし上ながら、又口わるをいひ出しよなどの御かけごと說しく、これまでにとゞめ申候。そのうち〳〵かしこ

三十日　　　　　　　　　　なつ

馬場樣御もとに』

これは二十九年五月三十日の手紙だ。『二頭馬車云々』は、一葉君がよく自分の身の上を悲觀したやうな話をされるので『ナニ僕などは落ちぶれるのは何うしてもイヤだ。馬車に乘る積りでやる』といふやうな冗談をいつたことがあるからだ。當時九州に居た私の實の姉が東上の途中此處へ寄つて呉れたことがある。私よりは年が十ほど上なのに、何う間違へたものか中學校の關係者の間に、私の許婚者が尋ねて來たといふ噂が廣がつて大笑をした。姉を其實に案內した事々圖よ

いふ料理屋の女中にその噂を話したら、『あれが貴方の奥樣では、貴方には重過ぎませう』と云つて笑はれた。

お文、お廣、一人は隣家の小間使、他は箱根の溫泉宿の女中である。

畫といふのは、當時同じ中學校に教師をして居た鹿子木孟郎君の筆になつた彦根の舞妓の肖像であるのだが、これは後になつて三十八年か九年に太平洋畫會へ出したことがある。如何にも笑顔の可愛らしい十四五の娘であつた。

藤村氏の『春』に描かれたる人々

一

湯本の小清屋の前の川岸に立つと、向ふ岸の大石の蔭あたりから河鹿の涼しい聲が聞える。箱根へ來たのは、十五年ぶりである。が、此のあたりの山の姿は元より、水路の具合も、道の廣さも全く舊態を存して居る。七八年前の洪水で川中の樣子の甚だしく變はつたのは、塔の澤から上であつて、木賀の總屋の邊りなど、昔のやうな急湍雪を吐く趣は最早見られ無くなつた。とにかく、塔の澤までのところは、川中の樣子までさうは變つて居無い。一石一岩の位置まで何だか昔のまゝであるやうな氣さへする位なのだ。

箱根の温泉を始めて知つたのは、最早二十六年程前のことである。それは、八月の十日頃であつたかと思ふのだが、親族の者が病氣で、それに連れられて、塔の澤の鈴木へ來たのであつた。その親類の者の病氣見舞にいろ〳〵な人が尋ねて來た。大石正己氏と、尾崎行雄氏と、犬養毅氏

とが連れ立つて来たこともあつた。三氏は代り〳〵に將棊を指した。

面白いことには、所謂る苦手といふのであらうか、犬養氏と大石氏と指すと大石氏が滅茶々々に負ける、犬養氏と尾崎氏と指すと犬養氏が手も無く負ける、所が、その尾崎氏が大石氏に對すると殆ど敵で無い程に大石氏が何時も優勢である。

大石氏は、落着いた如何にも意地の悪さうな聲で、尾崎氏に『君のは將棋を指すのでは無くて將棋を引くのか？』と云ふと尾崎氏は眞面目な顔で『悪口を云ふね』と云ひながら、駒を退却させて居るのであつた。大石氏は『尾崎は犬養に勝つ、然るに、吾輩はその尾崎に勝つのだから、ロジックから行くと、吾輩が一番强い譯だ』と云つて、よく吾々を笑はした。

二十六年は可なり長い月日である。その間に多くの水が流れた。これ等の人々の境遇はさまざまに變つた。今は皆白頭の人となつた此の三氏が、昔のやうに將棋盤を挾さんで、無邪氣な冗談口をきくやうな日が、今もあるか何うか、私は知ら無い。

二

塔の澤への道は昔と少しも變つて居無い。東京からの客が歸る時は私は大概湯本の停車場まで此道を送つて行くのであつた。その時分は湯本國府津間には鐵道馬車が通じて居るのみであつた。さういふ時は、何時も宿の女中の十六位なのが、一緒に客を送つて行くのであつた。それは、背の延やかな、面長の、色の白い、口數をきかぬ、地を如何にも輕く踏んで行くやうな歩き方の娘であつた。

停車場から歸途は、その娘と二人で何時も默まつて歩いた。明治學院での同窓の遺友の家で溫泉宿を持つて居るといふことを聞いたことがあるので、その娘に、その友人の姓を云つて、その溫泉宿は何處だか知つて居るか、聞いて見た。娘は何とも返事をせずに歩いて居たが、玉の緒橋を越して、玉の湯の前を通る時に、垣根のやうな處から右の手に持つて居た自分の袂を推けるやうにして、家の中を覗くやうにしたが、直ぐ私の方を向いて「此所です」と、低い聲で云つた。

此の娘が二十六年の夏、即ち、島崎藤村氏の『春』の始めに描かれて居る時代には、見違へる程大きくなつて居た。これが、『春』の中の菅時三郎が戀したお君といふ娘である。實の名はお千代。お君といふのは、私が明治二十七年に雜誌『文學界』に載せた『流水日記』で用ゐた名である。

藤村氏は入念な人である。『春』の中の人物の名は、それ〴〵所由のあるものを用ゐて居る。菅の戀人の名に私の付けた名を重ねて用ゐたのは、藤村氏のさういふ用意の一つであるのだ。

三

『春』の中の足立弓夫といふのは、私のことだ。私は明治二十四年の十二月から高知市の共立學校といふ私立の英語學校の教師に雇はれて行つて居た。島崎氏が高知まで私を尋ねて來て呉れたのは二十六年の二月の末頃であつたかと思ふ。『春』には土佐を伊豫としてあるのだ。

藤村氏からは岸本捨吉のやうなことを告白されたことを覺えて居る。『春』には、岸本の戀人を『盛岡』と呼んで居るのだが、これは『仙臺』位なところでは無かつたらうか。『春』で勝子となつて居るその娘は、東北の代議士の女で、兄は今或る博士になつて居る人である。

一度位は見たことはあるかも知れ無いが、何ういふ風の人であつたか記憶して居無い。唯、當時連中の中ではその娘をオフィリアと呼んで居た。これから推すと、その娘は愼ましやかな氣の弱いやうに見える娘であつたのであらう。

これは岸本に戀して居たと見て貰からうと思はれる「西京」といふのは「神戸」であつたやうに聞いて居る。この女は夫を持つて明治四十年頃には大久保邊に住んで居たやうに聞いた。

大久保に藤村氏が住んで居た時分のことであるが、藤村氏が、

「……此邊に住んで居るので、遊びに來いと、人傳に云つて來たのだが、行か無かつた。家の奴の思はくもあるのでね……」

と、云つてから、少し極まり惡さうに、

「ジイラス・テムパアなんだから……」

と、苦笑した。それを聞いた秋骨氏も私も、一緒に笑つた。『春』の時分であつたら、吾々の方からは「ヨウ〳〵」位な聲を懸けたのであらうと思ふのだ。

『春』の女學校は當時下六番町に在つた明治女學校である。『春』に關根とあるのは、岩本善治氏のことである。秋骨氏も、藤村氏も、星野天知氏も、北村透谷氏もその學校を教へたことがあるのだ。明治女學校は極めて進歩主義の女學校であつた。現今の女子大學などよりは遙かに活氣のある學校であつたやうに思ふのだが、一つは國民の一部に飽くまで進んで見やうといふ機運が未

めて居る。

四

『春』の始の方にある岸本等四人が泊つたといふ湖畔の宿屋といふのは、元箱根の青木といふ小さい宿屋であつた。

十五年程前に湖畔まで行つたことはあるが、その後の變遷は更に知ら無い。然し、繪端書などで見ると、この邊も此の頃は餘程開けたやうである。湖沿の宿屋が、湖の眺を餘程善く使つた家の建て方をして居るやうである。

が、明治二十六年頃には、未だ彼の邊は開け無かつた、青木などでは、晝食まで附いて一日五拾錢になるかならず位であつたらうと思ふ。今で考へると、まるで虚のやうな安さであつたのだ。

藤村、秋骨の兩氏の居たその宿へ私が尋ねて行つたのは、八月の十日頃であつたらうかと思うのだが、その翌日あたりから雨が太く降り續いた。湖面には見る〳〵深く霧が立ち籠めて、數町

の前面の權現の森さへ見え無くなつて、霧の裡から打ち寄せて來る波は、廣さの際涯の無い海からでも寄せて來るものゝやうな氣がしたのであつた。

藤村氏も、秋骨氏も、學校(明治學院)時代とは、最早餘程變つて居た。要するに、兩氏とも餘程さばけて來て居たのだ。明治學院時代には、藤村氏などに、通りがゝりの車上の女を見て、なかなか別嬪だねなどゝ、吐かうものなら、殆ど睨め付けぬばかりに、厭な顏をされたものであつた。その藤村氏が青木では可なり陽氣な調子で女のことを話すのであつた。艶福といふ言葉が兩氏の口からよく出た。誰某は艶福家だとか、誰某の艶福といふのはこれ〳〵だといふ風に云ふのであつたのだ。斯ういふと、兩氏をのみ怪しからん者のやうに云ふやうであるが、兩氏のさういふ變り方に勢ひを得て、私自身が大分兩氏に聞かせたことがあつたことは勿論である。

その時隣の座敷には、一組の泊り客があつた。女の方は最早四十近くだらうかと思はれた齢の、東京辯であり、男の方は少し年下であらうかと思はれた上方辯の聲であつた。男が大阪では番地と云ふことは無くつて、何處の何番屋敷と云ふのだと云ふと、女は餘程侮辱した調子で、其樣なことがあるものか、番地といふのが無い筈が無いといふやうなことを云ふ。すると、男の聲

が甚く氣色ばんで、これ此の通り何通もの端書に何れだつても何番屋敷と書いて無いものは有りはし無い、さアこれは何うだと云ふのだ。女は、如何にも鋭つたやうな聲で『ふん爲方が無い負けてやらう』と云つた。吾々は、女のさういふ聲を襖越しに聞いて、顏を見合せてクス〳〵笑はざるを得無かつたのであつた。夜遲くなつてから、男の泣いて何事が訴へるやうな、述懷するやうな聲が聞えた。言葉は何とも聞き取れ無かつた。その時は女の聲は少しも聞え無かつた。聲の樣子では女は何うも藝人らしく思はれた。此の曰く付きらしく思はれる男女は何ういふ者であつたのであらうか。何うして、元箱根のやう不便なところへやつて來たのであらうか。唯聲を聞いたのみで姿は見ることができ無かつた。多分その翌朝その二人は發つてしまつたのであらうと思ふ。

五

藤村氏等と一緒に山を下つたのは、八月の中旬であつたと思ふ。新道をば下つて來て、塔の澤で泊つた。『春』にある『千歳橋の畔にある溫泉宿』といふのは、環翠樓といふ鈴木のことである。

『往來の方へ向いた二階の一室へ案内された。庭の池へ落ちる筧の音は早川の水聲と一緒になつて、寂しい雨を聞くやうな思ひをさせる。山の上から降りて來て宿の浴衣に着更へた時は、三人とも蘇生つたやうな心地に成つた。』

と、『春』の(十)にあるのであるが、全くその通りであつた。

『春』の(十)から(十一)に亘つて、藤村氏は温泉宿の描寫をして居るのだが、藤村氏は『春』を書くに先だつて、箱根へ行つたことがある。(十一)の始めにある女中が二三人で話をして居るところなどは、何うも意味が私には解り兼ねる。彼れは、藤村氏が何時得られた材料に基いたものなのであらう。

現今では、鈴木はだん〳〵家を建て増して、全く大厦高樓の觀を有して居るのであるが、『春』に描かれて居る時代には、鈴木は未だそれ程大きくは無かつた。三階は無かつたと思ふ。

『春』に描いてある事柄が事實その儘で無くとも、それは一向差し支の無いことではあるが、藤村氏が何ういふ材料に依つて『春』を組み立てたかといふことが明かに知れゝば、吾々の興味はますます加はるのであるから、私は此所に、藤村氏は明治四十年頃の鈴木と、『文學界』時代の鈴木

となし綯ひ交ぜて『泰』の中の温泉宿を書いたので無からうかといふ推測を加へて置く。

お君、即ち、お千代の家元といふのは、小田原から熱海へ向う海道の振り出しに當る早川といふ村であつた。家はその村の中程の右側であつたと思ふ。

私は、鈴木の主人善左衞門と一緒に、その家へ尋ねて行つたことがある。お千代は今は最早何處かの人妻になつて居ることであらう。

四十三年あたりの洪水からであらうが、早川の川尻が幾つにも分れてしまつて、早川の村へ入るまでには橋を三つ渡ら無ければならなくなつて居る。十五年前には畑の中に立つて居た清光館が今は家に取り巻かれて居る。鈴木に長く居た此の家の長女は臺灣の某高官の妻になつて居る。

お千代のことでも聞かうといふのは、鶴屋の内儀さんのみであるのだが、急いで居たので、それにも逢はずにしまつた。

善左衞門は中氣になつたといふのである。これも見舞ひ度いと思つたが、意を果すことができ無かつた。

秋骨氏とはよく一緒に箱根と小田原へ行つたものであつた。その時分には鈴木が今の小田原の

養生館を持つて居た。それは禱龍館といふ名であつて、その西隣りに、伊藤博文氏の滄浪閣があつたのだ。

最早これで許された紙數が盡きたのであるが、もう一枚容赦して貰つて、『春』の人物のモデルの名だけを云つて置かう。

青木駿一は北村透谷(門太郎)氏であり、菅時三郎が戸川秋骨(明三)氏であり、市川仙太が平田禿木(喜一)氏であつて、家は伊勢町一番地の絵具問屋であつたのだ。岡見兄弟が星野兄弟である事は前に云つた通りである。菅の從弟の栗田といふのは故大野酒竹(豐太)氏であり、福富といふのは故上田敏氏であり、堤姉妹といふのは、樋口一葉氏姉妹であり、菅千春は戸川殘花氏であり、陶山といふのは山路愛山氏であり、菅の伯母さんといふのは故横井玉子氏である。『文學界』時代には女子學院の幹事であつたのだが、後は女子美術學校の幹事になつて居るうちに、胃病で亡くなつた。北村透谷氏の家であつた元數寄屋町の家は無論代は變つて居るのだが、今も尚煙草屋である事は昔の通りである。

岸本の戀人の勝子の本名は覺えて居無い。姓には藤といふ字が附いて居たやうに思ふ。古藤庵

の藤、藤村の藤がそれから來たものだか、何うだか、それは知ら無い。

『文學界』のこと

雜誌『文學界』に集まつてゐた五六人の者の思想なり作物なりがどういふものであつたか、それらの者共の爲人がどういふものであつたかといふやうなことに就いては島崎藤村君の『春』といふ小說が殆んどそれを言ひ盡してゐる。その小說の中の青木といふのが北村透谷であり、岸本といふのが島崎藤村君であり、市川といふのが平田禿木君であり、菅といふのが戸川秋骨君であり、岡見兄弟といふのが星野天知君と同夕影君であり、福富といふのが上田敏君であり、栗田といふのが大野洒竹であり、足立といふのが馬場孤蝶であるといふ風で、中に書いてある事實も先づ全部實際あつたことだと云つて宜からうと思はれる。さうして見ると、『文學界』のことを僕が茲で話すのは全く蛇足である譯になるのだが、然し、『春』の方は小說であるのだから、幾らか朧げな

ところもあるかも知れないと思ふので、茲には事實として話して見ようと思ふ。

ところで、『春』は御承知の通り印象的に書かれたものであるので、あの中に出て來る個人個人の行爲、思想といふやうなものに就いては、『春』の中で書かれなかつたことは大分あるものであつて、それを話せば當時の文學者の謂はゞ裏面的生活に對して好奇心を持つ人々のおなぐさみ丈けには確かになることだと思はれるけれども、これは茲ではやらない。何故それをやらないかといふと、實際の事實といふものは、樣々な人の利害に關係を有つて居るものであるから、それからしてまた、個人の私的生活といふものは何等か已むを得ざる理由あるにあらざれば他人から公にすべきものではないのであるから、それを藝術にでもするのでない限りは、この場合に於て公にすべきものでないと僕は考へるからであるのだ。

『文學界』の第一號(二十六年一月刊行)を僕が見たのは高知市に於てゞあつた。

僕は二十四年の暮に兩親を東京へ遣して置いて僕一人高知市の共立學校といふ英語專門の學校へ教師に行つて、二十五年の夏休みに東京へ歸つて、それから九月の末位に高知へ行つたのであるが、その夏休みの間は眼病に罹つてゐたので、島崎君にも戶川君にもさう度々は會はなかつた

やうに思ふ。島崎君が巖本善治氏の女學雜志の寄稿家でその時あつたことは知つてゐたか、別に島崎君の交友達に就いて聞いたことはなかつた。

ところで、『文學界』第一號は島崎君から僕の手許へ郵送されたか、それとも島崎君自身の手から受取つたかどちらであつたか今確かには覺えてゐない。

二十六年の一月の末か二月の初めであつたか、その時日の記憶は今確かでないが、教場に出てゐると小使が古藤庵無聲といふ名刺を持つて來て、かういふ人が會ひに來たと僕に言つた。僕は新聞社の人でも來たことかと思つて暫時待つてゐて貰ひたいと小使に言つた。で、それから少し經つて教場から出て來ようとしてゐると、小使がまたやつて來て、お客樣は甚くお急ぎのやうでございますといふのだ。そこで、一體どんな容子なのかと小使に訊くと、どうも旅をなすつてお出でになつたお方のやうでございますといふのだ。その瞬間に僕の心には、餘程親しい人が訪ねて來て呉れたのではなからうか、思ひもかけぬ人が來たのではなからうか、といふやうな豫覺が生じた。今思へばその時何となく島崎君の名が僕の心の中に徴かに閃めいたやうに思ふのであるが、それは今の記憶なので當にならない。で、大急ぎで小使部屋へ行つて見ると、旅裝束の島崎

居た。僕は豫期したことが當つたやうな感じと意外なことが起つたといふ感じとが妙に雜り合つた心持で島崎君を迎へた。が、島崎君に其處で會つたのは僕にとつては非常に嬉しかつた。高知は僕の故郷である、然し乍ら幼年の時其處を去つた僕に取つては、高知の言葉を殆んど忘れてしまつたやうな僕に取つては、高知は全く旅先であつた。その遠國の旅先で親しい友に會つたのであるから僕は非常に嬉しかつた。僕はその時甥を東京から連れて行つてゐたので、それにいひつけて島崎君を僕の家へ案内させて、それから僕自身は學校の仕事をしまつてから家へ歸つて島崎君とゆつくり話をした。『文學界』のことや『春』の中にある岸本捨吉君の戀愛の話をきいたのはその時であつた。二十三年以後の島崎君は、非常に沈默な、非常に嚴格な人に見えた。それは島崎君の自己改造に努力せられた時代であつた。女のことなどを話し合つたことのそれ迄一度もなかつた島崎君の口から、戀愛の話を聞くのは僕に取つては甚く意外であつた。僕はその時は旣に性慾上の或る經驗は有してゐたのであつたが、島崎君の話したやうな――即ち『春』の中の岸本君のやつたやうな――戀愛をば十分に理解することができなかつた。同情はあつたが、所謂共鳴はなかつた。島崎君は僕の家には精々四五日位しか居なかつた。或る雪の降る日に高知の港から船に

乘つて歸つてしまつた。それから少し後になつて我々の親友某君が、某君自身の戀愛に對して島崎君の同情が足りないといふ不滿を島崎君に訴へた。すると島崎君は『それは誰しも有つ感情なのだ。現に高知の馬場の所へ訪ねて行つたときにも先方は非常に款待して呉れて心持がよかつたが、たゞ自分の戀愛に對しては馬場の同情や理解が足りないやうに思はれたので、たゞそれ丈けが自分には不足であつた。誰でも戀愛に熱中してゐるときには、他人の同情なり理解なりが足りないやうに思ふものだ』と答へたさうである。が、實際のところ僕は島崎君の戀愛に就いての話には面喰はされたやうな氣持であつた。異つた世界を近々と見せられたのではあるが、僕はその世界の人であつたこともなく、又その世界へ突入しようといふ氣もなかつたので、僕の同情は熱中した戀人を慰めるに足りるものでは決してなかつたのだ。僕が島崎君の心持を理解し得る點まで近附き得たのは、それより後のことである。さうして見ると、島崎君は文學者として僕の先輩であると共に、さういふ人情の點に於ても確に僕の先輩であるのだ。

高知の鏡川の岸にあつた僕の家で、早い春の夜、島崎君は物靜かなしかし沈痛な聲で、島崎君自身の文學を本氣にやりだした心持や旅に出た考や自身の人生觀などを詳しく話した。

『春』を見ると、次のやうな青木――北村透谷――の文章が引いてある。

『極めて拙劣なる生涯の中に、尤も高大なる事業を含むことあり。極めて高大なる事業の中に、尤も拙劣なる生涯を抱くことあり。見ることを得る外部は見ることを得ざる内部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて、眞率なる靈劍を空際に撃つ戰士は、人間が意識を拂はずして恩澤を蒙る神の如し。天下斯くの如き英雄あり、爲す所なくして終り、事業らしき事業を遺すことなくして去り、而して自ら能く甘んじ自ら能く信じて他界に遷るもの、吾人が尤も能く同情を表せざるを得ざる所なり。』

これが北村透谷のみならず島崎君始め其他の文學界同人の考を最も雄辯に說明してゐると思ふ。

高知で島崎君から聞いた話や、其の他の諸君から聞いた話を綜合して見ると、『文學界』の起つた過程は大凡次のやうな風であつたらしい。巖本善治氏が出してゐられた『女學雜誌』が次第に耶蘇教に緣故のある若い文學者の作物を發表する壇場になつて來たのは、明治二十五年頃である、ところで、その年の秋頃からして『女學雜誌』に文藝附錄といふやうなものを附けることにして、

そこへ『文學雜誌』關係の若い文學者に力を盡させようといふ話が出來た。が、巖本氏は宗教家であるのだから、文學者とは――殊に『其の文學界』同人になつたやうな人々とは――大分道德觀も違ふのであつたし、殊にさういふ文學者の連中には、もう既に耶蘇教に對する反對的態度を表明し出してゐた連中さへあつた位であつたのだから、そこで、雙方の爲に『文學雜誌』とは一向關係のない雜誌を出す方がよからうといふことになつて、愈々二十六年の一月から『文學界』を出すことになつたのであつた、といふことだ。金は星野天知君が出し、編輯は星野夕影君がやることになつた。で、その時の執筆者は、北村透谷、星野天知、古藤庵無聲(島崎藤村)平田禿木といふやうな後來『文學界』の幹部になつた人々に、戶川殘花氏が謂はゞ特別寄稿家のやうな位置に加はつてゐたのであつたやうに記憶する。その時分、島崎君の書いたものは各行十七字になつてゐる戯曲若しくは抒情詩が主なもので、その外に芭蕉の俳文脈を大分取入れた散文が大分あつた。高知で島崎君に會つたときに、島崎君は『十七字にすると漢語が自由に使へるから、かういふ形を始めたのだ』と僕に說明して呉れたことのあるのを記憶する。

北村透谷は、『文學界』に加はらないうちから可成り作をしてゐたやうである。『蓬萊曲』とい

ふ戯曲のやうなものが既に單行本になつて出てゐたと思ふ。僕が透谷を見た時分には、最う透谷の體が病的になり始めてゐた時分なのだと、何時か島崎君が云つたことがある。それはさうなのであらう、如何にも神經質らしい落着のない人のやうに思はれたのだ。年齢の割には世間的知識の狹い、考の偏つた人のやうに思はれた。妙に角の立つた人のやうな氣がしたのであつた。が、心の弱い人とは見えなかつた、野卑だといふやうなところは決してない人であつた。が、惜しいことに耶蘇教がそれ程ぬけ切つてゐなかつた。けれども、さういふ風に稍や一本調子に見えたところが或る仕事の――或る思想上の仕事の――開拓者としては必要な資格であるかも知れないのだ。

平田禿木君は、その時分はまだ二十一歳位であつたらうと思ふのだが、平田君は却々成熟してゐた。藝術上の技巧に對する鑑賞力の精到なる人であり、一體に趣味の豐富な人であるのは勿論、人情に對する知識及び考察力が年齢の割には餘程多かつた。今日の平田君は如何にも控目な人になつてしまつて、今は殆んど隱遁的生活を送つてゐるやうな有樣である。けれども、二十六七年の頃の平田君は筆に於ても口に於ても却々の論客であり、警句家であつた。平田君の紅葉露

仲雨氏の作物に對する批評などは却々氣の利いた粋な文章であつて、紅葉が書を寄せて平田君に或る作物の批評を頼んで來たことがある。『春』を見ると、『市川といふ男は西洋料理を食つて反吐を吐いたやうだ――かういふ有難い批評をある大家から頂戴したといつて市川は反りかへつて笑つて……』と書いてあるのだが僕が、誰からか聞いた話では、紅葉が『文學界』の連中は西洋料理と日本料理を一緒に食つて反吐を吐いたやうなものだと云つたといふのである。成程これは當つて居る批評であらう。ところで、平田君の所謂反吐は、西洋料理と日本料理が可成り融合してゐたのであるが、島崎君等始め僕等に至る迄もの反吐はその二つの料理が生のまゝで出てゐた趣が確かにあつたらうと思ふ。

『文學界』の創立者達のことに就いては先づそれ丈けにして置いて、その人々の志といふ様なものを説明する事を試みよう。

『文學界』の創立者等は、兎に角孰れかの耶蘇教の教會に籍を置いた人々である。その當時の耶蘇教なるものは可成り新知識の進歩主義の人々を集めてゐた。が、しかし、さういふ人々の中心思想は、東西の舊い道德から何程も脱出してゐるのではなかつた。『文學界』の創立者等の志は、

さういふ舊い道德から自分等の思想を解放しようといふのに在つた。『文學界』の創立者等の間には『繩墨を脫する』といふ言葉が行はれた。卽ち舊い羈絆を脫する、卽ち習俗を脫するといふ意味だと解して宜からう。

前に引用した透谷の文章の中からも窺ひ得られるが如く、『文學界』の創立者等の志は所謂凡人の思想行爲、卽ち凡人の生活の尊重に在つた。凡人の存在の意義、凡人の尊嚴を主張するに在つた。

『文學界』創立者等の當時文界に對する態度は――其當時の思想界に對する態度は、その當時文界の權威を成してゐたところの硯友社派及び民友社派の文學に對する返逆の態度であつた。謂はば物質主義に對する精神主義の反抗であつた。洗煉に對する野性の反抗であつた、文界の紳士に對する文界の書生の反抗であつたのだ。言葉を換へて云へば、理知主義に對する感情主義の反抗、客觀主義に對する主觀主義の反抗であつたのだ。

『文學界』の同人は自分等の失戀のことを平氣で書いた。尤もその點では僕と戶川君とが一番罪が深かつたかも知れないが、他の諸君もその點で全然無罪だとは言へなからう。ところで、二十

八年頃だと思ふのだが、川上眉山が、尾崎紅葉が『文學界の連中は戀の失敗のことを殆んど誇りがに書いて居るのだが、あれは並の人ならば隱すのが本當であるのに、どうしてあゝいふ風に露骨に書くのであらう。あの連中の心持がどうも解らない』と云つてゐるといふことを僕に話したことがある。『文學界』の連中が露骨に自分等の失戀を告白したのは、前に言つた通りの平凡生活の尊重、客觀主義に對する主觀主義の反抗、洗煉に對する野性の反抗、といふやうな所に根據を有してゐたのだと思ふ。『英雄畢竟馬前の塵である。つはもの共の夢の跡は夏草である。羅馬の城壁は跡なく崩れてしまつた。英雄の事業に何の永遠があらう。戀を索め天地の美を探る凡人の心の方が、寔に永遠であり、意義がある』と、島崎君が高知で僕に話したことがあるやうに思ふ。『文學界』の同人等は當時の思想界の現狀、當時の文界の現狀にはあきたらなかつた。で、彼等はその現狀から脫却しようとした事は前に言つた通りであるが、其脫却しようと思つた當人が矢張り彼等自身の裡に舊い多くのものを有つて居つた。なほその上に、殘念なる哉、彼等は自然主義の開拓者等の如き良い師表を有つてゐなかつた。『ハムレット』と『若きエルテルのわづらひ』とではさう遠くまで行けないことは知れ切つてゐる。彼等は人生にロオマンスを索めた。即ち彼等

の向つた方向は間違つてはゐなかつた。が、到着點を確かに睨んでゐたのではなかつた。『文學界』の創立者等及び『文學界』に可成り關係を有つてゐた人々の中で、出發點から到着點まで少しも捩れずに來た人が二人ある。それは島崎藤村君と田山花袋君である。

ところで、一口に云へば、『文學界』の同人といふことになるのであるが、勿論個人々々に就いて言ふと色々異つたところがあるのは勿論のことである。けれども、茲に極大まかな類別を示してみたいと思ふ。明治四十二三年頃かと思ふのだが、島崎君の淺草新片町の家で、『馬場君とは生れた階級が違ふので、色々相違があるやうに思ふ。馬場君等は上流の階級から出、僕等は下流の階級から出たのでそこに色々面白い相違があると思ふ』といふやうなことを島崎君が僕に言つたやうに覺えてゐる。この大類別法に從つてみると、一寸と面白いことを發見する。即ち北村透谷、戸川秋骨の兩君へ更に僕を加へ、それを一方に立たせ、島崎藤村君と平田禿木君とを他方に立たせて見るといふと、一方の人々は考が抽象的であり、趣味も粗大であり、萬事大摑みな人々てあるが、他方の兩君はそれとはまるで反對で、思想も緻密であり、趣味もこまかく、萬事に精到してゐる。前者に謂はば豫言者肌であるが、後者は何處までも藝術家肌である。北村透谷に行

きつまつて驚れたのであるが、性格に於て似寄つた多くを有つてゐたと云はるゝ島崎藤村君は、非常な努力によつて行くべき道を自ら開拓した。これは、この兩君の性情の差にも基くことであらうが、上に言つたやうな類別もその原因を爲してゐないわけはなからうと思はれる。

そこで、その次に來る問題は、『文學界』の創立者等の爲し遂げたところのものがどういふ影響を、その後の思想界及び文學に及ぼしたかといふ問題であるのだが、これは最も手取早くいふとよく分らないといふより外はない。『文學界』の廢刊したのは明治三十年の十二月であるのだが、雜誌はそれ以前よりもその以後に於て弘く讀まれたと信ずべき理由がある。さうして見ると、尠くともその時分の文界には多少の影響を與へたには違ひなからうが、その代り『文學界』の連中それ自身が、明治二十七八年頃の思想界及び文界から樣々の影響をうけたことは事實であるし、また彼等の出現はその時分の青年の間に勃興しかけてゐた思想の大勢に推されたものと見るのが至當である。即ち彼等の出現は『時の徵』であつたのだ。で、その後から起つた思想界並びに文界の樣々の運動に『文學界』の出現それ自體がどれ程の貢獻をしたのであるか、これを定めることは至く不可能である。が、『文學界』同人中の個人々々になると、それは大分異つた話になつて來ると

思ふ。吾々は北村透谷、島崎藤村、田山花袋の三君の如きその人の思想、文體技巧其他の後に來れる若き人々の藝術に様々な直接な影響を與へた人々に敬意を表すべきであらうと思ふ。尚ほ言ひ度いことは盡きないがこの話は先づこの邊で打切る。そこで、斷つて置くが、この話の中で故人には大抵「君」といふ敬稱をつけなかつた。これはその人々を輕蔑した譯では決してない。たゞかういふ場合の先例に從つたまでゞある。

それから「文學界」同人のことに就いては、島崎藤村君の「春」が最も良い説明書である。「文學界」同人のことを知らうと思はれる人々は「春」を精讀せられんことを希望する。

職業婦人の危險

一

女は三界に家無しといふのは、佛教の方の言葉だと思ふのだが、少くとも今日までの女はさうであると云はなければならぬ。

佛蘭西の劇作家ユウゼエヌ・ブリユウといふ人の脚本に『デユウボン氏の三人娘』といふのがあるだのが、此れが現代の普通の女の位置を實によく明晰に描き出して居る。

デユウボンといふ先づ所謂る中流の男にアゼエル、カロリイヌ、ジユリイといふ三人の娘があるのだが、長女のアゼエルといふのは、若い時分に何か間違を仕出かして、家を飛び出して、巴里で客商賣をやつて居るし、次の娘のカロリイヌは、獨身で陶器の繪か何かをかいて、何うにか自分だけの生活費を得て居る。唯三番目の娘のジユリイのみが、世間並みに結婚することになつて居る。所で、メエロオといふ家の息子のアントニンといふのと、ジユリイは結婚するのだけれ

ども、半年程經つと、ジユリイは夫が如何にも俗物であるのと、メエロオ家の者どもの卑野であるのとに愛想をつかして、離婚して獨立する積りで、家へ歸つて來るのであるが、丁度その時歸つて來て居る姉のアゼエルからは、客商賣の辛さを話されて、その方へ行くことは不幸な結果よりも倚辛抱のできるものでは無いから、詫ことをしてメエロオ家へ歸つたら宜からうと意見され、二番目の姉のカロリイヌからも、女職人の生活の辛らい厭なものであることを話されて、同じくメエロオ家へ歸れと意見されるのである。ジユリイは到頭、諦めてメエロオ家へ歸つて行くことになるのである。

ブリユウの此の劇では、今日の中流社會位な女は、大抵のところ、商店の番頭位な卑俗な夫を持つて、諦らめて暮らすか、それが厭ならば、所謂職業婦人になつて、世間からヘンに見下げられ、憐まれるといふ狀態に甘ずるか、さも無ければ、世間の人が何と云はうと、そんな事は眼中に置かずに、所謂る客商賣の女になつてしまうより外は無いことを示したものである。

さういふ風に、今日の並々の女は何處へ向うにしても、安住の地を得ることができ無いのである。即ち、本當の落ち着くべき家を持ち得ざる女である。

所で、さういふ女の狀態が生ずる根本原因は何であるかといふと、現今の社會が財產私有制度の上に立つて居つて、多數の無財產者に對しては、何等生活の保證が無いことであると思ふ。實際を云ふと、男女ともに思ふやうには結婚することすらでき無い狀態である。現今の結婚といふのは、同階級間の結婚である。同なじ位の資產を持つて居る家の者同士の結婚であつて、決して互に相適した男と女との結婚では無い。故に、世間の定則に從ふことを欲し無いものは、結婚し無いで居るか、非常な犧牲を拂つて、自分の好きな相手と結婚するより外は無いのである。

然かし、さういふ場合になつて來ると、男の方は何といつても、何分か有利な地位に立つて居るのだが、資產無き家庭に生れた女は實に憐れむべきものであつて、結婚を目的とする戀愛の自由は、殆ど全く持つて居無い。

日本では、未だ斯ういふ狀態がさう甚しきに至つて居ないのであるが、歐羅巴では、所謂持參金の習慣等もあるので、前に云つたやうな狀態が可なり甚しきに至つて居るやうである。

さうすれば、少し敎育のある中流位の家に生れた娘は、何ういふことになるのであらうか、女事務員とか、女敎師とかいふやうなヂミな職業に就く者の外に、もう少し〻出に見える職業に就

き度いと思ふ者は家庭教師(ガヴ・ネス)になるのである。所で、自國內で家庭教師になる者は先づ別として、外國へ行つて、外國人の家庭へ住み込む者などになると、此れは全く家無き女であつて、さま〴〵な誘惑に露される譯で、さういふところから、當人の身の上は更にも云はず、その周圍の人々の間に、さま〴〵な悲劇を生ずることがあるのである。

佛蘭西の小說家マルセル・プレヴォーの『守護天使』(英譯は『ガアディアン・エンゼルス』といふ)は家庭教師とその雇はれて居る家庭との間に生ずるさま〴〵な事件を描いたものである。

二

基督教の羅馬派では、人間にはそれ〴〵保護する天使が附いて居て、その者が惡くならぬやうに保護するのだといふ信仰があつて、さういふ天使をばガアディアン・エンゼルといふのであるが、家庭教師は小兒を保護し、養育し、教育するのであるから、プレヴォーは、洒落れて家庭教師のことをばガアディアン・エンゼルと云つたのであらうと思ふ。尤も、家庭教師のことをガアディアン・エンゼルと呼ぶのは、プレヴォーに始まる譯では無くして、洒落れた人々の間には[illegible]

くより行はれて居た言葉かも知れぬ。

プレヴォーが書い居る女家庭教師といふのは、大抵若い女だが、其中の一人を除いては皆所謂渡り者である。

何處でも、チヤンとした家庭ならば、二十歳そこ〳〵の娘をば、一人追ひ放して、外國へ出す譯のものでは無いのであるが、さういふ家庭教師にでもなるやうな女の家庭といふのには大抵事情があつて、家を離れるやうになつた者だといふのである。或者は家が貧乏であるとか、或者は家が繼母であるとかいふやうなことから、家を出ることになつたのであるし、又或る者は、男でも拵へて家を飛び出した末に、家庭教師になるといふやうなのもある譯である。

さて、さういふ種類の女であるのだからして、一種の冒險家的なところがあつて、その住み込んで居る家の主人とか、息子とかと情的關係が出來て、家庭に波瀾が起ることは珍らしく無い。又、家庭教師たる女が素直な女である場合には、その家の主人なり、息子なりの爲めに誘惑されて、童貞を失ひ、次第にすれた女になつて行くことなども決して少くないのである。

プレヴォーは『ガアディアン・エンゼルス』の中で、家庭教師の四種のタイプを描き出して居

ろ。一人は、クロオズといふ下院議員で陸軍次官である男の家庭に住み込んで、娘のジロゼットといふのに獨逸語を教へて居るマグダム(略してマグ)といふ獨逸女、第二は、クロオズの妻の姉のかたづいて居るロパアル・ダネエといふ男爵の家に住み込んで居る白耳義生れのロザリイといふ無邪氣な女、第三は、鐵工場か何かの持主のコルブリエー家の小さい娘のルウトと二十歳になる息子とに伊太利語と音樂を教へて居るアサンドラ(略してサンドラ)といふ美くしい伊太利女、それから、第四は、フオーモン・シユグレエといふ銀行家の娘のベルトといふのに英語を教へてゐるファニイといふ英吉利女である。

その中、マグが一番年上(二十八九)で、内緒でボルスキーといふ音樂家で可なり放蕩な男と夫婦になつて居るといふ女で、これまでに方々を渡り歩いて來て居つて、十分にすたれた女である。住み込んで居た先きの主人が、厭な奴で無い場合だと、それと平氣で情的關係を結んで、それを享樂したこともあると、云つて居る女である。

ロザリイは、やう／＼二十歳位な少しもすれたところの無い娘であつて、孤兒であるのだから、ロパアル・ダネエ家で親切にして吳れるのを喜んで、ダネエ家では、家庭教師の務はもとよ

り、男爵の祕書の務を執つて、その家の帳簿を受持ち、更に、その家の末の雙兒附の子守を監督して雙兒の世話もするといふ風に、骨身を惜まず働くので、男爵は元よりのこと、夫人にも甚く氣に入られて居るのである。

サンドラは、美しい二十二歳の女で、音樂が上手であると同時に、可なりしつかりした女であるので、コルブリエー家の息子のジヤツクといふのに、音樂と伊太利語を敎へて居るうちに、ジヤツクが懦弱な性質なるを知つてそれを矯正することに骨折つて、到頭、ジヤツクをして惡友たちと絕交させる、さういふ風であるから、コルブリエー夫婦からは、サンドラは可なり感謝を表されて居るのである。

ファニイは、背の高い、英吉利風の意志の强い、男性的な女で、フォーモン家の一人娘のベルトの世話を一切引き受けて居る。ベルトからは十分信賴され、その二人の間には同性愛のやうなものが成り立ちかけて居るのである。クロオズの長男のギイとベルトとは、許婚のやうな間柄であつたのであるが、ファニイとベルトとの同性愛的な愛情が發展して行つて、ギイとベルトとの關係はすつかり破れてしまうのである。

三

墺地利公使館附の武官にレッツリングといふ若い貴族があつて、それがクロオズの娘のジョゼットと相愛のなかになつて、結婚し度く思ふのであるが、父親のクロオズは、獨逸帝の國の官吏と而かも公使館の官吏と婚姻關係を結ぶことは、自分の政治上の進展に甚しい障害になるのだと云つて、結婚を承知しないのみならず、レッツリングと娘との交通を一切阻止してしまはうとする。所で、レッツリングとボルスキイは太く懇意であるものだからして、マグがレッツリングとジョゼットの間を取り持たうとする。

レッツリングの金で、ボルスキイは、或る不思議な家を借りる。それは、甲の町にも入り口があり、それに裏合せになつて居る乙の町にも入り口がある家なので、何うしても一軒の家とは見え難いのであるが、內は書棚のところが祕密戸になつて居て、甲の町から入つて、乙の町へ出ることができるやうになつて居るのである。その家の借りたてにマグが亭主になつて、ファニイやロザリイや、サンドラを呼んで、酒を飲んで、半日氣晴しをしたのであるが、その時の四人の行

動や言葉で、四人の閲歴や人となりが、讀者に分るやうになつて居るのである。

マグは、その隱れ家へジョゼットを伴れて來て、レッツリングに逢はす、二人は愛情に滿ちた話はし合ふが、女の方が可なりしつかりして居るのと、男の方が上品な人間なので、何等肉的な關係などは生じ無いで別れてしまふ。

ボルスキイは、博奕がすきなので、よく大きく負けて困ることがあるのであつたが、此の時も少し前に、巨額の負を拂は無ければならないやうになつて居て、その金策に就いてマグに相談する。マグに對して主人のクロォズが餘程心を寄せて居るらしいのだから主人のクロォズを引つ掛けて金を拵へろと、ボルスキイはマグに云ふのであるが、マグは流石にそんなことはでき無いと云つて、拒絕する。

フォーモン・シュグレエの銀行に破綻を生ずる。ベルトは伯父から百萬法の遺產を受け繼いで居るので、兩親は、そのうちの八十萬法だけを、娘の資產から一時流用して、それで、確に儲る株を買つて、その儲けで、銀行の方の危機を免がれやうといふ策を建てる。が、それは、ベルトの承諾を得無ければならないのであるが、直接に娘に話しても承諾はしまいから、ベルトが信賴

して居る家庭教師のファニイを說き付け、成功の上は禮をするといふことにして、ベルトを說かせるのが上策だといふので、主人がファニイを呼んで、娘が金を貸して吳れるやうに、說得して吳れと懇々賴む。ファニイは、承知したとも不承知だとも何かとも分らぬ返事をして、主人の前を退つてしまう。

フォーモン夫婦は、娘から金が貸りられるとしても、まだ其上に少し金が必要なので、懇意な間のロパアル・ダネエ男爵のところへ金を貸りに行く。男爵はフォーモン夫妻の賴みに應じ無いので、二人はすご／＼家へ歸つて來ると、家にはベルトがファニイの忠告に依つて、二人で家を出て獨立する、銀行に渡してしまつて退隱したら宜からう、兩親の生活費は自分の資產の中から支出するといふ置手紙があつて、ファニイとベルトは居無くなつて居るのである。

その次には、ロパアル・ダネエ男爵のヴァル・ダネエといふ田舍の住居に於て、悲劇が起る。男爵は軍人上りではあるが、上品な善人で、夫人（此れも上品な、氣象の勝つた婦人）との間も圓滿であつたのであるが、ロザリーが男爵及びその一家に對して持つて居た貪撒的な愛情が妙な風に進んで行つて、遂に男爵と肉的關係が生じて、ロザリイは懷姙してしまう。

男爵はロザリイと相談して、ロザリイの伯母が大病だからといふ拵らへ言をして、宿へ行かせるといふ名目の下に巴里の或る下宿屋へ隱して置て、自分は、春の雨が續いてヴアル・ダネエの川に水が出た時分の或る夕方、田地の損害視察に出ると云つて、馬に乘つて出て行つて、さも川へ墜ちて死んだかのやうに裝つた細工をして、馬だけを追ひ放して家に歸らせ、自分は變裝、變名の下に、ロザリーと一緒になつて、ブラジルか何處かへ逃げてしまふのである。

始め男爵の行方が分らなくなつてしまふと、男爵夫人は、もうすつかり喪服を着て、家の仕事を皆自分で指圖をしだす。その悲しみと、混雜に對して、慰問する爲めに、男爵夫人の妹、即ちクロオズ夫人がヴアル・ダネエの男爵家へ行つて泊り込むのであるが、その留守にクロオズの家で又一騷動持ち上る。

四

クロオズ夫人の留守にクロオズは或る晩首尾よくマグを手に入れるのであるが、マグはクロオズを寢こかして、クロオズの保管して居る佛蘭西の陸軍の飛行隊の計畫、豫算等の書類をばクロ

オズの部屋から盗み出して逃げてしまう。クロオズは大に驚いて、巴里の警視廳へ依頼して、マグの行方を捜査して貰らうと、マグはボルスキイと一諸に 國へ逃げたことが分る。それと共に、ボルスキイの名で借りて居た二つ入口のある家も、警察へは分つてしまうので、警察での始めの見込みは、レッツリングがボル・キイ及びマグを使嗾して、クロオズの書類を盗み出させたのだらうといふことになつて、調べてみると、レッツリングは書類が盗み出された時と殆ど同時に國へ歸つてしまつたことが分つて、レッツリングに對する疑ひがます〱深くなる。

クロオズに取つての不幸はそれのみでは無かつた。コルブリエー家では、ジャックとサンドラとの間がだん〱接近して、二人はある日、マルヌの川縁のムウラン・ド・シエルといふところへ遊びに行つて、其處の料理屋で、二人の間に肉的關係が出來てしまふ。それで、その後になつて、ジャックはサンドラと結婚しやうといふ意志を漏すのであるが、母親のエメリンが不賛成で、自分の十年來の戀人であるクロオズに相談して、サンドラに暇を出してしまう。サンドラはエメリンとクロオズとの間の手紙を盗んで去つてしまう。

それで、何か月か經つても、ジャックはサンドラとの結婚の約束を履行しやうとしないので、

サンドラは、その復讐に、エメリンに關する戀の手紙をば、一半はコルブリエーへ送り、後の一半をクロオズ夫人へ送つてしまう。

クロオズ夫人はそれを見て、全く夫を信ずる心がなくなつてしまつて、永久に別居する考を決する。其處へ、巴里から探偵部主任のメルカデュウが、ロパアル・ダネエ男爵は川へ墮ちたのでもなく、他人に殺されたのでもなくして、ロザリイと共に南米へ逃げたのだといふことを證據を擧げて報告に來るのだが、男爵夫人は何と云つても、夫が生きて居るとは信しないと云つて、何處までも家の體面を傷けまいとする、メルカデュウはし方なしに、その儘歸らうとするのであるが、クロオズの娘のジョゼットに逢ふので、豫て總監から返すことを托されて居るからと云つて、ジョゼットがレッツリングに送つた手紙をジョゼットに渡す。その手紙はボルスキイの隱れ家を搜索した際に、警察の手に入つたものであつたのである。警察は若い娘の名譽に傷がつかないやうにと、人知れず、さういふ手紙をジョゼットの手へ返さしたのだ。

ボルスキイとマグの倫敦での居所も分つたので、クロオズの管理して居た飛行書類を穩便に買ひ戻さうといふ談判が始まつた。ボルスキイは百萬法ならば戻さうと云ふのであつたが、クロオ

ズの方は二十萬法ならばといふので談判が終結するのに少し間があつたうちに、書類が盗まれた事が少し世間へ漏れ出して、クロオズは大臣から詰問を受けて辭表を呈出するに至つて、クロオズの公的生活も私的生活も滅茶〱になりさうになつて來たのである。

ヴアル・ダネエに居たクロオズ夫人は、夫の不仕だらは兎に角、斯う一家の浮沈に關する場合になつては、傍觀する譯には行かんといふので、クロオズ家へ歸つて來る。

ボルスキイとの談判が纏つて、書類は戻つて來てクロオズの名譽は僅かに保ち得られたのであるが、娘のジヨゼットはレッツリングを惡黨とは何うしても思へなかつたので、墺地利へ向けて手紙を出したのであるが、一向に返事がないので、全く自分はレッツリングに欺かれて、感情を弄ばれたのだと思ひ込んで、クロオラル(麻睡劑)を飲み、瓦斯の栓を拔いて、自殺してしまうのである。

が、レッツリングは、ボルスキイとマグの惡事を知るや否や、直ぐヴインナへ歸つて、伯父の陸軍大臣に逢つて、自分がボルスキイなどに欺まされて居たことをうち明けて話すといふと、伯父はレッツリングの不注意を非常に叱つて、國法に依つて處分するといふことになつて、何處か

地方の城のやうな監獄に監禁されてしまつて居たので、ジョゼトの手紙を見ることもできなかつたし、ジョゼツトへ手紙をよこすこともできなかつたのであつた。

コルブリエーは、妻のエメリンの不貞の行爲を知つて何うしたかといふと、すつかり自分の工場での事務をかたづけて、數ケ月自分が居らずともさし支へのないやうにして置き、一方では又辯護士を賴んで、離婚の訴訟を起すやうにして置て、末の娘の子のルウトといふのを伴れて、田舍の靜かな海水浴場へ行つてしまうのである。

フォーモン。シュグレエは何うなつたかといふと、フォーモン夫人はベルトに家出をされてしつたので、弱つて病氣になつて死ぬのであるが、その死際に娘に逢ひ度いと云つたけれども、母親の病氣見舞にベルトをよこすことさへファニイは拒んだので、フォーモン夫人は、到頭娘に逢ふことができずに死んでしまつた。

そのうちにベルトが病氣になつたので、ファニィは太く心配して、南の方の地中海に沿うた小さい村の別莊を借りて、其所で、自分の娘にでも對するやうな愛情でもつてベルトの世話をして居る。

フォーモン・シユグレエは、自分の銀行をいよ〳〵潰すことにして、財産を按分比例で債主へ分配してから、馬耳塞の或る銀行に勤めると云つて、巴里を出てしまう。けれども、馬耳塞には一寸と下りたのみで、汽車をのり替へて、地中海縁の小さい村で、ベルトの居る家を尋ね當て、、ファニイを捉へて絞め殺してしまう。フォーモン・シユグレエは非常に腕力の強い男であつたのである。

それより先、クロオズの長男のギイは、ベルトの從妹のイボンヌと結婚して、地中海縁の村——ベルトの居た村から餘り離れて居無い村——に住まつて居たのであるが、ベルトから、父親が來てファニイを殺して、氣が違つてしまつたといふ報告を得て、夫婦でベルトの宿へと向ふ。

話は此れで終りになつて居るのである。

プレヴオーは、婦人の心理を描く事に於て、拔群の手腕を有するといふ定評ある作家であるので、此の『ガアディアン・エンゼルス』中の諸所に非常に面白い入神の描寫を見るのである。

昔の寄席

一

雨の音しめやかな夜などに、獨り靜に物を思ひ續けて居るうちに、今まで別にそれ程遠い事のやうには思つて居無かつた自分の少年時の事などが、成る程隨分前の事であるのに氣が付くことがある。

五十位な吾々に取つては、自分から俺は老人だと思ふことは、甚だ困難である。然し、若い人人は吾々を老人だと思つて居るに違ひ無いし、又さう思ふのは尤な事である。

吾々自身も青年時には、五十位の人を見れば、可なりな老人だと思つて居た。さうして見れば吾々が自ら老人たることを承認するとせざるとに拘らず、若き人々から老人を以て遇せられることは全く已むを得無いことである。

されば、寧ろ自分も老人たることを承認して、稍々古い方へ廻つてしまう方が、骨の折れぬみ

ちかとも思はれる。

けれども、小生は生憎く餘り古い事を知らぬ。高々今より三十年位前のことならば、少し知つて居る。これでは、昔物語とするには價値が無いわけであるが、又一方から考へると、それでも何かの足しにはなるやうな氣もする。近來江戸研究とか、江戸趣味などゝいふことが云はれだして、幕政の時分の事などは、書物になつて居るものが多いけれども、明治十年位から二十四五年位までの市井の雜事は、江戸研究のなかには[illegible]含まれて居無いのだから、存外文書になつて居無いやうに思ふ。江戸時代の事を調らべれば、それで大分古い事のオヽソリテイになれるのであるが、知つて居る人の今大分生きて居る明治の事を書いたところで、誰もエライとは云ひはし無いばかりでは無く、それは斯う違うあ、違うと方々から槍が出る。賢き今の人はそんな損の多い仕事を買つて出ることは先づし無いのだ。然し、さういふ割合に近い時代の事であつても、もう二十年も經てば、大分古い事として取り扱はれるやうにならうと思はれるので、さういふ時代になつた際の參考にもと、吾々の青年時の市井の事を時々書いてみようと思つて居る。

左に記する寄席の事は、全くさういふ追憶記の一つである。

二

落語を何時頃聞き始めたのか、確な年代は今思ひ出せ無いが、小生の十二三の時分かと思ふ。本郷の大學病院へ出入りの貸本屋があつたが、それは、中脊で何方かと云へば圓顏な、道具立てのはつきりした容貌の男であつた。所謂キリリと締まつた顏立ちであつたのだ。年齡は幾つ位であつたか、少年の考では確で無いが、もう三十近い男であつたやうな氣がする。

斷つて置くが、勿論その時分の貸本屋のことであるから、今のやうな活版本を持つて歩るく譯では無い。八犬傳、弓張月、水滸傳、三國誌といふやうな木版ものをば脊負つて、方々を廻はるのであつた。

その男が落語が旨いさうだと誰かゝら聞いたので、本を貸しに來た時に、うちの者が大勢で、一つ落語をやつてみろとおだてた。貸本屋はその時二つばかり短い話をした。

一つは斯ういふのであつた。或る侍が茶店に休んで、婆さんに此邊には白狐が出るといふことだがときくと、婆さんはさういふことはございませんといふので、侍がイヤそれでは大かた人の

話だらうと云つて行つてしまう。職人がそれを聞いて居て、侍の眞似をしようと思つて婆さんに此邊にはダツコ(脫肛)が出るさうだねと聞く、婆さんはそんなきたない物は出ませんと答へると、職人は、大かた人のケツだらうと云つた。

も一つは、嫁いびりの姑が、浴衣へ糊のかひ方に就て、無理を嫁に云ひかけて、まだ糊が足り無い足り無いと云つて、浴衣がごわ〳〵になつて袖がまるで突張つてしまうまでに糊で固めさせてしまう。それを着て門口へ出て居ると、前の二階から子供が、向ふのお伯母さんお茶あがれよいふ。姑はノリ(糊)がコワくて行かれませんと云つたといふ話である。

田舍者であり且つ子どもであつた小生には、落は兩方とも解から無かつたが、全體としての話の調子だけは何うにか解かつたので落語といふものはなか〳〵面白いものだといふ印象は受けたのであつた。

そのうちに、母などが主唱で、寄席へ行くことになつた。始めて行つた寄席は、今の本郷の電車交叉點から切通しの方へ向つて行くと、右に日蔭町へ曲がる横町があるが、その角にあつた寄木亭といふのであつた。それは、當時二流以下の寄席であつたらうと思ふのだが、木戸錢は四五

錢のところであつたらう。吾々はその時分は敷物代を儉約するために、毛布を持つて行つたやうに覺えて居る。

荒木亭で何んな話を聞いたのか、大抵今は忘れてしまつたが、その中にたつた一つ記憶に殘つて居るのがある。

酒飲みの爺さんが、娘を賣つた金を持つて歸る途中、居酒屋の前を通り過ぎることができ無くつて、一寸一杯といふ積りで、入つて飲み始める。所が、あと引上戶のことであるから、もう半分、もう半分とだん〳〵飲んで行くうちに、とう〳〵ぐでんに醉つてしまつて、財布を忘れて出て行つてしまう。居酒屋の夫婦はその財布を隱してしまつて、爺さんが醉が醒めて、財布をさがしに來ても、そんな物は無かつたと云つて、渡さ無い。爺さんはその金が無ければ何うにもならない身の上なので、身を投げて死んでしまう。居酒屋の方は、その爺さんの金で、たん〳〵店を廣げて、商賣が繁昌して、可なりな身上になつた。そのうちに夫婦の間に子どもが出來た。乳母を雇つたが、何ういふものだか、皆二三日たつと、ひまを取つて歸つてしまつて、居附く者が一人も無い。亭主が何うも合點の行かぬことだと思つて、一と晩ねずに番をして居ると、眞夜中に

なつて、爺んぼがそろ〳〵寝床を抜け出して、貝入らずから過香を取り出して、且亭もう半分と云つた。

此の話は、爺さんが居酒屋でもう半分〳〵と云ふところは、可笑味で十分笑はせ、財布をさがしに來るところから、調子を引きしめだし、夜中の怪談は十分凄く話して、落のもう一杯で、客を笑はすといふ話し方であつた。

元より善い寄席では無かつたので、話家も善い藝人では無かつたのだらうが、今の記憶では、何うも話方が旨かつたやうに思はれる。落を除り聞か無いうち、而も子どものうちのことであるから、何か無しに旨かつたやうに思はれたのであるかも知れぬが、しかし又他方から考へると、當時の話家は中流どころでも、今の話家より藝がずつと上であつたかも知れ無いのだ。

此の話は、その後何處でも聞いたことが無い。當時でも善い寄席ではし無い話になつて居たのかも知れぬ。

三

所謂る怪談ばなしなるものも、當時では善い寄席には出無いものになつて居たやうに思はれるが、荒木亭には左龍といふのが、懸つたことがある。

話は、侍が腰元を殺すとか、家來を殺すとかして、その死骸を埋めに行くといふやうなところまで話して、それから、高座と客席の燈を消し、薄暗いなかで、死骸を埋めるやうな所作がある。靈位は附けて居るやうであつた。そのうち、あつと叫けんで、その男が倒れたやうで見え無くなつてしまうと、幽靈がそろ〳〵と高座の隅から現はれ、烟硝の烟か何かゞ裾の方でポッと立つ。時には高座の直ぐ下位へは下りて、引込んでしまうのだ。ハテ恐しい怨念ぢやなアとか何んとかいふやうな白が聞えて、燈がつくのである。

昔は幽靈が客のなかを歩いたなどゝいふ話も聞いたのであるが、吾々の時分には、そんな事は無かつた。

荒木亭に懸つた一座のなかで、今一つ覺えて居るのは、しん粉細工の何とかいふ男であつた。前藝にしん粉細工をやるといふのならば、兎も角であるのだが、これは眞打であつて、出來上つたのを、籤引きか何かで客に呉れるのであるから、荒木亭の寄席としての格式も大抵それで知れ

ようと思ふのである。

荒木亭は明治十七八年頃には最早潰れて居たかと思ふが、その後牛肉屋のいろはになつて居たことを覺えて居る。今はその家は取り崩づされて、その地面の一部分に、農工銀行の支店が建ち他の一部分が瓦屋か何かになつて居る。

日蔭町の岩本は、内部へ近頃入つたことが無いので、それは何うかわつて居るかも知らぬが、外部はさうたいして違つて居無からうと思ふ。

小生は、十三四の時分かと思ふが、岩本へも行つた覺えがある。一人で行つたのだから、大抵は講席であつたと思ふのだが、聞いた話のなかでは、澁川伴五郎が霧島山で土蜘蛛を退治する話と、姐妃のお百の話とが記憶に殘つて居るのみである。講釋師の名などは覺えて居無い。

講釋專門の寄席は、本郷近くでは、上野の廣小路に本牧亭といふのがあつた。これは今の鈴本の筋向ふあつたりであつたから、今何とかいふ蕎麥屋兼料理屋になつて居るあたりにあつたのでは無からうかと思ふ。

神田の白梅はその當時は位置が好かつたので、眼に立つ講釋席であつた。小柳のある町はその

時分は横町であつたので、講釋好きの人が知つて居るだけであつたらうと思ふ。

白梅は今はもう講釋席では無い。此頃は、多町あたりでも、白梅(はくばい)へ行くとは云はず

にしらんめへ行くと云ふのださうだ。時世の變化がこんなところにも窺はれて、微笑を禁じ得な

い。

白梅で憶ひ出すが、明治十二年頃のことだと思ふけれども、白梅の右手の裏を入つたところに

茶番狂言の常小屋があつた。

父の知人につれて行つて貰つたことを覺えて居る。掛合ひ話か何かで、侍が亭主と客と二人で

庭を向いて話して居るうちに、客が庭をほめると、亭主が植木屋に作らせたといふ。客がさすが

に餅屋は餅屋で御座るといふ。亭主はイヤ植木屋で御座るといふ。それでも、客は矢張り餅屋は

餅屋で御座るなと感心して居る、亭主はイヽヤ植木屋で御座ると奴鳴るので、看客は大笑をする

のであつた。後は、彌次、喜多が盲按摩におぶさつて川を渡る場と、長兵衛の鈴ケ森が出たやう

に覺えて居る。

近頃その常小屋のことを、人に話しても知つて居るといふ者がない。或はその小屋はその後間

も無くなつてしまつたかも知れぬ。

四

序だから、無くなつた寄席を二つ三つ書いてみやうが、本郷の元富士町に伊豆本といふ寄席が出來たことがあつた。位置は消防署の隣のところであつた。出來たのは明治二十二三年頃かと思ふのだが、此の寄席は明治三十一年頃にはもう潰れて居て、あとが甲子飯になつて居て、齊藤緑雨などゝ、懐中都合の悪るい時分に、其所で一二度飯を食つたことを覺えて居る。

これは伊豆本よりも後で出來たと思ふが、菊坂に菊坂亭といふのがあつた。勿論格の低い寄席で、源氏節とか、浪花節とかいふやうなものしきや懸らなかつたのであるが、近頃まで商賣を續けて居たやうであつた。けれども、今は病院のやうなものになつて居るやうである。

大横町――壹岐殿坂の通り――弓町の裏に、低級な寄席が出來て居たことを記憶して居るが、これも何時の間にか無くなつてしまつた。

小石川の初音町に鶯橋といふのが大溝にかゝつて居て、その袂に初音亭といふのがあつた。場

末の寄席らしい綺看板などを時々見かけたのだが、今はもう無くなつてしまつたらう。

麹町の山元町の山王へ下りる角のところに、山長といふのがあつた。これは女義太夫の定席であつたかも知れぬが、今はその跡が薪屋になつて居る。

九段坂の鈴木寫眞館の東隣に富士本といふのがあつたが、これは可なりな寄席であつた。今はその跡が佛教の講義所になつて居る。

小川町の小川亭は女義太夫の定席として、名のあつた寄席であつたが、今は改築されて、天下堂になつて居る。

下谷の數寄屋町の吹拔といふのは、心持の好い寄席であつたが、何時の間にか無くなつてしまつた。

舊兩國の橋詰めから左に、柳橋の方へ出る横町があつて、その角に新柳亭といふ女義太夫の定席があつた。川緣で、裏は大川であつたのだから、一寸と心持のかわつた面白い寄席であつたが、兩國橋の架け更へられると共に、彼の邊の模樣がかわつて、新柳亭も無くなつてしまつた。

京橋の南鍋町の鶴仙は風月堂の橫町の左側であつたと思うが、これも今は無い。

麻布の十番あたりであらうと思ふが、福槌といふ寄席があつたが、これももう今は無からうと思ふ。

日本橋では、木原店の木原亭だの、瀬戸物町の伊勢本などが、名の聞えた寄席であつたが、今は一向名を聞かぬ。或は二軒とも無くなつたのでは無からうか。

斯ういふ風に、無くなつた寄席が隨分多いのであるから、新に出來た寄席も大分有るには有るけれども、總數から云へば、減つても增して居る氣遣ひは無からうと思はれる。

けれども、近來では、郡部に近い昔の全くの場末が開けたので、其所には寄席の出來て居ることを見かけることがあるので、或は中央部では減つたが、場末ではふえて居るので、結局總數は三十年位前と同じだといふ譯になつて居るかも知れぬ。

五

竹町の若竹へ吾々が行きだしたのは、明治十四年頃であつたと思ふ。

圓遊がステテコを始めたのも、大凡その頃であつた。當時の寄席は一體に入りが今よりはずつ

と多かつたらう。

圓遊はその時分には、茶番のやうなやり方であつた。圓遊が辨慶になり、一座の誰れ彼が、義經その他になつて、勸進帳の茶番などもやつた。瀧夜叉などもやつたかと思ふ。面燈なども用ゐてなか〳〵大袈裟なものであつた。入りを取つたのは、此の茶番仕掛のお蔭であつたと思ふ。圓遊の話は、當時の大家のなかではさう重んずべきものでは、無かつたのであるが、それでも幾等かの新味は加はつて居た。

『成田小僧』とか、『お初德次郎』とかいふやうな話は、如何にも圓遊に適したものゝやうには見えたのであるが、何處と無くまだ落付きが惡るかつたやうであつた。晩年になると、それがだんだん落ち付いて來たのであらうと思ふ。

要するに、修行の功で出來上つた藝で無く、才氣の藝であつたので後年先輩の傳統的な型が客に忘れられて行くに從つて、圓遊の藝の長所が客の胸に善く徹するやうになつたのであらうと思ふ。後年には、圓遊の話は如何にも當意卽妙で面白いといふので、御座敷などが多かつたやうに聞て居るのだが、さういふ風に頓智を働かすところでもつて、此の人は自分の藝の修行の足り無

いのを意識的に補なつて居たかも知れぬ。

當時の大眞打連は皆續き話をしたが、圓遊はそれは出來無かつたらうと思ふ。義士の講釋りの話などは、何うもまずかつた。輕い罪の無い話だけが、先づ聞けたのであつた。けれども、今の大家連の中へ入れゝば、ステテコ時代の圓遊でも優に名人とでも云は無ければなるまいと思ふ。

當時の話家は大家は續き話で、中家位のところは、大抵音曲を入れるのであつたが、圓遊の一座の立川談志といふのは、素話であつた。顏の長い而かも、顎が細く尖つて長い男で、克明に話をするのであつたが、それで居てなか〳〵可笑かつた。思ふに話は上手であつたのであらう。圓遊のやうな才氣を基としたムラ藝では無かつたので、今何ういふ藝風であつたか思ひ出すのは困難である。

所が、談志も嚴密に言へば素話ばかりで高座を勤めたのでは無い。話のあとが郭巨の釜掘りといふ踊りのやうなものをやつた。郭巨が子を埋めに行くところからやるのだが、先づ座蒲團を巻いて、それを抱いて何んとか云つてはパア、又何とか云つてはパアで、子との別れを惜しむ身振りをする。それから、鍬で地面を掘る眞似をし、いよ〳〵釜が出て來たといふので、吃驚した表情

から、大喜びの有樣にて、奇妙頂禮テケレッツのパァといふので、ステヽコ形の踊になつて終るといふことに呑ん氣極まつたものであつたが、何にしろやつて居る當人が大眞面目なので、いやにくすぐつて笑はせられるといふ感じは無くて、見て居て決して厭な心持のするものでは無かつた。

呑ん氣極まると云へば、圓遊一座の橘家圓太郎の藝なども、全くたわいの無いものであつた。圓太郎は顏の如何にも柔和さうな、愛嬌のある男で、人が酒を飮んで騷ぐ眞似をして、歌を唄つたり、饒舌つたりして居るうちに噯すをると、皆がエヽきたないなどゝ云ふところをやるだけのことであつた。大抵は、馬車の喇叭を吹いて、お婆さんあぶないよなどゝ、馬丁の口眞似をするのだ。眼鏡から板橋へ通ふ馬車などは實に危險だと思はれる程構造の不完全な、そして、幌などの殆ど襤褸のやうに見える、今日では殆ど想像のできぬやうなものであつたが、さういふ馬車は圓太郎馬車と呼ばれて居た。此の名稱は圓太郎がさういふ馬車の眞似を高座でしたのから起つたのであらうと思ふ。圓太郎は柔かにふとつた脊の低い男で、如何にも圓いといふ印象を人に起させる體形及び表情の人間であつた。

ヘラ〳〵坊萬橘といふのも居た。此も小柄な何方かと云へば丸顔の男であつた。けれども、圓太郎のやうに圓滿に圓くは無く、幾らか骨張つて居た。先づ赤い布片で頭を包んでその餘りを頬冠りのやうに下へ持つて來て、顎の下で結び合せ、扇を開いて『太鼓が鳴つたら賑だァね、ほんとにさうなら濟ま無いね、ヘラヘラヘックラ、ヘラヘラヘ』といふやうな言葉に節を付けて云ひヘンな横眼を使ふやうな眼付をして湯呑を取つて湯を飲んだりするのである。歌は『太鼓が鳴つたら』のかへ歌として『大根が煮えたら、柔だァね』といふのもあつた。囃子は太鼓と三味線でも使つたかと思ふ。

圓遊一座の如きは、當時の大家の一座に比べると、幾らか俗な方であつたのであらうが、それでもさういふ俗ななかに何處か呑ん氣な泰平の氣分が表はれて居て面白いものであつた。

先代の遊三も此の一座であつた。藝は後年の風と素質に於てかわつた所は無い。矢張りヨカチヨロをやつて居たのである。

或る男が、女房を貰つたところが、その女房が亭主の寢息を窺つては毎晩何處かへ出て行く。亭主はそれと氣が附いて、或る晩そつと後を附けて行くと、女房は或寺の墓場へ入つて、新墓を

暴き、死人を引きだし、その腕を喰つた。亭主は驚いて逃げて歸て慄へて居ると、女房も直ぐ後から歸つて來て、亭主の樣子で後を附けられたことを覺つて、笑ひながら、自分は一度病氣であつた時に、或る人が妙藥だと云つて、何だか分らぬ肉を與れたが、それを食うと、病氣は直きになほつてしまつた。あとで聞くと、それは人間の肉だといふのであつたが、その味が忘れられ無いので、時々斯うして夜出て行くのだと云つた。亭主は、弱いことを云つては、自分も喰はれてしまうかも知れ無いと思つたので、イヤ俺だつても若い自分は親爺の臑をかぢつたと云つた。

此の話は、遊三がやるを聞いたことがあるのだが、その後は誰がやるのも聞いたことが無い。寄席での話に對する取締りが嚴しくなつてから、勿論斯ういふ話はでき無くなつたのでもあらうか。

六

若竹で聞いた話家の中では五明樓玉輔（先代）といふのを憶ひ出す。中背の瘦ぎすな、少し氣取つた男であつた。話家としては、漢語なども少し使へた方であつたやうだ。續き話しなしたやう

に思ふのだが、偖何んな話をしたのであつたか、覺えて居無い。『寫眞の仇討』といふのがお箱であつたらしいのだが、玉輔がニユウ・ヨオクのことをばニユウ・ユウヨツクと云つたと云つて、吾々が笑つたことを記憶して居るのだから、『寫眞の仇討』の一部分位は聽いたかも知れないが、何うも確で無い。

玉輔の一座で何ういふ話家が出たのか、それは少しも覺えて居無い。片目の今輔を見たのはずつと後のことだと思ふ。

此の間、新聞を見ると、或る話家が『わたしの親爺は歌にまで唄はれた桂文治です』と云ふと、客がそんな話家があつたかねえと云つた。今の寄席通なる者は大抵そんなものだから、し方が無いといふやうなことが書いてあつた。

成る程『桂文治は話家で』といふ歌のやうなものを聞いた覺えはあるが、全體の文句は一寸思ひ出せ無い。

桂文治は確に話家であつた。所謂る芝居話をするのであつた。何つちかといふと小柄な、眼付の鋭い、如何にも稲背な男であつた。

或る男が、他の男の妾のところへ行つて酒を飲んで居ると、その旦那が來て、双方甚だバツの悪るいことになる。旦那は、その男の額へ湯呑みをぶつつけて傷を負はす。それで、男は出刄か匕首を持つて、復讐に出かける。そこで後の引幕を落とすと、吉原らしい遠見の書き割りになつて居る。或はそれもさういふ景色を書いた幕であつたかも知れぬが、兎に角、文治はその前で上着を肌抜ぐと、辨慶か何かの粋ななりになつて、立膝で立ち廻りの身振りをするのであつた。外の話もしたであらうが、小生はその話だけしきや覺えて居無い。而も、この話は二度位聞いたやうに記憶して居る。

禽語樓小さんは、極く小柄に見える、顏が狆に似たやうな男であつた。小さんは續き話はし無かつたのであるが、圓遊の話などより餘程諷刺が強くこたへるやうな話し方であつた。小さんは雄辯とも云つても宜いやうな話家であつた。『五人廻し』などでは、可なりに旨く漢語を使つた。けれども、『將棊の殿樣』『お蕎麥の殿樣』などが最も客受けのする話であつた。今日の話家では、殿樣の話のできるものは一人もあるまいと思ふ。侍らしい侍を出し得るものは、今では圓右唯一人であらう。

『目黒の秋光魚』も小さんの話では無かつたかと思ふ。何うも小さんの話を聞いたやうな氣がする。

圓洲樓と云つた燕枝は當時の大看板であつて、これも一二度は若竹で聞いたのだが、何んな話であつたか、今少しも記憶に殘つて居ない。品のある話家とは思はれたが、何うも話はそれ程上手では無かつたやうである。『島衛』の一部分でも聞いたのであらうと思ふけれども、一向に憶ひ出せ無い。

春風亭柳枝は、體の肥つた一寸と遊び人といふやうな感じのする男であつた。話は博奕打のことであつたやうに思ふが、これも今記憶に殘つて居無い。柳條だの、司馬龍生などといふ話家は可なりな看板であつたやうだが、さう話は旨くは無かつた。

確か圓馬と云つたかと思ふのだが、可なりな商店の旦那とでも云ひさうな品格の、もう好い年配の肥つた話家があつたが、水茶屋の娘に旦那が出來たが、それが掏摸であつたといふ話を二三度聞いたことがある。此の話は近頃になつて速記本で見たことがあるから、講釋の方などでは、此の話もやるかも知れ無い。

圓橘が橘之助をつれて上方から歸つて來たと云つて、若竹にかゝつたのを聞きに行つたことがある。圓橘は肥つた柔和さうな、可なり年をとつた男であつた。何んな話を聞いたのか、今は覺えて居無い。橘之助は痘痕があるかと思はれるやうな顏の肥つた女であつた。今の橘之助よりは器量が惡るかつたやうに思ふのだが、同じ人であるのであらうか。

圓生は當時大家であつた、骨太の、色の白い、顏付の凄い男であつて、話にも强味があつた。或人は圓生の『累ケ澤』が面白かつたと云つたが、成る程あゝいふ話は得意であつたらうと思はれる。博奕打が欺かされて呼び出されて、途中で要撃されるといふ話を二度程聞いたやうに思ふ。

吉原の松人といふ女郎が病氣になつて、樓主の虐待を憤つて火をつける話を聞いたことがあるが、此は圓生の話では無かつたかと思ふ。可なり深い中の客が來て居て、それに松人が天上裏へ火の附いた着物か何かを上げてあるから今に火事になると話すところが可なり物凄かつたと覺えて居る、吉原に『松人火事』といふのがあつたが、話はその譯はれだといふのであつた。

明治二十年頃であつたと思ふのだが、圓朝を唯つた一遍若竹で聞いたことがある。如何にも落

ち付いた正々堂々たる話し方であつたが、餘りに平凡な教訓的な言葉が混つたので、客が冷かしだして、話が面白く聞け無かつた。圓朝は可なり體の大きい男であつたやうに覺えて居る。

伯圓も一遍茶竹で聞いたことがある。話のなかで鶴の講釋が始まつて、伯圓が頭の赤いのを丹頂といふのだと云ふと、客が頭の光るのは何だと云つた。伯圓はそれに構はずに話を續けやうとすると、客は尙頭の光るのは何だと云つた。伯圓は怒つて、そこ〳〵に話を終つてしまつた。何んな話であつたのか、何んな話し方であつたのか、少しも覺えて居無い。唯伯圓が背の高い、頭の禿げた男であつたことが記憶に殘つて居るのみである。

七

手づま師では、柳川一蝶齋も見たことがあるが、歸天齋正一が西洋流の手づまでは大家であつた。正一はまずいながら講釋もやつた。托塔天王晁蓋が何うとかしたといふ水滸傳の講釋を一遍聞いた覺えがある。正一は手づまの外に幻燈をやつた。今の活動寫眞から見ると、隔世の感が深い。西洋の大きい家から火事の出るところだの、或る景色が夕暮になり、全く夜になつて、月夜

になるところなどを見せた。火事などは烟と火は見えるのであるが、建物は何時までたつても燒け落ち無い。これは、建物の繪はそのまゝで、烟と火の板のみが動くやうになつて居たからである。それでも、天一の幻燈は當時ではさういふ活動式のところがあつてめづらしかつたのだ。

明治二十年頃にはジャグニ操一といふのがあつた。これは天一よりはもう少し新式な、もう少し規模の大きい手づま師であつた。然し、話家氣分といふやうなものは、正一の一座の方に遙に多かつたと思ふ。

十人藝とか稱する西國坊明學といふのが、上方から來たことがあるが、これは大きな盲坊主であつて、義太夫もやれば、琵琶もひいた。琵琶は今で云へば筑前琵琶のやうなものであつたやうである。客に謎を掛けさせて、三味線を引きながら、解を歌ふやうにして云ふのであつたが、これは上方では古くから座頭のやる事であつたやうに聞て居る。

『緣かいな』の德永里朝も見たことがあるやうには思ふのだが、確な記憶は無い。

明治十八九年までは、寄席では女義太夫はそれ程勢力を持つに至ら無かつたので、寄席へ出る女の藝人は女義太夫で無いもの丶方が多かつた。

圓遊の一座であつたか、何うか明には覺えて居無いが、寶集家金之助といふ年増の常磐津語りがあつた。出額ではあつたが、眼のはつきりした可なり好い器量の女であつた。『値特山』だの『富山』などを聞いたことを覺えて居る。

鶴賀若辰といふ新内語りがあつた。極く低い聲で語るのであつた。若辰は肥つた、三十を餘程越して居るかと思はれるやうな盲目の女であつた。

近頃死んだ紫朝の新内の聲を思ひ切つて殺すやうなところが、若辰の全體であると思へば間違ひは無いのだ。

岡本宮子のことは、嘗て拙者『葉巻のけむり』の中に書いたが、當時女で兎にも角にも眞打として客を呼んだのは、宮子一人であつた。岡本淨瑠璃といふのは、新内の一派であるらしかつた。『繼子いじめ』などをやるのは、他の新内とかわりは無かつたが、『須磨の仇討』などをやるところだ、岡本派の特徴であつたのでは無からうかと思はれる。

聞くところに依れば、長谷川時雨女史が先頃或る雑誌へ宮子のことを女義太夫として書かれたといふのだが、宮子は女義太夫のまだ流行らぬ時分の女藝人で、而も眞打であつたのであるから

そこが一寸と面白いのである。若い女であつて、藝は何うせヨタであつたのであらうが、器量のお蔭で人氣を集めて居たのだ。寄席藝墮落の徴候がもうその時分から見えて居たやうにも思はれるのである。

富子は、後に禽語樓小さんの妻になつたとか聞いたのであるが、小さん死後落魄し、脚氣の爲めに、本所の何處かの路上に倒れて居て、養育院へ送られたといふ新聞を見たのも、もう十年以上前のことである。

要するに、明治三十年頃までの寄席は有らゆる平民藝術の演ぜられる壇上であつた、男の義太夫でも當時は平民藝術であつた。先代越路の如きさへ寄席へ出た。木戸は高くなつて精々二十錢位であつた。呂昇、長廣などは無論寄席へ出た。

大芝居で五圓近くの木戸で義太夫が興行されたり、金ピカの劇場で落語や講釋を聞かされたりするのも、時勢の進歩には相違無からうが、木戸錢が高くなり、興行[illegible]になつた割り程には、藝が上手になつたやうには思へ無い。

容の趣味の低劣になつたことは一般である。けれども、有樂座などのお客の方が、落語の趣味

を解せざることは、寄席の客以上であるやうにも思はれる。寄席藝人はまだ寄席に於てはその藝の權威を持して居ることができるやうである。寄席藝人は寄席の壇上で骨を折つて貰ひ度い。蠟燭を兩方へ立てゝ薄暗いやうな高座で、時々蠟燭の心を切りながら話すといふやうな氣分で、落語の全體が出來て居るのだ。それを電燈の光眩ゆき金ピカの壇上へ引ずり出しては、何うも大分調子が違うやうである。

『貞婦傳』といふやうなビラが下がつたので、おや〳〵と思つて居ると圓右が『芝濱』を話しだすといふのでは、餘りのことに苦笑もし兼ねる。

それから、何んぼ可笑味を主とした落語であつても、一語一句が皆笑うやうに出來て居ては仕無い。笑ふには、笑ふべき要點があるものだ。それを話家が口を開くや否や笑ひ始めて、しまひまで笑ひ續けるといふのは、話しを聞く方式では無い。而も、有樂座の客などにはさういふのが甚だ多い。

話家がさういふ客に向つて話をするのを光榮とするやうでは、甚だ心細い。彼等は寧ろ退て、華やかならぬ寄席の高座で、傳統ある藝を演じて、誠實な聽き手を待つべきである。

文化の變遷と寄席の今昔

一　寄席對小劇場

僕等の少年の時分には、寄席は平民娯樂場の中心であつたのだが、現今では、さうではなくなつてしまつた。

昔でも、寄席以外に娯樂場の種類が幾つか在つたには在つた。が、その一つは各所に在つた小劇場である。近頃まで在つた中洲の眞砂座とか赤坂演伎座とかいふのも、小劇場には相違なかつたのであるが、僕のいふ昔の小劇場なるものは、もつとずつと小さい、全くの平民的劇場であつたのだ。僕の知つて居る限りで云へば、芝の森元座、二長町に在つた何とかいふ座と、向柳原の開盛座などが、盛な方であり、もつと小さいのでは、赤城下に殆ど列んでゐる位の近い位置に全くの小芝居が二軒あつた、僕はその時分は、辨天町に住まつて居た親類の老人のところへ漢文を

習ひに本郷から毎日通つてゐたので、その小芝居の前を通つて、『八陣守護城』とか『二十四孝』とかいふやうな、惡どい程彩色の濃い繪看板を見かけたことがある。

けれども、さういふ小芝居の客はずつと俗な連中――重に女、子供と云つてもよかつたらう――であつたので、寄席――小くとも中流以上のもの――がさういふ小芝居に蠶食されるといふことはなかつた。

中等どころの劇場が大入場を廣げだしたのも、二十二三年以後のことである。當時の春木座――今の本郷座――の前身で、大阪の鳥熊と稱する男が、可なり安い芝居を興行しだした。役者は芝鶴、鯉之丞、徳五郎などゝいふのが重立つた役者であつた。けれども、極めて變つてゐたのは看客待遇法であつた。鳥熊は先づ大入場を思ひ切つて廣くした。それから、面白いことには客の下駄の掃除をした。

即ち、雨天の日など、泥まぶれになつてゐる下駄の齒をば、下足の方で、客の歸る迄に、すつかり綺麗に洗つて置くのであつた。

さういふ興行法が大いに當つて、毎日大入をしめた。何しろ、その時分、春木座を一日見物す

るには、何うしても一圓以上はかゝつたのであるが、二十錢もかゝらぬ位で見られるのであつたから、あの近傍の人に取つては一種福音の觀があつた。

が、それでも、それが爲めに、若竹あたりは、さう大して打撃を受けたことは無かつたらうと思はれる。

さういふ小芝居若くは中芝居へ行く客は、濃厚な娯樂を求める連中であつた、もつとあつさりした、輕い、氣の利いた寄席の藝を翫賞する連中とは、少し種類を異にしてゐたと思ふ。それに芝居の方だといふと、時間等の關係もあつて、さう誰でも行くといふ譯には行か無かつたのである。

それから芝居の方は何分時間が長いのであるから、辨當がいるとか何とかいふことになつて、寄席より少しは費用を要したやうにも思はれる。要するに、芝居の方は、何と無く出入が億劫であるやうに大抵の人には感ぜられてゐたのである。

夜間、即ち、大抵の人が最つともひまになる時間に於て、手輕な娯樂の場所と云つては、寄席より外には無いと云ひ得る時代であつたのだ。

先づさういふやうな點でも、昔の寄席は、他の娛樂機關に對し、競爭を容るさぬやうな優越な地位を占めてゐた。これが、當時の寄席が大抵何處も繁昌した一理由であつた。

二　昔の寄席には權威があつた

その時代に於ては、人々の知識の程度、趣味の程度が大凡平均してゐたやうに思ふ。

その時代には、東京の人口が今日程多くなかつたことは勿論であるが、それは、地方人が今日程多くなかつたといふ意味になる。即ち、その時分は東京が今日のやうに地方人に征服されてゐ無かつた時代であつたのだ。それ故に、その時分では、地方人は、直きに東京人の感化を受けて可なり急速度に東京人に近づいて行くのであつた。思ふに、その時分東京へ出た地方人は直に知識階級であつたので、その趣味に於ても東京人とさう甚しく違つてはゐなかつたのであらう。さういふ風で寄席などの藝は、東京趣味、東京人的知識に訴へるものでありさへすれば宜しかつたのである。

藝人の方からは、解からないところがあれば、それは客の方が惡いのだといふ考へでやつて來

し支へが無かつた。謂はゞ藝人の方に權威があつたのである。

又客の方から云へば奇拔とか斬新とかいふものを、只管に求めるといふまでに、それまで在つた物に不滿足は感じてゐないし、又、何でも新しい物を要求するといふやうな向上的憧憬は持つてゐたのではなかつたのだから、自分たちの持つてゐるだけの知識、趣味に合致するものであれば、滿足するのであつた。言葉を換へて言へば、當時の客は一種のエキスペクテエションを持つて、藝を見、そのエキスペクテエションに合致するものであれば、それでもう十分滿足するのであつた。勿論、藝に對して、看客の方で或る固定したエキスペクテエションを以て臨むといふことは、何時の時代でもあることであるのだが、演ぜられる藝とそのエキスペクテエションが合致するかしないで、問題がいろ〳〵になるのである。

寄席で演ぜられる藝のうちでは、云ふまでもなく落語が重なものであるのだから、先づ落語に就て云ふことにするが、當時の聽客には落語は全體として善く理解されたのである。落語が大成されたのは、明治十四五年頃から見て、さう古いことでは無かつた。その自分を去ること精々で三十年位前と云つて間違ひは無かつたらう。いや、實際はもつと近かつたかも知れぬし、話によ

つては、慶應年間若くは明治の始め位に作られたものも幾つかあつたかも知れないのだ。いやそれどころでは無く、圓遊の話の如きその時分出來上りつゝあつたものさへあつた位である。さういふ譯で、落語の中に出て來る人物の身分とか形氣とかいふものは、噺家なり、客なりが實見したものでは無いにしても、大體想像だけはつく位、落語が作られた時代と明治十四五年頃――或ひは二十年頃でも――とは接近してゐたのである。いや、時としては、落語のなかに出て來る商家の旦那とか、若旦那とか、權助とか、お鶴とかいふやうな人物の形氣を多分に具備した實際の人物を見ることさへあつた時代であつた。

だから、さういふ方面だけで云へば、少くとも明治二十年位までにあつては、落語は大部分當時の風俗の寫實であつたと見られぬことも無いのである。

それから侍などに就ても、侍といふ生活を實際やつた人々が、可なり多く生存して居た時代であつたことは勿論である上に、極く若かつた吾々さへもが、その侍であつた人々の子、即ち、さういふ侍であつた人々の直ぐ次のゼネレエションであつたのだ。それで、所謂る侍なるものに對しても、吾々は相當の理解や、想像を持つことができ、從つて餘程の親しみを持つことができた

のであつた。

その外、家屋の具合でも、衣服道具などに至つても、封建時代のものと、さう大した違ひは無かつたのである。いや、前時代の典型的な住家的建物の遺つてゐるものさへ少く無かつたのである。日常は用ひ無くなつてゐた物でさへ、その物だけは吾々の眼に觸れることが珍らしくはなかつた。例へば日本馬具だとか、行燈だとかいふやうなもの丶如きは、實際用ゐてゐるのを見掛けることさへあつた位であるのだから、唯の古道具として見かけることなどは、全く屢のことであつたのである。その他の風俗、習慣の如きも、消え去つたものでさへ、大抵は何等かの痕をまだ殘してゐたのである。

要するに、吾々の青年時代にあつては、落語の材料は今日のやうに既に死んだもの若しくは死にかゝつてゐたものではなくして、十分に生きてゐるもの、若しくは可なりに息の通つてゐるものであつたのだ。

落語家自身の方から見ても、話そのもの丶雰圍氣なるものは、個人として落語家その人を取り卷いてゐた雰圍氣とさう甚しき相違はなかつた。即ち、彼等は、話のなかでのみ自分の生きてゐ

る時代とは全く異つた時代、自分の接觸してゐるのとは全く異つた世界へ入つて行かなければならんといふのでは無かつたし、又自分等が實見してゐるのとは全く異つた種類の人間にならなければならんといふのでは無かつたのである。謂はゞ、落語家は地のまゝで藝を演じ得られるといふ傾きであつたのだ。

さういふ風で、藝人と客との間で知識趣味の範圍が、大凡極まつてゐたのであつて、客のエキスペクトしてゐるところへ、藝人の藝が一々嵌まつて行き得る譯であつたのだから、藝人の方も藝がしよいのであつた。即ち藝人が自信を以て藝を演じ得られたのであつて、客の方も、安心して、心持好く藝を鑑賞し、享樂することができるのであつた。

寄席藝人を藝術家といふ風に尊敬するといふ時代では勿論なかつたし、藝人自身も人間としてはさう太したプライトを持つてゐたのではなかつたが、實際上當時の寄席藝人は卑俗な下等な人間として客から見られてゐたのでは無い。即ち、客が心の底からさう輕侮してゐるのでは無かつた。客から見て全然賤しいおもちやといふのでもなかつた。口では成る程寄席藝人とか、鹿とかいふやうな風に、輕侮的な言葉で以つて呼ばれてゐたのであるが、客の心の上で藝人の占めてゐる

た位地は決してさうまで賤しいものでは無かつたのである。

少くとも、滑稽とか、頓智とかいふやうな領域に於ては、彼等が一種のオラクルであつた。客はさういふ點では、確に藝人から敎へらるゝところが多かつた。彼等にはさういふ點で權威があり、客も暝々のうちにさういふ點に對し一種の尊敬を以つて、彼等を待つたのである。

當時の寄席で演ぜられた藝は、殊に落語は、內容的に云つて、當時の東京趣味を具體化したものであり、且前に云つた通りの客の性質であつたので、當時の落語は東京趣味の具體化であり得たのである。

當時の落語家は、自分等のハアトに何等の親近性を持つてゐないことをば唯し來り通りにしやべるといふやうな鸚鵡藝人では無かつたのである。又、さうで無くて濟み得たといふ有利な位地にあつたのである。

大凡これで察せられるであらうが、當時の寄席の社會上の位地は高かつたと云つて宜しからう。前代の越路などは東京では寄席を打ち廻はつたものであつた。

以上に說明した點が、昔の寄席の盛であつた第二の理由であると思ふのである。

三　古き寄席の思ひ出

まだ、その外には、交通の不便などがあつて、短時間のうちにさう遠方まで遊びに行くことはできなかつたので、人々はその住居の最寄々々で、娯楽の場所を求めなければならなかつたといふのも、寄席繁昌の一理由であつた。

各所に小さい寄席があつたのは、重に此の理由で說明ができると思ふ。

泉鏡花君が『三味線堀』のなかに書いて居らるゝやうな寄席は隨分方々にあつた。僕の記憶してゐるだけで云つても、本鄕の田町から、小石川餌差町へ渡るところは、小石川側は大溝になつて居て、鶯橋といふ小さい橋がかゝつて居り、その袂に初音亭といふのがあつたが、それなどは、全く僅にその邊だけの客をアテにしたものであつたらうと思はれる。

小さい寄席では、本鄕の消防署の西隣に伊豆本といふのが、明治二十二三年頃に出來たことを記憶する。近頃まで在つた菊坂町の菊坂亭は伊豆本よりも少し後に出來たやうに思ふ。

今日では、寄席の數は市內全體では餘程減つてはゐはしまいか。麴町の山長も富士本もなくな

つたし、兩國の新柳亭、小川町の小川亭、池の端の吹拔、麻布の福槌、京橋の南鍋町の鶴仙、日本橋木原店の木原亭、瀨戸物町の伊勢本、など可なり名のある寄席であつたのであるが、それ等も何時とは無しに無くなり、神樂坂の藥店亭の如きも、廣く知られて居た寄席であつたが、これは御承知の通り活動寫眞館になつてゐる。

根津の入口あたりにも一軒あり、駒込の蓬萊町あたりにも一軒あり、牛込の辨天町にも一軒あつたが、それ等は、今はもう無いであらう。

東京の人口が激增して、郊外や場末まで可なり賑かになつたので、意外なところで、寄席的興行の看板を見かけることはあるのだが、それが、寄席的に興行して居る家なのか、何うも確で無いやうに思はれる。

新開で寄席が出來て、今も取り續いてやつて居るといふやうなところは、餘まり無いやうである。新開では、寄席の代りに活動館が大抵何處にもあるやうだ。

寄席で僕の今も尙忘れ得無いのは、前記の柳橋の新柳亭である。元の兩國橋の袂から、神田川の川岸へ出る橫町があつて、その右角にあつた寄席であつたが、大川に沿うて立つてゐた家なの

で、入ひる時の氣分も既に快かつたが、樂屋寄の方へ行くと、川波の音が聞えるのであつた。新柳亭は女義太夫の定席であつた。兩國橋が今の橋と掛け替へられた時に新柳亭は取り壞はれてしまつたのであらう。

四　藝と人格の一致

三十四五年前の落語家には、上手もあつたと共に、實にタワイも無い、殆ど藝とは云ひ得無いやうなことで、高座を勤める者もあつた。けれども、當人もさういふ珍藝をやけ氣味にやつて居るのではなく、落付拂つて、謂はゞ生眞面目でやつてゐるのであつたから、客の方でも唯吞ん氣に笑つて見てゐることができたのである。さういふのは、一つには、藝人その人の人格の問題であり、一つには又、藝人と客とを包むその場合の雰圍氣の問題であると思ふ。

ヘラヘラ坊萬橘などゝいふ落語家は、話と云つても小話位なものをしてしまふと、赤い木綿ですつぽりと頰冠りをし、扇を開いて、『太鼓が鳴つたら賑だあよ。ほんとに、さうならすまないね』といふ歌のやうなものを、太鼓に合はせて歌つてしまうと、極めて變な横眼使をしながら、

湯呑の方へ手をやつて、湯呑を取つて、湯を呑み、又今度は『大根が煮へたら柔だあね………』といふ替歌を歌つてから、同じく前のやうな顔付と、身振りで、湯を呑むのであつた。唯全くそれだけのことであつたが、客は、さういふ藝にも飽きなかつたのであつた。

橘家圓太郎も萬橘に劣らない無邪氣な藝人であつた。圓太郎のは、何時も人が集まつて酒を飲む光景を話し、そのうちの一人が無暗に歌つたりしやべつたりしてあとでくしやみをするところをやつて、それから、最後に乘り合ひ馬車の馭者の用ゐるやうな金屬の喇叭を出して、それを高く吹き鳴らして、『お婆さんあぶないよ』と、馭者か馬丁の聲を眞似るのであつた。圓太郎は顔の圓るい、體の肥つた、如何にも圓滿な人相の男であつた。

當時は筋違あたりから、板橋などへは、極く粗末な構造の乘合馬車――幌のかゝつたもの――が通つてゐるのであつて、圓太郎の模したのは、さういふ馬車の有り樣であつた。さういふ馬車は圓太郎馬車と呼ばれてゐた。橘家圓太郎のさういふ藝からつけられた名であつたらうと思ふ。此れなどが、當時の民衆と寄席との間に密接な關係のあつた一例證と見ることができやうと思ふ。

『お前もどぢなら、私もどぢよ、どぢとどぢなら、拔けうらだ』といふ都々逸を圓太郎は何時も歌つた。

立川談志といふのも變つた話家であつた。顏の長い顎の尖つた男であつたが、克明に素話をするのであつた。極く眞面目に話すのであるから、滑稽味もなか〳〵よく客に徹し、例の『子はかすがひ』といふ話などでは、餘程哀れな情味が出たものであつた。談志は、話の後で、郭巨の釜堀りといふのを踊つた。先づ座蒲團を卷いて、それを子どもに見せ、それを抱いて、唐人の言葉らしく、何か分らぬことを云つてはその末にパアと云ひ、又何か云つてはパアと云つて、子を埋めようとする時の悲しみの身振りをする。そのうちに、子どもを傍へ寢かすさまを見せてから、又パア〳〵云ひながら鍬で地面を堀る眞似をし、いよ〳〵釜に堀り當てた見えで、吃驚した表情や、大喜びの表情をして、『奇妙頂禮、テケレッツのパア』といふやうなことを云つて、天地を拜する動作をするのである。やる當人が如何にも實體な人柄で、それが大眞面目なのだから、さういふことでも、客は面白がつて見てゐたのである。若し、生若い利巧振つた男などが、あゝいふことをやつたのであつたら、嘸ぞ厭に思はれたのであらう。

本當の大家では、圓朝は唯一度しきや聞か無かつた。體格の好い、なか／＼品格のある男であつたやうに覺えてゐる。何ういふ話であつたか、それは記憶に止まつてゐないが、話のうちで一寸教訓的な言葉が出たが、若い書生客から彌次が出たので、圓朝は直ぐ調子を變へたが、それで少し話の感興が殺がれたやうに見受けられた。唯如何にも落ち着いた、飾り氣を嫌つた、描寫式――會話を餘り用ひないといふ意味――の話し口であつたやうに記憶する。

圓生は數回聞いた。圓生は骨太ではあつたが、瘦せた、顏に凄味のある男であつた。博奕打ちが欺まされて家を出て、途中で、要撃されるといふ話を二度聞いたやうに思ふ。博奕打ちが、綿入れの上から水を冠ぶつて、刃を防ぐ用心をして子分の危難にあつてゐると傳へられた場所をさして、驅け付けて行くと、途中の藪疊から竹槍などが突き出されるといふやうな物凄い光景が、如何にも陰慘の氣を帶びて、力強く話されたやうに覺えてゐる。

松人火事といふ話があつた。それは、吉原の松人といふ女郎が病氣になつたが、助からぬことを自分でも知つて、內所の仕向けの刻薄であつたことを恨んで、家へ火を附けるといふ話であつたのだが、松人が病氣で寢てゐるところへ馴染の客が來ると、松人はその客に自分の決心を語つ

て、今その家の天井裏へ火を入れて置いたから、もう直きに燃えだすのだと告げるところが、如何にも凄惨な風に語られたのである。此の話は何うも圓生のやつたもの・やうに思はれるのであるが、餘り確ではない。

長尾素枝君の話では、圓生は『鰍ヶ澤』の凄い部分が非常に善かつたといふのであるが、成る程それはさうであつたらうと思はれる。

先代の小さん――禽語樓小さん――男振りは見榮えが無かつたが、それが却つて、その藝風と調和して、當人の爲めには、損にならなかつたやうである。小さんも極めて生眞面目な顏で、可笑しい話を話す話家であつた。『五人廻』も、此人が話すと非常に面白みがあつたし、『將棊の殿樣』『殿樣蕎麥』などに至つては、全く天下一品の觀があつた。恐らく、小さん以後あゝいふ話を到底あれだけに話し得る人は無かつたらうと思ふ。今の話家がやると、侍でも殿樣でも皆官員さん位なところにしきや聞え無いのであるから、今の話家からは『將棊の殿樣』などは何うしても聞くことはでき無からう。

今現存の話家のなかで、侍を侍らしく話し得るものは、恐らく圓右一人であらう。今の小さん

の侍は何うしても官員さんにしきや聞えない。

斯ういふ點も、落語が現代人を離れて行くことの一實例である。

それから、此れは、此頃よく人に話すことであるのだが、昔の話家——殊に續き物の場合——は、地の言葉に可なり骨を折つて、今のやうに殆ど會話ばかりで話を運ぶといふやうなことはやらなかつたと思ふ。今は、時間の都合などがあるので、自然と地の言葉を省いて、專ら會話で話を進めて行くといふことになつたのであらうが、話術の技量は、地の言葉を旨くこなして行くところにあるのだから、語術の稽古をするものは、共所に留意すべきであらう。

會話でばかり話を運ぶことになると、聲色、身振りに骨を折るやうになつて、耳に訴へるよりは、目にばかり訴へるものになつてしまうかと思はれる。それでは、話術の本意を失つてしまう譯である。

現に圓右など、話はなか〳〵面白いのであるが、少し身振りが過ぎると思ふ。近代の名人橘家圓喬などは、そんなに身振りや手眞似はし無かつた。

五　女義太夫も新芸術であつた

寄席のことを書く以上は、女義太夫のことを書かずにしまふ訳には行くまいと思はれるので、左に少しそれを書くことにする。

寄席の女義太夫が一座をなし始めたのは、竹本京枝からだといふことになつてゐる。ところで、明治十四年頃に、伊東燕尾が女房の此勝といふ女義太夫と一緒に寄席へ出たことがあるのだが、その時には此勝の弟子の若い女が二人程口語りをやつたやうに思はれる。然かし、燕尾此勝の一座と同時に女義太夫ばかりの一座も他に存在してゐたやうに思ふのであるが、それが或ひは京枝の一座であつたのであらうか。或ひは、それは京枝の一座で無かつたにしても、明治十四年頃から既に女義太夫の一座が出来てゐたことだけは確である。

女義太夫が可なり有力なものになりだしたのは、先代の東玉が東京の寄席へ現はれだした頃からだと思ふ。けれども、女義太夫が全　期に入つたのは、明治二十二年頃であらうと思ふ。即ち、竹本綾之助の出現と共にさうなつたのである。

綾之助は始めは、チョン髷であつたので、男だらうか、女だらうかと、皆判じ迷つたのであつた。その時分の綾之助の人氣は全く素晴らしいものであつた。若竹のやうな大きい寄席が殆ど連夜滿員になるのであつた。八時頃にでも行かうものなら極く後、即ち帳場との境のハメにくつ付いて聞くより外にし方がなかつた。聲は始めから如何にも善かつたが、本當に十分な善い聲が出だしたのは、それから二三年經つてからであつたらう。

始めは東玉の一座にゐた小政は、その時分では、上手な女義太夫であつた。その當時では、『吉田屋』を語り得るものは小政一人であつた。

後に素行となり、終りに瓢となつた豐竹三福も二十三年頃には、可なりな人氣を得て居つた。『小礒ヶ原』を語つたのはその時分では三福ばかりでは無かつたかと思ふ。

小清と小土佐は大抵同時位に東京の寄席へ現はれたと思ふ。綾之助の出現時分を女義太夫全盛時代の第一期とすることができるならば、小清の出現は第二期を劃するものと云へるであらう。小清の男性的な藝風は可なりの賞讃者を集め得たのであつた。『鰻谷』『岡崎』などは、それ以前の女義太夫から聞くことのできないものであつた。殊に吾々は小清の『鰻谷』を面白いと思つた。

小土佐は、始めから矢張り後年の藝と同じ筋であつた。此の人の『新口』などを僕は後年になつて、面白く聞いたことがある。

何うする連といふのが出來たのは、二十四五年頃からであらうと思ふ。然かし、そんな者どもでも、まだ人間が馬鹿正直なところの失せない時分のことであつたので、馬鹿げたところに、一種の愛嬌はあつたのであらうと想像せられる。

その時分では、義太夫專屬の寄席が隨分多かつたほど、それほど女義太夫が流行つたのであつた。

當時の若い者が、女義太夫の寄席へ蝟集したのは、唯女を見る爲めばかりでは無かつたと思はれるのである。矢張り藝術に對する欲求にも基いてゐたのだらう。淨瑠璃といふものが文學として並に音樂として、當時の吾々に取つては新しい藝術であつて、決して今日の如く古ぼけたものでは無かつたのであり、從つて女義太夫も、今日の如く唯從來ある藝を機械的に演ずる藝人とのみは思はれなかつた。淨瑠璃その者にも、女義太夫その人にも、何だか新しい生命が籠もつてゐるやうな氣がしたのであつた。要するに、吾々は藝術的欲求を滿足させ得る導き、高い對象を個

で見出し得無かつたのだ。いや、吾々は、極く卑近なところで藝術的欲求を滿足させ得るまでに、吾々自身の眼が低くかつた。心が進んでゐなかつたのだ。

世の中がだん／＼進むに從つて、女義太夫では藝術的欲求が滿足せられない人が增して來ると同時に、唯女を見るだけならば、カフエーの女給の方が面倒がないといふ時勢になつて來たのである。

これでは、女義太夫は廢滅せざるを得ないであらう。

もう此の十年前程から、女義太夫界それ自身の方が荒み始めたやうである。今好い藝人が出たところで、此の大勢は奈何ともしかたがないであらうが、而かも、實際に於て、好い藝人は出て來無いのである。

落語でも、女義太夫でも、總ての寄席が皆日陰の藝術になりつゝある。いや、もう既にさうなつてゐると云つた方が確であらう。偖てさういふ風に落目へ向つて來ると、氣の毒なもので、よい藝人が生れて來無いことになるのである。

さういふ風であつて、所謂る寄席藝は次第に趣味の中心を離れて、卑俗な方へと落ちて行くの

である。残念であるが、何うもしかたがない。

六　衰退已むを得ず

寄席業者が衰運の豫覺を感じだしたのは、明治二十八九年頃からであらうと思ふ。さま〴〵な好みの客の欲求の爲めに唯目先をかへる爲めにのみの場違ひな藝を演じさせ、一席の出演者の數を無暗に多くし、唯一つ時の瞞かしで落を取らうとするやうになつて、藝人の方では本當に高座で藝を錬ふ機會が無くなり、客の方でもゆつくり藝人の藝を鑑賞する餘裕が無くなつてしまつて、藝人の素質が低下すると共に、客の柄もだん〳〵惡くなつて行つたといふ風に見えるのであるが、此れは單に結果の表れであつて、實際は、前に云つた通り、時代の變化が、藝人の方へも、客の方へも及んだのが、寄席衰退の眞因である。寄席衰退の歴史は、東京敗北の行程を負載してゐるものと見ることができるであらう。

前代に於て東京へ移住した人々は、その前方からして東京の感化が及び得た範圍内にゐた人々であつたのであるが、後の東京の移住者は、さういふ傳統を更に持つてゐ無い人々がます〳〵多

くなつて來た。後の地方人は東京の文化に對してヴァンダルスであつた。さういふ地方人なるヴァンダルスが、東京なる羅馬文化を破壞して行つた。その一局面が、寄席の衰退となつて表はれてゐるのである。

さうなつて來ると、さういふヴァンダルス自身が權威を揮ふのみならず、羅馬人たる東京人の方でも、さういふヴァンダルスに感化されて行くのが增して行くのである。尤も征服者なるものは、何時も被征服者から何等かの感化を受け無い譯には行かないものであるのだからして、ヴァンダルスそのものゝ中からも、東京的文化の感化を受けた者が可なり出た譯であるのだが、それ等は數に於て、さう太したものでは無かつたのみならず、さういふ感化を受けたものも、根がヴァンダルスであるのだからして、究局のところでは、東京文化の擁護者では有り得無かつたのである。

固より東京文化プラス地方精神といふやうな文化が纏まりつゝあることは、事實であるのだが、然かしまだそれは十分なものでは無いと云は無ければならぬ。

かういふ風であつて見れば、善い寄席、善い寄席藝といふのは、極く少數のものが殘つて行く

に過ぎぬであらう。寄席業者も、寄席愛好者も、先づさう諦めるより外にしかが無からう。

故攝津大掾

一

明治の義太夫界の巨人と仰がれ、近代絶倫の美音と稱せられた竹本攝津大掾は、此程八十二歳を一期として、白玉樓中の人となつてしまつた。

僕は此の人が攝津大掾と改名してからは、折惡るく一度も聽いたことが無い。僕の此の人に關する記憶は今より二十六七年前のことに屬する。此の人が未だ越路太夫と云つて居た時分のことである。

元よりその越路太夫に關する記憶は單獨の記憶では無い。それは他のさま〴〵な記憶をばその後に牽ゐて、僕の心に起り來たる記憶である。

それは僕等の學生時代であつた。その時分に一緒に越路を聽いた友の中には最早とくに故人となつて居るものもある。遠い土地に居て消息も互にし合は無くなつてしまつたのもある。その時分からの知人で今時々行會ふ者と云つては、ほんの數へる位しきや殘つて居無い。

秋雨のしめやかに降る夜、さういふ思ひ出に耽れば、昔親かつた人々の顏、昔行なれて居た場所の光景などが、つぎ〳〵に眼の前に現はれて來るやうな心持がする。

さういふ追憶を書き立てれば何枚書いても書き盡くせさうも無い。僕は今、攝津大掾の越路時代のことを重に思ひ出して見よう。それには幸二十三、四年の僕の日記が殘つて居る。それから、越路を聞いた時のことを抄出しよう。

二

僕が最初に越路を聞いたのは明治二十三年の五月の三日である。寄席は本郷の若竹、同行者は今朝鮮の何處かの知事である松永武吉氏であつた。午後一時から始まつて、八時半頃に終つて居る。それで木戸錢はといふと、二十錢か精々で三十錢位であつたらうと思ふ。物價の安い時分で

あつたからでもあるのだが、それにしても、現代の越路が大劇場で金何圓といふ木戸錢であるのは、少し故人に對して、くすぐつたい氣はし無いであらうか。

さて、少し蛇足の感はあるが、參考のために、その時の語物を順に書いてみよう。『八陣―正清本城』越榮太夫、『加賀見山―又助』小長太夫、豐澤廣子、『棊太平記―坂戸村』越尾太夫、豐澤廣吉、『同―揚屋』村太夫、豐澤富三、『玉三』さの太夫、鶴澤小庄、『袖萩』路太夫、豐澤花助、『酒屋』越路太夫、豐澤廣助といふのである。

越路は此時は聲の美しさの方では稍下り坂だと云ふ人があつたのであるが、まだ何うして實に善い聲であつた。殆ど男の聲とは思へ無いほどの奇麗な聲であつた。節を細かに語つて行くところは、所謂盤上に玉を轉ばすといふ形容は此の樣な場合に用ゐるものでもあらうかと思はれた位であつた。

『あとには園が』といふところまで來ると、越路は見臺に手を掛けて、膝で眞直に立つた。それから『繰り返したるひとりごと』までが、如何にも悠揚に語られた。

同月五日にも、松永氏と共に聽きに行つた。路太夫の『紙治の茶屋場』と越路の『御殿』とが殊に

面白かつた。路太夫は如何にも聲の無い太夫であつたが、その代り非常に言葉の旨い太夫であつた。此の『河庄』は今も猶僕は忘れ得無い。もう一度此時のやうな『河庄』を聽いてみ度いと思ふ。越路の『御殿』では『お末の業をしがらきや』以下のところの節廻はしの奇麗であつたことが、今も猶耳に附いて離れ無いやうな氣がする。殊に『心も滑き洗米』の節の細かゝつたことは、僕の終生忘れ得無いものであらう。

同月十日には、母と姪と三人で聽きに行つたのであるが、その時は越路は病氣で出無いで、さの太夫の『松王屋敷』と路太夫の『帶屋』を聽いたのみであつた。

三

同じ年の十月十七日に、若竹で又越路を聽いた。此時は僕一人であつた。遲かつたと見えて、路太夫の『沼津』と越路の『十種香』だけを聽いたことしきや、日記には書いて無い。

同月十九日には、比佐といふ學友と一緒に、越路の『柳』を聽いた。此時のさの太夫の出し物は『玉三』であつたが、僕等は、さの太夫の大きい語り口にひどく感服して、此太夫の前途の多望

なることを語り合つた。越路の『柳』の面白さは前半にあつた。一體三味線のよく解からない我等素人には、『柳』は柳の精の消える所まで、澤山である。

十一月二十三日、芝の玉の井で、越路の『堀川』を聽いた。例の『鳥邊山』が何とも云ひやうの無い程心持の好かつたことを記憶して居る。

翌二十四日、玉の井で、さの太夫の『加賀見山－尾上部屋』と、路太夫の『引窓』と、越路の『太十』とを聽いた。この時は、此佐と竹本東佐（當時は彌升）と三人であつた。東佐は路太夫を激賞した。東佐のお蔭で、『太十』の終りに近い部分の三味線の面白さを知ることが出來た。

十二月十九日、越路の『合法』を宮松で聽いた。路太夫の語り物は『重の井子別』であつたが、此は餘り好く無かつたやうに思はれた。

僕の東京で越路を聽いたのはそれだけであるのだが、これが越路を聽いた最後では無い。

二十四年の十二月に、僕は高知市の共立學校といふのへ、英語の教師に雇はれて行つたのだが、その途中、神戸で船待ちの間、同月の十二日に、神戸の大黒座で越路一座を聽いた。その時は、さの太夫が八兵衛の三味線で『志渡寺』、路太夫が同じく三味線は八兵衛で『河庄』、呂太夫が『吃

又』、越路が『太十』であつた。呂太夫は如何にも體格の魁偉な異相の男であつた。そして、語り口が如何にも闊達であつたやうに覺えて居る。

四

越路を聽いたのは唯だそれだけである。越路はからだの小さい、顔の小さい、如何にも濃い地藏眉の色の赭黒い男であつた。語り出す前に、本を兩手で顔の前で捧げて、長い間居るのであつたが、或る人が丁度一分間さうして居るのだと云つたことがあるので、僕も一度時計を見て試めしたが、確に一分間であつた。

名人長門太夫が初代の綱太夫に三年間一段しきや教へ無かつたといふ傳說があるのだが、越路も師匠が一年間一段しきや教へ無かつた。越路の家の者が一年間一つ物ばかりでは心細い、何か他のものを教へて呉れと、師匠に申込んだ。師匠は言下に『それでも、當人が不平を云はずにやつて居るから宜いでは無いか。先づさういふことは一切わしにまかして置いて呉れ』と云つたといふ話がある。

越路の義太夫は邪路に入つたものであるとか、所謂るケレンであるとかいふ評は、黒人のなかに大分唱へられて居た。けれども、聲の美くしかつたこと、節の細かつたことは、何人も爭ひ得無いところであつたらう。その點では越路時代の攝津大掾は不世出の人であつたことは、疑ひが無い。

俳優、音樂家等は、刹那のヒーロォである。その人衰ると共に、その人逝くと共に、その天才の技能もまた永久に消え去つてしまふのは、憾みに堪えざることである。

夏目漱石君が或る時次のやうな話をしたことがある。

或日、夏目君が兄さんから拜領の外套を着て、若竹へ越路を聽きに行つて居ると、傍に安坐をかいて居るへんな男が、夏目君に『今日は休みか』ときいた。夏目君は、學校のことだと思つたので、『今日は休みだ』と答へた。すると、その男は夏目君にいろ／＼話しかけたが、だん／＼話が喰ひちがつて來るので、夏目君もこれは少しへんだなと思つて居るうちに、到頭先方から『だつて、おめえ、造兵ぢやァねえか』と云つた。

夏目君は砲兵工廠の職工と間違られたのだ。

あゝ、その夏目君も今は故人で、その一週忌が近々に來るのである。

僕が一緒に趣路を聽いた比佐道太郎は、明治三十六年に磐城の小名濱でなくなつた。そのわすれがたみの男の子は、もう高等學校の試驗を受け終つた位の年になつて居やうかと思はれる。

その時分の學友で亡くなつたものは、もう十指にも餘るであらう。

夜は更け行くまゝに、雨の音はいやさびしく聞えて來る。人もなつかしい、事もなつかしい。

鬢に數莖の霜の色しるき僕に取つては、今宵の雨は消え行く過去を低調に弔ふ輓歌のやうな心持がする。

紅塵居漫筆

傳聞程當にならぬものは無い。或る噂が傳はつて行くに從つて、傳へる人がその噂を聞いた時の心持、又他へ自らその噂を傳へる時の心持、さういふものに依つて原話が段々と變化され――多くの場合誇張されて――傳へられることになるものである。即ち、謂はゞ、傳へる人々の創作力が原話に對して何分かの程度に於て働く譯になるものである。

吾々は、他人の話をばさう深く注意して聞くものでは無い。大抵の浮世話、噂話などは、吾々は宜い加減に調子を合せて聞いて居るものである。で、その後で、その時聞いた話を他の人にする場合には、その場合々々の興に乘り方次第で、その話をば話者のその場合に於ける記憶なり感情なりで取り整へて話すものである。

何人でも、自分の智識なり、感情なり、情調なりを土臺にして、他人の話を聞くといふ傾向を

免がれ無いものである。要するに、謂はゞ幾分かの先入主になるものがあつて、それで作られて居る心の畑の上へ、他人の話といふ種子を受け取つて、そこから生ひ育つて行つたものを、他へ傳へるといふやうな譯になるのである。で、話を受け取る心の畑次第で原話がさまぐ〵に變形されて傳へられるのである。他人の話すことを、それが特殊な專門的な事柄に關する話で無い以上は――その通りに聞いてそれをその儘に傳へること位何でも無いことのやうに思はれるのであるが、それが實際は甚だ六づかしい事であるのだ。虛心で他人の話を聞けば宜からうといふ人があるかも知れぬが、さういふ場合の虛心といふのは、その話を正しく聞くのに邪魔になる感情とか情調とかいふものを心の裡から追ひ出してしまつて、その話を正確に聞きとるに必要な智識、感情等を善く働かすといふことを云ふのである。その話を聞くに邪魔になるものを心の裡から排除したことだけで云へば、聽者は虛心と云へるであらうが、話を正しく聞くのに必要なものを善く働かす方から云へば、聽者の心は大に有心で無ければならぬ譯になる。

そのカネ合ひが中々六づかしいものである。新聞若くは、雜誌の記者に訪問されて、それに所謂る談話をすれば、その談話は大抵の場合その話した當人の意志には反したものとなつて、紙上

に現れる。話した當人が話の重要な部分――即ち話の要め――だと思つて居る點は大抵無くなるか、さも無くば、極めて拙く改作されて、紙上に現れるものである。

これなら、一何々讀んで聞すやうに口で云つて、書き取らしたら何うかといふと、それでも矢張その書き取つたものを一應閲讀してやら無ければ駄目である。例へば、膀石病といへば淡喉病と書くし、羅馬正教と云へば羅馬政廳と書くし、コリジユウムの遺趾と云へば、コリジユウムの臀部と書くといふ類で、少し込み入つたことになると、飛んでも無く間違つてしまふのだ。

速記は何うかといふと、これも、前陳の筆記と同なじ理由で、閲讀をし無ければ、まるで駄目である。

さういふ風であるから、人に關する逸話などには、隨分多く誤り傳へられて居るものがあるだらうと思はれる。今こゝに、小生自身に關する逸話を載せて、その實話と對照させて見よう。

『年中刑事に後を附けられて居る社會主義者の大杉榮「何に俺が家を明ければ、留守は刑事が見て呉れるし、俺が外へ出れば、俺の身邊は刑事が護衛して呉れるし、決句駕籠に乘つた氣持さ」などゝ痩我慢は言つて居るものゝ、流石に隨分五月蠅がる時もあるらしい、先達ても馬場

孤蝶と一緒に、横須賀へ女義の東佐を聽きに行つた時も、二人が好い氣持になつて聞いて居ると、其處へ刑事が張り込んだことを發見し、大杉は孤蝶を誘つて飛出したと云ふ話である、處が夫とは氣の付かぬ刑事、樂屋の中へ潜り込み其處に遊んで居た子供に蜜柑などを與へ乍ら「此んな男が來て居無いか」と、徐々詮議に掛ると、無邪氣な子供は「一體伯父さんの尋ねる人は、何んな身の上の人なの」と訊く、刑事も此奇問には當惑して、「左樣さね、梅川忠兵衞のやうな男さ」は、振つて居る。』

これは『文壇失敗談』といふ小册子に載つて居る事柄である。此の話は小生が誰にか話した覺があるのだから、それが如上の話に造くり上げられたのであらうと思ふ。大杉氏に斯ういふ事柄のあつたのは、一昨年の暮から昨年の春に至るまでの間のことであらうと思ふ。從つて、大杉氏が堀安子君と夫婦であつた時分のことであつて、夫婦で逗子に避寒して居た間の事件である。竹本東佐を聽きに行つたのは、大杉氏と僕とでは無くして、大杉氏と堀保子君とであつたのだ。

竹本東佐は、小生の極く古い知人である。大杉氏夫婦も東佐を善く知つて居るのである。大杉夫婦が前に云つた通り、逗子に避寒して居るうちに、東佐が横須賀の某亭へ出ることになつたの

で、或る夜大杉氏は夫婦で東佐を聽きに行つた。（小生は同行したのでは無い）。刑事は前から大杉氏夫婦に尾行して居り、夫婦も無論尾行されて居ることは承知であつたのである。大杉氏夫婦は樂屋へ入つて行つて、東佐に逢ひ、樂屋で聽いて居た。所が、樂屋の入り口が別になつて居たのであるのか、刑事（これは二人位であつたらうと想像される）は、大杉氏夫婦の歸るのを見失つてはならぬと思つたものと見えて、樂屋のこども（これは小兒では無くして、前語りをやる若い娘）を樂屋口まで呼び出して、蜜柑か何かやつて機嫌を取つて置いて、彼のお客が歸る時には是非一寸と知らして呉れと賴んだ。娘は、一體彼の人たちは何ういふ人たちなのかと、刑事に尋ねた。すると、刑事は笑つて、まづ梅川忠兵衞さと云つた。娘たちは、夫では彼の人たちは今にきつと縛られて連て行かれるに違ひ無い、その樣子は何ういふ風だらうといふやうな風に、太く好奇心を以て待つて居たが、一向に縛られさうも無いので、娘たちは待ちあぐねて、東佐に、その話をした。すると、東佐は大笑ひをしながら、大杉氏夫婦は縛られるやうな人では無いことを、娘たちに說明して聞かした。娘たちは、『では、お師匠さん、縛られるのぢやァ無いの、では詰まら無いわねえ』と、相顧みて云つた。

小生が大杉氏から聽いたのは大凡この通りである。刑事は相手が義太夫語りの若い娘であるので、梅川忠兵衛と云つたのであらうし、又それが此の話の骨子になつて居るのであるから、此の梅川忠兵衛といふ言葉は、何うしても男と女とをいふので無ければならないのである。『失敗談』のやうに、大杉氏と小生即ち男二人を指して云つたとしては、無意味な言葉になるのである。

以上の話は、所謂る危險人物には何ういふ風に刑事が尾行するものであるか、寄席の樂屋とは何ういふ風なものであるか、東佐と大杉氏夫婦の關係は何ういふものであるかといふやうな、さまざまな豫備知識が無いと、十分には解かり兼ねることであるので、或は『失敗談』にあるやうに間違う方が當然のことであるかも知れ無い。

怪力亂神

一

聖人は怪力亂神を語らずといふのであるが、吾々小人に取つては、取り留めの無いやうなことを語るのが、現實の苦痛をば脫却する最も手近な安直な方法である。

相變らず有り觸れた本から、面白さうな話を引いて見る。

古來怪力の人の傳說は隨分多いのであるが、戸川肥後守安達の家臣寺尾作左衞門は其比稀なる大力であつた。

或る年、江戸へ行く旅中に、作左衞門の僕と馬子とが口論をしだし、僕が馬子を毆り倒したので、その邊の馬子どもが百人ばかり聚つて、棒を振り廻し、石瓦を投げ、寺尾主從を取り卷いて罵り騒いだ。作左衞門は自分の持槍の長さ二間あまり、周七寸程あるのを、手に取つたが、身の

方で薙いで、若し馬子に傷を負はしでもしては、後が面倒だと思つたので、身の方を隻手に握つて、柄の方で馬子どもの脚を拂つた。

すると、一拂ひに十人ばかりづゝ打ち僵されるので、馬子どもはその勢に恐をなして、皆逃げ散つてしまつた。

此の作左衞門は、平常戯むれに拳を握り腕をさし出すと力瘤が出、筋はまるで篠を束ねたやうになるのであつたが、その時細き裏刺の磨ぎすましたのをば腕の上二尺位のところから落しかけても跳ね反つて、腕には刺ら無いのであつた。

又緣の端に踵をかけて立つて居るところをば人が走りかゝつて、背中を撞いても、宛然磐石を立てたるが如くで、作左衞門の體は少しも動か無かつた。

作左衞門には七兵衞といふ弟があつたが、五斗入の俵一つを口に銜へ、兩の脇に一俵づゝ脇挾み、尙二俵をば足に穿いて、それで歩くのを見ると、少しも力を入れて居るやうには見えずに、如何にも易々と歩るいて居るのであつた。作左衞門の力は此の七兵衞の力の倍であつたといふのである。

二

寺澤志摩守の家中に、遠山六兵衛といふ者があつたが、これは騎士二十人の頭で、祿千石を領し、近國に聞えた大力であつた。

此の遠山が、周一尺二寸の大竹を兩手で握つて一締め締めるといふと、さしもの大竹が乍ちバリバリと割れる。それをば半分ばかり割つたところで、それからは雙手で後を皆おし割つてしまつた。

或る時、筑前から反橋といふ相撲の上手が唐津へ來たが、力も強いし、手も善く取つたので、足輕、水手などは云ふに及ばず、若手の士中にも此の反橋に勝ち得た者は一人も無かつた。

此の時、遠山は、自分の組下の馬廻、隣家の人々、身近き者どもを、宅に招請して、相撲を催したが、その時も、反橋は三人抜に度々勝つて、笑ひながら引いて入つた。

所が、反橋にばかりさう勝たれるのは如何にも殘念なことである。反橋は筑前へ歸つて唐津には相撲の取れる者は一人も無いやうに云うかも知れぬ。是非反橋と一番取つて呉れと、座中から

頻りに遠山に所望があつた。

遠山もそれではといふので、場に出て、兩手を擧げて立ち向つて、反橋が潜り入るところを、右の手で反橋の下帶の三結を取り、手をさし延べて振り立てると、反橋の手足更に地に付かず、二振三振して、引擧げて、えいと聲を掛けて投げ付けたが、反橋は宛然蛙を踏み潰したやうな形になつて、鼻血が流れ出て、氣絶してしまつたのを、顏へ水をかけ、氣付藥を與へて、介抱すると、半時ばかりしてやう〳〵蘇生はしたのであるが、左の手が折れ、骨がくひちがつてその後全く不具になつてしまつた。

三

同じ寺澤の家中の千賀五助も大力の聞え高き士であつた。

或る年の正月二日例年の通り志摩守が馬揃を唐津の城下で見物して居られる時に、何うしたことであつたか、人に喰ひ付く馬が轡を脫して、駈けて來た。千賀は之を見て、袴の股立を高く取り馬場の中に走り向つて、片膝を突いて待つて居た。

隼は千貫を見て、眼を光らし、牙を叩いて、跳びかゝるところを、千貫は立ちさまに馬の小頸を抱き、推し伏せて、膝で小頸を敷き、手を擧げて、馬副（馬丁）を招き、馬の口を割つて轡をはませた。

四

美作の大守森内記長繼の士、高木右馬之助は稀か眼の下から胸の毛まで聯つて居て、身長六尺ばかりで、力は五六人力であつた、錢を柱へ當てゝ押すと、柱の中へ入つてしまう。高木はさういふ風に四五文づゝ錢を柱へ押し込むのであつた。

或る時、試めし者を切らうとしたが、刀の目釘の穴が窄くつて、目釘竹は穴一杯になつて入ら無かつた。高木はその目釘竹を取つて目釘穴に當て指でもつて上からぐつと推すといふと、目釘竹の周圍が削つたやうに細つて、目釘穴の裏まで透つた。鐵槌を以つて打つても透るものでは無かるべきを、高木の力質に測り難しと、見る人皆驚嘆したといふのである。

五

大友家の臣原大隅守の話が、一寸と前の遠山六兵衛の話に似たところがある。

原大隅守は豐後の吉野といふところを領し、生得その力常人に勝れて、量り難かつた。

或時肥後國戸口といふところへ、奇代の石火矢五百挺渡來した。所で、その石火矢一挺に人夫數十人かゝつて丹生の城へ運んだのであるが、その體如何にも騷がしかつたので、宗麟は大隅守を呼んで、その石火矢を持つて見ろと云つた。大隅守は畏まつて、座敷を立ち、石火矢の筒先を隻手で引き起し、如何にも輕々と肩に載せ、廣場を七八遍廻つてから、元の如くに置いた。

宗麟は尙も原の力の程を試めして見たく思つて、庭前に大きい水鉢のあつたのを幸ひ、その据りどころが惡いから、直して呉れぬかと原に云つた。原は其儘、袴の裾を高く挾み、兩の手を差伸べて、水鉢を宗麟のいふ通り直したが、鉢の水は一滴も零れず、面色も更らに變ら無かつた。

實に鼎を擧ぐる力とは此の事である。全く我家の寶であると、宗麟は感服した。

『又その頃豐後の府内に勸進角力ありけるに、國中はいふに及ばず、近國に名ある力者共、雲霞

の如く集まりける、又上方より雷、稲妻、大嵐、辻風といふ強力の者下着しける。何れも身長の七尺に余り、筋太く骨あれて、殊に此の道の妙を得たれば、此者共に手合する程の者一人も無かりしかば、相撲は程無く止みてけり』

其處で、その四人の者どもは大に慢心して、吾々は、既に東國、北國を經廻つて此所まで來たのであるが、今までには吾々の片腕にも足る者は無い、して見れば、九州の力者の力も大抵知れたものである。唯一人大友家に勝れた強力の人があるさうだから、丁度序でもあるし、その人の力の程を見やうと云ひ合せて、臼杵へやつて來たが、折好く原大隅守が丹羽島の自邸に居るといふのを聞いたので、使を以つて、面會を請うた。大隅守が快く承諾したので、四人の者は、たとへ鬼神の變化なりとも、吾々が必死に勵むならば、爭でか相撲に負けるものかと、喜び勇み、仲間の者ども以上八人、大刀を横へ、傍若無人の有樣で、大隅守の邸へ押かけて行つた。

原も、是非一番相撲つてみやうとは思つたのであるが、先づ奴等の度膽を拔いた上でといふ考で、相撲どもを座敷へ通し、今一寸と細工を仕かゝつて居るところであるから、少し待つて呉れと云ひながら、鹿の角を取り寄せて、それを手で押し折り、摘み碎きなどしながら、話をした。

相撲どもも、大隅守が鹿の角を砕いたのには眼もかけ無い有様で、大隅守の力量は上方までも聞えて居るのであるから、是非お力の程を拜見し度くて參上したのだと云つた。大隅守は、なかなか評判ほどのことは決してないのであるが、折角の御所望であるから、持つて居るだけの力は見せやうが、それは何ういふ方法にしやうかと、相撲どもに相談した。相撲どもはそれは吾々と相撲の手合せをして呉れと云つた。

大隅守は、それはいと易いことであるが、自分は相撲といふものを取つたことが一度もないのであるから、一體どうするのだかその方法を話して聞かして呉れと云つた。相撲どもは、斯う云ふ風にするのだと、その方法を教へた。

大隅守はそれでは今支度をするからといつて、一間へ引つ込んだが、暫すると、侍どもが、周圍二尺ばかりもあらうと思はれるやうな大竹を五六本庭上へ擔ぎ込んだ。大隅守が上方の相撲と手合をするといふ取り沙汰が廣がつたので、城下の者どもが大勢見物にと集まつた。

大隅守は、其所へ出て來て、自分は相撲といふものは取るのは生れて始めてであるが、此の竹で土俵とかいふものゝ形を拵へやうと云つて、その大竹を手に取つて、一本づゝ、末の方から揉

紐と綱の端を解き、本と末とを一つに捻り合はせ、大きい輪を拵らへ、此輪より外へ足を蹈み出した方を負けとすると定めると云つた。

雷、注連を始め相撲どもは、此の有樣を見て大に驚き、吾々どもは、日本國中都鄙遠近至らぬ隈も無い位、方々修行して廻り、相撲道に於ては恐らく大力の業を取つた者どもであるが、大隅守樣の最前よりの御擧動は、到底人間業とは思はれない位である。これでは、中々吾々が御手合をするまでも無いことである。もうこれで結構だから御免を蒙ると云つて、恐れ入つてしまつた。

大隅守は大に笑つて、庭上より座敷へ上つたがその時、武宮武藏守といふ天下稀なる大男だといはれて居た大友家一番の大兵肥滿の武士が見物に來て居た。武藏守は身の長八尺に餘つた男であつた。所で、此の武藏守と大隅守とが座席の讓り合ひで、間取つて居るうちに、大隅守は兩手を差し出し、武藏守を掌の內に掬ひ上げ、まるで小兒を載せたるが如く、上座の方へ直したので、それも一座の一興になつた。

六

「抑大隅守が力量付きたる謂を尋ぬるに、或時生善寺といへる寺に行きて、日暮れて歸りけるに一村繁りたる藪の陰、さゞれ水の流潺々として、月さへいとゞ冥かりしに、とある板橋の向を見れば、其の様怪しき女の、懐に子を抱きてぞ立休らひける。大隅元來不敵なる者なりしかば、馬を乘り放ち、唯一人橋板を荒らかに踐み鳴らし、既に間近く歩み寄りし時、彼女嘶嗄れたる聲音にて、此の子を少しの間抱き給ひてんかと云ひければ、大隅仔細あらじとて、片手には刀の柄を握り、左の手にて嬰子を請取りけるに、重きこと磐石の如し、須臾くありて女立ち歸り、あら嬉しや、此方へ賜はれとて、其子を抱き取り、和殿何にても心中の望はなきかといふ、大隅答へて、我武門に志あれば、天下に雙なき力をといひければ、其時女米と思しき物を三粒、是れを食せられよと與へける。

大隅推し戴きて食しける。女又此の外に猶もあるやと問へば、大隅守、さればこそ、我屋敷平生水渇の苦みありと申さるゝ。女打ちうなづき、忽然として姿を見失ひければ、月光晝の如く輝

して林木影明なり。

大隅奇異の思をなし、馬引き寄せ、打ち乘りて歸りける。夫より未濟の患なく、力量心の儘なることそ不思議なれ』

此の末の話は講釋にはよく出るのであるが、僕は『四國軍記』――本名土佐軍記――の中から引いたのである。

大力

一

僕の少さい時分には、父や兄から、備後の尾の道の何がし寺の和尚が恐しい強力であつたといふ話をよく聞いたものであつた。

拳固を柱に當ててグツと推すと、木が拳固なりにメリ込んでしまつて、其所へ丁度拳が入つて

しまうやうになつたとか、或る侍が尋ねて行くと、和尙は可なり大振りの銅の火鉢をさも輕るさうに雙手で持つて出て來た。和尙が寸時中座した間に、その侍はその火鉢は何れ程の重量の物だらうかと思つて、持ち上げてみようとしたが、立ち上がつて諸手をかけて、必死の力を揮つても、その火鉢は一寸も動かなかつたとか、又他の或る侍が和尙の晩年に尋ねて行くと、私ももう年を取りましたから、力業はできません、責めてこれでも記念にお持ち歸りを願ひますと云つて、鐵の火箸を二本合せて、繩の如く綯り合せて、それを吳れたとかいふやうな話であつたことを覺えて居る。

僧には時々大力の者があると見えて、『武將感狀記』にも、左の如き强力の僧の話がある。松平讃岐守賴重の下に、光顯寺といふ眞言の僧があつた。これは日本無雙の大力であつた。嘗て、修業の爲めに東國へ赴く時、行手を急ぐが爲めに、深夜に旅宿を出て、人家を離れたところへ行きかゝると、道の傍に崛强の男が四五人立並んで何か囁いてゐる聲が聞えた。その年は饑饉であつたので、定めし追剝なのであらうとは思つたものゝ、何うしても通らなければならない道であるのだから、用心しながらその男どもの傍を通らうとした。

すると、案の定、その男どもは、もし〳〵和尚さん、路銀を頂き度いもんですねと呼はりなから、光顯寺の前後に立つて遮ぎつた。

光顯寺は、その男どもを引つ掴んで、人礫に打つて投げ殺すのは何でも無いとは思つたものの、それでは出家としての慈心に於ては缺けたことになると思ひ返し、これは何でも驚かして追ひ拂つてしまうのが一番好いと思案して、並木の松の樹圍一尺程なもの丶傍へ走りかゝるが早いか、えいと聲を掛けて苦もなく根引にすると、その邊一間ばかり地が裂けて、樹が根ごと拔け出てしまつた。光顯寺はその松の樹を手に提げて、烈しく振り廻すと、枝葉が大に鳴つて、まるで大風が松を吹く時のやうであつた。それで、汝等盜賊ども片つ端から微塵にして呉れるぞと怒鳴り付けるといふと、追剝どもは、これはよも人間ではあるまい、天狗の所業に違ひ無いといふので皆散り〴〵に逃げ去つてしまつた。

光顯寺は又或る時馬に乘つて行きながら、道端の七寸周圍程の竹を隻手で根こぎにしたが、それでも馬の足並は常と少しも違はず、少許も力を出した樣子は見え無かつた。

或る日、或る禪寺で珍客を迎へるといふので、新に石の手水鉢を据たのであるが、光顯寺は其

處へ見廻りに來て、それを見て、此の手水鉢は裏表になつて居る、これは可笑しいから、据直したら宜しからうと云つたけれども、最早亭午の時分であつて、三十人して終日かゝつてやつと据た位の巨石であるものを、今更何うにも爲やうは無い、何うしたものだらうと、人々が當惑して居ると、光顯寺は、それでは愚僧が据直して進ぜやうと云つて、黑衣の上に襷を掛け、庭へ下りて石に手を添へ、さしもの大手水鉢をそろりと推し廻したが、始め三十人かゝつて据た時より倉に自由に見え、中に八分目程入てあつた水が一滴も滾れなかつた。手水鉢はそれで奇麗に向が直つた。

光顯寺が座に直るといふと、禪僧は、さて〳〵、聞きしよりも今現在に見ては尙一層驚かるゝお力である。さりながら、さういふお力をお見せなされると、諸大名から祿千石二千石を與へるから還俗せよなどゝ申して來だして、結局は佛道の障碍になるであらう。今手水鉢を据直さうと云はれてからは、顏色が太くお變りなされて、平常の光顯寺さんの面相では無いやうに見えた。全く力を出されやうと思はるゝ氣勢は實に凄まじい體であつた。是又佛心に背いたことである。一たび出家となつた以上は、力などは全く用の無いものだ。今より後は力業は止められた方が宜

からうでは無いかと云つた。
　光顯寺も豁然として悟つて、それより一生力を出すやうなことはし無かつた。

二

　サキソニイの選擧侯で、波蘭土王であつたオーグスト二世の大力物語を何かで讀んだことがある。
　オーグスト王が、或る日遠乘に出ると、馬の蹄鐵が落ちた。で、村の鍛冶屋へ行つて、蹄鐵を打つことを命じたが、鍛冶屋が打つ積りで、一つ持つて來ると、王はその蹄鐵は强いか何うか前以て試めして置かなければならぬと云ひながら、それを兩手に持つが早いか、ボキリと二つに折つてしまつて、
『イヤ、これは駄目だ』
　と、云つた。それからは、持つて來るのも、持つて來るのも、片つ端から、捻ぢ折つてしまつた。

鍛冶屋はそれを見て、じッと考へ込んでしまひ、村人は驚き入つて、眼を圓くして、王の顏ばかり見て居た。

そのうちに、王も到頭やつと十分丈夫な蹄鐵にぶつかつたといふやうな顏をして、最後の蹄鐵は折らずに通過させた。

蹄鐵が馬に打たれてしまうと、王は鍛冶屋に代としてテエアラ貨を與へた。

鍛冶屋はそれを指先で撮んで、ぐつと推し曲げて、

『イヤ、これは駄目だ』

と、云つた。で、王が與へるテエラア貨を續けざまに皆指先で推し曲げてしまつた。

『この金貨は何うだこれなら少し丈夫だらう』

王はルイドル貨を鍛冶屋に渡した。鍛冶屋もそれで滿足した。

王は、自分に劣らぬ大力の男を見つけたので甚く喜んだ。

三

正木大膳は『八犬傳』の中では大した役廻を當てられて居ないが、『武將感狀記』の中では、古今の大力の中に數へられて居る。

里見家の家老正木大膳は、里見家が亡びてから、因幡の鳥取へやられた。預人であつたから、國主少將光政は大膳を厚遇した。

大膳は身幹長大、壯力その比等倫すべきもの無く、昔ならば畠山重忠などがさうであつたらうかなどゝ噂せられる程の男であつた。

鳥取にあつて、退屈の餘り、慰みに、新刄の眉光刀を鍛たはせたが、刄の長さ三尺許、幅廣く、重ね厚く、唯持ち上げるだけでも並の人には容易で無いものであつた。ところが、大膳はその眉光刀の石突を右の指三本だけで持つて、物を斬る眞似して、前後左右へ五十も百も振るのであつたが、まるで細竹でも振るかのやうに如何にも輕るさうに見えた。

人がその力が何れ程あるのか、何か力試めしをやつて見せて吳れぬかと云つても、大膳は、楚囚の如き今の身にあつては、そんな事をすべきではないと思つたからであつたらうが、決して人前で力業などはしなかつた。

房州に居た時分、六月頃に、壯年の朋友を誘つて納涼の爲めに河邊を逍遙したことがあつたが、暮方になると、戲れに乳だけほどの早瀬に下り立ち、あたりの民家から板戸を一枚取り寄せて、水に逆つてそれを推し上げると、板戸は半ばから折れてしまつたので、これでは水勢に堪へないからといふので、今度は板戸を三枚重ねて、それで川下から推し上つて行くと、水波は左右に分れて川上へ行くこと一二町であつた。見る者舌を卷いて驚嘆した。

四

肥前龍造寺の住人勝山左近も又その力九國に雙ぶ者無しと云はれた程の大力であつた。常に鐵杖を突いて歩いたが、家へ入る時は、厨のたゝきへ鐵杖をゆり立ると、土に入ること二尺ばかりで、二三十人してもそれを引き拔くことができなかつた。左近は外へ出る時は、それを隻手で、足をも止めずに、すつと引き拔いて行くのであつた。

又四尺、柄一丈の薙刀を傍に置き、燈臺の上下二箇所に火をともし、指二本で薙刀の石突を持つて、下の燈火をば切尖にかけ、上の燈火と一緒にして挑げることを慰みにして居た。

その頃、國中に隱れ無き口の强い馬があつて、左近が或る時それを乘つて居るうちに、墓地に驅け出した。引いて留めやうとしたが、馬は口が裂け血が流れ出ても留まらないで、城門を驅け入らうとする。左近は自分の額が上の横木に當つては、大變だと思つたので、手綱を放して、兩手を潜りの横木にかけ、股で以つて馬を一締めしめると、馬は四足を縮めて締め揚げられ、まるで物を吊つたやうな形になつた。

大蛇

一

蛇は、西洋では、人間の始祖アダムの妻エバを誘惑して、人間墮落の基を開いたといふので、聖書の中での大達者になつて居るのであるが、その後の傳說では蛇は更に振つて居無い。唯邪智深い人間の喩へに引かゝる位なことで、物語の中では更に大した役割を勤めて居無い。

哥薩克の童話の中には神通力のあるやうな蛇が出て來るところがあつたやうに思ふのだが、今生憎く本を借し無くしてしまつたので、確なことは何もいふことができ無い。露西亞、セルヴィア等の童話の中にはよくヅラゴン（龍）が出て來るのであるが、これも唯の妖怪といふ意味のものに取れて、別段蛇體のもので無ければならんといふ心持のするものでは無い。

さうすると、蛇、うはばみ、おろち等に關する傳說は、日本に一番多いやうである。そして、日本のものが一番趣味に富んで居るやうに思はれる。

机邊にある書中から蛇に關する傳說を一つ二つ拔いてみる。

二

『谷干城遺稿』の中に左の如き物語がある。

『先人の昔話を思ひ出し、左に記す。昔日高岡郡上の加江といふ浦に、喜作といふ山獵師あり、頗る强氣の男なり、夫婦暮しなり、晝夜を別たず深山に分け入、猪鹿を獲て生活を爲す、或時山

中にて大蛇に遇ふ、喜作銃に二つ丸を込めて忽ち撃倒す、其大きさ大松の横たはれるが如し、歸りて妻に此事を告ぐ、妻亦女丈夫なり、曰く、聞く大蛇は恩怨深きものなり、今夜或は來り讐せん、油斷すべからず、喜作例の如く銃に二つ玉を込め待ち居たるに、夜半に至りすさまじき音して屋根の上に何か落ちかゝれり、喜作窃に戸外に出て屋根の上を窺へば、圍一抱へもあるべき大蛇鎌首を上げ將に喜作を呑んとす、喜作其口中をねらひてドント放つ、何かは以てたまるべき、蛇は家を打越し下の谷へ落ち死したり、此前日殺したる蛇の友なりし也、隣人等喜作に勸め、死體は燒捨て、骨を積み弔ふべしと云ふも、喜作は物ともせず、打棄置きて顧みず、其蛇腐敗し骨となりしを一節取つて火入れにせりと云ふ、其骨一尺五寸廻りありと云ふ、喜作後ち人と喧嘩して殺害し、歸り、其由を妻に告ぐ、妻曰く、人を殺さば死罪は當然なり、御上の御厄介とならず速に自殺すべしと勸むれば、喜作最なりと同心し、正に切腹せんとす、然るに、人を切りし時力過ぎて切先を石に切付鋒を折たり、研石にて其切先を研ぎ、漸くにして切腹して死したりと云ふ、其勇氣可驚なり、其後は妻は寡居して世を送れり、或時强盜押入、寡婦を强迫し、飯を炊か令めんとす、寡婦は少しも臆せず、今に炊きて喰すべしと云ひて、押入れより例の銃砲を取り出

して、火繩に火を付け、さあいくらでもくらへと云ひ樣、火蓋を切つて、盜賊に差付けたれば、盜は驚き恐れ、ほう／＼の體にて逃げ去りたりといふ、喜作が如き强勇あり、而して又如此女傑あり、蛇喜作に酬る能はず、喜作遂に自ら酬ゆ、勇の過度なるものなり。』

三

これも極く古い話であるが、筑前の博多の或る商家に十四五の美くしい娘があつたが、何時とも無く、二尺ばかりの蛇が來て、その娘の傍を離れ無くなつた。その蛇を殺してそれを捨てにやると、その捨てに行つた者が歸つて來ないうちに、又何處からか同じやうな蛇がやつて來て、娘の傍を離れずに居る。

娘が坐つて居る時には、蛇はその前で輪を作つて、娘の方を見て、舌を出して、動かずに居る。娘が立つて行くと、蛇は一尺ばかり後から這つて附いて行く。娘が早く歩けば、蛇も急いで這ひ、娘がゆる／＼と歩けば蛇もゆる／＼と這つて行くのであつた。兩親はそれを甚く悲しむのであつたが、何うにもしやうが無かつたし、娘もそれを苦しんで、段々顏が蒼ざめて瘦せて行つ

た。十七八になつても蛇憑きの娘といふので何處へも嫁に行けやうが無かつた。

その時、高僧道元和尚が入唐の途すがら博多で風待ちをして居た。その商家の者たちは、それが尊い僧だと聞いたので、その旅宿へ尋ねて行つて娘に蛇が憑いて居る事を話し、何うか一遍御覧の上、法力を以つて蛇を退ぞける方法もあらば、それを施して頂き度いと、只管頼んだ。

道元は、法力を以つて蛇を退けることができるといふ見込みはないが、何さま珍らしいことであるのだから、一遍見て置き度いと思ふが、唯見せるだけ見せるか、何うだと、商家の者に云つい。

いや、それは元より願つてもの事だと云つて、娘をば母がつれて、和尚の宿へ行つた。和尚は二人を自分の座敷へ呼び入れて見ると、成る程聞きしに違はず、蛇がついて來て居る。

道元はそれをつく〴〵見て居たが、やがて『もう長く居られるには及ばない、が、歸る時には、拙僧の前の此の梱を越へて歸りなさい、これには少し理由があるのだから』と云つた。母は『畏まりました』と云つて、先に立つて梱を越すと、娘も續いて越す。すると、蛇もその後から隨いて行く。

で、蛇が棚を越す時に、道元は扇の要でもつて蛇の尾をきゆつと力強く抑へ付けたので、蛇は首を戻して、尾を押へて居る要に喰ひ付かうとするところを、道元は黒衣の下から剃刀を取り出して、蛇の首を斬つてしまつた。母も娘もそれを見て甚く驚いたが、道元は、もう二度　蛇の來る氣遣もはない、安心しろと云つた。

それから後は、道元の云つた通り。蛇は來なくなつた。これは、蛇の執念を別な物に移して、娘に憑く心を轉じさせてしまつたからだといふのであつた。

四

「河波の三好、河波、土佐、淡路三州を切取、讃岐は已に旗下に屬す、其武威五畿に振へり、梶原、香、舟越、安宅皆其同姓なり、舟越は三好が三男にて、淡路の周本に在城して、年々播磨、紀伊と相戰ふ、播磨より福浦には三里、紀伊より牟島には九里、海上近ければ、漕渡りて淡路の地を侵す、舟越五郎左衛門能く拒ぎて、度々播磨、紀伊の兵を挫く、ある時紀伊より牟島のわき大石が鼻といふ所に兵船をよせて戰ふ、時に舟越强弓ならばわたり四寸八分の大雁股を以て、一陣

陣に進みたる敵の冑の吹返のきはより眉を掛けて鼻を横に射切て、鼻は海上に隕、胴は舟中に倒る。それより矢つぎ早に放ちければ、敵弓一張に射立られて、遂に引退く、舟越が勇力にて遂に侵掠られず。』

所が、その頃は、三年續けて大雨洪水があつた後に必ず旱魃があつて、國疲れ民饑るといふ有様で、大いに困つたのであるが、それはしどりの池に住む大蛇のわざだといふのであつた。

舟越は『何千といふ兵をさへ一人で防いだ自分が、僅一匹の蛇の爲めに苦しめられるといふのは、如何にも殘念なことである』と、云つて、弓矢を持つてしどりの池へ行つて、池の汀に馬を乘り止めて、『此の池に大蛇が住むと聞いたが、三年の洪水、大旱も皆貴様が所業だといふことだ、さア今形を顯はして出て來い』と呼はつた。舟越が大蛇を退治に出たと聞いて、その將の納氏、加治氏等も後から驅け付けて、池の汀で舟越と一緒になつた。

少時すると、池水の上へ一尺ばかりの小さい蛇が浮び出た。舟越はそれを見ると『そんな姿で此の舟越に見えんとするはこと可笑しや、速にまことの姿を顯はせ』と、叱咤した。蛇はその言葉と共に水底に沈んでしまつたと見るうちに、乍ち、急雨一過して、風が烈しく吹いて來て、浪

逆捲いて、非常に大きい蛇が池の上に現はれて、箕を二つ合せたやうな大きい口から、火焔かと見えるやうな舌を吐いて、舟越へと向つて來た。舟越は常に好むところの大雁股の矢をその蛇の口へ射込んだが、蛇は倒さまに引つくり返つたと見えたが、又直ぐ起き直つて、舟越を追つかけた。

舟越は納、加治と共に馬に鞭つて城の方へと引返した。大蛇は尙之を追つ駈ける。草木の上を足る音が疾風の如くであつた。

しどりが池から周本の城まで、一里半程であつたが、その半路のところにあまと云ふ所があつて其所に大楠の森があつた。舟越等がその森の陰へ入ると、大蛇は舟越等を見失つて、森の梢に上つて見下ろすところを、舟越は振り返つて、二の矢をば射たが、その矢が大蛇の喉に中つたので、大蛇はそれで弱つて、追ふ事がさう急でなくなつた。

舟越は馬を乘り仆さぬ程に、馬の足を加減して城の方へと引いて行くと、大蛇もまたそれに隨つて、追つてくる。城へ着くと、門を開かせて馬を乘り入れて、直ぐ城門を閉ぢたのであるが、大蛇は直ぐ續いて城門を上り踰へようとした。其所をば、納は持つて居た眉尖刀で大蛇の首を斬

り落とした。大蛇はその時息を吹つかけたが、それが納の身體に當ると、まるで熱湯をあびせかけられたやうな心持がした。納も加治もさういふ毒氣に觸れて、甚だ煩熱して、その日のうちに死んでしまつた。それから、門番の足輕三人と、舟越、納、加治の乘つて居た馬三頭とは、立ちどころに斃れ死んだ。舟越も三四日過ぎて、全身の皮膚が赤く爛れて、死んでしまつた。

五

上州館林の士に竹尾隼人といふものがあつたが、小鳥狩が好きであつて、講武の暇ある時は、よく小銃を携さへて、野山を狩り歩いた。

或る日、山の中で鳩を見たので、小銃を執つて、打つたところが、鳩は藪の中へ逃げ込んでしまつた。隼人は續いてそれを追つて行つて、葛蔓のからんで居る中を推し分けて、あちらこちらと鳩をさがして居たのであるが、そのうちに、隼人の腹に蔓がからみ付いたと見えて、段々に引き締められるやうな心持がしだした。

不思議に思つて、よく〳〵見ると、蔓だと思つたのは可なり大きい蛇であつて、それが隼人の

腹を卷いて居て、もう三匝程卷いたところであつて、その頭は傍の松の大木の枝に打ちかけてあつて、隼人をだん〳〵と引寄せようとして居るのであつた。

隼人が振り仰ぐと、大蛇は息を吹つ掛け吹つ掛け、唯一呑みにしようとたけるのであつた。隼人は腰の刀を探ぐつたが、何時か拔け落ちてしまつて居て、鞘ばかりであつた。何うにもし方がないので、腕を伸ばして、大蛇の喉と思はれるところを松の幹へ押し付けて、それにわんぐり喰ひ付いて喉の鱗を喰ひ破り、三口四口に及ぶといふと、さしも大きい蛇も、急所の疵には弱つたものと見えて、隼人の腹を締める力は餘程緩るんで來た。隼人はます〳〵力を極めて蛇の喉を嚙んで、遂に喉を喰破つてしまつた。

血が顔に濺ぐのを厭はずに、喉の肉をぶつりぶつりと喰ひ切つて捨てゝ居るうちに、蛇はいよ〳〵弱つて樹から落ちてしまひ、隼人も安心すると共に、傍に倒れて氣絶してしまつた。

隼人の家來は、方々へ散々になつて、主人の行衛を探して居たのであつたが、到頭隼人の倒れて居るところを尋ね當てゝ、その體を見て大いに驚き、隼人を扶けて歸つて、さま〴〵に介抱した。隼人は五六日經つと、すつかり心持が好くなつて、元氣ます〳〵盛であつたと傳へられて居る。

六

元文元年の春のことであつたが、安藝國佐東郡八木村の内阿生山の中迫といふ處に大蛇が現はれて、往來の人を惱ました。

『その形狀を聞くに、太さは戸口をも呑つべく、長さは八峽八谷の間に蔓延るべし、松柏背上に生て、眼光日月を並懸たり、舌を掉ば紅焔を瀰し、身を躍せば白花を播す』といふ程のものだといふのであつた。

八木の城主、香川左衞門尉光景は、その由を聞いて『我が領内ではあるし、殊に城の近邊にさういふ者が出ては、人民を惱ますといふのは、甚だ怪しからん、急ぎ退治しなければならん』と云つて家子郎黨を召し集めて、評議を開いた。

所で、光景の一門に香川左衞門太夫勝雄といふ若者があつた。その時年は十八歳で、身の長六尺八分、骨太く眼逆しまに裂け、隆準く口廣く、頰髭荒々と生ひ、腕に力瘤累々と湧き、十五人が力を蓄へて居たのであるが、伊勢參宮をした歸りがけに、大蛇の現はれる話を聞いて、衆々、

人間を斬るだけなら別に珍らしくはないのだから、鬼神とか天狗とかいふやうなものを斬つて名を揚げ度いものだと思ふのだが、何か不思議な事でも現はれて呉れゝば宜いがなァと、腕を摩つて居たのであつたから、これこそ願ふところの事だといふので、光景に向つて『此の事は何卒勝雄一人に任せて戴き度い。彼の大蛇如何に天地に屈伸して働かうとも、萬物の靈たる人力には爭でか勝ることができようぞ。昔時、素盞嗚尊は簸川上の大蛇を斬つて十握の寶劍を獲給ひ、漢の高祖は道を遮ぎる白蛇を斬つて、三尺の劍を揮つた。その時代とは百千の歲を隔てゝも居り、又遠く海河を隔てた物語ではあるが、自分の勇烈の機は更に劣つては居ないと思ふ。それで、是非某が馳せ向つて惡蛇の身首を立ちどころに二つにしてしまひませう』と、云つた。

光景は、勝雄の勇氣を大いに感稱して、家に傳はる義元の太刀の三尺一寸あるのを取り出して勝雄に與へた。勝雄は非常に喜んで、太刀を戴いて腰に帶び『武功の歷々多き中に若輩の某へ此の討手を許されたのは、身にとつて莫大の名譽であり末世の手柄と存ずる。但大蛇を退治せずば、今生では二度人々と面を合しはしない』と高言を吐いて光景の前を下つた。

勝雄は、小櫻縅の鎧を隙間も無く着なし、同じ毛の五枚兜の緒を締め、義元の太刀に、三尺三

すあつた左文字の太刀を帶そへ、人多くてはいかんであらうと思つたので、唯一人黒き馬に黒鞍置いて打ち乘つて、二月下旬の曉に、月の光を兜の星に輝かし、冴え返へる山風に小篠の霜を吹き拂ふ阿生山さして上つて行つた。

所が大蛇は、化して龍になるといふ位の異類のものであるが爲めか、勝雄が退治に向つたことを自然と覺つたものと見えて、何處にも姿が見えなかつたので、勝雄は次第に山奥へと分け入つて行くと、朧月の殘つて居た大空は俄にかき曇つて、時ならぬ村雨一頻り降り來り、巖裂け岸崩れ、山鳴り谷應へて、滿山晴々然として、物のあやめも見え分かず、如何にも凄まじい氣色となつた。

勝雄の馬はその氣色におぢたのであらうが、進み兼ねて身振ひして立つて居た。勝雄は少しも心を撓まさず、馬をば其處に乘り捨てゝ置いて、歩立(かちだち)で、岩を傳ひ、蔦を攀ぢて上つて行つたが、東方の空が大分白みかけた時分になつて、山上を遙に見上るといふと、高さ十丈許の岩陰の欅の大木の一の枝に、大蛇は頭を持たせて眠つて居る態で、呻鳴(うめい)て居たのであるが、息が甚く荒いのでその五六間周圍の草木は嵐に靡くが如く動いて居た。勝雄はこれを見て、如何に鱗虫なればと

て一言をもかけず斬つてしまふのは、寝首を掻くに等しく、卑怯なことだと思つたので、程近いところまで立ち寄つて高聲に斯う呼はつた。

『毒蛇確に聞け、深山大澤は龍蛇の棲するところと聞けば、元來汝の輩の本所たり、村屋近境は百姓の聚落たり汝等の徘徊すべき地にあらず、然るに、汝本所を捐て村里に出、人民を凶害することいはれなし、汝速に本所に歸り、再び來ることなくば、早く其處を去るべし、もし立去らずば勝雄唯一太刀に汝を殺さん。』

大蛇は眠つて居た眼をかつと啓き、紅の舌を閃めかし、火焰の如き息を吐きかけ、枯木に似たる角振り立て、唯一呑と飛びかゝつた。勝雄は太刀を拔きかざし、飛び違うやうにして丁と斬つたが、誤たずに、大蛇の頸をはつしと斬つた。首は空中に舞ひ上り、雲路遙かに躍つて居たが、やがて黑雲一면火焰を包んで降ると見えて、彼首勝雄が上へと眞倒に落ちかゝて來た。勝雄は拔きもうけたる太刀ではたと斬つた。斬られて其首は七八町飛去つて、田の上へ落ちたが、上下動することと夥しくして、餘勢なほ休まず、また一町許り躍り越えて行つて、地を穿ち岩を覆し、流るゝ血川をなし、終に其所が淵となつた。今蛇王子淵といふのがそれだといふのである。

勝頼は大蛇の毒氣に中られたと見えて、暫く兩眼をわづらつたのだが、醫療の効があつて程なく全癒した。勝頼は永祿十二年作州高田の合戰で、年五十五で討死した。

魔術

一

切支丹宗門の者は、魔術を行つたと云ひ傳へられて居る。渡來の教師たちは大抵醫術を以て、布教の方便に供したらしいのだから、さういふ醫術を心得て居た教師たちのうちには、今日の所謂る催眠術のやうなものを、實地に行ひ、人を信服せしめたものもあらうかと思はれる。で、さういふ點が語り傳へられて何時しか、魔法の傳說になつたのだあらうと想像せられるのである。

『參考天草軍記』を見ると、左の如き記述がある。

『東町中の者と申す所に市橋庄助と申す外科醫師、亦濱町に島田壽安と申す醫師、此兩人は南蠻

放下を仕つり候、是のみ唯今評判なりと申し上ければ、秀吉公聞し召、夫は珍らしゝ、何卒見度きものと命あれば、即ち佐々木平右衛門に申し付けて、堺へ使を遣はし、彼の兩人を呼び寄せらる。その翌日右兩人召し出さるゝに、御門の側らには、奉行役人を始、御近習後宮の女房達に至る迄列座たり、秀吉公命に、其方ども不思議の術を覺えし由聞及ぶ、依て何ぞ珍らしき業を致し見せよと命あれば、兩人謹んで畏まり奉つり候と、夫より大鉢に水を入れさせて、紙を蓑形に切りて、其鉢に入れければ、紙は忽ち鯉、鮒其他種々の魚と變じて水中を泳ぐこと、眞の魚に異ならず、暫時有て原の紙となる故、見物の衆人奇異の事なりと思ひ居たり。又何ぞ致せと上意有れば、此度は紙縷を一筋取り出し、何れも樣驚き給ふなと、何やら口に呪文を唱へ、疊の上へ投げ出せば、大いなる蛇と成りて這繞るにぞ、見物ありし女中ども大いに驚き逃出す故、早く仕舞へと命あり、手を叩けば、原の紙縷となる。又御臺所より鷄卵を取り寄せ、掌中に載せ、口に呪文を唱へて疊の上に置きければ、忽然雛鳥と變り、見る間に、大いなる鷄となり、羽たゝきをなし鬨を作り、暫時して原の鷄卵となる。此の上は何なりともお好み遊ばされ候へと申し上ければ、秀吉公奥に入り給ひ、婦人ども何にても望むべしと命せければ、富士の山を此の所へ移し見すべ

しとあれば、兩人申しけるには、大いなる物は御座敷には叶ひ難し、御庭へ造り申すへしと、障子の外へ出て、呪文を唱へければ、御庭の氣色變りて、富士山現れたり、何れも見て、驚きしよりも見事なりと感じけり、又障子を鎖て呪文を唱へければ舊の庭となる。

又近江八景を顯し、叡山、三井寺、膳所の城、堅田、比良、唐崎など悉皆く現したり。

其他須磨、明石の景色など萬般奇妙のことゞも爲して御覽に入れければ、君を始め何れも珍らしき事と驚き感じられ、秀吉公命に、世に幽靈といふもの有りと聞けど、見たることなし、是も成るべき哉との御尋ねに、兩人畏まり候、さりながら幽靈は晝出たる事なし、夜の物なれば、日の中は其業行ひ難し、夜に入りて、御覽に入れ奉つらんと申し上ぐれば、然らば休息せよと、御料理御酒を賜はり、程無く日も暮ければ、燭を夥だしく灯し、白晝の如くなる故、兩人申しけるは、斯樣に灯火御座候ふては行ひ難し、悉皆く御消し下さるべしとて、皆消させけり。

時に十八夜の月明らかにさし昇りしに、兩人は障子の外へ出、暫くありて、障子を開けば、今まで光り輝きし月も曇り、風戰吹きて何やらん物凄く、御庭の茂みより、白き物を被て色蒼然たる幽靈顯れ、顏を掩ひ、泣々出たる形粧は身の毛立つ程氣味惡く覺えたり。女中方大いに懼れ、

是は又用無き御望み哉と身を縮め奥へ逃げ行くもあり、幽靈は次第に近接き、御緣の先まで寄りければ薄月ながら有り〳〵と見ゆる故、秀吉公是を篤と御覽ありて、疾仕舞へとの命に、兩人は障子を閉て呪文を唱ふれば、忽地消失て、空も霽れ元の月夜となりにけり……

斯くて、兩人は、御望み通り御覽に入れしにより、定めて御褒美も下され、永く御出入りともなり、又諸侯にも近接豫ての宗旨を弘めんと思ひ居たりしに、秀吉公近臣に命じ、兩人の者を召捕り隨分嚴しく禁獄せよとと命ければ、近臣ども心得ずとは想へども、上意なれば其旨武士に下知なし、彼の兩人思ひがけ無く居る處を高手小手に嚴しく縛め入牢致させ置きぬ。然れば、兩人は妖術を施す隙もなく阿容々々と擒となりたり。

秀吉公の命に、彼の兩人は全く放下に非ず、切支丹の殘黨ならん。吾最初より餘り不思議なる事を致す故、態と幽靈を望みし處、先年攝州にて我未だ微賤の時に寵愛せし菊といふ女、暇を乞ふ故に緣を斷ちしに、其の後吾播州を領し筑前守と成りし時、尋ね來り舊の如く仕へん事を望むと雖、一旦暇を遣せし女を召使ふ可きやう無しとて取り上げざるに、露命繫ぎ難き由達て歎く故、不便に思ひ、別所小三郎が娘白瀧姫に附置きたり、然るに白瀧姫を我愛する事を妬み毒害をなし、

大勢を惱ましたるにより、刑罪に行ひ、婦人ながらも、重罪人につき、獄門に梟けて諸人に見せたり。我藤吉郎たりし時變じたる女といふ事を汝等も知るまじきに、其の菊女を幽靈に出す事邪術を以て搜り知り、不思議を見せ、我に取り入らんと斯く計ひしに相違なし、拷門に掛けて同類を白狀致させよと命けり……

然る程に、兩人を嚴しく拷門に掛ると雖も、一向同類は白狀せず、然れども、終に吟味の末、切支丹の法に相違なしと白狀に依つて、天正十六年九月二十九日、粟田口に於て、磔刑に處せられ、尚國々御穿鑿あり、切支丹の者數多御所刑にぞなりたりける」

此の話の後半が餘程面白いと思ふ。市橋、島田の兩人は、此處に云つてあるやうな奇術を行つたのではなかつたが、上手な放下はやる男であつて、秀吉の註文で、兩人が全くの放下で、女の幽靈を見せたところが、その顏が偶々秀吉の平常氣にして居る菊女の顏に似て居たとか、若しくは、單にさう似て居るやうに秀吉に見えたとかで、兩人が切支丹だと極られてしまつて、所刑されたといふことなのであるとすると、さま〴〵な面白味が、此の話には加はつて來ると思ふのである。

二

まだその外に、千壽院萬海といふのが奇術を行つた話もある。

『此の程殊の外旱魃にて一滴も雨降らず、人民歎き憂ひ、萬般雨乞しける時に、千壽院は此の時不思議を見し、耶蘇宗に人々を引き入れんと、先づ近在に赴き、八脊小原の邊の民家に立ち寄り……………拙者は大佛前に住居致す千壽院萬海法印なり……拙者の奇術にて忽然に雨を降せ五穀豐熟ならしめんと存ずるなり、とばかりにては分り難からん、御望みならば不可測を顯はし見せんと……口に呪文を唱へ、側に起りありし炭火を三つ四つとりて掌中に載せ、各々見給へ、火は水を以て制し、水は火を以て制す、月は水、日は火なり、陰の姿を以て起りし火を手取りにする是雨乞の驗しなりと申しければ、在り合ふ人々大いに驚き、是は不思議と云ひ囃すに、追々聞き傳へ聚ひ來り、衆人奇異のことに思ひ居たり。

庄屋年寄ども何れも相談して、雨乞を賴みけるゆえ、千壽院承知して、八脊の中にて場所を撰み、二丈四方に構へ、角々に竹を建て、注連を張り三尺許りに白砂を盛り、堅炭十俵を起して用

意なすに珍らしき雨乞なりと……大勢集り見物す』千壽院は白無垢に襷を掛け、御幣を手に持ち、起り立たる火焔の前に立て……斯く起り立たる火の上に立ち、天を祈り、陽を鎮め、立ちどころに雨を降し見すべしと、珠數押揉て何やら唱へ、火焔熾んの上に、飛び上り、彼方此方と駈け廻れり……此の雨乞の風聞二三日前より洛中へ聞えければ、所司代板倉伊賀守殿怪み給ひ……役人ども罷り越し様子を見とゞけ、愈々火の上を歩るくならば引き立て來るべしと仰せあれば、捕手の役人ども……萬海笑を含み火の上より下るところを、動くなと捕て押へ縛めければ、思ひ懸け無きこと故、見物の諸人四方へ逃げ散つたり』

『板倉殿工夫あつて、先年切支丹宗停止布達されし節關係の役人年寄又は隱居等を召して見せければ、其中に見知りし人ありて、彼は南蠻寺のヒヤンと申せし者なりと云へば、然もあるべしとて入牢仰せ付けられ……定めて徒黨あるべしと……種々拷問に及ぶ中、幻術を以て苦を除け、機好くば逃げ去らんとなしけれども、流石嚴しき縄目なればその事かなはず、併如何程拷問なすと雖も白狀せぬ故、從類詮議は追つての事と定め、先づ千壽院を刑罪に行はんと、粟田口に於て磔に處せらるゝに決し、町中を引廻し、所刑場に到れは、矢來の内外警固嚴重なる中に、千

壽院は弱りし體にて、物をも言はず打ち萎れて居る故、此の期に及びては幻術も出ざるべしと、衆人思ひ、馬より下し、磔架に寄せて縛り付けんとせし處に、急ち鼠と變じて驅廻りければ、役人驚き周章、唯撃ち殺せと立騷げる處に、空より鳶舞下りて、彼鼠を掴み、雲井遙に飛去りけり。皆人呆れ果、爲すべきやうも無く………」

樹下漫筆

一

古來、名高い傑い人々は皆幸運であつて、それ〳〵不思議に危難を免がれて、その優越な地位に達することができたとの傳説がある。

人の心は西洋も東洋もさう違つて居無いのであるから、傳説などになると、東西その揆を一にするものが少く無い。

米國の獨立戰爭より以前の或る戰の時に、或る士官が兵を率ゐて、森の中に埋伏して居ると敵の若い士官がその間近まで來て、悠々と偵察をやつて居るので、それを射撃すれば丸が中ることは必定だとは思つたものゝ、その若い士官の斥候振りが、如何にも落着き拂つて居るのに感服して、それ程の勇士をむざ／＼狙撃するに忍び無くなつて、その儘見遁してしまつたのであるが、その大膽な若い士官は、後に米軍の元帥となり、大統領となつたジョオジ・ワシントンその人であつたことが後になつて分つた。

そんな話を何かで讀んだことを記憶して居るのだが、『續武將感状記』を見ると、豐臣秀吉に就て左の如き話がある。

山縣三郎兵衞尉昌景は飯富兵部少輔虎昌の弟であつて、初めは飯富源四郎と云つたのであるが、武功度々であつたので、信玄がこれを賞して、山縣と改めさせた。山縣といふのは武田家の舊き由緒のある姓氏であつたからである。

長篠の戰の時は、昌景はもう年が六十位であつた。甲斐勢の先鋒であつて、敵と間近に相對して居たので、敵が仕寄りを付けるのを見て居ると、一人の武者が眞先に進んで、柵の杭は斯う打

つものだとか、繩の結やうは斯うし無ければいけぬなど〻、一々指圖をし、自分で繩を男結にしめたりして居る。昌景はそれを見て、彼の武者は尋常の雜兵で無い、彼を擊てと、部下に下知して、馬上に突つ立ちたるところを、參河の陣から打つた鐵砲の彈が中つた。けれども、昌景は馬から落ずに、采配を口に銜へ、兩手で鞍の前輪を押へて、死んだ。實に大剛の勇士だと云つて、後々までも傳へられたのであるが、楯の繩を男結にして居た武者は羽柴筑前守であつたと後に知れたといふのである。

二

妖怪だと思つて居たところが、その正體が知れると、何でも無いものであつたといふやうな話はよく聞くのであるが、『武將感狀記』の中に次のやうな話がある。

中川修理太夫秀重の家隷赤座七郞兵衛は鐵砲頭であつたが、赤座の妻の弟村井津右衛門といふのが浪人で、赤座の所に居た。岡の城は地理嶮岨であつたので、諸士の居宅は此所、彼所に散在して居て、家のあるところから十町ばかり離れたところに墓原があつた。何時の頃よりか、雨風

の夜にはその葦原で何物か羽ばたきをしてヘンな聲で鳴くものがあるので、妖物だといふ評判が立つて、農、商、女、子どもなどは大に恐れて居た。

さういふ評判が立ちだしてから五七日經つた頃、村井津右衛門は知人の家へ行つて、歸りが夜になつた。折しも、夜は更けたし、雨風は烈しくなつたので、歸り路は丁度その葦原を通るのだから、此頃は妖物が出るなどゝいふ噂もあるし、今夜は是非泊れと座中の人々は、村井を引き留めた。

村井は、心の中では、人々の言葉は何うも粗忽である、妖物が出るから泊つて行けなど、云はれては、泊り度くても泊れぬでは無いかと思つたものゝ、さらぬ體で、今夜は必らず歸ると、赤座に云つて置いたから、寢ずに待つて居るだらうからと云つて、強て歸途に就いた。

葦場の近くまで來るといふと、成程羽叩きと鳴き聲とが聞える。此は實際だなと思つて、近寄つて行くうちに、風の絶間になると、その聲がハタと止んでしまう。大凡此の邊であらうと思ふところへ寄つて行くと、風が吹いて來ると共に、ハタ〳〵、ヒヤウ〳〵と云つて、何物かゞ頭の上へかゝつて來る。兼ねて斬らずに捕へようといふ心組みであつたから、直ぐそれを捉へて手探

にして見ると、竹の子笠が墓原の竹垣へ掛けて置いてあるのであつた。それを取り外づすといふと、風が吹いて來ても何の音もし無くなつた。

村井はその竹の子笠を持つて、歸つて、赤座の寢て居るのを起して、自分は今夜妖物を斬り留めたと云つた。赤座はそれは不思議千萬な事である、一體何うしたのだと尋ねた。村井は他の人人を退座させて、赤座だけに實に斯う／＼いふ次第なんだと、實際を話した。赤座は、イヤ、それならば、實際の事は決して人に話さずに、唯妖物を斬り留たことにして置けと云つた。村井は明る日人に逢ふごとに、妖物を斬り留めたと話した。

ハタ／＼とは笠が垣根に當る音であり、ヒヤウ／＼とは竹の穴に風の笠に支られて激する音であつたのである。

それから後は、その墓原では何の音も無くなつたのであるから、人々は皆村井が妖物を斬り留めたのだと信じた。

此の話の面白味は、赤座が、實際を人に告げさせずに、妖物を斬つたことにさせてしまつたところにある。此の話はもう少し肉を付けると、一寸氣の利いた小說になる。

籐椅子に倚りて

一

夏目漱石君の亡くなつた時と、有島武郎君の父君の武氏の逝去せられた時に、兩家とも不思議な詐欺僧の手に乘つた話は當時可なり廣く傳はつたと思ふけれども、文壇關係の事に餘り注意を拂つて居られない人々にはまださう知られて居無いことであらうと思ふので、傳聞のまゝを書いてみる。

夏目君の亡くなつた時分――多分葬式が濟んでからでは無いかと思ふのだが――、一人の若い僧がやつて來て、自分は故人の爲めに救はれた人間であつて、殆ど死ぬべき運命を脱却するを得て、越前の永平寺へ行つて、修業して居たのであるが、その恩人の夏目氏の訃を聞いたので、直ちに走せつけようとしたのだけれども、旅費が無かつたので、越前から徒歩してやつて來た。願

くば、靈前での回向を許され度いと如何にも殊勝な口振りであつたので、夏目家では、甚く感動して、佛間へ招じ入れて讀經をなさしめ、餘分に金を包んで與へた。

さういふ際の夏目家の人々の所置は尤至極であつて、何んな家でも不幸の際には、人々の心持が感傷的になるものだから、さういふ場合、故人の陰德が顯はれたと思ふべき理由があれば、非常に感動するのが自然であらうと思はれる。從つて、恩を忘れずに數百里の道を遠しとせずして弔問に來たといふ人に對しては、懷しみも親しみも同情も強くなるのが當然である。

所が、それから間も無く、有島武翁が逝去された時分に、矢張り一人の若い僧が來て、夏目氏の家で云つたと同樣なことを云つた――卽ち故人武氏に九死一生の場合に金を惠まれるか何かして、永平寺へ行つて居たが、武氏の訃を聞いて、徒歩で上京したと云つたので、有島家でもその僧の特志を喜んで、故人の靈前で回向をさせ、相當の布施を包んで、僧に與へた。

それから間も無く、森田草平君が有島家での話を傳聞して、武郎君に注意を與へたのであつたか、或は有島家の方で、夏目家の不幸の場合に有つたことを傳へ聞いた爲めであつたのか、どちらであつたか聞き漏らしたが、とにかく、武郎君と草平君との間に交涉が始まつて、その結果、

その如何にも殊勝らしかつた僧は全く兩家を騙つたものであることが明にされた。
ところが、兩家の方にさういふ事が明になつたことを知らなかつたものと見えて、その僧は、その後、夏目家を訪ひ有島家をも訪うた。夏目家の方では、僧が漱石氏の墓參をすると云つたので、久米正雄氏が雜司ヶ谷へ同行しながら、途中で僧を可なりとつちめたといふことである。有島家の方では、僧が來ると、人々が取りまいて、さん〴〵に面の皮をひんむいたといふのである。

生馬君は、その僧の事件に就いて私にかう語つた。

『私の父は、人を助けたことなどは、大抵家の者に話す質であつたので、それから考へれば、父が家の者に話さぬやうな所謂陰德は先づ無いのであつて、僧の話は始めから少し疑はしい位には少くとも思つていゝ筈であつたのだが、何にしろ、皆の心が故人のことでひどく柔になつて居る時であつたので、僧の話に直ぐ飛びついてしまつて、此れこそ本當の陰德だといふ風に、誰も殘らず感動してしまつたのだ。ところで、後になつて、皆が僧を太く責めた時の僧の態度なんだが、それが餘程、通例の人の豫期に反するものであつた。僧は人々からさん〴〵と

つちめられても、恐縮してひたあやまりにあやまるといふのでもなければ、引かれ者の小唄的に何か反抗の言葉を出すといふのでもなく、何と云はれても唯下を向いて默まつて居るのみであつた。』

何うも、その倍は可なり度胸の据つて居る人間であつて、さういふ詐欺を行つたのも、夏目、有島兩家に於てゞあつたのみでは無からうと思はれるのだが、吾々はその前後に於ては何も聞くところが無い。

二

以上の話を聞いて居る私は、先頃短篇の探偵小說で『フュウネラル・フランク』といふのを讀んで、同じやうに、不幸のあつた家へ行つて、詐欺をする人間の話に一層注意を引かれたのであつた。

フランクといふ名の男で、葬式のある家へ行つて詐欺をするので、それで、葬式(即ちフュウネラル)のフランクといふ綽名を得た惡漢の話であるのだが、その男は非常に善く馴らした小さい犬を使つて、詐欺をやるのであつた。

例へば、或る可なり名高い紳士が死んだことを知るといふと、フランクは他の町から來た極く人の好い、上品な紳士らしい樣子をして、小さい犬を抱いて、その家へたづねて行つて亡くなつた主人の名を云つて面會し度いといふ。取り次ぎの者が、主人は死んだといふと、非常に驚いた風をして、それでは自分は死んだ主人の舊友だから後つぎの人に逢ひ度いといふ。後つぎの娘などに逢ふことができるといふと、フランクは自分は近頃は亡くなつた主人とは少し遠々しくはして居るもの丶、昔は非常に心安くしたものである、自分はこれ〳〵の町に住んで居るこれ〳〵の者だが、愛犬が怪我をしたのでその療治を受ける爲めに此の町へ來る途中、犬を犬箱へ入れるのも可哀さうだと思つて、革鞄のなかへ隱してつれて來たので、犬のことが氣になつて、つい〳〵懷中物の用心などはそつちのけになつて居た爲めに、すつかり懷中物を掏摸にしてやられてしまつた、此の町には親しい知人といふのも餘り無いので、全く當惑してしまつたのだが、その時思ひ出したのは當家の主人のことである、此頃こそ少し疎遠にはして居るもの丶、古くからの友人であるのだから、犬の治療費と家までの汽車賃とを借り度いと云つたら、一も二も無く貸してくれるだらうと當にしきつて、尋ねて來たところが、豈はからんや、主人は亡くなられたと聞い

て、實に残念に堪へ無いとともに、自分も何とも當惑してしまつた、と云ふやうなことを、如何にも世間にうとい人らしい、鷹揚な言葉つきで話す、主人側の人が女でゝもあるといふと、フランクの言葉を直ぐ信じてしまつて、一體何れ位あれば宜しいのかと聞く、すると、フランクは貴女に拜借するのは何うも相濟まんといふ空遠慮をしたあとで、先づ五十圓もあれば、何も彼も辨ずるのだがといふ、結局それだけの金を渡されるといふと、犬に向つて『此のお孃さんのお蔭で、お前の怪我した足が直せるのだから、よく御禮を申し上げな。』といふやうなことをいふ。犬は前足を一本出して、家の主人の袖へかけようとしかけはするのだが、急に怪我して居る部分に痛みを感ずるのだと見えて、けたゝましくキャン〱と鳴き出すのである。

主人側の人は、犬のさういふいぢらしいさまを見て、いとゞ哀れに思つて、フランクを送り出すのである。

フランクはさういふ詐欺をやる男であるのだから、自分が騙る先きの家の事は十分知り拔いて居なければならんので、町の重なる紳士のことを調べる材料と云へば、新聞雑誌の切り拔きであれ、紳士錄であれ、會社錄であれ、ことごとく備へて居て、彼の家は正に小興信所の觀をなす位

總ての材料が揃つて居た。彼はさういう材料によつて、先きの家の人と話をする時に、言葉の上では少しもボロを出さずに居られるのであつた。

それから、その犬が前に云つた通り、十分馴らした悧巧な犬であつて、勿論實際は怪我も何もして居ないのであつたが、前足を一寸さし出して置いて、直ぐさも痛さうにキャンキャン鳴くやうに、ふだんから敎へ込まれて居るのであつた。

斯ういふ詐欺は、如何にも巧みな方法ではあり、收穫も容易であるのであつたが、フランクは惡黨仲間からは、太く擯斥せられて居た。他人の不幸の場合、人々の悲しみに心亂れて居る際に乘じて、金圓を詐取するといふのだから、その仕事の容易なる點に於いて、謂はゞ、卑怯なる方法、賤劣なる犯罪だといふのである。詰まりさういふ點が、惡黨仲間の面目――といふのも可笑しいが――を汚すものと見なされて居たのである。

所で、フランクの詐欺が度々被害者たちからの訴へ出によつて警察の注目するところとなりだして、その町で稼ぐことは全く危險になつて來たので、しばらく竄伏を決心して居るうちに、倚運の惡るいことには、大事な犬が病氣になつて日に日に衰へだした。犬はフランクに取つて大事

な商賣道具であつたのみならず、彼はその犬を長年飼つて居たので、その犬を甚く愛して居た。それで、何うしても犬を醫師に見せなければならなくなつて來たけれども、フランクの人相風體も犬の毛色なども大凡そは警察側へは知れて居るのであらうから、犬だけならば兎も角、フランク自身が犬をつれて醫者のところへ行くのは、危險此上ないことであつた。

其處で、フランクは、惡黨仲間の見知り越しの連中に、犬をつれて醫者のところへ行つてくれまいかと賴んで廻つたのだが、誰も彼もあざ笑つて相手にしてくれない。已むを得ずフランクは自分の危險を忍んで、犬をバスケットへ入れて、醫者のところへ向ふ。途中で自動車をよけるとたんにころんで、バスケットを投げ出してしまつたのたが、人々に扶け起されると同時に、直ぐバスケットを探したけれども、影さへ見えなかつた。

何うにもし方がないので、フランクは家へ歸つて、さんざん歎いた末に、彼が最後に金を騙り取つた先きの當の娘が動物虐待防止會の幹事か何かであつたことを思ひだして、自分の愛犬もどうかして幸にその會の手で拾ひ上げられることもあるかも知れぬと思つて、自分がそれまでに稼ぎ溜めて居た金を全部その會へ寄附することに決心して、それに必要な手紙を書き始めるのであ

る。

三

もう何うしても二十何年か前に死んだ人であらうと思ふのだが、中島某といふ人があつた。明治二十七、八年頃には、もう五十位であつたらうと思ふのだが、古い佛蘭西語學者で、若い時分に共に學んだ連中は皆學界だの政界だのゝ重立つた人々になつてしまつて居たのだが、中島氏だけは家庭の不幸か何かの爲めに途中で失脚してからといふものは、酒にばかりひたつて居て、次第に落魄して、とゞの詰まりは、知り合ひの學者、若くは知名の人々のもとを廻る乞食のやうなものになつてしまつた。

門に立つて、病氣で難澁をするから、少し惠んで吳れといふやうな近頃の乞食とは違つて、玄關先きで、取次ぎの書生などゝ、悠々と話をしながら、二十錢なり三十錢なり貰へるまで立去らぬといふ風であつたらしい。

小柄な丸顏の人で、鐵縁眼鏡をかけて居て、古る新聞の可なり大きな束を抱へて、下を向いて、

何となく陰欝な顔で、歩いて居るのであつた。

上田敏君はその時分、西片町の田口卯吉氏の家に居たのであるが、中島は田口氏の家へ無心に來て、よく入口の離れ家に居た上田君を捉まへて、例へば『君は大學で何をやつて居るのだ。ゾロアか。』など〻聞き、『キャリッヂの金がほしいのだが、いくらか呉れぬか。』など〻、外國語をはさんで話しかけるのであつたといふのだ。

さういふ風にして、少しづゝ貰らう金は、片つぱしから居酒屋などで浪費されてしまうのであつたらう。

その中島基が或る日例の通り、或る學者の家へ合力を請ひに出かけて行くと、家が非常に取り込んで居るらしかつた。主人に逢ひ度いと云ふと、主人は昨夜死んで、今葬儀の支度中だといふのであつた。中島はそれを聞くと、改めて丁寧に弔辭を述べてから、

『私も世が世であるならば、香奠の五圓なり拾圓なりさし出すべきものであるのだが、何分御覧の通りの體であるのだから。』と、云ひ、それからは急に早口になつて、

『御取込みのなかで、何ともお氣の毒だが、何うか二十錢戴きたい。』

四

故成島柳北氏は幕政時代では何の守といふ所謂る布衣以上の殿様株であつたのであらうから薩長政府には反對の一敵國の觀があつた朝野新聞の幹部に居て諷世嘲俗の文字を公にしたのであるが、大都の上流に生れた人だけに悶えを酒に慰め、鬱を狭科に散ずるといふ風で、所謂る當時の大通であつたらしく考へられる。

此の柳北先生に就て面白い逸話が傳はつつて居る。

柳北先生が公にした花月新誌は漢文で書いた狭斜情史ともいふべきものであつたのだが、友人の裁判官の某氏がそれを讀むといふと、早速手紙を書いて、成島氏ともあるべき人がさういふ卑俗な社會のことに興味を持つて、それに沈湎して居ることを世上へ廣告するやうな著書を世に出すことは、成島氏の如き國士の爲めに實に惜しむべきことであると、いふやうなひどく鹿爪らしいことを云つてやつた。

花柳通であつた成島氏は、その裁判官が表面は非常に謹嚴な人のやうに見せかけては居るもの

の、實は見せかけ程堅い人ではなく、人眼を忍んでは柳橋で晝遊びをすることも、その馴染の船宿が何處であるかといふことまでもちやんと知つて居たので、裁判官からのその手紙を見るとその餘りに白々しいのに吹きださゞるを得なかつた。さんぐ笑つたあとでつい惡戯をして先方を困らしてやり度い氣になつてしまつた。

其所で裁判官某氏の行きつけの船宿のかみさんを說きつけて、某氏が遊びに來たら成島氏に急報することに話をきめたのであるが、それから二三日して某氏が見えたといふ急報が成島氏に達するや否や、成島氏は書生を二三人連れて、その船宿へ乘り込んで、その裁判官が藝者と共に籠つて居る室の直ぐ次の部屋へ陣取つて、廊下に向いて居る障子をばすつかり開け放して置き、家から借りた古机を室の眞中に置きその上へ本を載せて大まじめな顏をして、經書の講義を始めた。

『拙者は先き頃、花月新誌を公にして、狹斜の事情を世に知らせたのであるか、友人の判官某氏は、拙者の爲めに手酷しい忠告の手紙を送られた。拙者も成る程とばかり頭を抱へて、全く閉口し、翻然志を改めて、鍛冶屋の手間取りの如くテンカコツカ、テンカコツカと、ひたすら堅いことを心がけるやうになり、此所に諸生を集めて、經書の講座を開き、聖人の道を講ずるこ

とになつた。」

と云つて、成島氏は咳一咳し、一きは聲を高くして、

「そも〳〵聖人の道は家を整へ、身ををさむるといふにある。但し身ををさむると云つた所で、隣の聖人の如くまつ書問満圃のなかへ身ををさめるといふのではない。」

先づさういふのを序開きにして、成島氏は經書の文句によつて、隣室の某氏にさん〴〵當てつけた。

隣室の某氏は、不意に隣りへ成島氏に陣取られてしまつて少なからず狼狽したのであるが、運の悪るいことに、某氏の部屋は廊下の一番奥になつて居て、その部屋を去るには何うしても成島氏の居る部室の前を通らなければならぬ。ところで、その部室の障子は殘らず開け放されて居るのだから、何うしても姿を見せぬわけには行かぬ。某氏に取つてそれがひどく辛い事であつたので音をひそめて自分の部室に忍んで居るといふと、隣りで途方も無い講義が始まつて、番毎に隣りの聖人、隣りの聖人となられるので、それこそ全く頭を抱へて閉口してしまつたが、それもさう長い事では無からうと思つて辛抱して居たもの丶、成島氏の講義は何時までも終らないで、隣り

の聖人、隣りの聖人といふ言葉が雷の如く響いて來る。それで先づ弱りきつてしまつたのは、相手の藝者で、泣き聲で何うにか結末のつくやうに、成島氏に交渉して呉れと頻りに某氏に賴んだ。某氏もさうなつてはいよ〳〵兜をぬぐより外仕方が無くなつて、間の襖を細目に開けて、『柳北先生、柳北先生、もう全く降參しました。何うか勘辯してください。』と、兩手を突いてあやまり入つた。

五

古い文人の文章を書く事の達者であつた事はよく聞く事であるが、故假名垣魯文氏に關する話も甚だ面白いと思ふ。

假名垣氏は、晩年には文章を書きかけながら居眠りをした。筆を持つた儘で、紙の上へ手を突いて、心持好ささうにコクリコクリやつて居るのであるが、ハッと氣がついた風で眼を覺すや否や、それまで書きかけてあつた部分を見もせずに直ぐその續きのところへ筆を落して、すら〳〵と書き了はつたのを見ると、その前を見もせずに書いた部分が前とちやんと連絡して居て、少しも可

笑しなところなどは無い。これは假名垣氏の一藝當ともいふべきまでに、人々に感服されて居たところが、魯文氏の敎へを受けた野崎左文、齋藤綠雨の兩氏は度々魯文氏の居眠り中にいたづらをした。

それは、魯文氏が筆を止めた後の一二行のところへ眞黑に墨を塗つて置くのであつた。さうして置いて、魯文氏を搖り起すといふと、例の通りに大急ぎで、筆に墨を含ませるや否や、鮮かにすら／＼と書き續けて、やがて書き了はつて讀み返しもせず、組みの方へ廻はすのであつたが、後で組み方から『先生此所は』と云つて、その墨塗りの部分を質されるといふと、魯文氏は不思議さうにその部分をためつすがめつ見たあとで、『これは私にも分らない。齋藤さん讀んでみてください。』といふのであつた。

或る時は又、魯文氏が心持好く眠つて居る最中を見すまして、魯文氏の手にある筆をそつと拔き取つて、毛をすつかり拔いてしまつて、元の通り魯文氏の手へ握らせて置くと、ヘツと眼を覺ますや否や、軸だけの筆で原稿の上へがり／＼と書きつけた。唯墨がぽた／＼落ちたのみで字も何も書け無いので、魯文氏は如何にも不思議さうに筆を見て、毛の無いのに氣がついたと見えて、

小刀を軸の口へ突つ込んで、かき廻したが、無い毛の出て來る譯は無いのであるから、何うにもし方が無い。魯文氏は何か口の裡で呟きながら、その軸だけの筆を投げ出すと共に、直ぐ他の筆を取つて、それまでの部分を讀み返へしもせずに、例の通りさら〳〵と書き續けるのであつた。

魯文氏は學者では無かつたのであるから、長いものになると非常な名文といふものは無かつたのであるが、引札位の短文に至つては、何人も企及し得ざる妙があつたが、ものがものなので、それ等は大部分散逸してしまつて、今日に傳はるものが殆ど無いのは殘念であると、或人は語つた。

魯文氏の話では古河默阿彌氏は文學上の素養の極めて乏しい人であつたと云ふのだ。或る日魯文氏のところへ來て、『瓦罐寺を脚色して呉れといふ注文を受けたのだが、瓦罐寺とは一體何だらう？』と聞いたので、魯文氏は水滸傳中のその話をしたところが、默阿彌氏は喜んで歸つたが、魯文氏の語つた梗概を本にして作つた劇は實に巧なものであつた。

『彼の男は全く芝居の作者に出來て居る男だ。』

さう魯文氏は稱讚したといふのである。

綠蔭茗話

一、敵討

一

何か隨筆をとの御註文である。夏向きの事だから、思ひ切り涼しさうなことを書き度いとは思ふものゝ、一寸と好い思ひ付きが無い。其所で、座邊にある古本を手當り放題開けて見て、宜い加減なことを書き飛ばすことにする。固より人に教へるといふやうな考は無く、又、自分の知識を誇らうといふやうな不量見は尚更持つて居無い。けれども余の豫め斷わつて置くが、何うかすると讀者の誰れかには全然知識の無いやうな事を書くかも知れ無い。さういふ場合には、僕が知識が多いのでは無くして、さういふ讀者の方が知識が少いのせいと思はれ度い。

如何なる人も知ら無い事を書くのは不可能であると共に、如何なる人でも知つて居る事を書く

のも等しく不可能である。知識の多い頂上と知識の少いドン底とを想像することは僕等には到底できる事で無い。

二

午睡から覺めたばかりの眼を擦つて四邊を見廻すと、『谷干城遺稿』といふ二册本がある。好し來た、此れで、今日の稿料を稼ぐことにしよう。

講釋でも、芝居でも、淨瑠璃でも、敵討の物語がその主な部分を占めて居ると云つて宜い位であるのだが、そもそも敵討なるものは、當時の法律では何う取り扱つて居たのであらうか。生命を以て生命を償はしめるといふのが、當時の法律の根本精神であるべく見えるのに、私人が正當防衞で無い全くの故殺をなすのを政府が公許したのだとすると、餘り矛盾があり過ぎたやうに思はれる。何等か法律上合理に見えるやうな言ひ前が付けられて居たものでは無からうか。

所謂る敵になつた人間は、殺人犯であるのだから、敵討ちに出る方の者はその罪人の搜査をするといふ意味で國を出ることを許されたのでは無からうかとも想像せられる。若しさうだとする

と、後者は何かの身分證明のやうな書類位は藩廳から與へられて居たらうかとも思はれる。

享保時分の事であるから、一般の例にはならぬかも知れぬが、僕の家にある書類に據ると、藩士が藩邸以外に住居する場合には、藩から町役人に宛てた證明狀のやうなものを出したやうである。即ち、露西亞のパッスポオトのやうな意味のものである。で、それから推すと、敵討の連中にも何かさういふやうな書類が與へられて居たかも知れぬと思はれるのだ。

講釋などでは、矢來を結つて、敵討のアレナを設け、役人が出張して、それを監視するといふやうな甚く大仕掛のものであるのだが、果して幾らかさういふことが有つたのだとすると、それは、敵に當る人間、卽ち、罪人を處刑する意味であつて、敵を討つ方の者は處刑執行人といふやうな資格で、敵を討つことを許されたといふ譯では無かつたらうかと思はれる。

さういふ取り扱ひは、總て漠然としたもので、これを記錄に止めて置く譯には行か無かつたのであらうから、今日では文書に據つての考證はもう行き屆くまいかとも考へられる。

所で、敵討は種々で、討つ方が無理な場合もあつたであらうし、敵討をし度く無い者もあつたであらうとは、誰でも考へ得られる事であるのだが、『谷干城遺稿』の『日記』の中に左の如き話が

ある。

『福岡善三殿を訪ふ。談偶然三谷山にある富永新助氏墓の事に及ぶ、此人の父を伊織と云ふ、甲浦の在藩にて、家老職位の位地なるが如し、或時江戸城下に人を殺せし事あり、當然の事なれば切勝也しが、其弟甲浦の白濱といふ處にて、伊織に刄傷に及びしが、伊織之を仕留めたり、死者の懐中より書置の如きもの出づ、其文に依れば、此人の母は繼母にて實子あり、家督を實子に與へん事を欲するより、兄の敵を討たぬは腰拔なり抔云ひて、頻りに敵討を勸めたれ共、此弟たる人は兄の死は實に不得已事にして、法に死したれば、相手を敵として討つは反つて不正なりとの考へなれども、母の意はまゝ子たる彼を無き者にせん考より隣に責るを以て、不得已死を決し、富永氏に刄向ひしも、實は自ら殺さるゝ覺悟にして、深く抵抗せざれば、忽ち富永の爲に殺されたり、富永此書面を見て憐を催し、巳に兄を殺し、又其弟を殺し、且其弟の心事を察すれば愴然に不堪隣國の阿波より國を立退き來るを勸むる者ありしが、富永は敢て用ひず、遂に自殺せりと云ふ』

三

それにつけて思ひ出すのはメリメエの『コロンバ』である。『コロンバ』はコルシカのヴェンデッタ(復讐)の物語である。

コロンバの父親はコルシカ人に殺されて、コロンバの兄が佛蘭西から歸つて來た。コルシカの風習ではさういふ場合には必ず復讐をし無ければならないのであつて、若し復讐をし無ければ世間から腰抜けだと看做されて齒されぬのであつたので、コロンバは兄が歸つてきたらば、當然復讐に取り掛る事だと思つて居た。處が、兄は佛蘭西で教育を受けて、佛蘭西の軍隊の士官になつて居たので、コルシカ人の持つやうな頑固な考へは失つてしまつて、一向敵を討たうとし無い。けれども、妹のコロンバの方は熱烈な、強い心の女であつたので、何うにでもして敵を討つやうに仕ようと決心して、兄を勵ましたり、煽動したりして復讐をさせようとする。

そのうちに、敵の方がだん〳〵不安を感じて來て、コロンバの兄が鐵砲を持つて山を歩いて居る所を狙撃する、彈丸はコロンバの兄の右腕に當つて腕が利か無くなつたが、それでも鐵砲が上手であつたので、左の手で鐵砲を掴んで敵を二人とも撃ち止めてしまつて、妹と一緒に大陸へ逃げてしまつた。

メリメエの『コロンバ』は大體さういふ筋のものだと覺えて居るのだが、執着の強い、烈しい心のコロンバと、しつかりしては居るが文明的になつて居る兄との對照が酷く面白いと思つた。

四

モオパツサンもヴエンデツタを二つ程書いて居る。一つは『コルシカの山賊』と云ふ題なんだが、これはコルシカの山賊のサン・リユウシアといふ名高い山賊の話で一寸コロンバに似たところがある。

サン・リユウシアの父親は同じ地方の若者に殺された。處が、サン・リユウシアは體の弱い、臆病な男であつたので、復讐を企て無かつた。親類の者共も來て頻りに復讐を勸めたのであつたが、それでも承知し無かつた。

けれども、サン・リユウシアの妹の方は復讐を熱望した、コルシカの風習では復讐を企て無い者は喪服を着る資格が無いといふ事になつて居たので、妹は兄の喪服を取り上げてしまつた。それでも、兄に何とも思は無い風で、父の鐵砲を鐵砲掛けから取り下して復讐を企てようとはしなか

つた。彼はまるで父を殺された恨などは忘れてしまつた風で何時も家へ引つ込んで暮して居た。そのうちに敵の若者が結婚することになつて、その連中は大膽にもリユウシアの家の前を行列して通ることになつた。或る日妹と二人で窓の所で菓子を喰つて居ると、その前をその婚禮の行列が通つた。それを見るとリユウシアは何んと思つたのか、フラ〳〵と鐵砲を取り下して、何處かへ出て行つてしまつた。が、少し經つと何んにも持たずに、茫然として歸つて來たので、妹は兄は又復讐を諦めてしまつたのだと思つて居た。けれども夜になると、彼は何處かへ行つてしまつた。

敵の若者はその晩嫁付きの男を二人連れて、徒歩でコルテといふところへ向つて居た。處がその途中でサン・リユウシアが不意に彼等の前へ現れた。彼は敵の額をぢつと睨みつけて、「さあ、時が來た」と云つて、鐵砲をさし付けるやうにして撃た。嫁付きの一人は逃げたが、も一人の方は後へ殘つて、リユウシアに聲をかけてから、助けを呼びにとコルテの方へ行かうとした。

リユウシアは『一足でも動いて見ろ、足を撃つぞ」と嚴しい聲で云つた。けれども、その男はリユウシアが平常から弱い男なのを知つて居たので、「貴樣にそんな事ができるものか」と云ひながら馳け出さうとした。リユウシアは、直ぐ、その男の腰へ一發喰はした。で、倒れた男の傍へ

立寄つて、『俺は貴樣の傷を見てやる。若し傷が重く無ければ、そのまゝにして置いてやるが、助から無いやうなら、苦痛を止めてやるぞ』と云つて傷を見たが、重傷であつたので、頭へ一發擊ち込んで殺してしまつた。それからリユウシアは山へ逃れて、隙を見ては敵の親類とか、その親しい故舊とかを皆殺してしまつた。

彼は一生の間に、武裝巡査を十四人殺し、夥多の家を燒き、死ぬる迄最も恐れられた山賊であつた。

五

もう一回だけ敵討の話を續けることにする。

モオパッサンは又『ヴエンデッタ』といふ短篇を書いて居る。同じくコルシカの物語である。

母一人子一人で人家を懸け離れた海邊か何かに住つて居る一家があつたが、息子が島の誰かに殺されてしまつた。後に殘つたのは母親だけであつて、所謂復讐を誓ふべき男の親族といふのは一人も無かつたので、母親が自分で復讐しようと決心した。

所で、その方法といふのが極めて奇抜なものであつた。その婆さんは一頭の猛犬を飼つて居たが、その犬を人間に飛びかゝるやうに敎へ込んだ。先づ藁人形のやうなものを作つて、その頸へソォセエジを捲き付けて、犬をけしかけるやうにすると、犬は食ひ物を目がけて跳びかゝつて行つて、人形の喉元へかぶりつくかと思ふやうな勢で、そのソォセエジを一と嚙みにするのであつた。だん／＼さういふ風に馴して行くうちに、犬は人形の喉元へ跳び付くのが全く習慣になつてしまつて、頸にソォセエジを捲いて置かずとも、婆さんが指さして、ソレと聲を掛けさへすれば、犬は直ぐ人形の喉元へ跳び掛つて行つて、其處を一口に嚙み破るやうになつた。

婆さんの住所は人家をかけ離れたところにあつたので、婆さんがさういふ仕度をして居ることは誰も知ら無かつた。

所で或る日、婆さんの敵に當る男が婆さんのところへ訪ねて來ると、婆さんは直ぐ犬に跳び付けと命令した。犬は容赦無く敵の男の喉笛に嚙み付いて、息の根を止めてしまつた。

六

これはヴェンデッタでは無いが、モオパッサンの作に、「メエル・ソオヴァージュ」といふのがある。

普佛戰爭の時分に、或る村へ獨逸軍が駐屯して、或る婆さんの家へも獨逸兵が二三人割り當てられた。婆さんの息子は佛蘭西軍に入つて獨逸兵と何處かで戰つて居たのだが、婆さんは家へ割り當てられた獨逸兵を如何にも親切に世話して居た。

所が、或る日、婆さんの息子が戰死したといふ報知が婆さんのもとへ達した。婆さんはその報知に接しても、別に大して悲しさうにも見え無かつた。

丁度その晩婆さんの家から火事が出て、獨逸兵は三人共燒け死んでしまつた。火をつけたのは婆さんであつた。彼女は息子の死んだ責任をば家に居る獨逸兵へ持つて行つて負はしたのである。獨逸の士官は婆さんの心持を能く理解して、婆さんが謝罪すれば生命は助けると云つたが、婆さんはあやまるどころか、憤然として士官の顏へ唾を吐きかけた。で、士官は已むを得ず銃殺の命令を下した。

所で、此の敵討の話は初めに『谷干城遺稿』を引いたのだから、同じ『谷干城遺稿』の中に書かれ

て居る或る人物に關する云ひ傳へを掲げて、此の項を終ることにする。

土佐の執政吉田東洋は漢學者ではあつたが、氣宇極めて濶大な男であつたことは、谷氏も『遺稿』中の諸所で認めて居るのだが、此の男の學問をするやうになつたのは、復讐事件に關係があつたといふ言ひ傳へがある。吉田は若い時若黨が不禮をしたといふので、手討にした。ところで、その若黨の[illegible]に當る者が、敵を討つと云つて、吉田を附け覗つた。吉田は用心して引籠りがちになつたので、自然多く讀書する機會を得たのだといふのである。

二、弓の話

一

『武士（もののふ）の片肌涼む夜的かな』

といふ句があると、僕は故川上眉山君から聞いた事がある。夜的は普通夏の事になつて居る。今日では電燈が出來て居るから、何處から燈光を採ることも自由であつて、燈の採光には不便が

無からうかと思はれるのだが、往時のランプ時代には採光が十分で無かつた。

照り返しの附いたランプを――硝子箱に入れてあるのを――垜の左右の上の隅へでも吊すといふことにすれば――垜の可なり大きい場合には――宜しいのであつたらうが、僕等はそんな面倒なことをせずに、何時も夜は的を垜の中央へ唯一つ掛けることにして、その的を掛ける場所の前の直ぐ下を少し掘つて穴を拵へ、その穴の表面の半分位後部を板で掩つて、その上へ土をかけてその餘半分位(前部)な所からランプを穴の中へ入れるといふ仕組にしたのであつた。

即ち、さういふ風にして穴へランプを入れると、燈光が的へ當つて、的だけが闇い裡でハッキリと浮き出して居るやうに見えるのであつた。

併し、此の方法には少くとも二つ缺點があるやうに思はれた。

その第一は地面へ殆ど平に堀つた穴であるから、何うかすると雨水が溜る虞のあることであつた。第二は、燈火が殆ど的へのみあたるやうになるので、的ばかりが明るく見え過ぎて、射手の心を挑發し過ぎて、知らず〳〵射前を匆卒ならしめる傾きのあることであつた。

故に夜的の垜の採光の方法は、燈器を入れる穴を掘らずに濟み、且、その投光が的へばかり集

中しないことになるやうなのが一番宜しいかと思ふ。

三

夏は日中は餘り暑いので、人間ばかりで無く、弓そのものがだく\/になつて居るのであるから、夜になつてから、幾らか空氣の引締つたなかで射る方が面白いので、夜的が行はれるやうになつたのであらうと想像せられるのだが、夜的は弓術練磨の上には餘程有益なものである。

前に云つた通り、夜は的のところだけが一番多く光を受けて居るかのやうに思はれて、的へばかり心が引き付けられるので、唯引つ張つて放しさへすれば皆中るといふやうな氣になつてしかたの無いもので、何うしても射方が早くなり勝ちで、從つて十分に引いて放さないことになるのだから、普通の晝間のやうな心持で行くと、矢が極まつて的の後(向つて左方)の肩のあたりへ塊まつてしまふ。で、思ひ切つて的の前(右)下へ狙を當て、引つ込むやうにして、早いところでトントン射て居るのも一方法には相違無いのだが、然しそれでは唯中るだけのヨタな射方に過ぎ無い。

夜的の場合は、弓を十分に引いて、十分に長く保つやうにして射れば、殆ど百發百中である。

夜は的が闇の中で浮き出して居る譯であるので、それを目標にして射る矢は何處かへ塊まつてしまふのが自然であるのだから、是を正法の射方にすると始終好い射方が揃ふといふ譯である。

だから言葉を換へて云へば、夜はぞんざいな射方では、探り探り射て居るやうなもので、甚だ不安であつて、何うしても正法の念の入つた射法によらなければならぬことになるといふのである。

其所で、その通り正法に依る練習を夜的でやつて置くと、早けと稱する引つ張ると直ぐ放す病などはだん〳〵と治せられて行くと思ふ。

心の落ち着、心の集中は何うしても夜の方が宜い。弓を十分に引いて、心を丹田におさめ自分の心の鏡へ自分の姿勢を寫して、心手一緒に完全の域に到らうとするその心境を私の師匠はよく『澄み渡る』といふ言葉を用ひて象徴した。確に『澄み渡る』といつて宜い心持である。

三

僕は冬の夜弓を射るのが好きであつた。殊に初冬の夜が好かつた。

射るには一般には白木を貴ぶのだが、京都製の白木は夏は使へ無いので秋口から使ふのである。

妙になつて、白木を持ち出すことのできるやうになつた場合の快さといふのは、なか〳〵忘れられ無い快味である。

所が、初冬になつて來ると、弓が一層締つて、夜などはその冴え方があり〳〵と感ぜられるやうな氣がするのだ。絃音などが如何にも引締つた好い音がするやうになる。

射手の心が初冬の夜には殊に澄み渡ることができるのだ。

四

堅物といふのがある。これは鍛ひ鐵の板とか、鎧とか、兜とかを射拔くのをいふのであつて、矢の射拔く力を試すものである。

此れは勿論遠距離でやるのでは無い。今手元にある本では一寸その距離に對する定めを調べることができ無い。いや、それどころか今僕の本箱に在る射法の書、卽ち『古事類苑』の武技の部『射法三部書』、『本朝射法史』、『弓馬要覧』位なもの、中には、堅物のことは一切書いて無い。思ふに、小笠原などの流義に無いもので、極く後世になつて始まつたものであるが故に、以上の如き

割合に古い書中には載つて居無いのでもあらうか。

堅物の距離は精々五間位でもあらうかと思ふ。僕の師匠が晩年に鎧と兜を[illegible]たのを見たことがあるが、其時の距離はもつと近かつたのでは無からうかと思ふ。或は三間位であつたかも知れぬ。その時のは鎧も兜も名作物といふ程のものでは無かつたらしかつた。弓は七分位のものであつたに拘らず、鎧にも兜にも容易に矢が徹つた。

堅物を射るのは無盡根矢であるのだが、その根即ち鏃は長い柄即ち軸の附いて居るのを用ゐる。篦に此の鏃を附けると、軸の端が矢の元矧位なところまで來ることになるのである。

斯ういふ矢が堅物に徹ると、矢の羽中位のところから折れて飛んでしまうといふことを聞いて居たけれども、僕が見た時のは、的になたつたものが、本式の堅物では無かつたせいかも知れぬが、箭は其のまゝで立つたのであつた。

五

堅物のことでは、僕の師匠が面白い話をした。

或る時、五六人で、何處かの某々邸の射場へ、道場破りの積で出掛けた。的の方では到底勝て無いことが分り出すと、主人方では、堅物を射ようと云ひ出した。距離は十五間で、鍛ひ鐵を射るといふのであつた。道場破り連は、此の十五間といふので、先づ度膽を抜かれた。

で、いよ〳〵始めるといふと、道場破り連は、尾州の星野の社中の者であつたので、皆七分以上の弓で射て居たのに拘らず、皆矢が戻ねかへされてしまつて、誰の矢も徹らなかつた。

次に、主人側が射たが、此れは皆六分五六厘の弓であつたのに、當つた矢は何れも皆スポッスポッと徹つてしまう。道場破り連中全く顔色が無かつた。

が、少し考へると何うにも合點が行かぬので、客の方で一番年若であつた僕の師匠が、お矢取りは私がと云ふが早いか、跣足で駈け出した。主人側はお矢取りは私どもの方でと、慌てゝ止めたが、間に合は無かつた。

客に射させたのは鍛ひ鐵であつたのだが、主人側の番になると、矢取りの手で、並の鐵板へ墨を塗つたのと掏り代へてしまつてあつたのだ。

「やア、貴君方のと吾々のとは的が違ひますよ」

まだ子供だつた私は遠慮も何も無く、斯う大聲で云つたものでしたと、師匠は笑ひながら話した。

六

僕の師匠は關口源太と云つて、若い時分尾張へ行き、星野家に入つて修業した人であつた。富士見町(牛込門内)で三合舍といふ道場を開いて居た時分には隨分社中も多かつたやうであつた。

僕は關口氏を知つて居たのは、餘程前からであつたが、正式にその道場へ稽古に行きだしたのは、關口氏が牛込白銀町へ移つてからであつた。其所へは、故和田垣謙三氏も來た。故有地品之允氏も來た。故高木豐三氏も來た。

が、殆ど毎日のやうに稽古に行つたのは故渡邊寬綱といふ子爵と僕とであつた。

和田垣謙三氏の弓は少し引きが足らないやうな形で、少し上の方で釣り合ひを取つて居るといふ風の射方であつたが、當る日だと無暗にポンポン當つたが、出來の惡い日になると氣の毒な位

矢が倒れた。

合間には例の輕口でさん〴〵吾々を笑はせた。或る時、和田垣氏は尾崎紅葉の連中から、下總の猫實へ牡蠣を食ひに行かぬかと誘はれたが、用事があるので斷つたといふ話をして、

『其儘で、我家は澄めるは負け濁れるは勝ちにけりと云つてやつたんだが、どうです、解りますか』

と、云つた。勿論、吾々は牡蠣とも猫實とも少しも聯絡が無いことやうに思つたので、何うも解ら無いと答へると、和田垣氏は少し早口に、

『がき（餓鬼）がかき（牡蠣）を食ひに行つたといふんです。食ふ方は勝で、食はれる方は負けでせう』

と云つて快氣に笑つた。それから、直ぐ、

『かきの字のつく者は皆えらい。板垣伯でも和田垣博士でも、といふのもあります』

と、云つて、さも面白さうに笑つた。

又、或る時、和田垣氏が、

『紅葉がね、我輩の論を聞いて居て、名月や此の諸をば玉に疵と云つたから、我輩は聲に應じて名月や此の諸をば疵に玉と云つてやつた』

と、話したので、吾々は

『それは、何うも先生の方が勝のやうですな』

と、云つて、大笑ひをした。

和田垣氏はマドロス・パイプをくはへて、弓を引いたが、有地氏は葉卷をくはへたまゝで弓を引いた。有地氏は極く眞面目で、冗談口などはきかなかつた。

有地氏は、肩がヘンに引けて居るに拘らず、なか〳〵しつかりした射前であつた。弓力も老人としては可なり强い方であつた。大抵六分七八厘位なところを射て居られたやうであつた。

此れは、誰でも氣が付いたところらしかつたが、有地氏位達磨に似て居た人は一寸無からうと思ふ。氏自身もそれに氣が付いたのだと見えて、氏の署名は品之允の三字で實に巧に達磨の形を描いてあるのであつた。

有地氏の屬して居た貴族院の分科に今一人達磨さんが居た。それで、豆腐居士と署名して狂詩

を作つた人があつた。その轉結は

『〇〇分科禪味多。白眼相對雙達磨』

と、いふのであつた。豆腐は即ちおかべであるから、豆腐居士は岡部即ち子爵長職氏の戲れに號した名であつた。

七

白銀町の關口の稽古場では、よく富井政章氏とも一緒になつた。

富井氏は勿論冗談口などはきかれなかつた。その點では、和田垣氏とは全くの對照をなして居た。

富井氏はもう隨分長く關口の稽古場に來て居られたやうであつた。道具の古さなどから見て、それは明であつた。

誰でも少し長くやつて居る人は、道具などに幾らかの好みが出來て、代へ弓を一二本は買つて見ろとか、條分の矢を揃へるとかいふやうなことが必ずあるものなのだが、富井氏に至つては、

一向さういふところは見えなかつた。

何時も、赤みがゝつた塗りの弓一張きりで、矢は鷹の羽を矧いだ殆ど白箆のやうな、太い丈夫一式なのを使つて居られた。

白銀町へ關口の稽古場が移つてからは、富士見町時分からの連中は僅三四人しきや見えず、しかもそれも全く時たまのことであつたのだが、富井氏だけは月に二三遍は必らず見えるのであつた。何でも、師匠の話では、富井氏は他の人々のやうに一時熱中してから直ぐ止めてしまふやうなのでは無く、始めから絶えず同じ調子で、何時までも、止めないでやつて居られるのだと、いふのであつた。

僕は、さういふところにもよく富井氏の謹厳な性格が表はれて居るのだと見て、甚だ面白く思つたのであつた。

富井氏が見えると、何時もの弓が張られ、例の太い矢が十本程立てゝある竹筒の矢立が持ち出される。富井氏はその矢立から矢を取つて弓へ番へ、頭を少し後へ反らせて、高々と打ち上げて、勢好く一氣に肩まで引き渡して可なり長く固めて居て射放たられる。如何にもきちやうめんな、

正直な射方であつた。

八

誰が始めたとも無く、白銀町の稽古場では、滑稽な賭をやりだした。それは斯ういふのであつた。即ち、三四人集まると、四本宛射て、尺二の的の星へ入つた者から順々に責任を解除されて一番後へ殘つた者は罪として或る用が云ひ付けられる。その用といふのは、燒薯を買ひに行かせられるのであつた。かけを指したまゝ、袴を穿いたまゝで、燒薯を買ひに行かなければならないのであつた。金錢は他の連中が出すのであつた。

四月か、五月頃であつたが、師匠は京都の武德會へ行つて居て、その留守は、來る人の相手をすることなどは、渡邊寛綱氏と僕とが頼まれて居たので、二人は絶えず稽古場へ顏を出すやうにして居た。

或る日の午後、渡邊氏と僕とで頻りに射て居ると、其所へ富井氏が入つて來られた。所で、その日は富井氏の矢がよく星へ入る。其所で、僕は『今日のやうな日に燒薯の賭をやれば、吾々の

方が早速貰ひにやられちまうね』と云ふと、富井氏が『やりませうか』と云はれるので、いよいよ賭が始まつた。僕は運好く最初の矢が星へ入つた。渡邊氏もその次ぎの立てゞ星へ入れて、富井氏だけが殘つてしまつた。

まさか富井氏に薯を買はしにやる積りは吾々には無かつたのであるから、唯大笑に笑つて居ると、富井氏は生眞面目な顏で『風呂敷と金は』と云はれた。吾々は師匠の妻君に風呂敷を出して貰つて、金と一緒に富井氏の手へ渡した。

九

稽古場の隅に腰を下して居た富井氏の若い車夫が腹を抱へて笑ひこけて居る間に、富井氏は羽織も着ない袴姿のまゝで、薯を買ひにと出て行かれた。

彼の横丁は電車道になつたが爲めに今は半分以上無くなつてしまつたが、當時は極く狹い路であつて、稽古場の路次を出てから、右へ二三十間行つた向側に燒薯屋があつたのである。

やがて、富井氏は薯の入つた風呂敷を提げて歸つて來られた。

『これは恐縮でした。でも、これが和田垣さんだと興になりませんですが、先生なんだから、大きに興になりましたです、まことにご苦勞さまでございました』

と、僕が笑ひながら云ふと、富井氏は、笑ひを吞んで、

『私が薄屋から出て來ますと、知つて居る海軍士官に逢ひましたが、先方では叩頭をしながら私が不思議な家から出て來たので、ヘンな顏をして見て行きました』

と、落着いた調子で云はれた。

『いや、ます／＼傑作ですな』と、云つて渡邊氏も笑つた。

十

白銀町の稽古場へ行つた時分は僕もまだ三十を少し過ぎたばかりであつたので、力だめしだと云つては、七分位の弓を二張合せて置いて、素引きをしてみたり、八分餘の弓へ無理に矢を掛けたりしたのであつたが、師匠は笑ひながらそれを見て居て、次のやうな話をした。

『馬場さんは大分力をお出しになりますが、私も一度斯ういふことがありました。まだ私の二十

後の話で星野の家にゐた時分のことですが、名古屋の郊外の或る神社に寸五分の弓があると聞き、それに一つ精を入れてやれといふので、星野の息子二人と或る日出かけたものです。

神主に掛け合ふと、誰も張る人が無いから、到底駄目だと云つたけれども、此方は、ナニ張るだけならば、各々が張るからと云つて弓を出させて、何うやら斯うやら弦を張してしまつた。最初に星野の息子の兄の方が弦を入れやうとしたが、額のところまで引いたのみで、それからは何うにもならなかつた。

「では、僕によこせと云つて、ウンと一つ力を出して引いたんですが、頭のところまで来ると、ゴッチリ支へて毫でも動きさうもありません。おい、誰か、一本指で僕の肱を押せよ、と云ふと、星野の弟の方が、私の右の肱を一本指で一寸押しました。すると、それで、難無く楽かくツと入つた。何うだ、これ見ろといふんで、暫時そのまゝで居てから、弦を元へ戻して、弓を置いて一寸すると、一寸位の丈の棒のやうなものが弓の先をヒユツ／＼と飛びだした。おやへンだぞ／＼と云つてるうちに、ウウンと云つてひつくり返つてしまひましたね、皆な大騒ぎ

になつて、介抱してくれたので、息は吹つ返しましたがね、それからといふものは、私は決して無理はしませんですよ』

十一

『本朝弓馬要覧』の第一巻に左の如き物語が載つて居る。

『吉田印西老其古いまだ葛巻源八郎といひし頃、讃岐に下る事ありしに、好事の槍術者ありて、源八郎が射術と勝負せんと乞ふ。源八郎固辞すれども、槍術者不用、たとへ源八郎が鏃、我胴を射通すとも、一本の矢なんぞ恐るゝにたらん、唯一槍に突殺さんと罵つたてやます。源八是非なく立向うて矢を番へば、槍術者も槍を捻てかゝる、源八弦をきつて発せば、槍術者あはぬきに倒る。起きかへつて飛かゝらんとすれば、早く二の矢をつがへり。槍術者槍をすてゝ閉口し、段々誤り入りいひのぶ。傍の人、始の詞にも不似合事かなといひしかば、槍術者の云、如何にも征矢にて射貫かば始いひし言のごとくならん、源八は妙手なる哉、案に相違の鈍頭にて射侍れば、中るとひとしく悶倒せり、是非におよばずといひしとかや』

十二

『頼光朝臣の郎等季武が從者屈竟の者あり。季武は第一の手きゝにて、下針をも射はづさず射ける者也。件の從者季武にいひけるは、下針を射給ふとも此男が三段斗のきて立たらんをば得射給ふまじといひけるを、季武やすからぬことをいふやつかなと思ひてあらがひにける。若射はづしぬる者ならば汝が欲する者を所望にしたがひてあたふべしと定めぬ、己れはいかにといへば、是は命をまゐらするうへはといへば、さらば立といへば、此男いひつるごとく三段のきて立たり。季武はづさじとよつ引て發しければ、左の脇の下五寸許りのきてはづれけり。季武やすからず思ひ、又射るに、右の脇下五寸許りのきて射はづしぬ。此男さればこそ得射給ふまじと申したれ、手きゝにてはましませど、いちづに眞中をねらひ給ふ故左右へはづせばはづるゝなり。始めより其意(こゝろ)をしたまはぬ事よといひしかば、實にあやまりたりとて笑ひてやみぬとかや』

　季武の矢は二度とも覘つた元の矢坪を違へ無かつたので、從者はさういふ風にかはすことができたのであらう。これが下手の矢先に立つたのだと、反つてさうは行かなかつたであらう。孤が

下手の矢がこはいと云つたといふ話が思ひ出られて、面白い話だと思ふのである。

〔十三〕

『那須與一資高西海にて扇子の的を射、源平の稱美に預り、其榮高し、後鎌倉にて右大將家諸大名高家を召集め遊宴の折柄、鶯の來りて花をちらす事ありしに、右大將家落花らうぜきあれ射留よかし、はづしたらんは無興なるべしと、射手をえらまれしに、幸に與一資高あり、則資高をめし、あの鳥の羽節許を射て、活鳥にして得させよと仰事ありしかば、與一弓に矢をとりそへ、しばらく矢もつがはずたちやすらひて、時をうつし、又矢をつがひ引たもちてもはなし得ず、又矢をはづせる事兩三度、其隙に鶯はいづこともなく飛去けり、右大將家を始めとして諸大名皆云、惜哉鶯飛去らずば、資高上意のごとく射得んものを、何とて與一はかくまで隙どりけるといひしに、與一心やすき友に私語しは、彼鳥を射得ん事も有べし、射得ざることも有べし、射得たりとてさのみ高名ともなるべからず、射得ざる時は瑕瑾となるべきか、資高西海において稀有に扇子を射得、諸人の褒美に預り、功成名遂て身退く、無用の高名はせざるにしかじといひけりと、古

き弓物語といへる書にしるせり。舊史實錄にしるさゞるところ、いぶかることなきにしもあらざれども、いさゝかこゝにしるす』

勿論、此の話は後世の武藝者か何かゞ拵へた話なのであらう。作者の目的意外に一寸と皮肉なところもあつて、可なり面白い話である。

三、馬の話

一

『立馬曠[illegible]見菜花』といふのは、山内容堂の或る詩の結句である。馬術に巧みであつた容堂に如何にもふさはしい句であると思ふ。

容堂の父であつた雅五郎といふ殿様は、馬が好きであつたので、馬を乗り馴らす際に、容堂をば殆ど馬丁の如く使つた。

舊馬術では、駒を乗り馴らすのに、輪乗を掛けたりするのには、馬の頸へ綱を結んで置いて、

下に一人居てその綱を執り、騎者の指圖に從つて、その綱を引いて、馬の方向を種々に變へさせるのである。これを和鞍の方では頸繩と云ふのである。頸繩を引くのには、勿論其足で尻をからげて驅け廻らなければならないのだ。

容堂は雅五郎氏の爲に頸繩を引いたのであつた。

傍系とは云ひながら、大守の連枝たる貴公子であつたのだから、頸繩を引くことまでやつたのは、馬の稽古としては、十分なもので、さういふ貴公子に取つては稀有なことであつたであらう。

容堂の馬術は全く殿樣離れのした達者なものであつたと傳へられて居る。

京都で參內の時などは、馬を川へ乘り入れ、道も無い堤を乘り上つて、『清公家どもは此ういふ道を通れる氣遣ひはない。皆來い／＼』と云つて、ヅン／＼進んで行くといふ風であつたので、遲く宿を出でながら、誰よりも先へ參內したといふのである。

二

或る時、式臺先で馬に乘つて鐙を踏むと、カチンと云つて、力金が外れて、鐙が延びた。容堂

は『喜五郎々々々』と、馬頭を呼んで、鐙を直すことを命じた。馬頭は力革の何の邊の穴へ嵌めて宜いのか分らないので、一寸躊躇つて居ると、容堂は『上から三つ目』と直ぐ云つた。何年にも自分では鞍など扱つたことの無かつた容堂が、自分の鐙のことゝは云ひながら、直ぐに穴の順を云ひ得たのは、馬術者の心得を忘れなかつたものとして、稱讃に値することだと、その時の馬役であつた僕の父は語つた。

三

容堂は仙臺馬の松島といふ馬が好きであつた。が、此の馬は上肝の荒馬で、乘らうとすると蹴つたり、跳ね上つたりして、扱ひ難い馬であつた。

僕の父が馬役になると、直ぐ松島の乘せずまひをする癖を直しにかゝつた。馬を馬場の眞中へ引き出して、馬頭に『貴樣しつかり押へて居れよ』と云ひ付けて置いて、僕の父は、松島の右から乘つて直ぐ左へ下り、直ぐ又左から乘つて右へ下りるといふ風に、乘り下りを續けざまにやつた。毎日々々それを續けながら、一方では厩へ行つて、飴を手の平へ乘せて食はせたりして、だん

だんと馴らして行くうちに、さしも荒れ立つて居た馬の氣も次第に落ち着いて來て、見違へるやうにおとなしくなり、乘せすまひなどはもう全くしなくなつた。

それまでは、容堂の愛馬であつたに拘らず、松島が餘り荒いので、馬係のものが心配して、何か口實を設けて、成るべく容堂の乘用には供さないやうにして居たのだが、此に至つて、もう何の心配もなく容堂の乘用に供したので、容堂はその松島ばかりに乘つて出るやうになつた。

四

所が、或る時、僕の父が式臺へ松島を横付けにして、その口を取つて、主人の出て來るのを待つて居ると、お坊主が主人の草履を持つて來て、式臺へ置いた。

『ハテ、少し後過ぎるな』とは思つたが、馬はもうどんな事があつても跳ねる氣遣ひは無いと信じて居たので、その儘にして待つて居た。

其所へつか／＼と出て來た容堂は草履の位置を見ると、突と馬の肩へ沿うて立つて、右の足を伸して草履を自分の方へと引き寄せて、それを穿いて、馬に乘つた。流石に心得のある動作だと、

僕の父は心の中で感服したといふのである。

五

容堂が土佐藩の軍艦に、夕顔船とか、胡蝶丸とかいふ風に、源氏五十四帖から選んで名をつけたことは誰も知つて居ることである。

或る時、容堂が近侍の者に、『馬に名をつけるなどはいらんことである。馬はそれ〴〵毛色が異つて居るのだから、青なら青、栗毛なら栗毛で分るではないか、以來馬の名を稱へるのは止せ』と云つた。

『上には斯ういふ御意だが、何うしたものであらう』といふ相談が僕の父にあつた。僕の父は『いや、それならば宜しい。これから、馬の名はよしてしまつて、青とか栗毛とかいふだけにしよう。それで、上が青を引けと仰しやつたら、有るだけの青馬を三匹でも四匹でも御前へ引て出ることにしようでは無いか』と、云つた。

その後になつて、容堂が栗毛をと云ふと、馬役は栗毛ばかり四五匹容堂の御前へ引き出して、

『何れに致しませう』と伺つた。

『同じ毛の馬がさう何匹もあるのか』と、容堂は笑つて、『それでは、名が無ければならん譯だな。僕が一つ付けてやらう』と、云つて、容堂自身で馬にそれ〴〵名をつけた。

それは皆、胡蝶、篝火、須磨、明石といふやうな、源氏の帖の名から選んだ優美なものであつた。

六

『馬などは乘つて置くには及ばん。馬になどゝいふものは無用なものだ、といふ御意なんだが、何うしたものだらう』と、僕の父に、容堂の側付の者から相談があつた。僕の父は斯う答へた——

『他の殿樣だとさういふ譯にはいかんが、此の殿樣なら、馬が何れ程暴れても落ちる氣遣ひは無いし、その他の間違ひもある氣遣ひは無い。それは私が請け合ふことができる。さういふ御意なら、馬は一切乘らずに置てみようぢやないか』

それから四五日經つと容堂は張り切つた松島に乘つて、友侯訪問か何かに出掛けたが、その歸りに、馬が烈しく駈け出さうとした。引つかけられては堪らぬので、容堂は兩肱へ手綱をぎりぎり捲き付け、鞍の後輪へ背中を附けるまでに、反り身になつて、馬を抑へつけて、駈けださせずに邸へ歸つて來た。

出迎へた馬役に口を取らせて、下りると、『馬をちと乘つて置けよ』と云ひ捨てゝ、ツーッと奥へ入つてしまつた。

七

馬を馭するは人を御するが如しなどゝ昔から云ふのであるが、下手な馬術者や、馬喰ふは馬を馴らすのに、如何にも亂暴な方法を用ゐたことが、『本朝弓馬要覽』の馬術の部に書いてある。その一二を擧げると、左の如くである。

『下口つよき馬又は首根强き馬は、土俵を付けて仕込む事』

『舌を出す馬をば、火箸を燒て、出す舌に押當て直す事』

『込馬をば首に縄を付置て、込時、彼の縄をつよく引しめ、咽をいためて仕込事、總じて、下桿の馬をば鞍下鐙すれなどに物を當て乗事』

『[illegible]入外悪しき馬、又人喰ひ馬をば、棒を焼き、口の内へさし入れて、咽をかきまはして、馬に惘を付けて人を欺く事』

『去博勞跳馬を直すことの勝れて得手なりとつねに語れり、或る時さる人いとうつよく跳る馬を持ちけるが、彼者にたのみて乗にければ、件の馬に、陰嚢に細糸を付て腹帯に結付乗けり、これども、彼馬其仕懸を用ひず、なほつよくはねければ、乗人も鞍にたまらずして落ちぬ。まして馬は陰嚢をしめ切て其傷にて死にけり』

『馬の歯を磨て、歳をなん若く見せて、利買をなして世を渡る者あり……年老ぬれば、馬にかぎらず、人も歯の長伸るもの也、さるによりて、鑢疵などをかけて、歯のたけを磨詰、歯の内をも掘て、ふしかねをさし入、六歳歯の、七歳などゝ云ひて、人の目を闇す事なり、しかれども揃へたる歯なるゆゑ、向歯、牙のみわかきとみゆれども、奥歯は揃へがたきゆゑにながきなり、さるによりて、物食時奥歯は合ふといへども、向歯はさらに合ざるにより、大豆、粥、糠をこぼ

して、萬事かたし、まことに、此時每に、其人を馬のなどかうらめしく思はざらんや』

八

しかしながら、正法の馬術の本意は濫りに馬の本性を出けるべきもので無いと云つて、次の如く說いてある。

『むかし、或乘人のいへるは、馬の生れ付より外の足を乘事なかれ、强て乘れば、四足おとろへ村血出來てあしく、後にはつかれあしとなり、早き驅もとまるものなり、ましていはんや、翔など乘度每に追事なかれ、必ず馬の氣亂れ、息をして病馬となるべし、此義は乘人ことにつゝしむべき事とかたれり、しかあれど、翔は堅きを碎き、危きをのがるゝものなれば、時々は翔をもくるしからざる事なり』

『或人の云ひしは、馬乘者の心持よくして、執行のいたりたらんは、其家もさかんにして、流義四方にみち、子孫繁昌ならん、下手の色々と惱まし、痛み勞れたるをも、なにとなく、其あしくなりたる心根をよく知りて、おのづと直るやうに乘るなり、少しも私の思ひにひかれず、たゞ馬

の困窮し一曲となり、朝にすたらんことをなげきて、馬の爲めとばかり思ひて乘るは、おろそかにはすることなく、無理を乘らざるゆゑ、我と馬と和合になりて、曲ある馬は曲を忘れ、直なる馬はいとつのらなん』

『又外あしき馬も、口よく乘らば直る事ありと古人もいへり……馬は本より引重致遠の德を具へて、人に隨ひ里に住ものなり、此故に、奥歯と牙との間二寸ばかりがほどは、歯はへざるものなり、是自然の理にして、轡を噛べき所以也、しかれども、底口痛むか、または、かうかけ引か或は飽乘をせられし馬などは、必ず轡をおそれて、はめはづしあしくなるべし、能々心を付て、其趣を乘ぬれば、大概直るもの也』

四、槍の話

一

『宗耕が云けるは、可兒才藏、寶藏院に逢て云には、我元來槍法を知らず、槍は如何にして勝を

得るやと、院答、上段下段相かぶりの外なし、才藏解らず、主人福島左衛門大夫へ、この術を習はんと告ぐ、福島許す、可見南都に往て、院に此術を習ふこと日あり、歸つて戰場に赴くに、還つて怯心起て進むに難し、因つて復南都に往き、實を以て告ぐ、院曰、知ること未だ半也、可見更に學ぶこと數月、得て歸る。是より敵の槍道を視ること明にして、廼我が勝路を得たりと。又この寶藏院、今に續目には、關東に下て拜禮をなす、此時僧の從に槍を持たすと。寶藏院退院しては、觀音院と號す。又この院にては、十文字とは稱せず、月劍と呼ぶ」これは元祖寶藏院は、もと直槍なりしが、或とき八日の月影水面にうつるを視て、あはれ、直及に斯く横手を加へん者をと、因て十文字の形を作つて、月劍の名ありと云ふ』

二

所で、寶藏院のことは『武藝小傳』に據る時は、左の如くである。『寶藏院覺禪房法印胤榮は中御門氏、南都の僧徒、釋門たりと雖も、刀槍の術を好む、柳生但馬守宗嚴と共に刀術を上泉伊勢守に學ぶ、又大膳大夫盛忠なる者あり、槍法の達人なり、諸州を修行して南都に來る、胤榮盛忠を

寶藏院に留めて、槍術を學ぶ、既に熟す、履を取り胤榮に從ふ者多し、中村市右衛門尚政獨り其宗を得たり、胤榮釋門に在つて武事を業とするもの固より本意に非ず、吾後嗣必ず武事を學ぶ可らず、武器無きに如かずと、故に兵器若干、以て中村に授く、寺中兵器無きなり、後關補律師胤舜房胤舜十九歳の時、胤榮寂す、時に慶長十二年丁未正月二日享年八十有七、胤舜想ふ吾が此寺は、釋氏の遺經の故に非ず、唯先師胤榮槍術の故なり、其槍術を繼がざるべからざるなりと、寶藏院の邊に奥藏院なる者あり、日蓮黨の僧なり、此の僧先師胤榮に從つて精妙たり、故に胤舜これを招き、日夜勉習、終に其の極に至る、槍法の神に入る者と謂ふべきなり、慶安元戊子年正月十二日、享年六十にして逝く、覺舜房法印胤清、胤舜の嗣法を繼ぐ、又槍術の妙を得たり、元祿十二己卯年四月四日逝く、六十五歳、或は曰く、胤舜十六歳の時胤榮逝くと、按ずるに胤舜は天正十七年生なれば、慶長十二年胤榮逝く時、十九歳ならんか』

三

『骨董は慶長の頃、江州佐和山の主、大谷刑部始めて作る所也、刑部は病ふ事ありて、手の中心

にまかせず、よつて管鑰を工夫すと也、事始めに云ふ、手ほう左馬之助始めて作ると有。
按、手ほうといふ苗字未だしらず、さだめて異名なるべし、手ほうといふによりて見れば、刑部が手のうち自由ならざるといふにひとし、刑部を始めは左馬之助といへるか、まさしく同じ人なるべし』

『今もてはやす管やりといふものは、元祖すやり上手なりしが、左の大指を落して、たゞつかはれぬゆゑ、手くびにくだを結付てつかひし也、其弟子ゆびの至きをわすれて、同じ管をもちひ、今に至りては、はしりのため、つきのためなどゝ遁辭をかまふ、今は妙術あるにもせよ、もとは變より據なく出たる管なり、其術の巧拙を論ずるにはあらず、その本意を失ふをこゝにしるすのみ、道理を知らぬ管やりつかひが聞かば、さぞ腹立べし、よくがてんがゆかば、管をくだきて可なり』

四

『大内無邊は出羽國横手郡大内莊の人なり、戸倉川の滸に生長し、鮭魚を捕を以て業となす、其

泳長竿を取て上りくる魚を鉤子て砂上へ撥あげ、日々數十尾を得る、遂にこれを以て槍を弄ふ術を工夫し得たり、郡中の士人從つて遊ぶもの多し、無邊の業ますく\進み、近國より來り學ばむを請もの、陸々として算るに暇あらず、無邊が云く、我家貧しく母老たり、一日も徒に曠隙を費すべからず、我業を學ばむとならば、共に川邊へ來れとて、從遊の士を具して、戸倉川の邊に至り、長竿を揮うて水を鉤子ひきかけず、從游の士あやしみ見て、先生何の戯をなすや、無邊云、鮭魚さかりに上り、我既に數十を得たり、公等これを見ることなきやと云、從游の士驚いて云、先生狂せるや、更に一尾の鮭魚なしと云て、且怪み、且疑ふ、無邊また云、我竿の上に數十の魚あれども、公等の眼に一尾の鮭魚なし、公等の眼中は川の中にあつて、我手を見ず、これ竿頭に魚なき所以なり、重て我手を見て、魚の有無を知と云て、また川水を鉤子す、一人の云く、魚あり大なりと云、無邊笑うて云ことなく、又川水を鉤子す、一人の云く、魚あり小なり、無邊また云ふことなく、川水を鉤子す、一人の云く、魚なし、其時、無邊その士を招いて云く、公すでに我業を知り、これより後うむことなくば、自然精妙に至むと云、その人云く、精妙は我にあり、至も至ざるも皆これ我によれりと云て去、此人別人にあらず、山本郡の人にして、後に無邊の名を

つぎ、山本の無邊と云これなり、或云、大内無邊槍法に善しと云ふを以て、出羽の國の一城主に仕ふ、城主の家人みな推て師となす、無邊すなはち同國山本郡眞弓山の神に祈て、其法の次序を立んと欲し、夜々山上に詣づ、路暗くして松杉の枝垂たれば、白日なほ人の昇り傾ふ處なるに、夜は更たり伴はなし、寂寞き時なるに、誰とも知ず、樹木の際より、ゐいと云聲と共に、枯木の枝を投出したるが、無邊をうと驚かけ、その枝を取、とれば投出し、投れば取ること數十次に及ぶとき、無邊が立たる岩石潰崩て淵底に陷ると云ども、無邊けし飛んで傍に立てり、時に大雨淋漓たり、無邊雨中に立つて寐とせず、漸く神前に至り、通夜して神助を祈ること懇々たり、其曉神告けて云く、前に汝を試みしことあり、汝よく思はゞ必自得すべし、二度我に向つて無用のことを祈るなかれとなり、無邊家に歸り、即ちこれを推測して、槍法の次序を定むと云へり、其後無邊の子上右衞門この技をつぎ、世に名あり、上右衞門の子を清右衞門と云、尤祖父の藝を襲で、精妙に至る、其門人椎名靱負助この術を傳ふ、世人これを神變なりと云、大内無邊流と稱するに至るとなり」

五

或る殿樣を教へて居た槍の師匠が、高弟を度々代稽古に出したが、或る日その高弟が師匠に斯う云つた。

『殿樣も此頃では大分御上達のやうですが、此方からもちと突いてみませうか？』

師匠は、それは以ての外だといふ顏付で、次のやうに答へた。

『上つ方のお稽古は吾々とは全く譯の違ふものだ。俺は少し量見があつて、殿樣をあゝいふ風にお稽古申し上げて居るのだ。おれの槍先きには名人の師匠でもわけなく突き留めることができるといふお心持ちにさへして置きさへすれば、いざとなつた場合存外剛敵をお仕留めになることもあらう。それをお前が突いて見ろ、さういふ英氣が挫けてしまつて、唯の下手になつてしまひなさつて、俺の考へも無駄になつてしまうのだ。いや、決して此方から突いてはいかぬ』

僕は此の話しを甚く面白いと思ふ。此れに就いて思ひ出すが、或る義太夫語が『素人の稽古だと、でき無いといふところは、宜い加減にしてしまうのですが、玄人の稽古では、でき無いでは

すまさずに、幾月かゝつても構はず、其所ができるまでやらせます。さういふところが、素人と玄人のちがひです』と、話すのを聞いたことがある。

五、劍の話

一

劍の長短は何れに利があるかといふ議論は可なり昔からあつたものと見えて、古書に左の如き記述がある。

『横田備中守申分、長き刀は大勢に渡り合て戰候へば、後には切先下りに成て、敵きれぬものにて御座候、美濃守申候如く、初心の間は盲打を仕、切先を打下け、多分土に切込むものにて御座候、數度手に合たる者と、合ざる者との替りは、爰にて御座候、土を切初心の者を、切馴たる者が切には造作も無き事にて候、平加成瀨と信虎公との御合戰の如く、日の内に度々の合戰に成ては、長き物は皆切先下りたる由に候、昔も義經、芳野山にて忠信に太刀を給はるに、寸延たるは

大勢に逢てはあしかるべしとて、二尺七寸の大刀をたまはりたりと承はり候、去ながら相手にむかひ、又は二人三人をしとむる事は狭き場所にてさへこれ無く候はゞ、腕に叶たらば長きにしくはこれ有るまじく候』

二

『小幡山城守申分、右之業申候處、何れも尤にて候、先年小田原より、眞影流兵法者大和田源内と申す者參り、弟子數多取、指南仕り候、大和田申候は、一尺五寸の脇差と、三尺の刀と打合候に、相打に成と申候、つゞじが崎に切籠り候者これ有り候を、彼大和田行合て、一尺五六寸の脇差にて仕候、相手は三尺程の刀にて、ひきゝ家の內にて相打に仕候、相手寸延の刀故、戸に切込たる處を、何の手も無く仕留候、其後大和田、身延へ參詣仕候に、道にて殺害人に行合、刀は拔ず、脇差にて切合候、是も相手は三尺程の刀にて御座候、相手に仕、大和田腕を切られ候、大和田が脇差は相手の刀に當り申候、大和田切倒され候處に、もろ角豐後守參り向、相手を仕留申候、大和田、兵法は能もつかひ候へども、相手にあはぬ故、不穿鑿なることを申候、其ゆへは、三尺

の刀と、一尺五寸の脇差とは、一尺五寸おくれ候へ共、片手打に仕候故、三尺の刀と同寸になる也、手を添へて三尺になる道理なれば、三尺の刀と相打にしては、先の刀手に當ると云合點仕らず、算打、木とう打ちなどの如く、眞劍も少の請はづしにて、かちなりと心得候ては、すべて手にあはぬ兵法者は心得ちがひ落度有べき樣に存ぜられ候、大和田、初はつゝじが崎にては、狹き處なれば、脇差にて仕候事尤にて候、身延の途中にて、脇差を拔も不巧者なり、一度の利をいつも能事と思ふは僻事なるべし、北條早雲の歌に、いる道具いらぬ道具を思案していれども用ひいらずとももて、と讀給ひしは尤の事也、美濃守申如く、刀にて働れぬ所の脇差也』

『山本勘助申分、何も申處尤至極にて候、塚原卜傳は、常に二尺四寸の刀をさし候へ共、仕合などの時、又は放打の者、其外覺悟仕たる時は、いつにても三尺程の刀を以て仕候由承及候、爰を以案じ候得ば、長刀のあつかはれぬ場所にては、短き物にて仕候道理と一つにて御座有るべく候』

要するに、此の論は、廣い場所では、長刀を使ふのが正法であつて、狹い場所などで、長刀を揮ふに不便である場合には、短刀を使へといふのに歸着するのであるから、吾々が今日考へてみても、道理ある言といはざるを得なからうと思はれる。

それにつけて憶ひ出すのは、故後藤象次郎氏と坂本龍馬との話である。二人とも人を斬つたのであるが、その場合が各異つて居るので、二人の直話が大に當時の人の興味を引いたさうである。

三

故後藤象次郎氏は、京都で或る公家を護衛して居つて、そのお公家を襲撃した浪士を斬つたのであるが、後藤氏はその後、屢、「刀は長いのに限る」と云つたといふのである。それは、戸外の廣場での鬪ひであつたのだから、皆後藤氏の說に同じた。

坂本の場合はそれとは異つて居た。坂本は木屋町か何處かの宿で、新徴組の者四十人程に圍まれて、それを切拔けたのであるが、その時の鬪ひは屋内で行はれたのである。坂本は後に斯う云つたと傳へられて居る。

「劍法などは、私の出會つたやうな場合には全く用をなさぬと思ふ。廣場で小人數の者同士が、さア來い來れと正々堂々と相向ふ場合でゞもあつたら、長刀を振かざして、所謂劍法の祕術を揮ふ餘裕もあるのであらうが、天井の低い室内での亂鬪では、私の用ゐたやうな少し長目な脇差で、

剣法も何もあつたもので無く、唯滅多矢鱈に横なぐりになぎまくるのが宜いやうだ』

四

その時の有樣は、坂本自身の直話では次の樣な風であつたといふのである。

坂本は新徴組の者が攻め寄せたと聞くや否や、長目の脇差を帶し、六連發の短銃を提げて階子の上に立ち現はれた。階下には新徴組の者どもが槍襖を作つて居たのだが、坂本が現はれたのを見るといふと、皆が唯ごた／＼と押し合ひ始めた。貴樣行け、われ行けと、てん／＼に他人を先頭に立たせようとする爭であるらしかつた。

『なまなか多勢より、死を決した一人の方が、さういふ場合には強いものだ。寄せ手の方では、誰も最初に死に面するのは厭であつたと見えて、誰一人自ら進んで先登しようとするものは無くして、誰も彼も他人を先頭に立せようとする。それでその結果一番弱いものが先頭へ押し出されるやうになつたらしい』斯う坂本は語つたと傳へられて居る。

やがて、敵は階子を上つて來た。坂本は短銃で一發喰はした。その敵は身を飜して落ちた。續

いて二番手が上つて來る。それも一發で落ちた。三番手が來る。これも打つ、落ちる、さういふ風で五人まで打つたのだが、皆落ちるには落ちたけれども丸が中つたやら、中たら無いやら、更に分らない。で、最後の一發だけは確に中たるやうにと、敵をできるだけ間近へ引き付けて、銃口を殆んどさし付ける程に思つて、引鐵を引いた。これも無論落ちた。

後で聞くと、その新徴組には負傷者は多勢あつたのだが、即死は一人のみであつたといふのだから、多分その死者は坂本の最後の彈に中つた者であつたのであらう。

五

『銃の音は平常試めした時には可なり大きい音だと思つたのだが、此の時には銃の音が如何にも小さかつた。もう少し大きい音のする銃であつたら宜かつたのにと思ふのであつた。自分では落ち着いて居た積りであつたのだが、實際は可なりあがつて居たことは、それでも知れるのだ』

坂本は笑つてさう話したといふのだ。

そのうちに、敵は幾人も二階へ上つた來た。坂本は前に云つたやうな長い脇差を揮つて、それ

で亂打奮鬪した。やがて寄せ手の引き間を見て、二階の窓から屋根へ出て、闇にまぎれて屋根づたひに遁れてしまつたといふのである。

六

坂本龍馬は中岡愼太郎(實名石川清之助)と共に、慶應三年十一月十五日の夜、京都河原町の近江屋新助方の二階で、二人の刺客の爲めに殺されてしまつた。

所で、その刺客は紀州の三浦安の黨であらうとか、近藤勇等であらうとかいふやうなさまぐな說があつたのだが、確な事は分らずにしまつたのである。

所で、明治三十三年頃になつて、俺が坂本を斬つたのだといふ人が現はれて來た。その人は、その時分遠州金谷ヶ原とかに居た今井信郎といふ人であつた。その人は幕府旗下の士で京都へ行つて、新選組か何かに加はつて居たのであるが、坂本と中岡を斬つたのは、此の今井と桑名藩の渡邊吉太郎といふのと、京都の與力の桂隼之助といふのと、今一人とさう四人であつたといふのである。所で、渡邊も桂も鳥羽の戰爭で戰死して、あとの一人の方は生きて居て、顯官になつて

居るため、當人のたつての頼みで、その名をいふことができ無いと、今井は云つて居るのであつた。

七

今井の直話だといふのは、次の如くである『十一月十五日の夜、先斗町で酒を飲んで、十時餘程過ぎに、才谷（坂本の變名）の寓居の河原町蛸薬師油屋へ參り、私共は信州松代藩のこれ〳〵といふものです、坂本さんに火急に御目にかゝりたいと申しました處、取次の者がはいと云つて立つて行きました……其中に取次が此方へと云ひますので後へついて二階へ參りました……見ますと二階は八疊と七疊の二間になつて居ました。六疊の方には書生が二人居て、八疊の方には坂本と中岡が机を中に挾さんで坐つて居りました……私は初めての事ではあり、何れが坂本か少しも存じませず、外の三人も勿論知りませんので、早速機轉をきかして、やあ坂本さん暫らくと云ひますと、入口に坐つて居た方の人がどなたでしたねえと答へたのです。それと云ひさま手早く拔いて斬りつけました。最初額を一つたゝいて置いて、體をすくめる拍子、横に左の腹を斬つ

て、それから踏み込んで、右から又一つ腹を斬りました、此二太刀で流石の坂本もうんと云つて仆れて仕舞ひましたから、私はもういきついた事だと思ひましたが、後で聞きますと、明日の朝まで生きて居たさうです。それから中岡の方です。私共も中岡とは知らず、坂本さへ知らなかつたのですから無理はありません。坂本をやつてから、手早く腦天を三つほど續けて叩きましたから、そのまゝ倒れて仕舞ひました。御話しますれば長いのですが、此の間ほんとに電光石火で、一瞬間にやつて仕舞つたのです。然し、室へ這入ります前に、私の直ぐ後へ渡邊がついて參りましたが、それが腰の鞘を立てゝ梯子を上りましたので、六疊に居る書生が怪しいと見て、それと聲を掛けましたから、少し手順が狂つたのです。それで四人とも坂本の室へ這入り込む處でしたが、書生が聲をかけたゝめ、渡邊と桂は早速に拔いて、六疊で書生と切合ひ、其間に私共は八疊の方でやつゝけたのです。書生は渡邊と桂に斬り立てられて、窓から屋根傳ひに逃げて仕舞ひました。其の夜は佐々木只三郎の處で泊りまして、翌日市中の噂を聞くと、却々大變な騷ぎです、何でも皆是れは新選組の仕業だらう、多分は紀州の三浦休太郎(安)が新選組と合體してやつたのだらうと云ふ風評です。それに其の晩渡邊が六疊へ鞘を置て歸つて來ましたが、その鞘が能く紀

州の士の差した高轄に似て居りましたから、愈是れは三浦の仕業に違ひないと云ふ事でした。暫らくたつと果して土佐の若い者が三浦の家を襲ひました。すると、其の時丁度近藤（勇）が其處に居合せて、一所になつて追ひ歸しましたので、愈斬つたのは、三浦と近藤だと云ふ風說が高くなりました』

八

今井信郎の直話なるものは一見一寸事實かも知れぬと思はせるものであるに拘らず、坂本中岡が斬られたといふ報を得て最も早く駆け付けた谷干城氏の說に據ると、甚だ疑はしいところの多いものであるといふのである。

第一、實際の刺客の數は決して四人では無く、二人であつたといふのである。第二には、今井の話では、六疊に三人書生が居つたといふのだが、實際は、坂本、中岡の外には坂本の僕が一人居たのみであつたといふのである。第三には、書生の逃げ出たといふ意の事が甚疑問だといふのである。第四には、坂本と中岡は机を中にして坐つて居たのでは無いといふのである。第五には

坂本及び中岡の傷の工合が今井の云ひ口とは何うも合ひ兼ねるといふのである。第六には、刺客は松代藩の者だと云つて來たのでは無く、十津川のものだと云つて來たといふのである。

九

谷氏の話つたところは、左の如くである。

『此坂本の斬られたと云ふ報知のあつた場合に、直ぐ驅け付けて行つた者が私と毛利恭助と云ふ者である……私が行つた時は最早疾うに後になつて居る。それで行つて見た所が、丁度階子の上り付けた所に坂本は斬り倒されて居る。夫からして、階子を上つて左に行き詰めた所が、即ち京都風の窓がある、御承知の通り、京都では町に向いた窓は大きな閂を置いて其へ泥を塗つてある、なか〳〵押ても突いても破れべきもので無い、其下に龍馬の僕が斬倒されて居る。そこで右手の方の坐敷には即ち中岡が斬られて居る、もう阪本は非常な大傷で、額の所を横に五寸程やられて居るから、此一刀で倒れねばならんのであるが、後からやられて、背中に袈裟に行つて居る。阪本の傷はさう云ふ次第で、それからして、中岡の傷はどう云ふものかと云ふと、後から頭にか

けて後へ斬られ、それから又左右の手が斬られて居る、そして、足を兩方ともになぐられたものおやから兩方斬られて居る。其内倒れたやつを又二太刀やつたものであるから、其後からやつた太刀と思ふのは殆ど骨に達する程深く行つて居るけれども、膽に遠いものであるからして、なかなか元氣な石川でありますから、氣分は至つて慥である』

十

『そこでまあ一體どう云ふ始末であつたかと聞いて見ると……阪本の所へ來て二人が話して居る中に、十津川の者でござる、どうぞ御目に掛りたいと云うて來た、そこで取次の僕(阪本の僕)が手札を持つて上つて來る、中間は手前に居つて、阪本は丁度床を後にして、前に居つた。それで二人で行燈へ頭を出して、其受取つた名札を見る、讀む暇はありませぬ。見居る所へ、僕が上つて來るに付いてすつと上がつて來た、そして置いて、矢庭にコナクソと云つて斬つた。それで手前に居つたのが中間である——行つて見ると位置も違ひ、机などを列べて居つたといふけれども、そんな譯でなかつた、矢庭に二人が名札を見やうとする所へ斬込んで來た——中間を先きに

やつた其言葉は所謂コナクソの一聲、そして斬られた。その時はつと思ふた時に、阪本は後の床に刀があるから、向いて刀を取らうとする様だけは覺えて居る、自分も直ぐに短刀を取つたけれども、奈何せん、それを取つたなりで拔くことは出來ぬから、振廻し、向ふは後へ退り〳〵なぐられた、そこでもう手はきかぬ様になつたから、唯向ふに武者振り附かうとすると、兩足をなぐられて仕舞つた、それで足が立たぬやうになつて、仕方がないから、其儘に倒れて、斬らせて置くより仕様が無い、其儘倒れて居つた、さうすると、もう宜いもう宜いと云うて出て行つた、――賊の云ふた言葉は、コナクソといふ言葉と、もう宜いといふ言葉の外聞きはしない――そこで阪本はどうしたであらうか、どうも分らない、分らないが阪本も素より斬られた、今の中岡が斬られて倒れて暫らくして居る中に、阪本が倒れて居たが、すつと起上つて、行燈を提げて、階子段の傍まで行つた、そして其處で倒れて、石川刀は無いか、刀は無いかと二聲三聲言うて、それでもう音が無い様になつた、斬られて居つた所は八疊の間であつたけれども、兎もあれ、立ち上つた儘、階子段の傍まで行燈を持つて行つて倒れたといふのが、是が即ち石川の話』

「それで石川の云ふに、なか〳〵實にどうも鋭いやり方で、自分等も隨分從來油斷はせぬが、何うする間もなつた、コナクソといふ一聲でやられた、斯う云ふ話であつた。」

「それからして、今の傷から云〳〵ましても、此人（今井を云ふ）の言ふ所に依ると、先づ其横臺を一つたゝいた、是は何か話にでも聞いたものではないか、此額をやられたのは五寸ぐらいやられた、それから稍々似て居るが、横腹を斬つた、又踏み込んで兩腹を斬つたといふのだが、それが深い傷といふのは、横に眉の上をやられて居る、それから後から袈裟にやられた、此二つが先づ致命傷、そこで阪本は何ういふことをしたかと云ふと、何うも分らぬけれども、是も想像が出來る、自分は刀を確に取つたに相違無い、刀を取つたが、もう拔く間も無いから、鞘越しで受けた。それで後から袈裟にやられて、又重ねて斬つて來たから、受けたか、太刀折の所が六寸程鞘越しに切られて居る、身は三寸程刄が倒れて、鉛を切つたやうに倒れて居る、それは受けたか受流したやうな理窟になつて、そして、其時横になぐられたのが額の傷であらうと想像される、傷のと

ころから云ふても、此人の言うて居る所とは全く違ふ』

十二

『是は何者の所業であらう、誰にやられたかといふことに付ては、未だ今に心に掛けて詮議中である、石川の判斷では、これは何うしても人を散々切つて居る新選組の者だらう。それでコナクソ（こん畜生の意味）といふ言葉に就て判斷した石川の云ふに、どうも四國人であらう。コナクソといふことは四國人が能う云ふが、土佐の者では無からう、土佐の者は其時分石川を斬る者は無い、皆殆ど有志は一致合體して居る時であつた。そこで一つの證據が殘つて居るのは、刀の鞘がある……コナクソと云ふ言葉ともう宜いと云ふ言葉の外に賊の殘して行つたものは刀の鞘だけである。それで石川は誠に遺憾千萬である、甚だ不覺を取つた、片時もやらなければ皆有志の徒がやられるから、速く事を擧げいといふことを頻りに云ふた、そこで石川は今申す通り十六日の午後の一時か二時頃昔で云ふと八つ時ぐらゐにとう／＼死んだが、其死なぬ前に傍に居たのは、即ち今の宮内大臣田中光顯、是も土佐の白川屋敷に圍つてあつた浪人組で、即ち自分の大將がさ

うい ふ災難に遭うたものであるから、田中が取敢ずやつて來た、それから田中が石川を慰める、是は貴樣の傷は餘程淺い、井上を見よ、聞多はあの通り酷い傷だが、癒つた、貴樣は十分に癒るぞと云ふて、力を附けた、併しながら、後から斬つたのが腦へ幾分か掛つたものと見えて、次第に嘔氣を催し、吐出して、とう〳〵翌日の八つ前ぐらゐに斃れた』

十三

『石川が斬られたのはその通り十五日であるが、それより前に新選組に元居つて意見が分れて、高臺寺といふ寺へ行つて居つたものが十四五人あつた、伊東甲子太郎といふのが頭であつたが、その甲子太郎が十八日の夜新選組の者に殺された、新選組の者は、甲子太郎を殺して置て、さア伊東が災難に遭うたから片時も早く參れと云つてやつた、高臺寺組の居合せた者が七八人程皆行つたが、待ち伏せて居た新選組の爲め皆殺されてしまつた、所が、その晩は伏見の方へ行つて居て高臺寺に居合さなかつた者が二三人あつた、それだけが斬り殘された譯である、それで、其の斬り殘されの者どもは初め白川の土佐屋敷へ來た、白川の土佐屋敷はあの時分は野原であつて淋

人が大變居るが、危險であるから、もう不用心故、薩摩の屋敷の方へ頼んだところが、こゝも危いと云ふので、伏見の薩摩屋敷へ匿つて居つた、其處で、此の斬り殘され者等は元々新選組に這入つて居つたものであるからして、刀に見覺があらうと云ふので、私は毛利とそれから彼の薩摩の中村半次郎と三人で、伏見の薩摩屋敷へ行つて、彼の甲子太郎の一類の者に會うて、其の刀の鞘を見せた』

十四

『さうすると、此の二三人が評議して見て、是は原田佐之助の刀と思ふ……と言ひだした、……成る程原田佐之助といふのは、腕前の男だ、新選組の中で先づ實行委員と云ふ理窟で、人を斬りに行くには何時でも先に立つて行く、そこで私などが、はァ成る程何うも其擧動と云ひ、如何にも武邊場數の者であらう。何しろ敏捷なやり方である。何うしてもそれに相違無いと云ふので、最早一人は原田佐之助、其の他斬つた者は新選組の者に相違ないといふことにまあ決定して居る』

「それでまあ全體さういふな有樣で、此の時のことは、私等の國の者等の考へも、元紀州の光明丸といふは丸と衝突の時に、坂本等が非常な激烈な談判をして償金を取つたから、其恨に紀州人が新選組を遣はしてやつたであらう、そこで紀州の巨魁は今の三浦安――三浦久太郎に相違ないから、即ち新選組を煽動して斬らせたであらうといふところからして、誠に詰らぬ壯士等が三浦安の所へ斬り込んだ所、向ふがドッコイさうはいかぬといふので、新選組に言うてやつて準備をして居つたから、此方から行つたのがやられた」

一五

「それで斬つた(坂本を)といふ今井は、松代藩の者であると言うて行つたと云ふが、松代藩の者だなどと云ふても、ウッカリ會ひはせぬ、皆用心して居る、殊に坂本は才谷梅太郎と云つて名を變へて居つて、殊に新選組から狙はるゝので、薩摩の方からも、危いに依つて何うだ私の方に參るやうにと云うたが、屋敷の中へ這入ると、出入りに窮屈だから這入らうと云はない、それ故に平生變裝を拵へて居るから、松代藩など云うて來ても會ひはせぬのでありますが、十津川の者は

始終出入りして居りました、勤王論者が十津川には多かつた、それで十津川と云うて來たから取次ぎも安心して取次した、そこで、十津川と云うことをかたられたといふので、十津川人が大變怒つて、即ち、三浦久太郎を斬りに行つた場合にも、十津川人が出掛けて行つた、十津川の中井承五郎といふは大分人を斬つた樣子ぢやが……とう〳〵斬られて仕舞つた、』

十六

今日になつては、今井信郎といふ人は坂本の刺客では無かつたのだと斷定するだけの材料は僕等には有る譯は無いのだが、谷氏の話(谷干城遺稿所載)に比較すると今井の話の方は少し胡亂なところがあるやうにも思はれる。

谷氏が中岡から親しく聞いたといふ話の方が、何うも辻褄があつて居るやうに思はれるのに反して、今井の方の話は餘程複雜なやうである。坂本、中岡兩人を本當に斬つたのであつたら、それは今井といふ人の生涯での大きな事件の一つに相違なかつであらう、さうすれば、さういふ大事件ならば、彼はもう少し精細に記憶し、もう少し詳密に語ることができて、谷氏が見た、實地

の有様と何處かで動かし難き符合點を持つことになるべきであらうと思はれる、谷氏は今井の直話なるものをば可なり手酷しく批評して居る、殆ど今井は阪本等の斬られた時の状況を傍か、ら聞いて、それを旨く綴ぢ合せて斬つた者は自分等だと誇稱して居るのだと斷定するやうな言葉をば、該話の諸所で洩して居る。谷氏は終りに臨んで「何れにしても、今井が斬つたといふ事は此の證據の上では認められぬと思ふ」と云つ居る。

偏頗の無いところ、今井信郎なる人の云ふところは、全く谷氏の云つて居る如く、俄に信ずることでき無いやうな氣がする。然し何れにしても此れ等の事は今はもう夢の如きものとなつた。然しながら、幕末の有司は、所謂る反政府の浪士等をば、個人的にも敵視し、憎惡して居たやうであるが、今の當局者に、所謂る危險人物等をば、同じやうに敵視し憎惡して居るのであらうか。

或は、昔の人は割合に正直であり得るのに便利であつたかも知れぬ。

筆蹟の相似

一

文壇の人々の中で、筆蹟の似通つて居る人々が可なりある。僕の知つて居る人々の中で云つても、小宮豐隆君の字が故夏目漱石氏の字に酷似し、大杉榮君の字が堺利彦君の字に似て居り、伊藤野枝君の字が平塚明子君の字に似て居り、與謝野晶子君の字が與謝野寛君の字に似て居る。

小宮君は萬事漱石君の寫しである。が、外の點は知らず、字の似て居るのは、小宮君にさういふ意識がある結果であらうと思ふ。他の三君の字がそれ〴〵親しい先輩の字に似て居るのはそれ程意識して似せて居るのではあるまいと思ふ。

或る若い人が『世間では、與謝野寛君の字は令閨晶子君の筆蹟を學んで書くのだなどゝいふので、與謝野君は不平であるらしい』と、いふやうなことを僕に話した。

與謝野君の字は、晶子君の書が今日の如く世上で持て囃されるやうになら無い時分から、今のやうな筆法のものであつた。僕が與謝野君を知つてからもう十四五年にはなるのだが、與謝野君の字は大體に於て變化は無い。晶子君の方が、寛君からの感化で、その字が寛君の筆法に大分似て居るのである。寛君の書が無論晶子君の書よりも數等上だ。

大杉君の書が堺君の書に似て居ることに就ては、先き頃大杉君その人と話したことがある。

大杉君は自分の書が堺君のに好く似て居ることを承認して居た。で、斯う云つた――『それは自分でも知つて居ます。寄せ書などをする時に何うかするとまるで同じやうな字が出來て、皆が不思議がることがある位です』

大杉君は又、『僕の字が堺の字に似て居ることは事實であつて、僕がわざ〳〵堺の字を眞似て居るのだと云はれたところで僕はそれは厭だと思ひません。反つて、僕に取つてはそれが光榮かも知れませんが、然し、實際は斯ういふ事實があるんです』と云つて、次のやうな話をした。

大杉君が始めて家を持つた時に、その門札を堺君に書いて貰つて、それを出して置いた。所が或る日、思ひも掛けず、昔の同志がたづねて來た。何うして此處に住つて居ることが分つたのだ

ときくと、その客は、その邊は度々通るので、その門札に氣が付いたが、世には同名異人があるのだから、滅多に尋ねても何うかと思つて、何時も素通りをしたのであつたが、幾度見ても字が大杉君の字に相違無いので、到頭意を決してたづねて來たと云ふのであつた。

『その友人は、僕が堺と友人になら無い前の友人であつて、僕が堺を知つてからはその友人には逢は無かつたのですから、此の友人は僕の昔の字より外知ら無い譯なんです。さうして見ると、僕の字は先天的に堺の字に似て居るといふことになりますかな』と、云つて、大杉君は微笑つたことがある。

二

以上の話とは少し違つたことであるかも知れぬが、僕は此頃一寸面白い物を見た。

大阪で發行する『海南』といふ雜誌があつて、僕もその寄贈を受けて居る。所で、その雜誌の十一月十七日發行第六號の第八頁を見ると、田中伯爵所藏なる由の武市瑞山獄中畫なるものゝ寫眞版が一つ出て居る。繪は牛若が熊坂長範を斬り倒したところを畫いたものであつて、紙の右上

の隅へ寄せて「橘次伴牛若丸而宿於香[illegible]美驛、有賊侵橘次之財、牛若奮劍擊之、當此時牛若歳已十有七」と書いてある。小さい寫眞版のことであるのだから、繪の方は確たることは云へ無いのだが、字の方は何う見ても僕の祖父馬若源馬の書であると思ふ。繪の方も大分祖父の筆意に似て居るやうな氣がする。のみならず、此の寫眞版と同じ繪を僕の祖父の遺稿の中で見たやうに思つたので、祖父の遺物の中を探したけれどもそれは見當ら無かつた。

祖父は繪も素人繪としては漫畫がなかなか巧であつた。書も極めて豪邁な字をものした。晩年は、筆を餘程横にして書いたらしい。瑞山戯畫と註されて居るその問題の繪の中の字は、祖父のさういふ老筆に酷似して居る。いや、僕の見るところでは、全くそれである。

武市瑞山は幕末の志士武市半平太のことである。僕の祖父は、半平太より一時代前の人間である。書蹟が相似て居るとしたところで、僕の祖父が瑞山の書蹟を學んだのでは無くして、瑞山の方が僕の祖父の筆蹟を學んだといふ方が、自然の推測であるやうに思はれる。

高知藩に於て何時も政權に近い位地に居たのは食祿四五百石以上の所謂上士であつた。それ以下の平士及び準士たる者などは、上士の專横に對しては皆不平を抱いて居た。所で、僕の祖父源

馬は彼の時代に於けるさういふ平士の代表的人物の一人であつた。性は極めて硬直、思想は極めて自由であり、藩の財政、軍制、國防、風紀等に關する當路への建白は四五十回であつたであらう、その草稿の今僕の家に遺つて居るだけでも廿通位はある。之に加ふるに、手先は如何にも器用であつた。甲冑を鍛ひ、緣、頭、鍔等の刀劍附屬物の鍛冶、象嵌も、素人としては確に秀でゝ居た。尚その上に、彼は極めて雄辯であつた。

瑞山の家も矢張り平士の列にあつたのであらうと思ふ。さすれば、瑞山の如きも僕の祖父を尊敬して居て、その書畫などに於ても僕の祖父の感化をば直接若くは間接に受けたのではあるまいか。

以上の推測は此問題の畫を瑞山の眞蹟として見た上でのことである。けれども、僕は、瑞山の作として傳へられて居る此書畫が何うかすると僕の祖父の作ではあるまいかと思ふのだ。何うとかしたことで、僕の祖父の作物が瑞山の作だと傳つてそれが田中伯の手へ入つたのでは無からうかと思ふのである。

此瑞山の書畫として傳へらるゝものは、田中伯が珍重せられて居るものであらうから、その原

物をも見ずに、以上の如き疑ひを入れるのは、草卒非禮の虞無きにしもあらずであるが、彼の書畫が瑞山の作で無いことになつても、馬場辰猪、同孤蝶の祖父であつて、高知藩に於ける維新志士の先驅をなした馬場源馬氏高の眞蹟であるといふことになれば、猶更價値の無いものでは無からう。

が、此は此方で申し上げることである。焉んぞ知らん、先方樣では人もあらうに辰猪、孤蝶などの祖父の作なんぞは眞つ平御免だと仰せられまいものでもあるまい。

ともあれ、聞き度きは、此の問題の繪が田中伯の手へ入つた由來である。

逝ける板垣伯

一

吾々の少年時代には、東洋自由の泰斗など、歌はれた板垣伯も遂に逝いた。高齢のことではあり、さう永く生きて居られやうとは思つて居無かつたが、いよ／＼斯うなつて見ると、今更に自分も早や老人の部に入りつゝあることを、急に明に感ぜざるを得無い

僕に伯と口をきいたことは唯つた一遍しきや無い。

それは多分明治二十六年の春であつたかと思ふ。その時分僕は高知の共立學校といふ英語學校の教師に雇はれて行つて居た。所が、板垣伯が歸省されたので、全市が盛な歡迎をした。

市の外れの遊廓の中にある得月樓といふ大きい料理屋で板垣伯歡迎の宴會が催されたが、その時學校からの希望で僕も伯を歡迎する演説者の一人になつた。で、その時、伯と數語をまじへた

ことがある。

二

伯の家は、その祖先は甲州から出たのであらうかと思はれる。山内家の藩臣には遠州附きと、土州で仕へたものと二種類あるのだが、板垣家は僕等の家よりはずつと禄高が多かつたやうに聞いて居るのだから、多分遠州附きであつたのだらうと思ふ。

退助氏の父か祖父かの何某氏も可なり氣骨のあつた人だといふのだが、その人のことで次のやうな話を聞いたことがある。

板垣家の隣には、大身の何がしの邸があつたが、その邸で或る時二階を新築した。そして、少時すると、その邸から板垣家へ、『手前どもの二階からは、貴家のお庭の松が何うも目障りになるが、伐つては頂けまいか』と云ひ込んで來た。

板垣家の主人は『畏まりました』と云つて、直ぐ松を伐つて置いて、少し經つと隣へ使ひをやつた――『手前どもの座敷から見ますと、貴家の二階が何うも目障りである。何うぞお毀しくださ

い』

隣邸では大いに狼狽してひたあやまりにあやまつたといふのである。

三

土佐には竹内流の體術といふのがある。これは所謂組討の術で、專ら短刀の扱ひを敎へるものである。昔は竹胴を着け、小太刀に擬した短い竹刀か木劍かを帶へ指して、試合をやつたやうに聞いて居る。

『武術流祖錄』には、作州津山の城下波賀村の人竹内中務大輔久盛といふ人が天文年中創始した武術だとある。久盛は『小具足の達人也、今竹内流腰廻りといふ。其末流諸州に在り』とあるのだが、何うも近代では土州以外に行はれて居たことを餘り聞かぬやうである。

一體土州へは新しい武術の入ることが遲く、上國では下段の劍術が盛に行はれて居た天保頃でさへ、土佐ではまだ無外流の如き舊式の上段の劍術が行はれた位なのだから、竹内流の體術もさういふ風で、土佐にばかり殘つたのかも知れぬのだ。

板垣伯も壯年時に竹内流の體術を學んだのであるが、それが役に立つて、岐阜で相原某に刺された時に、淺傷で濟んだといふのである。伯は遭難後竹内流の師匠――本山氏であつたと記憶する――へ手紙を與へて、昔の指南の恩に對し感謝の意を表したと傳へられて居る。

相原の公判廷での陳述中には、『板垣はよく〳〵狼狽したと見えて、刃を握つた』といふ言葉がある。

所が、竹内流には敵の刃を握り止める手があるのだ。板垣伯はその手によつて、相原の短刀を握り止めたのだ。本山氏に與へた手紙にはその點が云つてあつたらうと思はれる。

因にいふ、出獄後相原は、船に乗つて、西へ向ふ途中、遠州灘あたりで、行方が分ら無くなつたやうに聞いて居る。板垣伯に對する相原の刺客的行爲は何人かの煽動使嗾に因るものであつて、その使嗾者に取つては、相原が自由の身になつて生きて居るのは、甚だ困ることであつた。それが、相原が行方不明になつた原因なのだと云ふ人もある。けれども、これは單に想像說かも知れぬ。

清夜雜記

一

自分の書いた一篇の作物の隅から隅までを殘らず他人の解らせようとするのは、無効な勞に屬する。自分の書いたものを有らゆる他人に解らせようとするのは全く不可能事を企つるものと云はなければならぬ。

他人と自分とは、多くの場合、年齡が違ひ、境遇が違ひ、從つて經驗が違ひ、學問の方向が違ひ、お負に、作者たる自分がその作を書いた時とは違つた心理狀態の下に於て他人はその作を讀むのである。

その作物が細かな感情、特殊な境遇の下に書かれたものであればある程、他人に十分に理解されるチャンスは益少くなる譯である。

生方敏郎君の『人のアラ世間のアラ』といふ文集を見ると、その中に『今日最も忠實な讀者は、作者自身である』といふ言がある。これは單獨なものとして見れば諷刺の意味にも取れるであらうが、その前後の文勢から推すと、僕の前言の如き意味を云つたものと解し得られると思ふ。

他人が自分のものを善く讀んで呉れ無いと思ふと、不平が出るかも知れぬが、實は自分が他人のものを讀むのも左程親切では無いのだから、これはお互つこと云はざるを得無いのだ。

もう四五年前のことであるが、夏目漱石君と話して居るうちに、夏目君が、

『他人の物は自分の物のやうに親切には何うしても讀め無いものだ』

と、いふ意味のことを云つた。僕はその時次のやうに云つたことを記憶して居る――

『僕もさう思ひます。僕は誤植が甚く氣になるのだが、僕の物に誤植が何時も多いやうに思ひます。けれども、これは僕の物に限り誤植が特に多いのでは無くして、他人の物を僕が讀む場合には、可なり甚い誤植があつても僕がそれに氣が付かないためであらうと思ひます。そうして見ると、他人の物は隨分好い加減に不親切に讀んで居るのだといふことが分ります』

作者の人となりを知つて居るといふことがその作物を讀む助けになることはいふまでも無いこ

とである。それで、隨分親しい人々の書いたものならば、その心持が可なり善く解るべき筈であるのだが、それでも、時々作者自身に質問して見た上でなければ一寸何とも判斷のできないやうなことがある。其處で、作者自身にぶつかつて、此方の疑義を質して見ると、何も彼も全く氷釋して、それまでの自分の理解力の足り無かつたこと、讀み方の餘り親切で無かつたことが明かに分ることなどは、屢あることなのだ。夏目君もさういふ點では、僕と同じ考へであつたと思ふ。

要するに、技巧の細かい、感情の緻密な作物が廣く他人に解されるものだとは思ふべきでは無い。若し、他人に訴へる積りで書くものにしても、精々のところ、自分を個人的に知つて居り、且理解して居て呉れる僅少の人々にのみ訴へる積り位なところで書くべきものである。

島崎藤村君が、或る雜誌から愛讀書を問はれて、『自分は親しい人々の書いたものを讀むのが好きだ』といふ意味で答へたことがある。

全くその通りである。自分に親しい人々の作物を讀む場合には、成る程彼の男ならば、斯うい ふことに對しては斯う考へ方をする筈だとか、斯ういふ觀方をする筈だとか、斯ういふ點から筆を着けて行く筈だとかいふやうな此方の期待に絣つて居るところが興味の深い點である。

三

或は又、さういふ期待が外れる點があつたとしたところで、それに依つて、可なり善くその作家の人となりを知つて居る積りの自分にもその人の性情その他で意外な見落しが自分の方にあつたことに氣が付いて、其處で又盡きざる興味が喚び起される。

漫然として聞けば、人々の言葉が同じなやうに見えるのであるが、仔細にこれを聞けば、言葉は人に依つて千差方別である。人各その言葉に特徴がある。同じ事をば同じ言葉で、同じ言ひ廻しでいふことは殆ど無いと云つて宜からう。さういふ各人の言葉の反映がその人々の作物のなかで窺ひ得られる。

その人々のさういふ言葉を書いた時の姿勢さへも思ひ浮べられるやうなことがある。さういふ時のその人々の顔付さへ眼前に髣髴とするやうな氣のすることがある。又、その人々がさういふ言葉を口で云つたものだと想像するといふと、その口付、その聲の調子さへも思ひ浮べられることがある。

殊に、まだ名を成さ無かつた時分からその人を知つては居ながら、その人の作物を讀む機會が無かつたのだ、ふとその作物を手にしてその人の驚くべき進境を知るのなどは、甚だ快いものである。

今は最早世に亡き友等の著書を讀む時、さま〲の追懐の、さま〲の感慨の、胸に滿つることは、誰しも覺えあることであらう。

希はくは、我等亡らん後、彼の男で無くば何うしても斯うは書かぬ、この邊は彼の男をば眼のあたり見るやうだと、親しき人々が云つて吳れるやうな文字をば僅に數行でも宜いから、遺し度いものである。

四

生方君の『人のアラ世間のアラ』の中には又左の如き語がある――

『印刷せられた自分の文章は自分の思想の反映である。私は美人が自分の顏の美しさを鏡に映して誇るやうに、印刷せられた自分の思想を幾度も〲眺めて樂しむ』

生方君程熱烈な愛情をば僕は自分の作物に對しては持つて居無いやうであるが、それでも、自分の書いたものが載つて居る雜誌などが來れば、先づ自分のものが印刷された上で出來榮は何うであらうかと思つて、自分のものをば眞先に讀んでみる。

所が、面白いことには、原稿の時に可なりな出來だと思つて居たものは、印刷された上で見ると、必ず元の考へとは違つて、何うも拙いもの丶やうな氣がする。それとは反對に、原稿の時に意に滿た無かつたもの丶方は、印刷された上で見ると、大抵滿更でも無いといふ氣がする。長詩とか、短文とかいふやうなもの丶時は、殊にさうである。

けれども、さういふ感じの强かつたのは昔のことであつて、今はさういふ感じが餘程薄くなつて來た。それだけ確に年を取つたのであらうと思ふ。

自分の何年も前に書いものを讀んで見ることは面白いものである。廿年も前に書いものなどに對すると、まるで他人のものを讀む時と同じやうな感興を覺へることがある。時にはとても斯うは書け無いと思ふことさへある。

曾て島崎君が僕の書いたもの丶中の一句をば同君の『並木』の中か何かに引いたことがあるが、

その『並木』がまだ脱稿し無いうちに、島崎君は、斯ういふ語を引用する積りだと云つて、僕のその語を僕に告げた。すると、僕は、『一體それは誰の語なんだね』と問うた。島崎君は『君の「流水日記」の中の語ぢやァないか』と云ふ、僕は『さうかなァ、そんな旨いことを僕が書いたか知ら』と答へて、大笑ひになつたことがある。

五

レオナルトオ・ダ・ヴインチの語に、

『鏡を以て自己の作を寫し、以て之を判斷せよ、是自己の作をば反對の方向より見るものなるが故に、やゝ他人の作を見るの觀あればなり。製作中と雖も、屢筆を捨てゝ判斷をなすを要す、熱中甚しければ反つて過ち多し』

といふのがある。

自分の作物に關する判斷を誤らせるやうな感情は、その製作の當時に於ての方がより多く存在するのは事實であるが、何年も前に書いた自分のものに對する場合であつても、前の場合と同じ

感情はもう無くなつて居るとしても、その判斷を誤らせるやうな他の種類の感情はあるべき筈である。

けれども、年經た後であるとすれば、その作物をば客觀することがより容易であるべきであるのだから、大體から言へば、さういふ作物に對しては判斷を誤ら無いものだと思ふ。

『人のアラ世間のアラ』の中で生方君は若し百萬金を得たら何うするといふ想像を書いて居る。

『私は夢の醒め無い中に、先づその百萬金を使ふことにする。私は先づ原稿を書くのを止めて、早速睡る。私は此のまゝ永久に睡つてしまひ度い位休息を欲して居る。少しも生活の心配無く、深い〳〵奈落の底へ落ちるやうに止まるところなく眠り度い』

此度二引いた此語だけは、諷刺とは考へられ無い。諷刺でないとすれば、これには同感である。實際睡り度い。何の用も持た無い身になつて、電車の音も何も無いやうな所で、十分に眠り度い。

さういふ風に眠り度いと思ふのは、僕に取つては、少くとも廿五年來の志望である。僕は昔から眠むれなくなつた。けれども、その時分には眠つてはいけないのだといふ感があつた。それで、

なるべく眠ら無いやうにしたのであつた。今まで自分のした事を回顧すると、まるで、眠い眼をこすりこすり無理に眠ら無いやうにしてした事ばかりなやうな氣がする。その故であらう、今まで何一つロクな事はして居無いのだ。

今でも、矢張り眠つてしまつては惡いといふ氣はするにはするが、今は眠られるのなら、義務は兎に角、無理にも眠り度いといふ心持は大分强くなつて來た。

六

二月や三月の間眠る位なことならば、何うにかなりさうであるのだが、眼が覺めた後で何うするかといふ心配があるのでは、眼つたところで何程の足しにもなりさうで無い。

さういふ心配無しに眠ることのできる基礎には少くともなりさうな機會が僕の部室を通り拔けたことが一二度はあつたやうな氣もするのであるが、その機會の所謂前額の髪にかじり付いて何處までも隨いて行かうといふ執着心も無く、又或る時などは前額の髪を捉へるだけの決斷冒險の勇氣を缺いて居たので、その機會をば永久に逸してしまつたのだと思ふ。

今は最早眠り得られさうな機會は來まいと思ふのだから、今此所で、眠り得られた後は何うなるかといふことを思ふのなどは、全く夢の夢に屬することである。
けれども、何うせ眠い眼をこすり／＼書くものであるのだから、全くの夢を語るのもまる／＼緣の無いことではあるまい。

曾て或る席で――永井荷風君もその席に居られたやうに思ふのだが――或る人が僕に、『君等は金が出來たら嘸書か無いことだらうなア』と云つた。僕は言下に斯う答へた。『當分は惰けるだらうが、そのうち、又書き出すに違ひ無い、何にもせずに居るといふのは、餘程偉い人でゞも無くばやれ無いことである。金が無い時は生活の爲めに書くのだが、金が出來れば今までとは違つた意味で書くやうになるのだらうと思ふ。兎に角、何かせずには居られ無いのが、人間の天性であるのだから、何かしやうとするに違ひ無い。所で、吾々は物でも書くより外には何もできることは無いのだから、矢張り元々通りのことをやりだすに極まつて居る』

『金の無いうちは何んな拙いものを書いても、世間は勘辨して呉れるのだが、金が出來てからも矢張り拙いものを書いて居たら、世間では、最早廢せば宜いにと、嘸ぞ顏を顰める人があること

であらう。希はくは、可なりに金ができて、うんと拙いものを自費出版か何かして、他人にさんざん顔を顰めさせ度いものでは無いか』

今も尚時々そんなことを思ふことはある。金といふものは、それを儲けたら、廣告の爲めたると、罪滅ぼしの爲めたるとを問はず、兎に角その九牛の一毛にても、慈善事業とか、公共事業とかいふものに寄附するといふやうな心掛の好い人々に、天が下し給ふものであるらしく思はれる。

吾々の如き下らぬ使ひ路をば金を儲け無い先から考へて居るやうな不屆な者には、天は富么に金は授け給はざること、思ふ。天の配劑も亦妙なるかなとでも申し上げて置かうか。

おでんの鍋

上

先日、或るところで「今の人間には美くしいものを愛する考をもつと持たせるやうにしなければいけない。東京の人間がもつと奇麗なものを愛する心が強かつたら、道路でも、電車でも家屋でも直きにずつと奇麗になつてしまう」といふやうな話を或る人がした。

成る程一寸と聞くと、もつともなことのやうに思へるのだが、しかし、實際は必らずしもさうでは無い。

今日の世の中の支配者は金持ち連であつて、貧乏な吾々には何の力も無い。成る程、國政なり市政に參加する權利が形式だけでは吾々にもあるやうだが、吾々の代表者なる者も結局のところは、金持ち連のご機嫌をひどくそこねるやうなことはする氣遣ひはないし、又、そんなことをす

る力も無いのだ。

ところで、道路の泥濘がひどくつて困まるのは、徒歩することのある貧乏人である。電車のきたないのや、込み合ふのや、雨もりのするので、閉口するのは、電車に度々乘る貧乏人である。家屋のガタ〳〵普請で弱らされて居るのは、さういふ家に住んで、眼の飛び拔ける程高い家賃を拂はせられて居るこれ又貧乏人である。

しかし、さういふ貧乏人は、そんな不平を持ちだしたところで、何の効も無いし、餘まり强くそれを云ひだすと、何處かゝら、棒先きを振る者は兇徒嘯集罪位を以つて擬せられるし、そんな者に附隨して行つたものどもは兇徒なみの取り扱ひを受け衆ねぬことになる。これでは誰だつても、陰ではさん〴〵こぼして居ようとも、公だつた運動を起す氣遣ひは何うしたつてありはしない。

そんなら金持ち連は何うかといふと、さういふ人々は、道路の悪るいことも、電車のいけないことも、家屋のひどいことも知つては居るかも知れぬが、さういふご連中は町を徒歩せられることはめつたに無い。電車にお召しになることなどは絶無であらう。大抵がた〳〵普請のこわれか

かつた家などはちつとも見え無いやうな所謂る空氣のいゝ、廣々とした邸宅にお住ひである。
自働車ばかりで出入せられる、きれいな、見晴しのいゝ大邸宅に住まつて居られるそれ等の人人が、道路のぬかることゝか、電車のひどいことゝか、家屋の矮少にしてきたないことなどを、さう深く氣にせらるべき理由が何處にあるのであらう。
少しは見た目に心持が悪るいかも知れぬし、もう少し奇麗には出來ぬものか位なことは云ふ人人がたまにはあるかも知れぬが、ご自分たちとは直接交渉のちつとも無いことなのだから、隣りの洗濯屋の汚い干し物ほどには、氣になさらんでも濟むことである。
何うも、權力者たる金持ち諸君の方から、重に吾々貧乏人のためになる諸種の改良をしてくださらうなどゝは、吾々の方での餘り蟲のよすぎる期待のやうである。
先づ、さういふ風で、權力者の方から、吾々の爲めに、奇麗なものを與へて貰らう望みは無ささうだし、吾々の方ではみづからさういふものを得る力が無いものとすれば、吾々の方で幾ら奇麗なものが好きになつたところで、世間の有りさまは何程もかわら無いものと見なければならぬ。

尙その上に、世の中に於て最も多數の貧乏人に取つては、奇麗なものどころか、きたないものでさへ滿足には得られ無くつて困つて居る最中である。さういふ多數の貧乏人に取つては奇麗な物に對する欲望を持つに至るには、まだ一階段あるのだ。

さういふ欲望を貧乏人どもに持たせるのをば金持ち諸君がご自分たちの利益だと思つて居られるか何うだか、それは今のところ少くとも疑問であらう。

要するに、一般に云つて、奇麗なものを好く心を人に起させるのは、決して惡るいことでは無い。さういふ必要はたしかにあるには違ひ無い。けれども、世の中の物を奇麗にするには唯たそれだけでは、駄目である。

中

金持ちの話が出てみると、ちよいと此の頃讀んだ或る探偵小說を思ひ出す。それは、或る金持ちが、年をとつて居ても、いろ〳〵な企業的冒險心が盛であつたが爲めに、放浪者の間に大勢力を持つて居て『放浪者の女王』と綽名されて居る美くしい女を使つて、放浪者の間に大罪惡團を起

さういふ計畫を立てる。すると、その女はさういふ罪惡團を組織する氣は無かつたが、その金持ちの老人をだまして、金を引きだしてやらうとかゝつた。けれども、老人がその手にはなかなか乘らぬので、遂に老人を捕虜のやうにして、放浪の旅へ出る。老人は金も取り上げられ、衣服も汚い衣服を着せられて、貨車へ乘せられたり、下等室へ乘せられたりして、長い旅を續ける。

作者は其所で面白いことを云つて居る。

昔、或る王樣が『王といふ威嚴は身體に着いて居るものだから、王は何んな服裝をして居ても直ぐに分かる。例へば、俺が乞食の姿をして外へ出ても、人民はきつと俺を認める。何んなら、百金位の賭をいかうか』と、朝臣の一人に云つた。

ところが、その朝臣は金には困つて居たが、負ける氣遣ひは無いと思つたので、その賭を承諾した。

其所で、王樣は早速乞食の服裝になつて、街を歩いたが、人民は皆非常な謹んだ態度で王樣を迎へるのであつた。王樣は大得意で、見え隱れに隨いて來た朝臣を傍へ呼んで、

『何うだ、此の通りだ』と云つた。

『陛下それはいけません。陛下は王冠をお脫ぎになるのをお忘れでした』と、その朝臣が笑つて云つた。

さて、金持の場合には、金が王冠である。此の黃金の冠無くしては、金持が金持としては認められ無いのだ。

作者はさう前置きをして置いて、その老人の金持ちが、その放浪者の女王の手から脫しようと思つて、警察署へ駈け込んで、自分は桑港のこれ〳〵の金持ちなのだが、或る惡黨の女の爲めに誘拐されて、一文無しになつて居る。桑港に居る書記へ電報を打つだけの金を貸して吳れと、一生懸命に賴んだけれども、警察では、氣ちがひだと思つて、相手にして吳れず、すご〳〵立ち去つて、それから、何うにでもして、電報料だけを拵らへようと思つて、女の眼を盜んで、街で乞食をして、少しづゝ金をため、それを靴のなかへ隱して置くといふやうな有りさまを、面白可笑しく書いて居る。

マアク・ツウエーンの『百萬磅の札』といふ小說で、或る貧乏人が、百萬磅の札唯つた一枚預けられたきりで、崩して使ひやうが無いに拘らず、それでも、そんな大金の持ち主と見做されて居

たが故に、一向生活に困らぬのみで無く、一文も仕拂ひをすること無しに、金持ち連中と交際することができ、しまひには、その信用で金儲けをするといふ話と、此の金を持たぬ金持ちの老人の話とを對照すると、吾々は金といふものゝ力が、今日の如き世間では何れだけ大きいものであるかといふことを今更に明に見せられた氣がして、ひどく面白く思ふのである。

けれども、日本でさへ、金といふものは、甚だ厄介なものになりだしたやうに見える。餘まり出來ても、稅金として取り上げられ、高が無暗に多くなるのみならず、謂はれの無い寄附でも、へえ〳〵と承諾し無いといふと、ひどく憎まれて、ヘンな人間に短刀で横腹をゑぐられて死んでも、ロクに氣の毒だとも、世間からは云つて貰らへない。さればと云つて、金を取ら無いやうにして居れば飢えて死ぬるか、さも無くば馬鹿か、不具かのやうに人から輕蔑されなければならない。

　これは一體どちらにすればいゝのであらうか。

　利口な人は、まア困らぬだけ金をこしらへて置くのだと云ふであらう。けれども、その困らぬだけとか、自分の死後が心配にならぬやうにとかいふのだと、その額は一定し無い。いや一定し

無いといふことは、めい／＼出來るだけ多くためようといふことになるにきまつて居る。これでは、何處まで行つても、金儲けの爭鬪は止みつこは無い。

けれども、さういふ爭鬪を止め度いと思うのは、たゞに吾々敗退者の心のみだらうか。

下

所で、政府の方針は、誰でも金無しにいけるやうにしようといふ運動はもとよりのこと、それに關する論議をさへ嚴重に取り締ることになつて居るやうに認められるのだが、それならば各人が安心のなるだけに金をためることを奬勵する方針なのであらうか。

それにしては、稅金が高過ぎるやうでは無いか。率が可なり高いものであるのみならず、今年などは、殆ど[illegible]斂誅求の形である。これでは人民になるべく貯蓄をさせないやうな方針でゞもあるかのやうにさへ見える。當路者の考では人民を困まらして置か無ければ、財產に對する欲望が刺戟されぬからといふのかも、知れぬが、財產を持ち、財產をふやすことを容易にして置いた方が、もつと心[illegible]く有効に、財產に對する欲望を起させるもの〻やうに吾々は思ふのだが、何ん

なものであらう。

財產制度に動搖を及ぼすやうな思想を恐れる事甚きに拘らず、施政、殊に稅の方針の上には、財產を作る者を憎み妬むやうな氣分が漂て居るのは、吾々に取つて、甚だ心持の惡い事である。物價を下げる、小賣り價を安くする、さういふことは誠に結構なことだ。けれども、今のやうな唯だ一方だけのやり方で、さう旨く行くものだらうか、吾々は甚だ疑はしく思ふ。

地主や家主からは、國稅、市稅といふ風に可なり高率な稅金をばまさに誅求的に取り上げる。地主も家主も地代や家賃をますく上げることになる。さういふ高い地代を拂ふとか家賃を納めるとかいふやうな商人は、その上、まだ過重な營業稅とか、所得稅とかいふものを取り上げられるのだ。これでは、小賣りねの高くなるのは、自然だと思ふ。誰にしても、何時までも同じ位置に止まつて居度いと思うものは無い。誰にしても、向上を願うのは、當り前だ。小賣商人は金をためるなどゝいふ量見を起しては相成らぬといふ譯に行くものでは無い。今の狀態では小賣りねの高くなるのは已むを得無い。

小賣りねが高いのにはいろく原因がある。その原因を除き去らざる限り、實際に於て小賣りねの下る氣遣ひは無い。唯だ役人がもつともらしいことを云ひ立てゝ、ほんの申し譯だけの安ね

の市場でも拵らへるだけのことである。

所で、今日のやうに社會設備といふやうなことが、官公署の側で頻りに云ひ立られる際に當つて、吾々の不審に堪えぬことは、此の如き重税を人民に負擔させることである。

此の勢が長く續くならば、小中の財産者は次第に潰ぶれて行つて、貧乏人と大富豪のみが殘つてしまうであらうと思ふ。勿論それが自然の推移であらうけれども、階級戰の勃發を促がすべきさういふ狀態をば、人爲をもつて促進するといふのは、今日の政府の公表して居る考とは甚だ矛盾すると思ふ。

一體、政府は何處までも財産制度を擁護しようといふのか、それとも財産制度の破壞を急ぐのか、その本心はどちらにあるのであらう。

夏日雜感

一

何の考も無く物を觀る故か、時々今まで感じ無かつたことを、何かのはづみでふと感じることがある。大抵は、前にも殆ど無意識に感じて居たことであつて、それを把持するだけの省察が無かつた爲めでもあらうかと思ふ。

春の花の浮き立つた心持よりも、初夏の新綠の落着き掛けた心持の方が、更に深みがあることは、今まで少しも知ら無かつた事では無かつたのだが、今年になつてそれをしみ〴〵感じた。

僕の家は市ケ谷外の堀近くなのだが、この春、花時の或日の午後ちよつと用足しに出ると、濠端側の土手の櫻が滿開であつた。けれども、それが奇麗だといふ心持は少しも無かつた。何だか斯うまことにヘンな不自然な物が樹の上にくつ付いて居るやうに見えて、謂はゞ、何だか嫌な感

といふのでは無かつたにしても、何と無く落ち着き得無い感がしたのであつた。此の頃は、神經衰弱の爲めかと思ふのだが、近眼がます〳〵强くなるので、物が十分に見え無いのだから、一つはそのせいで、花なんぞがさういふ風に見えたのでは無からうかとも思はれるけれども、又、少し考へて見ると、花よりも靑葉の方が落着きがあつて、心持がいゝといふ感は、餘程前からあつたのであつて、それが此の頃になつて明に感ぜられだしたものとも、思へ無いことは無いのだ。

それは兎に角として、事實は、靑葉の此の頃の方が如何にも落着きがあつて、心持がいゝ。同じ外壕でいふならば、市ケ谷停車場のあたりのもう餘程濃くなつて居る綠葉が、黑ずんだ堀の水と照應して、沈靜といつたやうな心持の感を人の心に喚び起さずには置かぬといふ趣がある。元より自然の大景とは比べものにはならぬが、人間の作つた庭のやうなものが、何後の間にか、自然の掌中に委ねられて、次第に自然の懷へ取り收められて行く心持があり〳〵と見えて居るところが面白い。

土手の上にある櫻が又なか〳〵宜しい。秋の末からの寒木になつた姿の趣き深いのが一番宜いのは勿論であるが、春になつての若葉の形も決して惡くは無い。綠まだ淺く、明るい感のする梢

の間に、宿り木の濃い緑が何かの飾でゞもあるかのやうに、垂れさがつて居るのは、心持のいゝ眺である。

若葉時の眺めの快いのは、吾々が此の頃度々通る場所で云へば、辨慶橋のあたりの堀、芝の公園の丸山を芝園橋あたりから見たところ、同じ公園の辨天池のあたりなどである。

故齋藤賢の雅號綠雨醒客は、坂崎紫瀾の撰んだものであつて、綠雨は若葉にそゝぐ雨をいふんださうなのだが、此の頃の風の無い日の雨は如何にも心持がいゝ。沈靜の底に活氣を含み、緑の艶を灰色でほかすとでもいひ度いやうな、何とも謂へ無い快感が、心のうちに湧いて來る。

一體に、雨は快いものである。雨の音を聞きながら眠に入る心持、雨の音を聞きながら、人と靜に物語る心持、共に快さの限りであるが、今頃の雨の日に、傘をさしてゆる／＼と路を行くのも、實にいゝ心持のものである。雨の日に傘をさしして外へ出ると、何處までもさうして歩いて行き度い氣がすると、有島武郎君が云はれたことがある。僕も全く同感である。傘は日本の雨傘であり度い。足駄も新しいのであつたら、嬉しからう。それで、若葉の眺のいゝ町をゆる／＼と歩いてみ度い。さし向き、牛込見附から四谷見附まで、土手に沿うて歩いてみ度い。

旅へ出た場合ならば、日本傘で足駄で無くとも宜しい。洋服で草鞋ばきで結構である。もう二十五六年も前のことであるが、春の暮に、雨のなかを小田原から江の浦まで歩いたことがある。路行く人も殆ど無く、雨の音と波の音のみを友にして、さま〴〵な思ひに耽りながら辿つた數里の旅の風情は今も尙忘れ得無いところである。

二

此頃の物で、趣のある今一つのものは、蛙の聲である。暮春の頃から鳴き始める此の動物の聲は、何とも云へぬ物寂びた心持を吾々の胸へ喚び起す。闇の夜の堀や、沼から聞へる一つ二つの鳴き聲よりは、水の滿ちた田の中から聞える降るやうにとでも形容すべきまでに鳴き立つる諸聲の方が、不思議に寂が多いやうに感ぜられる。更に、さういふ諸聲が夜る深くなど遠音に聞えて來る場合の物寂びた心持は何に喩へることができるであらう『地の詩とこしへに盡きず』といふ外國の詩句は蟋蟀を歌つたものであるが、蟋蟀が秋の地の詩であると共に、蛙が初夏の地の歌であることは、吾々に取つては、疑ひ無きところである。

池は潰ぶされ、田は埋められた市の附近では、もう蛙の諸聲を聞くことも、容易で無いであらう。もう七八年も前かと思ふのだが、とある夜、若き友と共に、青山高樹町に住んで居た或る知人を訪はうと急ぐ道すがら、或る暗い道に沿うた竹垣のなかで、群蛙の聲を合せて鳴いて居るのを聞いたことがある。今も尚その邸があるや否や、何だか夢にでも見たことのやうな氣さへする位である。それが何の邊であつたといふ記憶さへ定かで無いが、閑を得て、一夜あのあたりをさまよつてみ度くも思ふ。

雨のなかを江の浦まで行つてみた日の前後であつたが、一夜小田原の舊城址の堀のほとりで、蛙の聲を聞いたことがある。何の屈托も無いやうななだらかな調子で鳴き立てゝ居たのだが、人の足音でも聞きつけたものなのか、はたと止んでしまう。それで、少時全くの靜寂に沈んでしまつて居てから、やがて、何處かで一つ鳴き出す。すると、直でも一つそれに答へるやうに鳴き出す。それから、又一つ應じ、又二つ聲を合せるといふ風で、何時の間にか、元のやうに鳴きつれるのであつた。朧月夜の人一人の影さへ無い境に立つて、さういふ蛙の歌に聞き入る心持は、何時でも味ひ度く思ふところのものである。

小田原の外堀はもうすつかり埋められてしまつたが、まだ御用邸の周圍には、内堀が殘つて居るのであらうか。今も尚そこでは、蛙の歌が夜々聞かれるであらうか。

二三日前のことであるが、ちよつと用があつて、與謝野氏を訪ふと、折りからの歌の會であつたので、僕にも歌を詠めとすゝめられて、聲といふ字を結びにして、『覺めて知るこれも昔になりにけり夢に聞きたる苗賣の聲』といふ腰折をやう〳〵のことで呻き出した。寛君からは、夢に聞いたのはもう少し何か意味のある他の聲なのだらうと冷かされたのだが、僕に取つては、苗賣の聲は、都の夏の忘れ難い景物の一つである。大抵は五十位な男の『茄子の苗、黄瓜の苗』と呼ぶ、あの澄んだ涼しいやうな聲は、初夏の來るのを宣する自然の先き觸れのやうな感がするのであつた。亡き母が、野菜を作くるのが樂しみで、二坪か三坪の庭の隅へ少しばかりの苗を下して、小さい茄子や黄瓜のなるのを喜んだのも、もう全く昔になつてしまつた。市ケ谷田町に移つてからは、母が緣日で苗を買つて來て呉れと妻に云つて居たのを覺えて居るのだから、吾々の住まつて居るあたりで、苗賣りの聲を聞か無いやうになつてからは、もう何うしても十年にはなるであらう。

牛込の可なり奥あたりでさへ、庭と云へる庭のある貸家は少くなつたのであらうから、苗賣りの商ひに殆ど無いであらう。何うせ、幾らにもならぬ商ひであつたのであらうから、あれだけで生計を立てゝ居たのでは無く、ほんの片手間の小遣取り位に過ぎ無かつたであらうと思はれるのだが、あゝいふ小商ひが若し專門のものであつて、長年それに慣れて、それより外に商ひの道を知らぬといふやうな者が、世の變遷の波に捲かれたとしたら、隨分悲しい終りを見ることであらう。アナトオル・フランスの小品のなかに、商ひが無くなつてとう〳〵自殺する大道の眼鏡屋のことを書いたものがあるのだが、小商人の上には、それに似通つたやうな悲慘事が日本にもあるやうな氣がしてならぬ。

苗賣は吾々の子どもの時分からあつたやうに思ふ。何時見た商人も同じ年頃の、同じやうな瘦た身體の、勿論同じやうな聲の男であつたやうな氣がする。何だか、十年たつても二十年たつても同じやうな年に見える一人の男であつたのでは無からうかといふやうな氣もする。

何時まで經つても五十位で居る男が、賣れもし無い苗を何處かで作り、賣れもし無い荷を擔いで、今も何、何處か場末を賣つて歩いて居るのでは無からうかといふやうな氣がしてならぬ。余

の實價は兎に角として、何な品でも金高の聲だけは高いものばかりになつてしまつた此の頃、一つ十錢になるかならずの品物を賣つて居る小商人を見る度に、ひどく傷ましい感を抱かずには居られない。

稗蒔も、此の頃では、賣りに來るのを見掛けぬやうになつたかと思ふ。都では、あれも夏のおとづれの一つであつた。僅に直徑一尺にも足らぬやうな土燒きの鉢の中に、新しき夏の清い涼しい野趣を盛つたあの玩具のやうなものが、自然とはまるで沒交渉な下町の人々などに、如何に夏の野に對する感興を喚び起したことであらう。藝術と云はんには、餘まりに素朴なものではあるが、こんな敢ない慰みにも、優さしい日本人らしい心持が表はれて居ると思うと、だん／＼さういふものが影を消して行くのを見るのは、如何にも淋しい心持がする。

庭とも云ひ兼ねるやうな方三四尺の空地に向つた黑みに黑んだ緣側に、青々とした稗蒔の置かれた風情は、今ではもう古い、色褪せた繪になつてしまつた。

〔三〕

さま〴〵な事からだん〴〵疎懶になつて、都門から足を踏み出さずに居たことが五六年にも亘つて居たのであつたが、一昨年の夏は、病兒を上總の大原へ養生にやつたので、久しぶりで、夏の野と夏の海を見る機會を得た。

屋根の瓦から、埃の道から照り返へす、灼くやうな日光に、眼を痛くさせられて居た者には、汽車の窓から見る平凡な田野の綠も、全く祝福として迎へ得られるのであつた。いや、それどころか、龜井戸あたりの工場の間の、家鴨を飼ふやうな、雜草に圍まれた堀とも池ともつかぬ方數間の水溜りさへ、それ自身の豐かな詩趣を持つて居るやうに思はれて、ひどく快いものに見やられたのであつた。

上總の村々は、東海道のやうに文明が往來した街道では無いのだから、全體の氣分が餘程舊態を脫して居無い。每週一回行はるゝ市の光景などは、如何にも鄙びたものであつて、東海道筋に東京近くの大磯、小田原などではとても見ることのでき無いものである。

賣られる品は大抵野菜や果物が多く、その間に古着とか、鹽魚とか、玩具とか、菓子とかいふ位の店が各一つ位出てゐるのである。どの店も、皆地面へ蓆を敷いた、昔しながらの本當の露店

である。可なりな人込みであるが、大抵はその近在から買ひ物に出て來たのらしい女連が重である。二十前とか二十そこ〳〵とかいふやうな若い女は、餘まり見掛けられぬ。大部分、三十位から以上の色の黒い如何にも健康さうな女房たちで、それが裾を高々と端しよつて、如何にも堅さうに肉の締つた下脚部を露出しにして、藁で造つた椅圓な籠を背に負つて、二三人づつ連れになつて行きかつて居るのだ。籠は物を入れて運ぶ爲めであるのだが、大原あたりの女は、可なりな年寄りでも、隨分重い荷をその籠へ入れて、運ぶことができるやうである。

文明の利便も、流行の花やかさも、一向眼にも入らぬやうなそれ等の女たちの一生も、確に氣の毒には相違無いが、都會の女勞働者などの、太く不健康に見えるのに比べては、まだ前者の方が人間としての幸福を持ち得て居るやうに思はるゝ。

勝浦へも二度程行つてみたが、此所では、一番重な町らしい通りの道端に蓆を敷いて、野菜だの、果物だの、菲を賣つて居た。極まつた市日といふのは無くて、毎日さういふ露店が出て居るのでは無からうかと思ふ。勿論、露店の數は大原とは比べものにならぬ程少く、從つて、買人も一寸とは見掛けられ無い位であつた。

天景の方から云つても、東海道のものよりは餘程ワイルドである。海岸は、茂原から大原まではは、大部分砂濱であるけれども、大原から御宿までは、矮草のところ／＼に靑んで居る岩山の連なつた斷崖、絶壁で、濱と稱し得べきやうなところは少しも無く、海岸に沿うて行く道は嶮い。

　月の末であつたが、子どもを迎ひに行つた序に、岩船の地藏といふのへ行つてみた。村は山を越えた――隧道を拔けた――彼方の海沿ひの謂はゞ蜒戸の一簇で、休み茶屋の軒並の黑ずみ加減や、家の煤けた樣子や、憩んで居る客の風態や、何處か近くの村からでも參詣に來たらしい若い娘たちの服裝など、如何にも田舍々々した鄙び方であつた。地藏堂は村の中程から海へ突き出した岩山――峯ろ岩――の上に立つて居る。大海の波はそのあたりを繞つて、轟轟と、花と散り雪と碎けて居る。一體の氣分が、もう三十年も前に一度行つたことのある南海の漁村のさまが懷ひ起されるものであつた。

　勝浦灣の景色はなか／＼いゝ。八幡山の岬端に立つて西南に面すると、興津の方の崎岬へ、紺碧の濤が、白く緣どられた幾つもの圈をなして寄せて居るさまが、夏の晴れた日だと、何とも謂へぬ眞味を心に喚び起させる。小島一つ見えぬ漂渺とした大洋の眺めは、餘まりに大きく、餘ま

りに淋しくして、一人旅の夕などには長く見るに堪へぬ心地がする。吾々には、矢張り、遠方に山あり岬ある海岸線の見え渡つて居る景色の方が、親しみ易い。その意味で、熱海街道の吉濱あたりから先きの景色を僕は愛するのだが、勝浦の景色も、對岸がやゝ近いやうな感はあるものゝ、それでも、山の峯と、遠方の磯屋の屋根が晴やかな陽光に輝いて居るさまはなか／＼繪畫的である。

勝浦と御宿の間の路は、大部分海に沿うて居る。直ちに海に附いて走つて居る低丘の端にあたる崖が道になつて居る形であつて、脚下には大洋の波が逆捲き寄せて居る。

ところ／＼で見かける磯の岩を切つて作つた餌の生洲も、吾々の眼には珍らしい。平たい大岩の面をさながらに幾つもの浴槽のやうに切り鑿つて、それへ鰹を釣る餌の鰯を生けて置くのだといふ。その洲には碧々と海水が湛えて居るのもあるし、また瀧のやうに波が打ち込んで居るのもある。其所を通つたのは、秋であつたが、その浴槽のやうなものゝ框とも見えるところに立つて、釣を垂れて居る三十恰好の赭顏の村人があつた。

浴衣一枚で、身になごり無く陽光を浴びて、廣々とした野邊なり、海邊に立つのは快いもので

ある。夏の日を恐れ無い人は、勝浦御宿間と云つたやうな、海沿ひの道を歩くのも一興であらう。

孤蝶隨筆(終)

大正十三年十月一日印刷
大正十三年十月十日發行

孤蝶隨筆

定價金二圓

著者　馬場孤蝶

發行者　東京市外日暮里町谷中本十六　佐藤三郎

印刷者　東京市牛込區長延寺町六　織田小三郎

發兌　東京日暮里谷中本十八　振替東京四三八八七番　新作社

發賣　東京市神田區[illegible]町一の十九　振替東京六四〇五九番　文行社